島根県簸川郡大社町

五反配遺跡

古代出雲歴史博物館建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

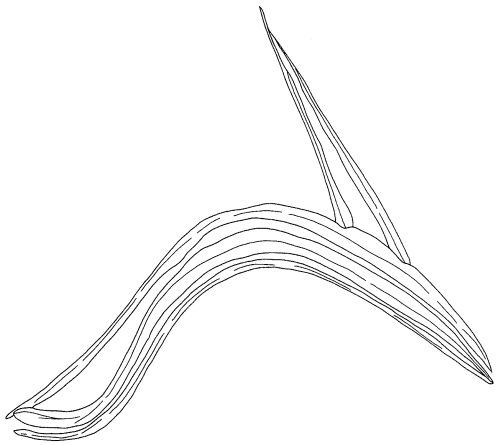
2004年3月

島根県教育委員会

島根県簸川郡大社町

五反配遺跡

古代出雲歴史博物館建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書



2004年３月

島根県教育委員会

序

島根県は、全国に誇りうる本県の歴史文化を展示紹介する古代出雲歴史博物館の整備を、平成18年度の開館にむけて進めているところです。平成14年度には、博物館建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施し、このたび調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回調査を実施した五反配遺跡は、弥生時代から平安時代までの水田開発に関係する河跡や水路跡、木組み遺構、水田畦畔などが検出されました。これらは当時の土木技術や、出雲大社周辺に広がる景観の形成過程を知るうえで貴重な資料となりました。

また、同時に出土した大量の建築部材や木製品については、古代の建築や生活の具体的様子を解明する手がかりとなるもので、周辺にある出雲大社境内遺跡や原山遺跡との関係も注目されるところです。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたりご協力を頂きました地元の皆様や大社町をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成16年３月

島根県教育委員会教育長

広　沢　卓　嗣

例　　言

1．本書は、島根県教育委員会が平成14年度に実施した歴史民俗博物館建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘調査地は下記のとおりである。

五反配遺跡　　島根県簸川郡大社町杵築東99-4ほか

3．調査組織は下記のとおりである。

調査主体　　島根県教育委員会

平成14年度　現地調査

［事　務　局］　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、卜部吉博（副所長）、内田　融（総務課長）、今岡一三（調査１係長）

［調　査　員］　東森　晋（調査１係主事）

［調査補助員］　松山智弘（臨時職員）、岩橋康子（同）

平成15年度　報告書作成

［事　務　局］　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、卜部吉博（副所長）、永島静司（総務課長）、西尾克己（調査１課長）、柳浦俊一（調査２係長）

［調　査　員］　東森　晋（調査２係主事）

［調査補助員］　岩橋康子（臨時職員）

4．現地調査、及び報告書の作成にあたり、下記の方々から御指導・御助言・御協力をいただいた。（敬称略、五十音順）

浅川滋男（鳥取環境大学教授）、穴澤義功（たたら研究会委員）、井上寛司（大阪工業大学教授）、岩本次郎（帝塚山大学教授）、景山真二（大社町教育委員会）、佐伯純也（㈶米子市教育文化事業団）、清水真一（桜井市教育委員会）、椙山林継（國學院大学教授）、園山　薫（出雲市文化財室）、高安克己（島根大学汽水域研究センター長）、田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、濵　隆造（㈶鳥取県教育文化財団）、濵田竜彦（鳥取県教育委員会）、藤永照隆（出雲市文化財室）、山田昌久（東京都立大学教授）、山田康弘（島根大学助教授）、渡邊貞幸（島根大学教授）、出雲市芸術文化振興課、大社町教育委員会、木の文化研究会

5．挿図で使用した方位は、測量法による第３座標系Ｘ軸方向を指し、平面直角座標系XY座標は日本測地系による。また、レベル高は海抜高を示す。

6．本書で使用した図のうち、第2図は国土地理院発行のものを、図版１・３・20は大社町発行の「平成６年版大社町全図」を、図版14・15は㈱ワールドに委託した。また、写真図版１・６～８は㈱ワールドが撮影したものを、写真図版５は日本地図センター発行の497 56（４Ｂ）を使用した。

7．本書に掲載した木製品の保存処理は株式会社京都科学に委託した。

8．本書に掲載した遺物の実測および図版の作成は柳浦、中川、東森、松山、岩橋ほかが行った。

9．本書に掲載した遺物の写真撮影は調査担当者と株式会社京都科学が行った。

10．本書の執筆は東森が行い、第４章は渡辺正巳氏（文化財調査コンサルタント㈱）に委託した。

11．本書掲載の遺跡出土資料及び実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

凡　　例

1．本文中の文献番号は、本文28項の参考文献の番号と一致する。

2．遺構図中の土層番号および土色は統一してある。

3．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗りにし、金属器と石器は断面に斜線を入れ、それ以外は白抜きにした。また、木製品のうち、木目を認識できたものは断面内に表現しているが、カシ類については放射状繊維を表現した。

4．本文中、図版中、写真図版中の遺物番号は一致する。

5．本書で用いた土器・石器・木製品の分類および編年観は基本的に下記の各論文・報告書に依拠している。

(1)縄文土器

島根県教育委員会　『三田谷Ⅰ遺跡vol.3』　2000

(2)弥生土器

松本岩雄　「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　－山陰・山陽編－』　木耳社　1992

鹿島町教育委員会　『南講武草田遺跡』　1992

(3)土師器（古墳時代）

松山智弘　「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討」『島根考古学会誌』第８集　島根考古学会　1991

鹿島町教育委員会　『南講武草田遺跡』　1992

松山智弘　「土器から見た出雲における前期古墳」『山陰の前期古墳　第30回山陰考古学研究集会資料』　山陰考古学研究集会　2002

(4)須恵器

大谷晃二　「出雲地域の須恵器の編年　と地域色」『島根考古学会誌』　第11集　島根考古学会　1994

島根県教育委員会　『西川津遺跡Ⅷ』　2001

(5)土師器（平安時代以降）

広江耕史　「島根県における中世土器について」『松江考古』第８号　松江考古談話会　1992

島根県教育委員会　『青木遺跡vol.1』　2004

(6)陶磁器

太宰府市教育委員会　『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』　2000

(7)石器

石器の分類については、古代文化センター丹羽野裕の指導を得た。

(8)木製品

奈良国立文化財研究所　「木器集成図録　近畿原始編」『奈良国立文化財研究所史料』第36冊　1993

中川　寧　「出雲における木製耕起具の変遷について」『島根考古学会誌』第17集　島根考古学会　2000

山田昌久　『考古資料大観８　弥生・古墳時代　木・繊維製品』　小学館　2003

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と経過 ……（東森）…１
　第１節　調査に至る経緯 ……１
　第２節　調査の経過と概要 ……１
第２章　遺跡の位置と歴史的環境 ……（東森）…３
第３章　調査の結果 ……（東森）…７
　第１節　遺構 ……７
　第２節　出土遺物 ……11
第４章　五反配遺跡発掘調査における自然化学分析 ……（渡辺）…15
第５章　まとめ ……（東森）…23

表　目　次

第１表　古代出雲歴史博物館整備に向けた主要な経過……１
第２表　周辺の遺跡……６
第３表　掲載木製品の数量……12
第４表　土器観察表(1)……29
第５表　土器観察表(2)……30
第６表　土器観察表(3)……31
第７表　土器観察表(4)……32
第８表　石器観察表……32
第９表　鉄器観察表……32
第10表　木製品観察表(1)……33
第11表　木製品観察表(2)……34
第12表　木製品観察表(3)……35
第13表　木製品観察表(4)……36
第14表　木製品観察表(5)……37
第15表　木製品観察表(6)……38
第16表　木製品観察表(7)……39
第17表　木製品観察表(8)……40
第18表　木製品観察表(9)……40

挿　図　目　次

第１図　五反配遺跡の位置……４
第２図　五反配遺跡の位置と周辺の遺跡……５
第３図　弥生時代の河道……７
第４図　木組み遺構・畦畔……９
第５図　平安～鎌倉時代の地割……10
第６図　試料採取地点……18
第７図　№１地点の花粉ダイアグラム……19
第８図　№１地点のプラント・オパールダイアグラム……20
第９図　№２地点のプラント・オパールダイアグラム……20
第10図　№３地点のプラント・オパールダイアグラム……21
第11図　№４地点のプラント・オパールダイアグラム……21
第12図　土器に付着した炭化物……24
第13図　五反配遺跡出土木製品と類似する木製品…26
第14図　鳥取市桂見の集落遺跡……27

図　版　目　次

図版１　平成13年度確認調査トレンチ配置図
図版２　トレンチ土層断面
図版３　平成14年度調査区配置図
図版４　縄文時代の遺物出土状況
図版５　弥生土器出土状況
図版６　河道土層断面
図版７　古墳時代の遺構
図版８　Ａ区溝および木組み・畦畔
図版９　Ｂ区畦畔
図版10　Ｃ区北側畦畔
図版11　Ｄ区溝および木組み
図版12　Ｄ区北側矢板列、Ｄ区北側杭列
図版13　Ｅ区木組み、12Ｔ
図版14　Ａ・Ｂ区土師器・須恵器・木製品出土状況
図版15　Ｃ～Ｅ区土師器・須恵器・木製品出土状況
図版16　Ａ区地割遺構
図版17　Ｂ・Ｃ区地割遺構
図版18　地割遺構遺物出土状況
図版19　11Ｔ地割遺構
図版20　地割遺構と周辺の地形
図版21　縄文時代の遺物
図版22　弥生土器(1)
図版23　弥生土器(2)
図版24　土師器(1)
図版25　土師器(2)・須恵器(1)
図版26　須恵器(2)・平安時代以降の遺物・石器
図版27　木製品(1)工具・農具
図版28　木製品(2)農具
図版29　木製品(3)農具
図版30　木製品(4)農具
図版31　木製品(5)農具
図版32　木製品(6)農具・紡織具
図版33　木製品(7)運搬具・漁撈具
図版34　木製品(8)漁撈具・武器
図版35　木製品(9)食事具・容器
図版36　木製品(10)容器
図版37　木製品(11)容器
図版38　木製品(12)容器
図版39　木製品(13)雑具
図版40　木製品(14)雑具
図版41　木製品(15)雑具
図版42　木製品(16)雑具
図版43　木製品(17)雑具
図版44　木製品(18)雑具部材
図版45　木製品(19)雑具部材
図版46　木製品(20)雑具部材
図版47　木製品(21)雑具部材
図版48　木製品(22)雑具部材
図版49　木製品(23)建築部材
図版50　木製品(24)建築部材
図版51　木製品(25)建築部材
図版52　木製品(26)建築部材
図版53　木製品(27)建築部材
図版54　木製品(28)建築部材
図版55　木製品(29)建築部材
図版56　木製品(30)建築部材
図版57　木製品(31)建築部材
図版58　木製品(32)建築部材
図版59　木製品(33)建築部材
図版60　木製品(34)建築部材
図版61　木製品(35)建築部材
図版62　木製品(36)建築部材
図版63　木製品(37)建築部材
図版64　木製品(38)建築部材
図版65　木製品(39)建築部材
図版66　木製品(40)建築部材
図版67　木製品(41)建築部材
図版68　木製品(42)建築部材
図版69　木製品(43)建築部材
図版70　木製品(44)建築部材
図版71　木製品(45)その他・用途不明品
図版72　木製品(46)その他・用途不明品

図版73　木製品(47)その他・用途不明品
図版74　木製品(48)その他・用途不明品
図版75　木製品(49)その他・用途不明品
図版76　木製品(50)その他・用途不明品
図版77　木製品(51)その他・用途不明品
図版78　木製品(52)その他・用途不明品

写真図版目次

写真図版１
　上：遺跡遠景　　下：遺跡遠景
写真図版２　　調査区全景（南東から）
写真図版３
　上：Ｃ区畦畔　　下：Ｄ区河道
写真図版４
　上：Ｄ区６層上面弥生土器（24）出土状況
　下：Ｂ区14層上面縄文土器（1）出土状況
写真図版５
　1947年米極東空軍撮影空中写真
写真図版６
　上：調査区全景　　下：Ａ・Ｂ区
写真図版７
　上：Ｂ区北側　　下：Ｂ区南側
写真図版８
　上：Ｃ区　　下：Ｄ区
写真図版９
　上：Ａ区地割遺構　　下：Ａ区地割遺構
写真図版10
　上：Ａ区地割遺構調査風景
　中：Ａ区地割遺構北壁土層断面
　下：Ａ区地割遺構東壁土層断面
写真図版11
　上：11Ｔ地割遺構
　下：11Ｔ地割遺構調査指導風景
写真図版12
　上：畦畔・木組み検出後全景
　下：畦畔・木組み検出後全景
写真図版13
　上：Ａ区溝南側の矢板列
　中：Ａ区溝南側の矢板列
　下：Ａ区溝南側の矢板列
写真図版14
　上：Ａ区矢板と河道内の木の関係
　中：Ａ区溝南側の矢板列調査後全景
　下：Ａ区溝北側の矢板列
写真図版15
　上：Ａ区溝内杓子（169）出土状況
　中：Ａ区溝内曲柄又鋤（134）出土状況
　下：Ａ区溝北側田下駄（147）出土状況
写真図版16
　上：Ａ区北側畦畔　　中：Ａ区北側畦畔
　下：Ｂ区南側畦畔
写真図版17
　上：:Ｂ区中央の杭列　　下：Ｂ区中央の杭列
写真図版18
　上：Ｂ区東側の杭列　　中：Ｂ区東側の杭列
　下：Ｂ区南側畦畔須恵器（88・89）出土状況
写真図版19
　上：Ｃ区北側畦畔・木製品検出状況
　下：Ｃ区北側畦畔・木製品調査風景
写真図版20
　上：Ｃ区北西木製品調査風景　下：Ｃ区調査後全景
写真図版21
　上：Ｃ区溝両側の矢板・木組み
　中：Ｃ区木組西側板材出土状況
　下：Ｃ区北側の木組み
写真図版22
　上：Ｄ区溝両側の木組み
　下：Ｄ区溝内土師器（83）出土状況
写真図版23
　上：Ｄ区溝両側の木組み　下：Ｄ区溝両側の木組み
写真図版24
　上：Ｄ区溝　　中：Ｄ区溝Ｄライン土層断面

下：D区溝Cライン土層断面

写真図版25

上：D区溝内木製品（410）出土状況

下：D区溝内掛矢（129）出土状況

写真図版26

上：D区溝縦断土層　　中：D区溝縦断土層

下：D区北側畦畔矢板列

写真図版27

上左：D区畦畔矢板列調査風景

上右：D区矢板と河道内の木の関係

中：D区畦畔矢板列完掘後

下：D区畦畔矢板列土層断面

写真図版28

上：D区北側畦畔の木組み

下：D区北側畦畔の木組み

写真図版29

上：河道Cライン土層断面

中：河道Cライン南岸部分

下：河道Cライン北岸部分

写真図版30

上：A区河道南側の木組み

下：A区河道南側の木組み

写真図版31

上：A区河道南側木製品出土状況

中：A区河道内の杭と蔓　下：A区河道南側の石

写真図版32

上：A区河道南岸部分弥生土器（36）出土状況

下：A区河道南岸部分弥生土器（36）出土状況

写真図版33

上：A区河道内鋤出土状況

下左：A区河道内田下駄（141）出土状況

下右：A区河道内櫂（165）出土状況

写真図版34

上：A区河道内鋤出土不明遺物1

中：A区河道内出土不明遺物2

下：A区河道内出土不明遺物取り上げ風景

写真図版35

上：D区河道調査後　　下：D区河道調査後

写真図版36

上：D区河道調査後　中：D区河道北岸部分の石

下左：D区河道北岸部分弥生土器（24）

下右：D区河道内円脚盤（171）出土状況

写真図版37

上：B区河道内木製品（379～385）出土状況

下：C区河道北岸部分木製品（400・409）出土状況

写真図版38

上：B区14層上面縄文土器（1）出土状況

下：B区14層上面木製品（12）出土状況

写真図版39

上：10T　　中：10T南壁土層断面　　下：12T

写真図版40

上：縄文土器　　下：弥生土器

写真図版41　弥生土器

写真図版42　弥生土器

写真図版43　弥生土器・土師器

写真図版44　土師器　甕

写真図版45

上：土師器　壷　　下：土師器　高坏・椀

写真図版46

上：土師器　高坏・低脚坏　　下：須恵器　坏・皿

写真図版47

上：須恵器　甕　　下：土師器　坏

写真図版48

上：土師器　坏・皿、須恵器、青磁、鉄器

下：石器、軽石

写真図版49　種実類

写真図版50　種実類

写真図版51

上：縄文時代の木製品、工具　掛矢

下：平安時代以降の木製品、農具

写真図版52

上：農具　鋤　　下：農具　鋤

写真図版53　農具　田下駄

写真図版54　農具・紡織具

写真図版55　農具・漁撈具・武器

写真図版56　武器・食器具・容器

写真図版57　容器
写真図版58　容器
写真図版59　容器
写真図版60　容器・雑具　腰掛
写真図版61　雑具　腰掛
写真図版62　雑具　箱
写真図版63　雑具　箱
写真図版64　雑具部材
写真図版65　雑具部材
写真図版66　雑具部材
写真図版67　雑具部材
写真図版68　雑具部材・建築部材
写真図版69　建築部材
写真図版70　建築部材
写真図版71　建築部材
写真図版72　建築部材
写真図版73　建築部材
写真図版74　建築部材
写真図版75　建築部材
写真図版76　建築部材
写真図版77　建築部材
写真図版78　建築部材
写真図版79　建築部材
写真図版80　建築部材
写真図版81　370～376用途不明品
写真図版82　用途不明品
写真図版83　用途不明品
写真図版84　用途不明品
写真図版85　用途不明品
写真図版86　用途不明品
写真図版87　用途不明品
写真図版88
上：内面に炭化物が付着した弥生土器
下：河道出土穎稲

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

島根県立古代出雲歴史博物館（本調査実施当時は島根県立歴史民俗博物館と仮称。以下歴博という）は、斐川町荒神谷遺跡で出土した大量の青銅器をはじめとする本県の考古・歴史・民俗資料を展示する拠点施設として建設が計画された。歴博の整備に向けた主な経過は以下のとおりである。

第１表　古代出雲歴史博物館整備に向けた主要な経過

S59．7～S60	斐川町荒神谷遺跡で大量の青銅器出土（銅剣358本、銅矛16本、銅鐸６個）
H２．1	「島根古代文化活用委員会」の提言 ○島根の古代文化を調査研究・活用するために、拠点となる「古代文化研究センター（仮称）」を設置
H４．4	埋蔵文化財調査センター、古代文化センター設置
H６．3	県長期計画に計上
H８．2	県中期計画に計上（平成10年代中ごろを目標に整備）
H８．10	加茂岩倉遺跡で大量の銅鐸出土（銅鐸39個）
H９．5～12	古代出雲文化展の開催（東京・島根・大阪で巡回展示。入館者443,960人）
H11．10	歴史民俗博物館・古代文化研究センター基本構想の提言（基本構想検討委員会） ○古代文化を中心とした島根県の歴史と文化を調査研究し、その成果を発信、活用していくための拠点施設として設置
H12．2	県中期計画に計上（平成10年代後半を目標に整備）
H12．4	出雲大社で巨大神殿の柱が出土 ○『金輪御造営差図』にみられる巨大な３本の柱（宇豆柱）を確認。10月には心御柱、側柱を確認
H12．8	島根県立博物館が歴史系博物館としてリニューアルオープン
H13．1	歴博・古代研立地場所発表 ○歴博：大社町　　古代研：松江市
H13．12	歴博・古代研整備基本計画策定
H16．2	歴博の名称「島根県立古代出雲歴史博物館」に決定

平成13年１月に歴博の建設予定地が発表され、県埋蔵文化財調査センターが、同年５月から建設予定地内の埋蔵文化財の確認調査を実施することになった。

第２節　調査の経過と概要

１．平成13年度確認調査（図版１・２）

確認調査は平成13年５月28日より開始した。調査前の建設予定地は株式会社日本交通所有の駐車場と庭園になっており、調査当時建設予定地は未買収だったので、調査対象地のうち植栽・庭石等の無い地域について確認調査を実施した。調査は10×10m～15×50mの試掘トレンチを合計11か所設定した。７月９日に３Ｔ北で矢板列を検出し、精査の結果さらに東西に続くことを確認

した。そこで矢板列の延長線上に５Ｔを設定したところ、横板を杭で固定した木組み遺構を検出した。遺構の時期は出土遺物より弥生時代後期から古墳時代前期と判断された。確認調査は８月31日まで行い、１Ｔ・３Ｔ北・３Ｔ南・５Ｔで近世以前の遺物が出土した。

この結果、小字名から名称を五反配遺跡とし、文化庁に遺跡の発見通知を提出した。同年９月に島根県古代文化センターと協議を行い、平成14年度に古代文化センターの予算令達を受けた埋蔵文化財調査センターが、建物の建設範囲内の発掘調査を行うことに決定した。

２．平成14年度発掘調査（図版８）

本調査は平成14年７月３日より開始した。前年度植栽等の関係でトレンチを設定できなかった部分は、用地買収後に確認調査を行いその結果対応することとした。

初めに、前年度の確認調査で検出した河道と木組み遺構の主軸に合わせて調査区を設定し、さらに東からＡ～Ｅ区を設定した。Ａ区から掘削を行い、重機で２層までを除去し３層以下を人力で掘削した。７月11日には矢板列を検出し、７月23日には矢板列北側の４層上面で平安時代の地割を検出した。その後調査区を西へ拡張したところ、矢板列は河道とは別の溝に伴う木組み遺構の一部であることが判明した。８月29日には本調査区の北側に他の遺構を確認するためのトレンチ（10・11Ｔ）設定した。その結果９月４日に11ＴでＡ区と同様の地割遺構を検出した。しかし、これ以外は若干の縄文土器と弥生土器が出土しただけで遺構・遺物は希薄と判断されたので、北側への調査区拡張は行わないことに決定した。９月11日からは駐車場に設定したＢ～Ｄ区の調査を開始し、Ａ区同様地割遺構やその下層で河道や溝、木組み遺構を検出した。ここで検出した木組み遺構は当初の予想をはるかに上回り、遺構の検出や実測に多くの時間を割くこととなった。このためＥ区の調査は木組み遺構の範囲と方向を確認するに留めた。12月12日には調査区の北西に12Ｔを設定し、河道の一部と若干の木を検出した。この間９月24日に岩本次郎氏、10月22日に浅川滋男氏、12月６日に田中義昭氏の調査の指導をいただいた。また、１月30日には現地説明会を開催し、雨天にもかかわらず多数の参加を得た。12月６日にはラジコンヘリによる木組み遺構の空撮を行った。その後、河道内の掘削を行うとＣ区を中心に大量の木製品が出土し、12月25日まで河道の掘削と遺構検出を行った。翌年１月17日に遺構の実測を終え、現地調査を完了した。

現地説明会風景

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

五反配遺跡は島根県簸川郡大社町に所在し、出雲平野の北西端に位置する。遺跡は出雲大社の境内から南東約300ｍの地点で、北に北山山地がそびえ南は砂丘に囲まれた低地である。調査前の遺跡はアスファルト舗装された駐車場と庭園になっていたが、それ以前は全域が水田で（写真図版５）、出雲大社境内の東側から南東に流れる吉野川は遺跡内を通過して堀川へと流れていた。五反配遺跡の近隣には県内の著名な遺跡が多く、北西約300ｍに出雲大社境内遺跡、北方約250ｍに真名井（命主社境内）遺跡、東方約200ｍに修理免本郷遺跡、南東約400ｍに原山遺跡、南西約500ｍに鹿蔵山遺跡が所在する。以下、五反配遺跡周辺で確認された主要な遺跡を概観しておく。

縄文時代

菱根遺跡では早期後葉の土器が、石器、骨角器、動物・魚類の骨と共に出土しており、周辺で最も古い時期の集落と考えられる。これ以後は後期まで町内で遺跡は確認されておらず、原山遺跡で後期初頭から前葉の土器が出土している。また、鬼ノ目谷遺跡では前述の石斧と別の地点で後期中頃の土器が出土している。その後は出雲大社境内遺跡で晩期の土器が出土し、五反配遺跡や付近の弥生時代の遺跡の状況から杵築地区では継続して集落が営まれたようである。このほか縄文土器は確認されていないが、日御碕地区の鬼ノ目谷遺跡と川井戸で草創期の局部磨製石斧と見られる石斧が出土し、稲佐遺跡で石皿・敲石・石斧が出土している。

弥生時代

弥生時代には遺跡数が増え、町内各所で遺構や遺物が確認されている。原山遺跡は出雲・隠岐地方で最古の弥生土器であるＩ－1様式の土器が出土した遺跡である。数次にわたる発掘調査や表採によって前期から後期にかけての遺構・遺物が検出され、前期の配石墓と後期の貼石墓が複数調査されている。出雲大社境内遺跡では前期から後期の土器が継続して出土し、鹿蔵山遺跡・稲佐遺跡・南原遺跡では前期や後期の土器が出土しているので、当該期の集落が存在したと考えられる。また、真名井（命主社境内）遺跡では寛文５（1665）年、神社の裏山の大石の下から４本の武器形青銅器と硬玉製の勾玉が出土している。このうち銅戈と勾玉が現在出雲大社に宝物として伝わっている。このほか日御碕地区のひろげ遺跡で、弥生時代後期から奈良時代に至る祭祀遺構が検出されている。

古墳時代

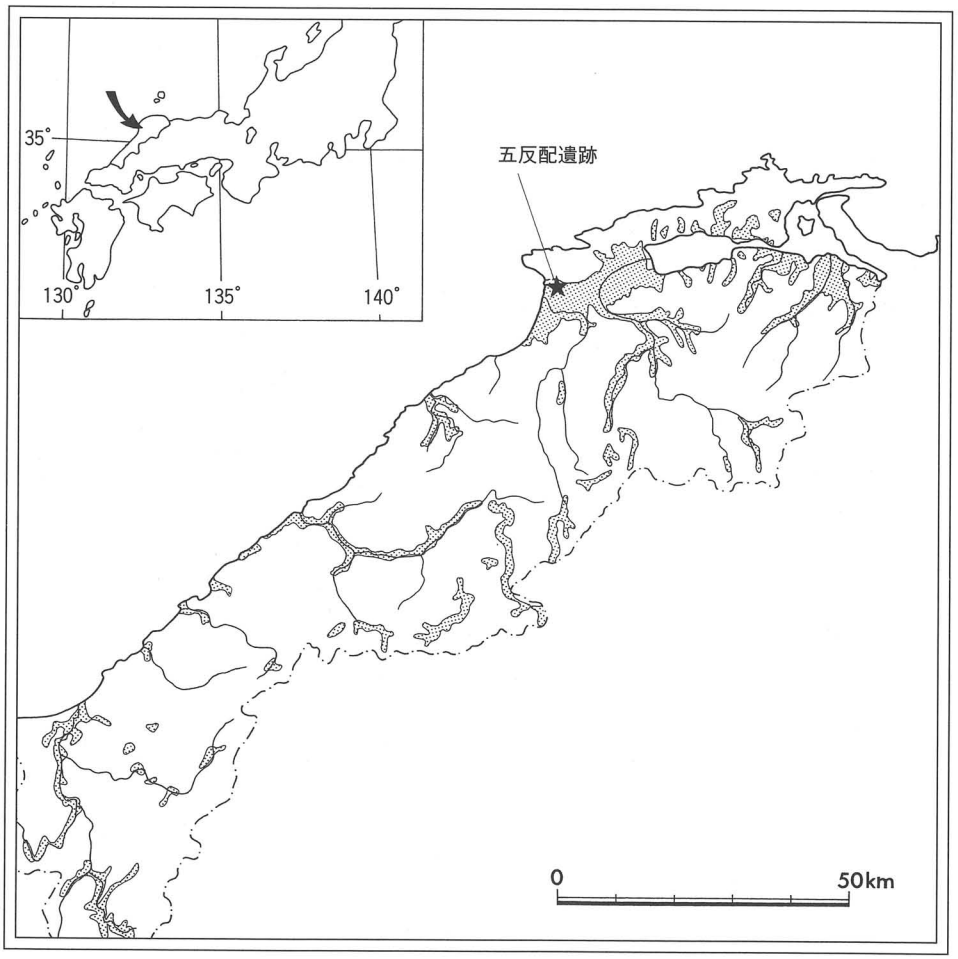
出雲大社境内遺跡で前期の溝や比熱面が検出され、勾玉、臼玉、手づくね土器が出土している。そのほか遺構は検出されていないものの、10回以上の工事・調査の結果、前期から後期の遺物が出土している。鹿蔵山遺跡・稲佐遺跡・南原遺跡では弥生時代に続き前期から後期の土器が出土しているが、中期以降は出土量が減少する。修理免本郷遺跡は弥生土器が出土せず、古墳時代前期以降から遺物が出土している。このころ大社町南東部の湿地が開発され、利用され始めた可能性が考えられる。遙堪地区の菱根西組で弥生時代終末から古墳時代前期の土器が出土し、亀谷遺跡でも中期の土器が出土している。また、可耕地の少ない日御碕地区でも日御碕神社境内遺跡やおわし遺跡、黒田遺跡で古墳時代後期の土器が出土し、後期古墳である高間ケ原古墳が知られている。

奈良・平安時代

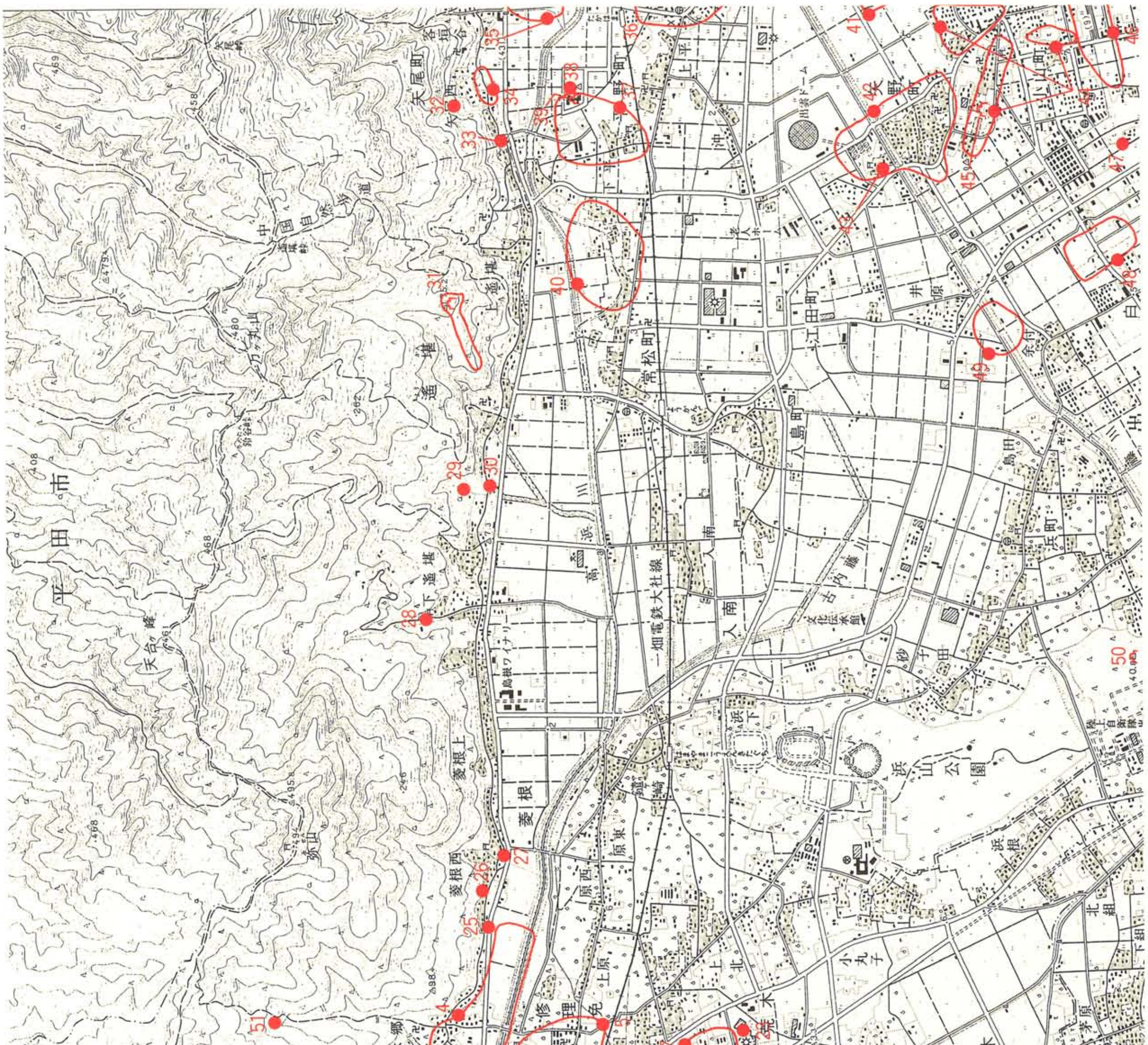
奈良・平安時代は町内各所で遺構・遺物が見つかっている。また、出雲大社境内遺跡では、文献資料から制度化した神社としての出雲大社が営まれていたことが確実である。鹿蔵山遺跡では奈良時代の井戸や貝塚が調査され、土師器・須恵器のほか奈良三彩や150点もの墨書土器が出土している。奈良時代の貝塚は中分貝塚でも発見され、鉄製のヤスが出土している。古代には『出雲国風土記』に載る神門水海と呼ばれる入海が存在し、その汀線にあたると考えられる。このほか南原遺跡では奈良時代の須恵器・土製品が出土し、集落の可能性が考えられる。また、ひろげ遺跡では奈良時代まで祭祀遺構が確認されている。

中・近世

出雲大社境内遺跡で、宝治２（1248）年に建てられた本殿の柱と考えられる３本一組の巨大な柱や、中・近世の本殿・柵列が確認されている。原山遺跡では平安時代末から鎌倉時代初めの土師器や白磁椀が出土している。誓願寺古墓では室町時代の土師器・陶器と共に羽口・鉄滓・鉄器が出土しており、遺構は確認されていないが小鍛冶が行われていた可能性が考えられている。このほか町内では古墓や経塚の調査も行われている。鹿蔵山経塚では土師器皿や古銭が出土し、土師器の多くに梵時が墨書されていた。奉納山経塚では金銅板製経筒17口分・銀装銅板製経筒１口分と古銭65枚、土師器が出土している。



第１図　五反配遺跡の位置



第２図　五反配遺跡の位置と周辺の遺跡　S＝１／35,000

第２表　周辺の遺跡

No.	名　　称	種　別	所　在　地	概　　要	備　　考	遺跡地図番号
1	五反配遺跡	水田跡	杵築東　五反配	水田跡、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、木製品、板材	発掘、一部消滅	Z 42
2	出雲大社境内遺跡	散布地	杵築東　宮内	旧本殿遺構、柵跡、川跡、焼土、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、玉類、石偶、青銅針、鉄滓、古銭、鉄鏃、鋳造鉄斧、石器、土製品、木器、羽口、瓦、巨大柱根他		Z 3
3	真名井遺跡（命主社境内）	銅戈出土地	杵築東　真名井	銅戈、硬玉勾玉	銅戈、硬玉勾玉重文	Z 28
4	修理免本郷遺跡	散布地	修理免　本郷	土師器、須恵器、田下駄他	出土品町指定	Z 7
5	原山遺跡	散布地	修理免　原山	縄文土器、弥生土器、石斧、磨製石剣、古式土師器他	出土品町指定	Z 9
6	鹿蔵山遺跡	貝塚他	杵築南	土師器、須恵器、奈良三彩、貝類、石斧、人骨、他	出土品町指定	Z 1
7	南原遺跡	散布地	北荒木　南原	弥生土器、土師器、須恵器、貝類、鉄滓、鹿骨他		Z 2
8	馬見烽跡	烽跡	壺背山			Z 38
9	稲佐関屋跡	関屋跡	杵築北　稲佐		消滅	Z 35
10	稲佐焼窯跡	窯跡	杵築北　稲佐	窯道具	消滅	Z 23
11	稲佐遺跡	散布地	杵築北　稲佐	弥生土器、土師器、須恵器、石偶他	出土品町指定	Z 5
12	仮ノ宮台場跡	台場跡	杵築北　仮ノ宮		消滅	Z 32
13	奉納山経塚	経塚	杵築北　仮ノ宮	経筒、紙経、木経、古銭他	消滅、出土品町指定	Z 30
14	山根遺跡	散布地	杵築北　山根	弥生土器、石錘		Z 6
15	神宮寺跡	寺院跡	杵築北　山根	石垣	消滅	Z 21
16	越峠焼窯跡	窯跡	杵築東　四ツ角		消滅	Z 24
17	乗光寺跡	寺院跡	杵築東　大鳥居	五輪塔、陶器	消滅	Z 19
18	誓願寺古墓	古墓	杵築西　下大工地	和鏡、人骨、古銭	消滅	Z 29
19	鹿蔵山経塚	経塚	杵築南　鹿蔵山	一字一皿経（梵字書入）、土師質土器、宋銭	消滅	Z 31
20	鹿蔵山城跡	城跡	杵築南　鹿蔵山	古太刀、釜、碗他	消滅	Z 26
21	乙見焼窯跡	窯跡	修理免　乙見	窯道具、磁器他		Z 25
22	赤塚台場跡	台場跡	杵築西　赤塚		消滅	Z 33
23	中分貝塚	貝塚	北荒木　中分	銛、漁具、獣骨、貝殻他		Z 8
24	湊原台場遺跡	台場跡	杵築西　湊原		消滅	Z 34
25	菱根遺跡	散布地	菱根	縄文土器、人骨片、石鏃他	ヤノンバ遺跡	Z 12
26	西組古墳群	古墳	菱根　西組	土師器、石偶、須恵器片	消滅	Z 16
27	菱根関屋跡	関屋跡	菱根　河原谷	関の地蔵	破壊	Z 36
28	阿式谷遺跡	散布地	下遙堪　阿式谷	勾玉、須恵器、土師器		Z 13
29	亀谷遺跡	散布地	下遙堪　亀谷	土師器		Z 4
30	鎌代古墳	古墳	下遙堪　鎌代	直刀	消滅	Z 17
31	蛇山城跡	城跡	下遙堪　蛇山	郭	消滅	Z 27
32	大前山古墳	古墳	矢尾町　矢尾西	横穴式石室		W 181
33	石臼古墳	古墳	矢尾町　矢尾西	横穴式石室		W 182
34	熊見谷遺跡	散布地	矢尾町	須恵器		W 173
35	下澤遺跡	集落跡		土師器		W 221
36	高浜Ⅰ遺跡	散布地	里方町	弥生土器、土師器		W 171
37	高浜Ⅱ遺跡	散布地	里方町	土師器、須恵器		W 172
38	里方八石原遺跡	散布地	里方町　八石原	須恵器、土師器、砥石、土錘、水晶	発掘調査	W 180
39	岡田城跡	城跡	平野町		岡田屋敷、消滅	W 223
40	高浜川遺跡	散布地	下遙堪	弥生土器、須恵器、土師器		Z 39
41	大塚遺跡	散布地	大塚町	土師器		W 93
42	矢野遺跡	貝塚他	矢野町	土壙墓、弥生土器、土師器、須恵器、古式土師器、貝類、鹿骨、鹿角、石斧、尖頭器、人骨、獣骨、魚骨、骨器、黒曜石	市指定	W 3
43	八野神社附近遺跡	散布地	矢野町	弥生土器、土師器		W 7
44	小山遺跡	集落跡	小山町	弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、かわらけ	四絡公民館附近遺跡を含む	W 15
45	三木氏館跡	館跡	小山町	郭、土塁、堀		W 224
46	蔵小路西遺跡	集落跡、館跡	渡橋町、小山町	掘立柱建物跡、墓、土坑、火処、井戸、河道、しがらみ、井堰、縄文土器、弥生土器、土師器、陶磁器、木製品、石器、刀子、古銭		W 211
47	渡橋沖遺跡	集落跡	渡橋町　渡橋沖	堀立柱建物跡、土坑、溝跡、柵列、塀跡、土師器、土師質土器、青磁、陶器、木製品、五輪塔		W 210
48	白枝荒神遺跡	散布地	白枝町	弥生土器、土師器、石斧	（旧）荒神屋敷遺跡	W 109
49	井原遺跡	集落跡	白枝町		保存措置	W 120
50	馬見烽跡	烽跡	浜町		大社町坪背山の説あり	W 102
51	神光寺跡	寺院跡	修理免　坊床	仏像（木像）、石垣、墓石	仏教遺物　町指定	W 20

第３章　調査の結果

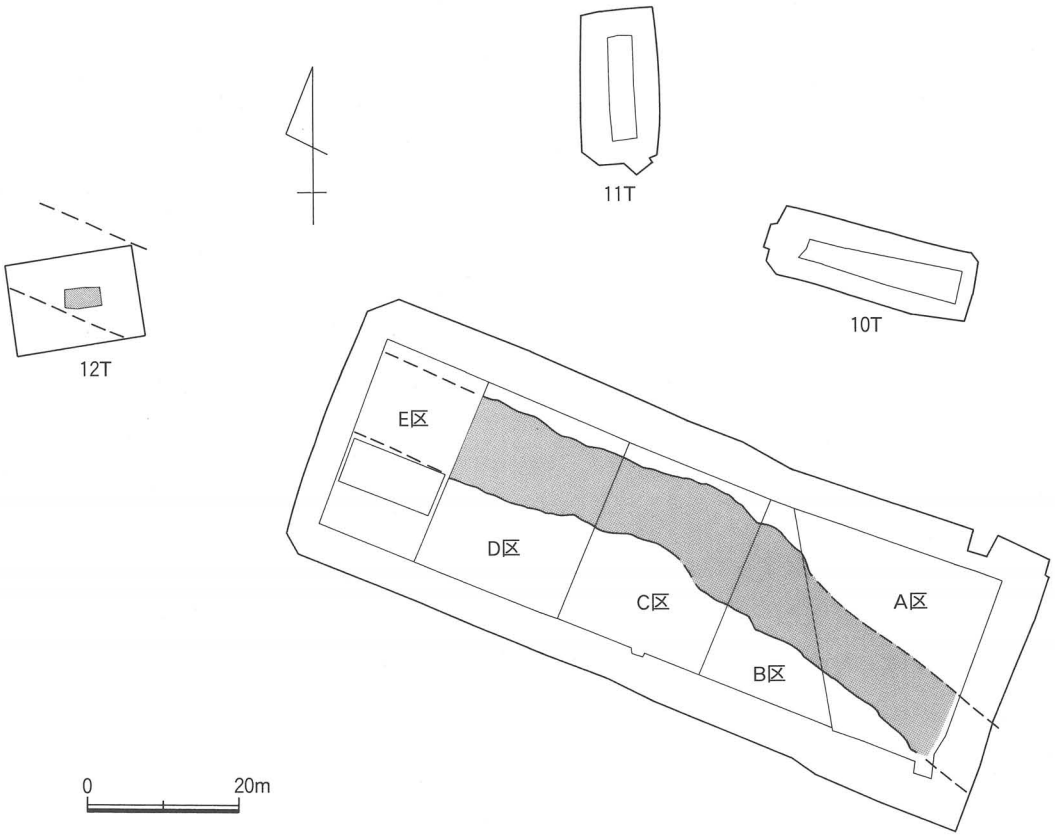
調査はＡ区から順に西側へ進めた。この結果、３層除去後に平安時代以降の地割を、４層除去後に木組み遺構や溝、河道を検出した。以下、遺構・遺物について年代の古いものから順に報告する。

第１節　遺構

１．河道（図版５・６、写真図版３・29～37）

平成13年度の確認調査時に３Ｔ北と５Ｔで検出した遺構で、北西から南東に向かって流れ、幅は９～11.5m、深さは0.4～0.5mである。４ａ～５ｂ層除去後にプランを検出した。６・12・13層を切っており、遺構内には７～９層が堆積する。床面に石や砂が堆積しておらず、土層の堆積状況からも水の流れは非常に緩いかほとんど流れが無かったと推測される[1]。

河道内と岸部分では縄文土器と弥生土器、木製品等が出土した。縄文土器はいずれも小片で上流からの流れ込みと考えられる。これに対し河道の時期を判断できる弥生土器が幾つか出土している。Ａ区南岸部分では拳大から人頭大の石と弥生前期の壷の底部（**18**）がまとまって出土した（写真図版31下）。また、同じＡ区南岸で９層にめり込むようにして弥生後期前葉の壷（**36**）が出土している（写真図版32）。さらにＡ区では北岸に近い矢板列手前の地点で、やはり９層内で弥生後期前葉の壷（**37**）が出土した。Ｂ区では河道のほぼ中央の床面で、弥生中期の壷（**25**）が小片



第３図　弥生時代の河道　Ｓ＝１／1000

(1)　渡辺正巳氏の御教示による。

に砕けた状態で出土した。最も上流に近いＤ区北岸では拳大の集石に近い位置で弥生中期の壷（**24**）が出土した（写真図版36中・左下）。このほかⅠ-2様式からⅤ-1様式の弥生土器が僅かずつではあるが出土しているので、河道が流れていた時期は弥生時代前期から後期前葉頃と考えられる。

河道内では木製品が多数出土しており、河道床面や岸近くで出土した杭等の長い材の中には組み合わせた様な状態で出土したものもあった（写真図版30・31中）。河道出土の木製品で、用途の判断できるものでは農具が最も多かったが、Ａ区で穂摘具（**135**）の近くで炭化した穎稲が出土している点が注目される。また、Ａ区では植物質の細かい繊維が集まったと見られる**不明遺物１・２**が出土し（写真図版34）、分析を行ったが性格は明らかにできなかった。

河道は12Ｔでは現駐車場造成以前の吉野川のコンクリート製護岸の下から検出された。また、確認調査時に３Ｔ南で近世以後と考えられる流路を検出しており、吉野川は歴博建設予定地の中で幾度か流れを変えていたと考えられる。

以上の点から今回検出した弥生時代の河道は、最も古い段階の吉野川の流路と判断され、水田耕作に関係したと考えられる。

２．溝（図版７・８・11、写真図版２・３・14・15・24）

河道とほぼ並行する位置で、４ａ～５ｂ層除去後にプランを検出した。河道がＢ区とＣ区の境でやや南に曲がるので、Ａ区では河道の北側に位置し、Ｃ・Ｄ区では河道の南側に位置する。Ｂ区では河道と重複していると考えられ、溝を検出できなかった。Ａ区も溝の南側が河道と重複しており壁面を検出できなかったが、木組みの位置からおよそ溝の規模を復元できる。溝の規模は幅が2.3～2.8m、深さは0.4～0.5mである。６・12・13層を切っており、遺構内には11層が堆積する。前述の河道の岸部分が緩い傾斜で６層をブロック状に崩しながら形成されるのに対し、溝の壁面は比較的きれいに形成され人為的に掘られたことがわかる。

溝の両側には２列一組と考えられる矢板列や木組みが有り、調査時に認識できなかった土手が溝の両側に構築されていた可能性が考えられる。遺構内からは縄文土器・弥生土器・土師器・木製品が出土した。検出面に近いレベルで土師器がまとまって出土し、床面近くでは縄文土器・弥生土器（**６・23・31・38・53**）が出土した。

この溝が機能していた時期は、溝の木組み周辺で出土した土師器や、Ｄ区で検出した溝に直行する畦畔が河道の埋まった後に構築されている点から、古墳時代前期から中期前半頃と判断される。ただし、床面で出土した遺物の時期から、溝が掘られた時期は弥生時代中期後葉から後期前葉に遡る可能性がある。

３．木組み遺構・畦畔（図版７～13、写真図版２・３・６～８・12～14・16～28）

４ａ層を除去すると、矢板・杭で長い板材や棒材を固定した木組み遺構や、矢板・杭だけの列が調査区のほぼ全域で検出された。調査区中央を東西に伸びる中心的な木組み遺構は、確認調査の３Ｔ北・５Ｔで検出されたもので、前述の溝状遺構の両側に構築され２列１組となる。杭列間の幅は約0.3～0.4mで、さらにこの杭列が２組セットになって計４列で間に溝のある遺構を構成していたと考えられる。調査区内では約85mにわたって検出され、検出状況からさらに調査区外に続くことは間違いないと思われる。

このほか南北方向に伸びる杭列や木組み遺構を多数検出している。Ａ区では北側で溝や木組みと直行して延びる矢板や杭の列を検出した。東西軸のものと異なり溝を伴わないが、位置関係か

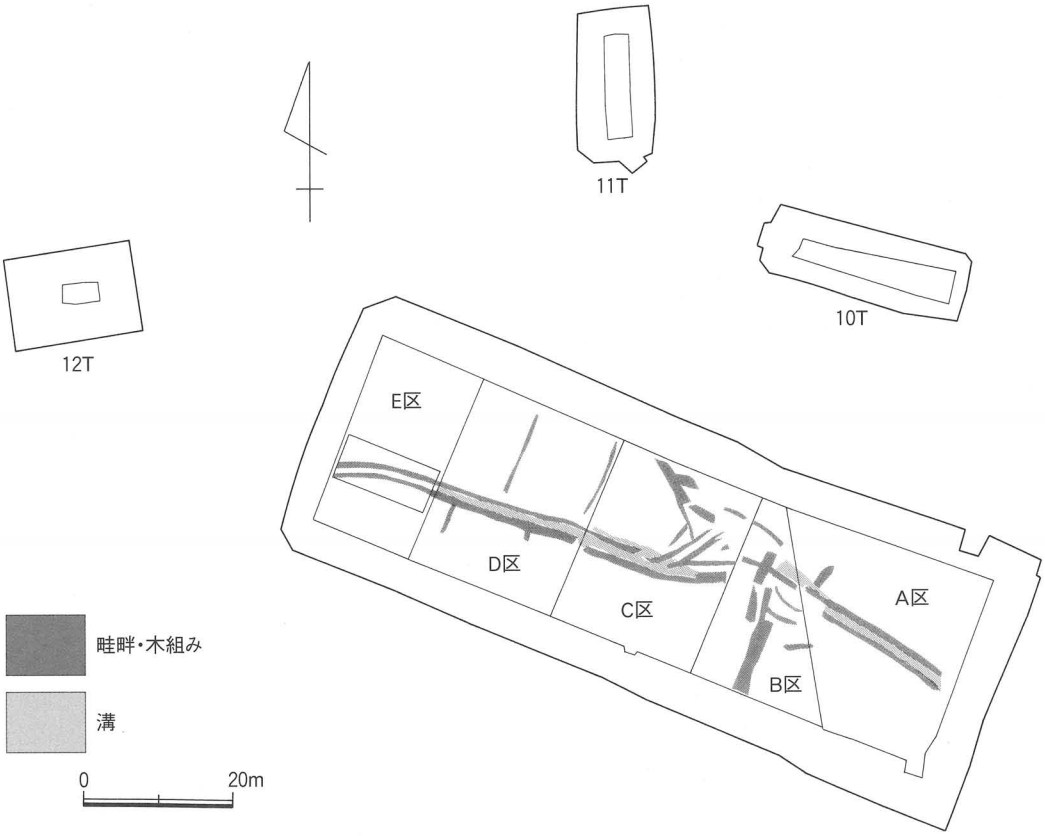
らほぼ同時期のものと思われる。Ｄ区北側で検出した矢板列と杭列も、溝および木組み遺構と直行するように造られているので同時期の遺構と考えられる。また、Ｄ区では溝の南側でも短いが直行して伸びる杭列を２か所検出している。

Ｂ区は最も杭列が密集した所でそれぞれの前後関係を明確に判断できなかった。このうち南北に伸びる杭列は、切り合い関係の少ない南側を見ると、東西軸の木組みに似た２列一組になっている。さらに、残存状況は良くないが並行する杭列を確認できるので、同様の機能を持つ遺構の可能性が考えられる。また、Ｂ・Ｃ区では溝や東西軸の木組み遺構と全く異なる軸の木組み遺構を検出した。これらは調査区のほぼ中央から北東に向かって伸び、途中で直角に近い角度で北西に向きを変えて調査区の北側へと伸びている。Ｃ区のものは溝に伴う木組み遺構と構造が良く似ており、同時期か連続する時期の遺構と考えられる。Ｅ区では木組みが調査区の西側で若干南に曲がっていた。

これらの木組み遺構は形状から基本的に土留めを目的に構築されたと考えられ、Ｄ区北側で検出した杭だけのものは本来固定していた板材・棒材が外れたものと推測される。具体的な性格としては、県内外の同様な木組み遺構の例[(2)]から、溝の両側に構築された木組みは水田の水路の土手を補強するもの、１列の矢板・杭列は畦畔の補強を目的としたものと判断される。

４．地割遺構（図版16～20、写真図版９～12）

Ａ～Ｃ区・11Ｔで３層除去後に検出した。細長い木を1.8～2.2mの幅で軸に合わせて並べており、



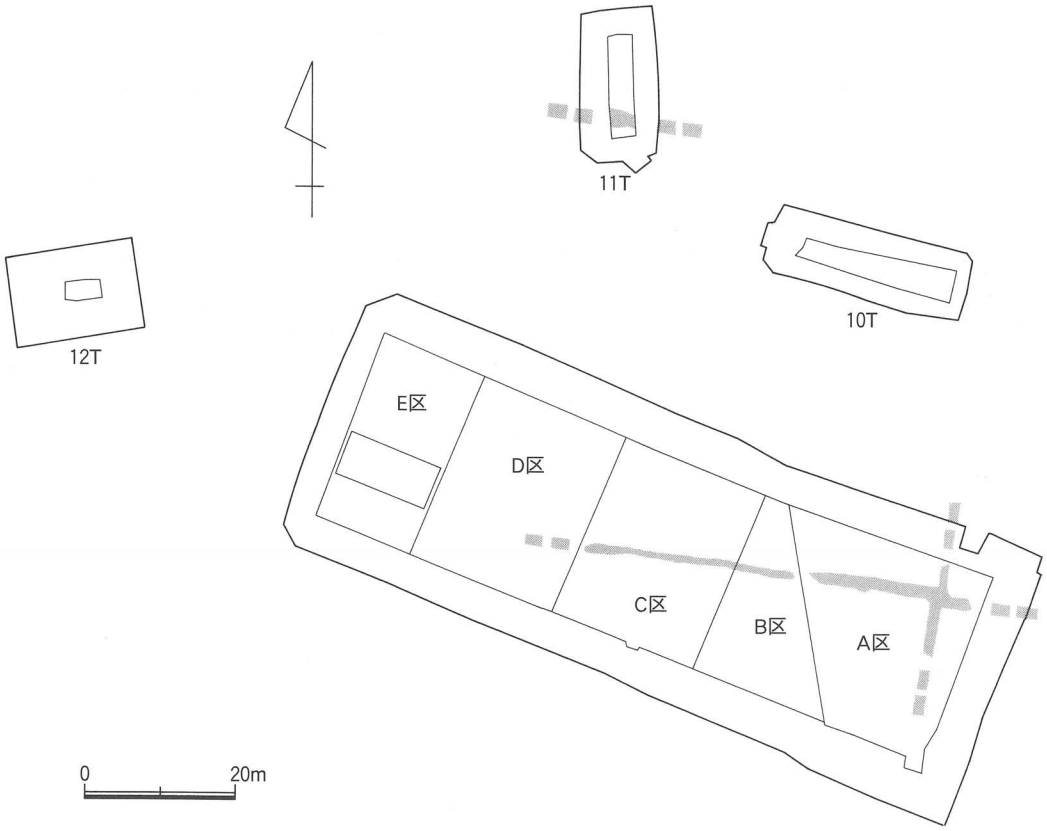
第４図　木組み遺構・畦畔　Ｓ＝１／1000

(2)　県内では江津市古八幡付近遺跡（文献１）があり、県外では同じ日本海側の兵庫県豊岡市五反田遺跡（文献11）、同出石町佐川遺跡（文献12）、さらに遠方では静岡県瀬名遺跡（文献19）を参考にした。

垂直に打ち込んだ木も部分的に残存する。木が並べられた範囲では拳大から人頭大の石が出土した。また、Ａ区とＣ区では遺構と一部重複して白色の砂を検出した。このような遺構は当地域で報告された例が無いが、Ａ区で十字に交差する部分がある点、東西の軸と並行すると考えられる並びが54～55m（約半町）北の11Ｔ内で検出された点、割付に使用したと考えられる石が出土した点、軸が方位に近い点などから水田の地割に関係する遺構と考えられる[3]。遺構を構成する木や枝はほとんどが表面に加工が無く、若干板材が混じる。これらの木で用途の判断できる木製品は無かった。

地割遺構や周辺からは図版26に掲載した土師器の坏や皿、青磁椀、金属器が出土した。土師器の年代はおよそ平安時代後半から鎌倉時代の前半と判断され、出土状況から地割遺構に伴うもので、地割が機能していた年代の遺物と考えられる。また、調査区の南側で、土師器の坏がほぼ直線に並ぶように出土している（図版19）。これらは東西の地割の約18m南に平行しているので、同時期の畦畔を反映している可能性が考えられる。

地割遺構は検出状況や軸の方向から、基本的に古墳時代以降の水田の区画を大幅に改編して造られたと考えられる。この造成が行われた時期は、図版14に示すように地割と重なる位置で須恵器（**91・93・96・98**）が出土していることから、平安時代前半に遡る可能性も考えられる。



第５図　平安～鎌倉時代の地割　Ｓ＝１／1000

(3)　岩本次郎氏の御教示による。幅が広く側溝が無いなど不明な点もあるが、条里的な地割として大過ないと思われる。

第２節　出土遺物

今回の調査では縄文時代晩期から近世・近代にいたる様々な時代の遺物が出土した。このうち本書では近世以前の遺物を掲載した。また、出土した土器類は図示できるものは可能な限り掲載しているので、今回出土した土器の時代毎の数量や器種の比率をほぼ反映させている。

１．縄文土器（図版21、写真図版40）

縄文時代晩期の深鉢・浅鉢が出土した。今回出土した縄文土器はほとんどが細片で数も少ない。このうち１は14層上面で出土した深鉢で、器壁の状態は良好で表面に炭化物が付着していた。突帯文深鉢２は、文献３で無刻目突帯Ｄ類に分類されるものである。

２．弥生土器（図版22～24、写真図版40～44・88）

弥生土器は出雲・隠岐Ⅰ～Ⅴ様式のほとんどが出土した。しかし、当地域で比較的多くの集落・墳墓が確認されているⅤ－２～４様式前半（草田４期）の土器は出土せず、次に土器が出土した草田５期以降まで遺物の空白期間がある。器種毎の出土量は胴部の破片を含めると甕が大半を占め、壷はやや少なく高坏・器台は出土しなかった。また、大半が河道や河道の岸部分で出土し、炭化物が付着したものも多い。22は壷の肩で、外面に黒色の格子目文様が施されている。時期は、図示した肩部以外に接合できなかった胴部下半の破片も出土しており、内面に縦方向のヘラケズリが施されるのでおよそⅣ様式のものと判断される。24は直口壷で、口縁端部を外方に拡張し上面に４条の凹線を廻らせる。口縁内面には接合時の指の痕が明確に残る。25は厚みのある口縁部が短く屈曲するもので、内面下部にミガキ調整が施され、煮炊きの痕が無いことから短頸壷と判断した。36は大型の壷で、煮炊きによる炭化物の付着が明確に残る良好な資料である。口縁部から頸部の外面に長い刺突文を施す。37も同様な壷の口縁部で、頸部外面に沈線と刺突文を施す。内面にはヘラケズリの痕が明確に残る。40・41は器壁の薄い胴部片で外面には炭化物が厚く付着する。42～44は口縁端部に面を持たないもので、草田５期の甕と判断したが古墳時代前期の土師器の可能性もある。

３．古墳時代の土師器（図版24～26、写真図版、43～46）

今回の調査では古墳時代前期から中期の甕が最も多く出土した。木組み遺構や４層・７層上面で出土した木製品の多くはこの時期のものと考えられる。古墳時代前期前半の甕は基本的に山陰系の複合口縁甕で外来系のものは見られなかった。また、出土量は多かったにもかかわらずほとんどが細片で全形の分かる資料は無く、一部が胴部上半まで復元できた程度である。前期後半から中期は退化した複合口縁と内彎する口縁をもつ甕が出土している。56は外面が真っ黒になるほど炭化物の付着し、肩部に間隔が不規則で広い刺突文を施す。64は不定方向にハケメ調整を施した後丁寧に横方向のハケ調整を施し、丸い肩を形成している。須恵器の坏や甕が出土した古墳時代後期以降の土師器甕は出土していない。壷は弥生時代に比べ出土量が減少している。直口壷73は口縁端部に面を持ち、厚みのある底部は僅かに面を持つ。高坏は図示できたのは坏部のみで、脚部の細片が数点しか出土しなかった。図示した坏部のうち80は内面が黒色に変色し蓋に使用した可能性が考えられる。82は外面に細く強いミガキ調整が施される。器種は低脚坏に分類したが、炭化物の付着状況から複合口縁甕の内蓋に使用されたと判断される。85・86は表面に赤彩の痕があり器壁はやや厚い。古墳時代後期以降の可能性がある。

４．須恵器（図版25・26、写真図版46～48）

古墳時代後期の蓋坏が３点出土した。**87**は小型で天井部のケズリが見られない蓋である。体部外面に沈線を廻らせ稜を表現するなどあまり例を見ない形態であるが、およそ出雲大谷編年６期に並行するものと考えられる。**88・89**は出土状況からセットになると考えられる。**89**は丸みのある底部の外面中心部分に板目の痕が付いている。**93**は器壁が薄く壷類の胴部と判断した。甕は胴部の破片のみ出土し時期を明確に判断できなかったが、**100**はタタキの形態から平安時代後半のものと考えられる。壷**120**は肩部外面に細かい格子目タタキを施す。内面はナデ調整で指の痕が明確に残り、歪みも目立つ。平安時代後半から鎌倉時代初め頃のものと推測される。

５．平安時代以降の土師器（図版26、写真図版47・48）

地割周辺で比較的まとまって出土した。**101**は底部にヘラ切りの痕が残るもので、口縁部を欠損するが青木遺跡出土の皿と類似することから皿と考えられる。坏類はやや厚みのある底部に内彎する体部が付くものが多い。全形の分かる資料は少ないが、広江氏の年代観や出雲市青木遺跡の土師器を参考にして、12世紀頃のものが中心であると判断した。**104・107**は内面全体に炭化物が付着している。**105**は底部外縁に高台の剥離後平坦に整えた痕がある。皿は底部のみで年代を判断できなかったが、出土状況や胎土・焼成から坏とほぼ同時期のものと考えられる。

６．陶磁器（図版26、写真図版121）

近世以前の陶磁器は、地割遺構で出土した青磁椀**121**のみである。

７．金属器（図版26、写真図版48）

Ｃ区南の４層上面で**123**が１点出土した。形状から鏨または船釘と推測される[4]。

８．石器（図版21・26、写真図版48）

打製石斧２点と砥石４点が出土した。打製石斧は形状から遺物の出土している縄文時代晩期のものと考えられる。砥石は時期を判断できなかったが、古墳時代以降の可能性が高い。このほかＤ・Ｅの南側で軽石が出土している。全て４層より出土しており、この時期は水田になっているので、どのような目的で持ち込まれたのか不明である。

９．木製品（図版21・26～78、写真図版51～88）

今回の調査では非常に多くの木製品が出土した。遺構に再利用された建築部材や、先端を加工しただけの杭を含めると、5000点以上出土している。現地調査時に木器と判断したものは全て持ち帰ったが、遺構に再利用された部材や大型の部材は、当初の加工が残っているものや特徴的な部材のみ持ち帰った。現地から持ち帰った木製品の総数は609点である。このうち、種別が判断できるものと代表的な部材の計325点を本書に掲載した。

第３表　掲載木製品の数量

工具	農具	紡織具	運搬具	漁撈具	武器	食事具	容器	雑具	部材	用途不明品等	計
3	30	1	4	3	2	2	32	23	161	64	325

木製品の時期は、12層以下で出土したものは縄文時代晩期、地割遺構に伴うものは平安時代以降、それ以外は弥生・古墳時代のものと判断した。**12**は14層上面で出土した用途不明の木製品で、

(4)　穴澤義功氏の御教示による。

出土した層位から縄文時代晩期のものと考えられる[5]。**122**は中世の漆椀で、内面は赤、外面には黒地に赤の緻密な文様の漆が塗られる。

128～**449**は弥生・古墳時代の木製品である。これらの木製品の時期は河道内の８・９層で出土したものは、土器の出土状況から弥生時代中期中葉～後期前葉のものと判断される。４層・７層上面付近・溝内で出土した木製品は、古墳時代以降のものが主で一部弥生時代の木製品が含まれると考えられる。以下、種別毎に記述する。

工具は掛矢のみ出土している。いずれも使用痕が残り、木組みや畦畔に接して出土しているので、これらの構築時に使用されたと考えられる。身と握りの境が次第に細くなる**128**と、明確な段を持つ**129**・**130**の２種類があり、**128**は加工が雑で枝の根元を残したまま使用している。

農具は鍬、鋤、田下駄、穂摘具、鎌柄、編台目盛板が出土した。田下駄は遺跡の性格を反映して比較的まとまった量が出土している。このほかに、用途不明品や他の種別に分類した木製品の中で田下駄の可能性が考えられるものもあり、総数はさらに増える可能性がある。３孔式、４孔式のほか側面にＶ字の抉りを入れる田下駄**146**も出土した。**153**は内側の３か所にくびれがあり、田下駄の可能性が高いと考えられる。**154**は松江市福富Ⅰ遺跡出土木製品を参考にして、古墳時代後期以降の高足田下駄部材と判断した。穂摘具**155**は河道下層で出土した。県内での出土は稀で、付近で炭化した穎稲が出土している点も注目される。刃部は鋸歯状で、時期は弥生時代中期後葉から後期前葉と考えられる。**157**は間隔約12㎝の刻みのある板材で、編台目盛板と判断した。

紡織具は紡錘**158**が１点出土したのみである。運搬具は天秤棒、緊縛具、田舟が出土した。
漁撈具は櫂が３点出土した。**164**は水かきに長方形の孔があるもので、スギを使用しており部材等を再加工したと考えられる。**165**は河道で出土した全形のわかる資料である。

武器は盾が２点出土した。**166**はＣ区の７層上面で出土したもので、本来の二分の一程度が残存する。割付線に合わせ多数の小孔が開けられ、小孔の間に綴紐の痕跡が残る部分もある。このほか２個１組の孔が上下に１組開ずつ開けられる。**167**は確認調査時に３Ｔ北で出土したもので、細片に砕けている。小孔が規則的に開けられ、表面には赤彩の痕跡がある。

食事具は杓子が２点出土した。**169**は加工が粗く未製品の可能性がある。容器は主に槽・盤と刳物桶で、他に椀や蓋が出土している。**173**は側面と上面の窪み内に孔が開けられており小型の蓋と考えたが、詳しい用途は不明である。**182**は大型品で、３Ｔ北で木組みに使用されていた。刳物桶のうち、**183**・**187**・**188**は内面に、**185**は両面に黒色物が塗布される。

雑具は腰掛と箱が出土した。腰掛は刳物と指物の両方が出土している。指物腰掛の座板**198**は表面の残存状態が良く、上面の窪みが確認できる。箱の部品には残存状態の良いものが多く、**204**・**205**・**208**・**209**・**211**には木釘や楔が残っていた。**211**と**212**、**213**と**214**はそれぞれほぼ同地点で出土したもので、同一固体の部品である可能性が高い。

部材は最も多く出土し、雑具の部材と考えられるものと建物やその他の構造物の部材と考えられるもの分けられる。今回の整理作業では、比較的小型で厚さの薄いものや加工の丁寧なもの（**215**～**263**・**444**・**445**）を雑具部材に、大型で厚手のものや加工の粗いもの（**264**～**369**・**447**・**448**）

(5)　これと似たものに、鹿島町稗田遺跡（文献７）の最下層（縄文時代晩期前半の深鉢が出土）で出土した櫂状の木製品がある。

を建築部材におおまかに分類した。**215・216・444**は栓で、遺跡内に再利用を目的に運び込まれた部材に付いていたものと考えられる。**217**は片面の加工に特徴がある板材で意図的に凹凸を付けており、琴の上板の可能性が考えられる。**245～252・256**は同地点で組み合わせるように出土した部材で、出土状況は使用時に近い状態であると考えられる。

278はＣ区木組みの横板に使用されていたもので、古墳時代の建築部材と考えられる。削り出しで作られた円形突起の中心には、円の割付時に付いた小孔が残っている。**327**は枝を利用してＬ字に加工した部材である。Ｃ区の河道床面で出土したもので、Ａ区の河道南岸部分でも同様の部材が出土している（写真図版31）。時期は弥生時代中期中葉から後期前葉と考えられる**332・333**はＤ区畦畔を構成していたと考えられる部材で、セットで使用されていた可能性が高い。時期は古墳時代前期から中期と考えられる。**357・360～369**は端部のみ加工した杭で、主に河道で出土し、弥生時代のものが多いと考えられる。長さ1.5～２ｍ前後のものが多いが、長いものは３～４ｍにもなる。

用途不明品としたものは部材以外の木製品で用途を判断できなかったものである。**370～376**はＣ区の河道床面で組み合わせた状態で出土した。調査時に出土状況の図化・撮影を行っていないが、組み合わせの状況は写真図版81のようになる。写真は座り具合から転地を判断したもので、**370**の上に三角形の側版**371・373・374**を固定する。**371**に対し**373**が一回り小さいので**374**を継ぎ足している。この上に**372**を突起が**370**の抉りに収まるようして乗せ、楔**375・376**で固定する。さらに側版や楔を多数の木釘で固定するので、非常に強度を持たせようとしたことがわかる。**372**上面に見られる小孔は木釘で何かを固定したとも見られるが、詳しい用途や目的は不明である。また、**377**は同地点で出土した棒材で、組み合わせの状況は不明だが同じ木製品の部品の可能性がある。**378**はＢ区南の５層で出土したもので、外面には鋸歯状の文様が彫られ赤彩の痕跡がある。やや反りがある点や丸い孔が丁寧に開けられている点から短甲の破片の可能性がある。**379～385**は１か所でまとまって出土した（写真図版37上）。全て側面を丁寧に削って丸くし、先端も丁寧な加工で細く仕上げてある。雑具部材とした**241**も同地点で出土しているので関連する可能性も考えられる。

400はＣ区の河道北岸に貼りついて出土した木製品で、一見の櫂のように見えるが他の櫂と形状、加工、広葉樹で作られている点などが異なる。特に注目されるのは断面Ｖ字の線刻で文様が彫られている点で、この文様は「和爾（わに）」または「竜」を表す可能性が考えられる[6]。その場合**400**は儀器の可能性がある。**401**はＤ区の溝床面で出土したもので、大型であるが鳥形の可能性が考えられる。**409**は形状や内面の刳り込みの特徴から鞘形の木製品と考えられる。ただし、長さ103cm、厚さ5.6cmと非常に大型で重量があり、方形の孔が開けられる等不明な点も多い。付近で盾**166**が出土している。**410**はＤ区の溝内で水平になって出土した（写真図版25上）。木組みの杭を打ち込まれた際に「身」の一部を破損しているので、古墳時代前期かそれ以前のものと考えられる。転地は不明である。「柄」の部分は厚く角柱状になり、「身」の部分は端部が薄くならず反りがある。未製品にも見えるが、「身」の部分が丁寧に加工されているので製品と判断した。**411～431**は板材の片方の側面に抉りを入れるもので、遺跡内で多数出土した。大きさは大小あり、短辺を斜めに切断するものや丸く加工するもの、抉りが丁寧なものや粗いものなど、様々なバリエーションがある。部材を再利用したものが多く、用途は不明だが出土量の多さから遺跡の性格を反映する遺物と考えられる。

(6)　埋蔵文化財調査センター内田律雄の教示による。

第４章　五反配遺跡発掘調査における自然科学分析

渡　辺　正　巳（文化財調査コンサルタント㈱）

はじめに

五反配遺跡は島根県中央部、簸川郡大社町杵築東に立地する遺跡である。五反配遺跡では、島根県立歴史民俗博物館建設に伴い緊急発掘が行われた。

本報は、上記緊急発掘に伴い、遺跡周辺の古植生などの「古環境」の推定を目的として、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが文化財調査コンサルタント㈱に委託・実施した、自然科学分析（花粉分析およびプラント・オパール分析）結果の報告書を、まとめ直したものである。

試料について

分析試料は、第６図に示す各地点で、発掘担当者と協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。各地点の模式柱状図および試料採取層準を第７～11図の各種ダイアグラム左端に示す。

分析方法

花粉分析処理は渡辺（1995）、プラント・オパール分析処理は藤原（1976）のグラスビーズ法に従い実施した。全ての分析の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1,000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。またイネ科花粉を中村（1974）に基づき、イネを含むイネ科（40ミクロン以上）と、栽培種を含む可能性の低いイネ科（40ミクロン未満）に細分した。ただし、多くの試料で花粉化石の含有量が少なく、木本花粉を200個体検出することができなかった。プラント・オパール分析では、グラスビーズが400個体以上になるまで検鏡を行い、同時に検出されるイネ他数種類の機動細胞由来のプラント・オパールについて同定を行った。

分析結果

分析結果を第７図の花粉ダイアグラム、第８～11図のプラント・オパールダイアグラムに示す。

第７図の花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示している。また、花粉ダイアグラム右側に「針葉樹花粉」、「広葉樹花粉」、「草本花粉」に「胞子」を加えた総合ダイアグラムを示している。総合ダイアグラムでは、計数値の合計を基数にそれぞれの百分率を算出し、累積百分率で示してある。

図３～６のプラント・オパールダイアグラムでは、各分類群毎に検出数を１ｇあたりの含有数に換算し、スペクトルで示している。

花粉分帯

花粉組成の特徴から以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料№も下位から上位に向かって記した。

(1)　Ⅳ帯（試料№12～10）

アカガシ属のほか、マツ属（複維管束亜属）、スギ属が他の種類に比べ高率を示す。また、草本

花粉の割合は低いが、水生、湿地生の種類が多産する。

(2)　Ⅲ帯（試料№９～７）

スギ属が卓越傾向にあるほか、マツ属（複維管束亜属）、アカガシ亜属が他の種類に比べ高率を示す。草本花粉ではカヤツリグサ科が卓越する。

(3)　Ⅱ帯（試料№６～３）

マツ属（複維管束亜属）が増加傾向を、スギ属、アカガシ亜属はやや減少傾向を示す。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が卓越する。

(4)　Ⅰ帯（試料№２、１）

マツ属（複維管束亜属）が卓越するほか、特徴的に検出される木本花粉は無い。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が卓越する

稲作について

プラント・オパール分析を実施した層準のうち、４ａ層より上位でイネが高い検出量を示した。経験的に5,000個体／ｇの検出量が稲作判定の目安とされているが、３層上部の全てと、４ａ層のほとんどの分析試料がこの値を上回っている。また5,000個体／ｇを下回るが、４ｂ層、５ａ層からもイネが検出されている。堆積物中での生物擾乱を加味すると、３層、４ａ層が稲作耕土であったと考えられる。また花粉分析結果では、５ａ層より上位でイネ属を含むイネ科（40ミクロン以上）花粉が高い出現率を占めている。さらにこれらの試料では、オモダカ属やセリ科などの「水田雑草」も安定して検出されている。

プラント・オパール分析および花粉分析の結果から、３層、４ａ層は水田耕土であったと考えられる。一方、４ｂ層、５ａ層についても水田耕土であった可能性があるものの、生物擾乱による混入や他地点から流入した可能性も残る。

また、１ｂ層、２層も水田耕土と考えられるが、イネのプラント・オパールの検出量は低い。このことは、収穫方法（穂刈りあるいは株刈り）の違いによる、水田内への葉（分析対象としている機動細胞由来のプラント・オパールは、葉身に存在する）の残存状況や、水田としての利用頻度（長さ）に由来すると考えられる。

古環境推定

花粉帯毎に、遺跡周辺の古植生を中心とした古環境を推定する。

(1)　Ⅳ帯期

出土遺物および従来の14Ｃ年代測定結果から、縄文時代晩期頃の植生を示していると考えられる。また花粉組成から、大西ほか（1990）のスギ亜帯に相当すると考えられ、その推定年代と矛盾しない。

草本花粉では、ガマ属やカヤツリグサ科、イネ科、ヒシ属花粉が数％の出現率を示す事、ヨシ属のプラント・オパールが高い検出量を示す事、および層相の観察から遺跡近辺には、抽水植物や浮葉植物の繁茂する沼沢湿地が広がっていたと考えられる。

アカガシ亜属花粉が卓越し、背後に迫る北山（弥山）山地にカシ類が分布していたと考えられる。ここではシイ類花粉やクスノキ科花粉は検出されていないがカシ類とともに照葉樹林を形成していたと考えられる。マツ属（複維管束亜属）は、遺跡西部から南部に続く砂丘地帯に主として生育していた可能性がある。このほかコナラ類とともに、北山（弥山）山地に小規模の遷移林

（二次林）を形成していた可能性もある。スギ属は同時に検出される針葉樹種と共に、北山（弥山）山地高所で温帯針葉樹林を形成していた、あるいは広葉樹とともに暖温帯針広混淆林を形成していた可能性がある。

(2)　Ⅲ帯期

出土遺物および従来の14Ｃ年代測定結果から、縄文時代晩期頃以降の植生を示していると考えられる。また花粉組成から、大西ほか（1990）のスギ亜帯に相当すると考えられ、その推定年代と矛盾しない。

草本花粉ではカヤツリグサ科花粉が卓越することと層相の観察から、遺跡近辺には沼沢湿地が広がっていたと考えられる。さらに、№１地点近辺にはカヤツリグサ科が繁茂していたと考えられる。

木本花粉ではスギ属が卓越し、北山（弥山）山地高所の温帯針葉樹林あるいは暖温帯針広混淆林中に生育していたスギが、谷斜面に沿って分布域を広げていったと考えられる。あるいは沼沢湿地周辺にまで分布を広げていた可能性もある。マツ属（複維管束亜属）、アカガシ亜属の分布に関しては、前時期からの変化は考えにくい。

(3)　Ⅱ帯期

４ｂ、５ａ層について堆積時期推定の決め手を欠くが、出土遺物からⅡ帯期は古墳時代以降中世末頃までの植生を示していると考えられる。また花粉組成から、大西ほか（1990）のカシ・ナラ亜帯に相当すると考えられ、その推定年代と矛盾しない。

草本花粉では、Ⅱ帯より上位でイネ科（40ミクロン以上）花粉が高率を示し、下位のⅢ帯とは異なるオモダカ属、セリ科などが検出されるようになる。このことは前述のように、遺跡近辺に水田が広がった事を示唆する。

木本花粉ではマツ属（複維管束亜属）花粉が増加傾向を示し、スギ属、アカガシ亜属はやや減少傾向を示す。開発に伴い北山（弥山）山地山麓～山腹の照葉樹林やスギ林はアカマツを主体とする薪炭林（いわゆる「里山」）へと変わっていったと考えられる。

(4)　Ⅰ帯期

出土遺物から近代から現代の植生を示していると考えられる。また花粉組成から、大西ほか（1990）のマツ亜帯に相当すると考えられ、その推定年代と矛盾しない。

イネのプラント・オパールの検出量は低いものの、引き続きイネ科（40ミクロン以上）花粉が高率を示す。このことから、引き続き水田が広がっていたと考えられる。

木本花粉ではマツ属（複維管束亜属）花粉が卓越し、コナラ亜属花粉やクマシデ属－アサダ属花粉を伴う事から、北山（弥山）山地は昭和初期に見られるような、アカマツ、コナラ類、シデ類などを要素とする薪炭林（いわゆる「里山」）で被われていたと考えられる。

まとめ

五反配遺跡で花粉分析、プラント・オパール分析を行い、以下のことを考察した。

(1)　花粉分析結果から、Ⅰ～Ⅳ帯の４花粉帯を設定した。

(2)　花粉分析結果およびプラント・オパール分析をもとに、縄文時代晩期以降の遺跡周辺の古環境を推定した。特筆すべき点は、以下の事柄である。

①　Ⅱ帯期（古墳時代以降）遺跡周辺で水田耕作が行われた。

② 水田開発とともに森林の開発も進み、北山（弥山）山地に分布した照葉樹林、スギ林は「里山」へと移り変わっていった。

③ 縄文時代以前は、遺跡近辺には沼沢湿地が広がっていた。

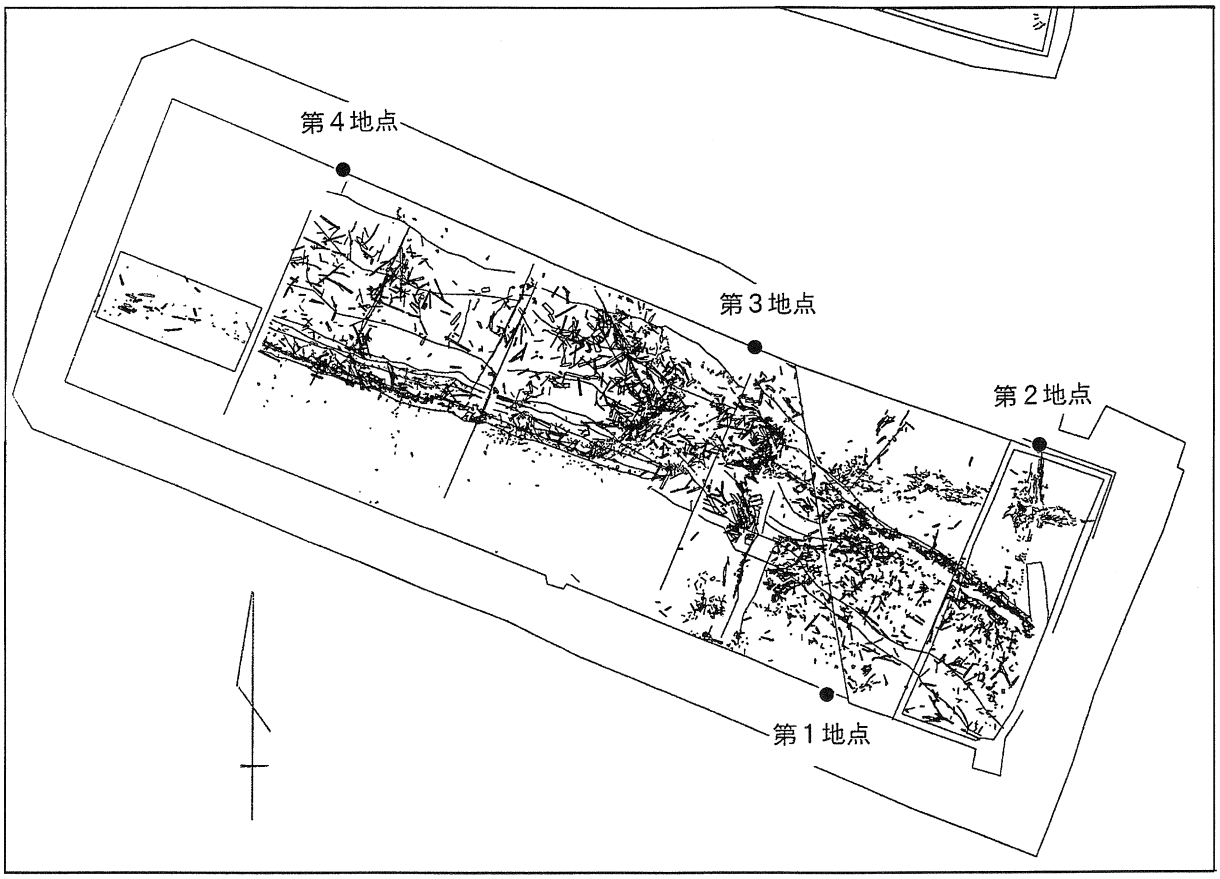
引用文献

大西郁夫・干場英樹・中谷紀子（1990）宍道湖湖底下完新統の花粉群。島根大学地質学研究報告、9，117-127.

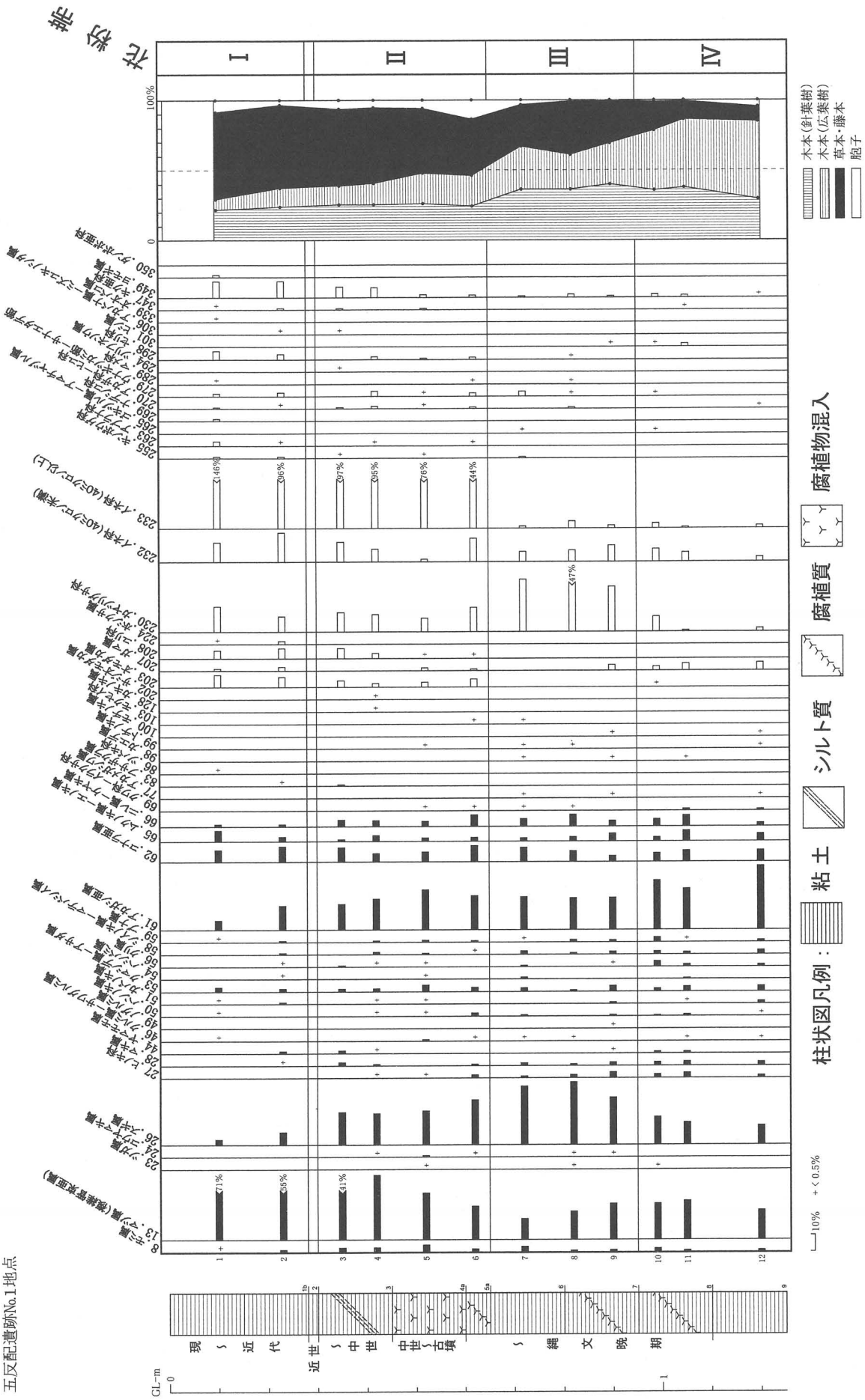
中村　純（1974）イネ科花粉について,とくにイネを中心として。第四紀研究、13，187-197.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学、9，p.15-29.

渡辺正巳（1995）花粉分析法。考古資料分析法，84，85．ニュー・サイエンス社

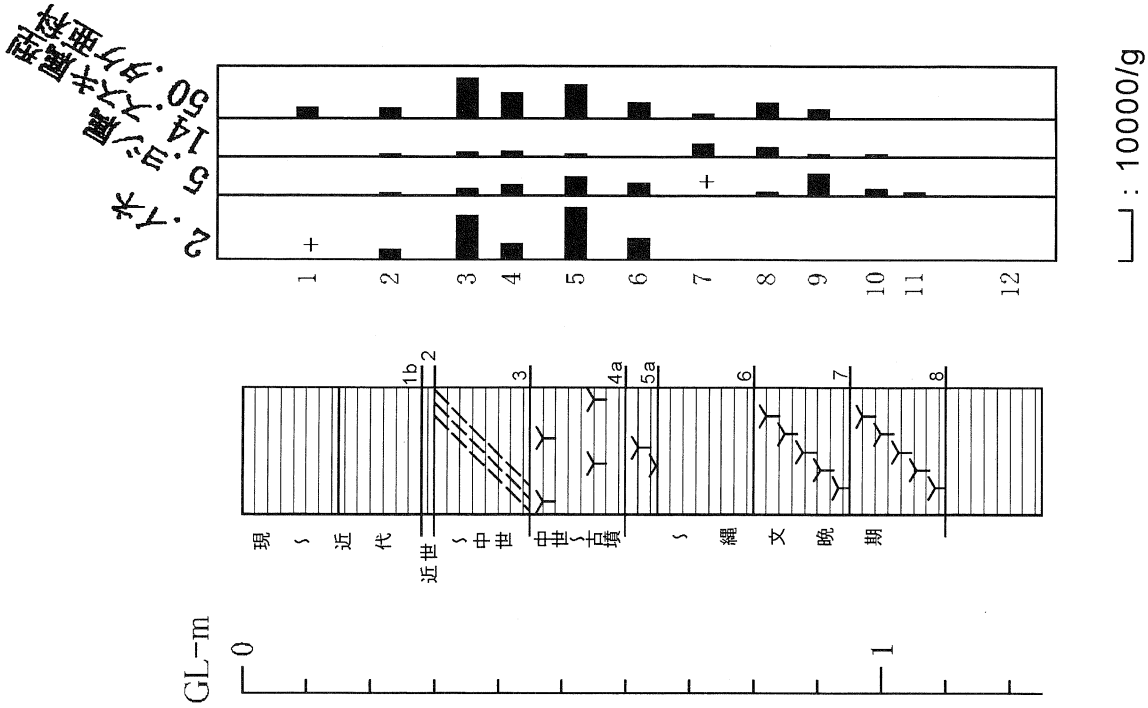


第６図　試料採取地点

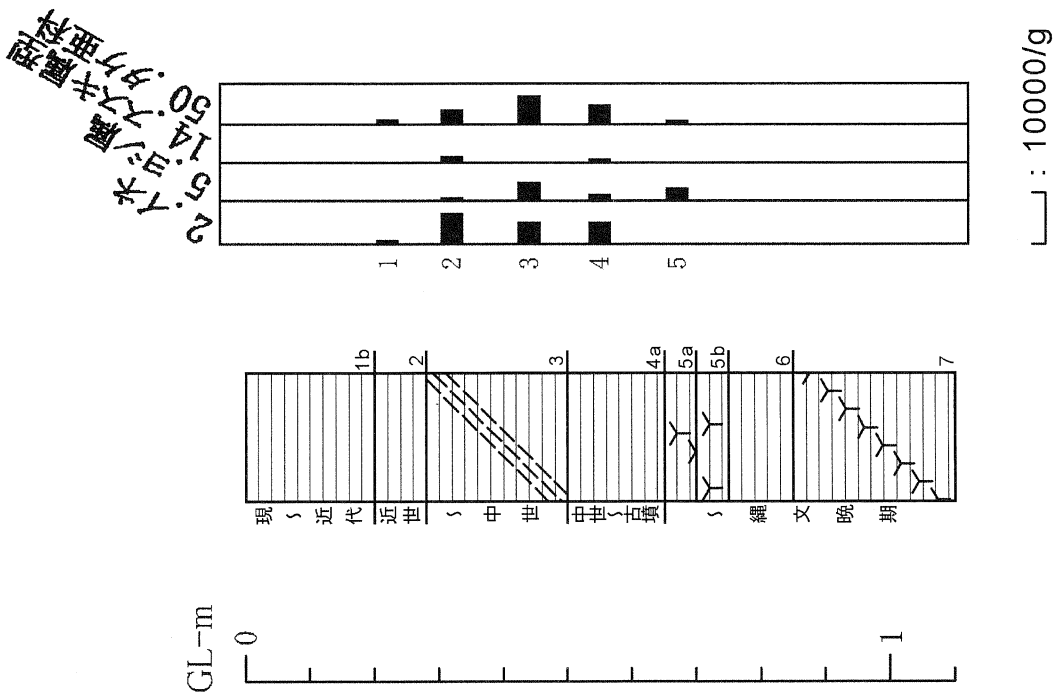


五反配遺跡No.1地点

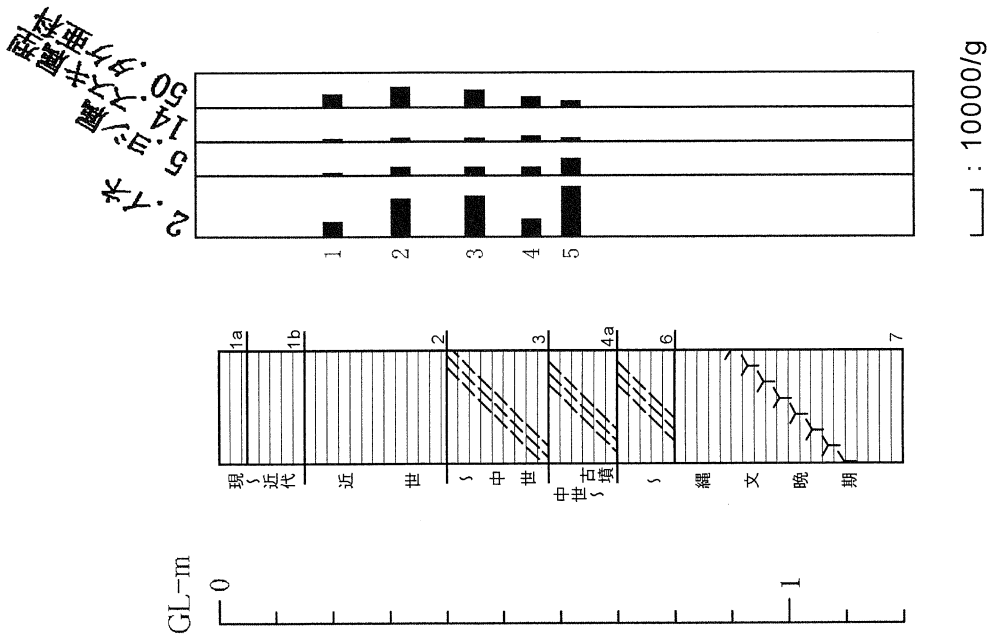
第７図　No.1地点の花粉ダイアグラム



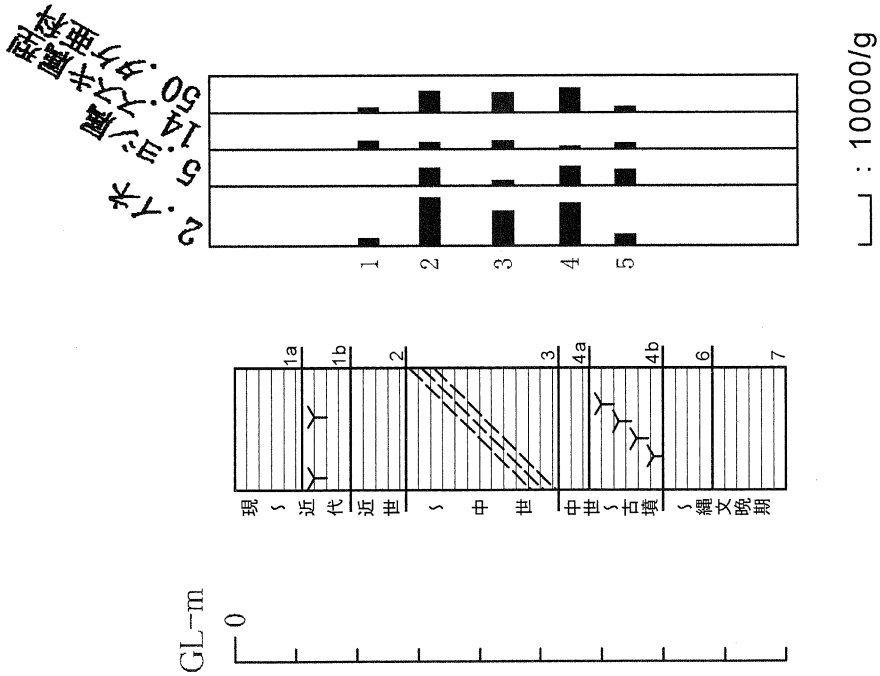
第８図　No.１地点のプラント・オパールダイアグラム



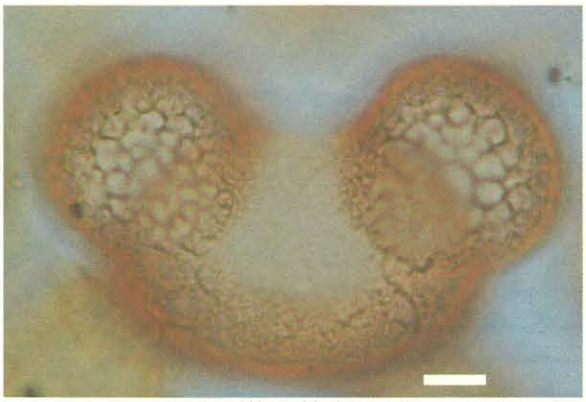
第９図　No.２地点のプラント・オパールダイアグラム



第10図　No.３地点のプラント・オパールダイアグラム



第11図　No.４地点のプラント・オパールダイアグラム

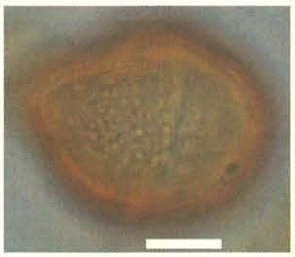


マツ属（複維管束亜属）

スギ属

カバノキ属

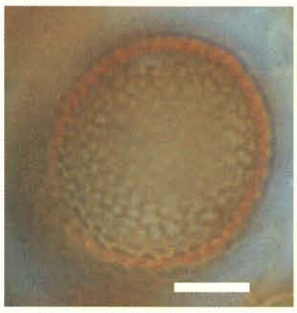
ブナ属



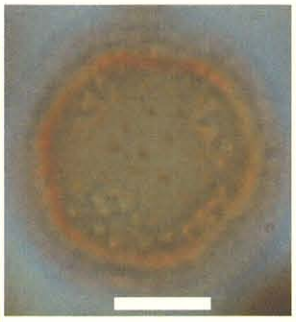
コナラ亜属

アカガシ亜属

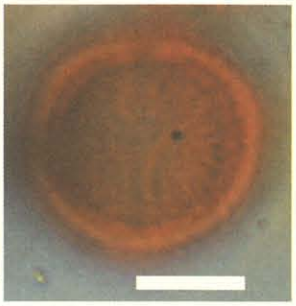
ニレ属－ケヤキ属



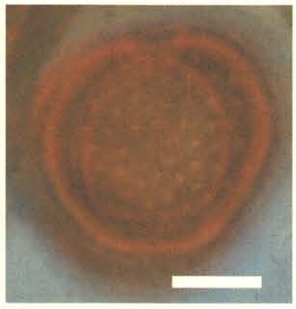
ガマ属



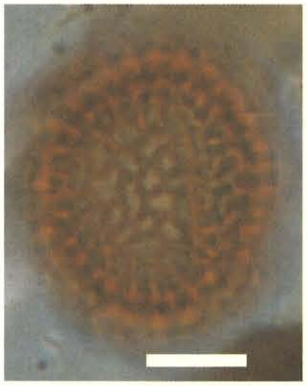
オモダカ属



ヨモギ属



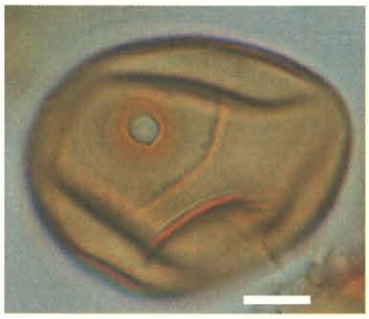
キク科（オナモミ属Type）



アブラナ科

セリ科

ヒシ属



イネ科（40ﾐｸﾛﾝ以上）

スケールバーは10μｍ（0.01㎜）

花粉化石顕微鏡写真

第５章　まとめ

五反配遺跡は発掘調査の結果、弥生時代以降の水稲耕作に関わる遺構や遺物が確認され、古くから水田となっていたことが判明した。この章では各時期の状況を整理し、特徴的な遺構・遺物について検討を行ってまとめとしたい。

１．各時期の状況について

縄文時代晩期　晩期の深鉢や櫂状の木製品が腐植層（12・13層）の底で出土したことや、自然科学分析の結果から、縄文時代晩期の遺跡周辺は沼沢湿地が広がっていたと考えられる。この時期の集落は、土器が出土した出雲大社境内遺跡が立地する遺跡北側の低丘陵上にあったと推測される。

弥生時代　遺跡全域で腐植層の上に灰白色の粘土（６層）が堆積し歩行可能となるのは、土器の出土状況から縄文時代晩期以降と考えられる。この粘土層は腐植層を削平するように堆積し、遺跡周辺の便槽工事や修理免本郷遺跡の調査でも広く確認されているので、洪水などで北山方面から運ばれてきた粘土が堆積したものと推測される(7)。今回検出した河道は６層堆積後に形成されており、下層で古墳時代の遺物が出土しなかったので弥生時代の遺構と判断した。河道の下層や岸部分では主に中期中葉から後期前葉の土器が出土し、鋤・田下駄・穂摘具などの農具や穎稲が出土したことから、この頃には付近で水田耕作が行われていた可能性が高い。また、河道と並行する溝が掘られた時期は、弥生時代に遡る可能性も考えられる。

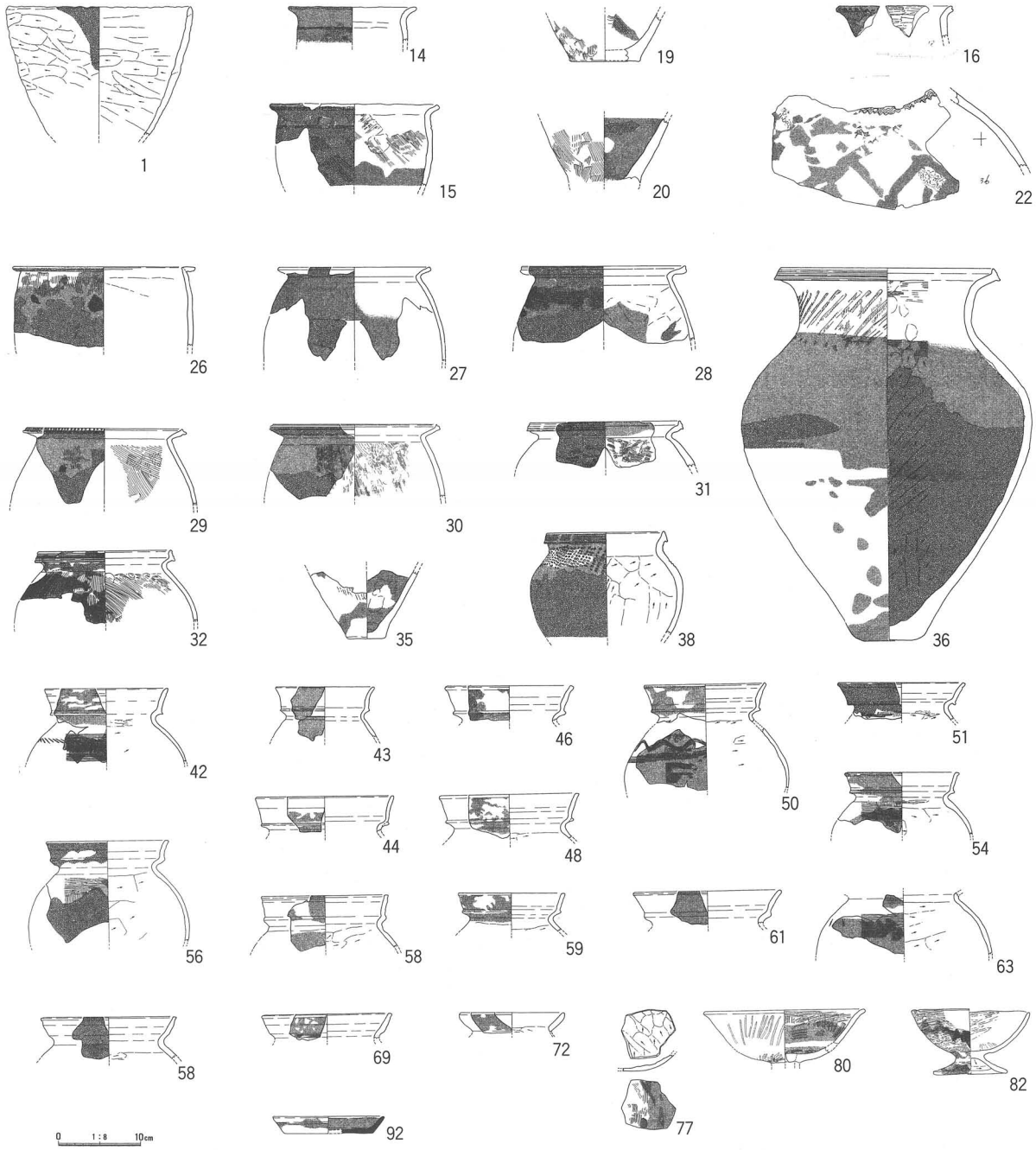
古墳時代　前述の河道は、土器の出土状況から古墳時代には埋まっていた可能性が高い。一方、前期には溝に伴う土手を補強する木組みやこれと直交する方向の木組み畦畔が構築され、水田はさらに整備されていたと考えられる。溝は水路として機能していたと考えられ、上層で古墳時代前期後半から中期前半の土器が出土することから中期には埋まっていたと考えられる。また、Ｂ区で検出された複数の杭列で構成される畦畔は、溝や溝に伴う木組みと方向が異なり、付近で古墳時代後期の須恵器蓋坏が出土した。このことから溝の方向と無関係の木組みや畦畔は溝が埋まった古墳時代中期以降に構築されたと考えられる。

木組みを構成する杭・矢板・横板は基本的に建築部材等を再利用したものだった。隣り合う杭や矢板に類似する例が多く、Ｄ区の木組みを構成していた**353・354**のように接合するものもあった。これは土手や畦畔を構築する際に、あらかじめ用意した建物等の部材を現地で再度適当な大きさ・形に再加工して使用したためと考えられる。今回整理を行った出土木製品の中には、矢板と杭に明確に区別しきれなかったものもあるが、再加工する際に先を斜めに切断する以外特に意識されなかった為と推測される。以上の点から、木組みを構成する杭と矢板の違いに特別な使い分けは無かったと考えられる。

平安時代以降　３層除去後に検出した地割遺構は出土遺物より平安時代以降のものと判断した。図版20は検出した地割を周辺の地形図にはめ込んだもので、方眼は調査区内の地割と11Ｔで検出した地割の間隔に合わせて54ｍ（約半町）方眼にした。これを見ると遺跡周辺に地割り遺構と近い軸の区画が存在することがわかる。ケバで表現されているものや、砂丘上の小道や畑など近年

(7)　高安克己氏、渡辺正巳氏の御教示による。

整備されていない区画に軸の合うものがある点は注目され、周辺の古い区画は平安時代の地割を反映している可能性が考えられる。また、鎌倉時代中期の出雲大社と周辺を描いたとされる「杵築大社并神郷絵図」（千家尊祐氏蔵）では、遺跡周辺は整った水田として表現されている。これは単に模式的な表現でなく、今回の調査で検出された地割を表現したものと思われ、このころ絵図に描かれた範囲に調査区同様の地割が整備されていた可能性が考えられる。今回遺跡の小字名を確認する際大社町の切図で確認したが、現在の地図では単に庭園として表現される歴博建設予定地内に、地割と同じ軸の区画が存在していた。このため今後さらに調査を進めることで、より詳しくこの地割について知ることができると思われる。



第12図　土器に付着した炭化物　Ｓ＝１／８

２．炭化物の付着した土器について

今回出土した古代以前の土器には、表面に炭化物の付着したものが多く見られた。特に、写真図版41右下・88上に掲載した弥生時代中期中葉の甕の胴部内面には、煮炊きの際焦げ付いた粒状の炭化物が付着しており注目される。接合できなかったが、Ⅲ－１様式の甕**27**の胴部下半の可能性が高い。炭化物の付着した土器のほとんどは甕であるが、壷や坏類も若干含まれる。甕は胴部最大径部分と口縁部に特に厚く炭化物が付着している。壷に分類される**36**は胴部下半も残存しており、内面に厚く炭化物が付着し外面は炭化物がとんだ状態である。高坏**80**とは蓋に使用されたと考えられる。低脚坏**82**は口縁部に炭化物が付着せず、体部と脚部の外面に付着していることから複合口縁甕の内蓋に使用したものと判断される。須恵器皿**92**は灯明皿に使用されたと考えられる。

３．用途不明の木製品について

今回の調査では弥生時代から古墳時代の多数の木製品が出土したが、用途を判断できなかったものも多数あった。このうちのいくつかについては県内外の類例を探してみた。**370～376**を組み合わせた木製品は現在のところ確認できなかったが、部品**372**単独と似た木製品は県内外に類例がある。五反配遺跡から最も近い出土例は出雲市矢野遺跡で、弥生時代の層から出土している[8]。県外の例では、京都府峰山町古殿遺跡（文献13）、滋賀県守山市下長遺跡（文献16）でよく似たものが報告されている。これらは多数の小孔を持ち、端部近くにやや大きな孔を開けている点から同様の木製品の部品の可能性が高い。儀器の可能性が考えられる

400に類似する木製品は、鳥取県青谷上寺地遺跡（文献９）で報告されている。表裏に渦文の陰刻が施され、小ぶりで薄作りなので別の器種である可能性が述べられている。このほか、鹿島町稗田遺跡（文献７）で出土している身が楕円形の組合せ式鋤も、文様は無いが身の形状や大きさがほとんど一致するので同様の木製品の可能性が考えられる。

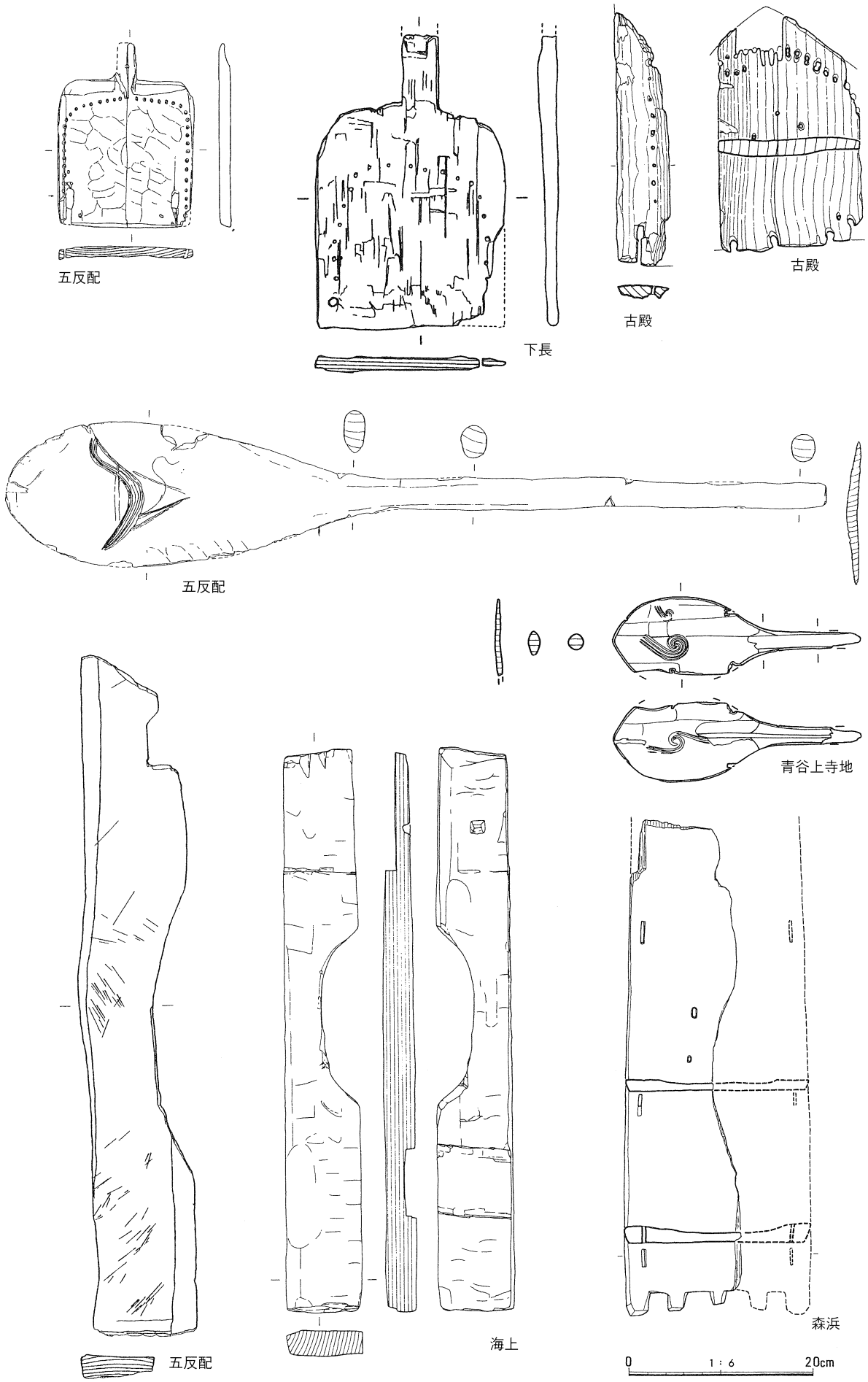
411～431のように板材の片方の側面に抉りを入れる木製品も、県内外で出土している。周辺では出雲市海上遺跡（文献６）で、**312・313**に似た部材の側面に抉りのあるものが報告されている。また、仁摩町大寺遺跡でも時期は不明だが同様の木製品が出土している。県外の類例はほとんど調べていないが、滋賀県森浜遺跡出土の琴上板（文献14・15）は、木目に沿って割れた部分の中央に抉りが入れてある。五反配遺跡出土品も含めて板材を再利用したものが目立つ。以上、用途不明品の類例をいくつか挙げてきたが、今後は民俗例と比較しながら用途を検討する必要があると思われる。

４．おわりに

五反配遺跡の調査では、県内で類例の少ない弥生・古墳時代の水田耕作に関係する遺構が検出された。このような遺構は、調査例が少ないために特殊なものとして扱われがちで、周辺の同時期の遺構と関連づけて検討された例はあまり見ない。今回の調査のまとめとして、検出された遺構・遺物について単に同時期の類似する例と比較・分類するだけでなく、遺跡の立地する出雲大社周辺の集落の中でどのように位置づけられるのか検討してみたい。

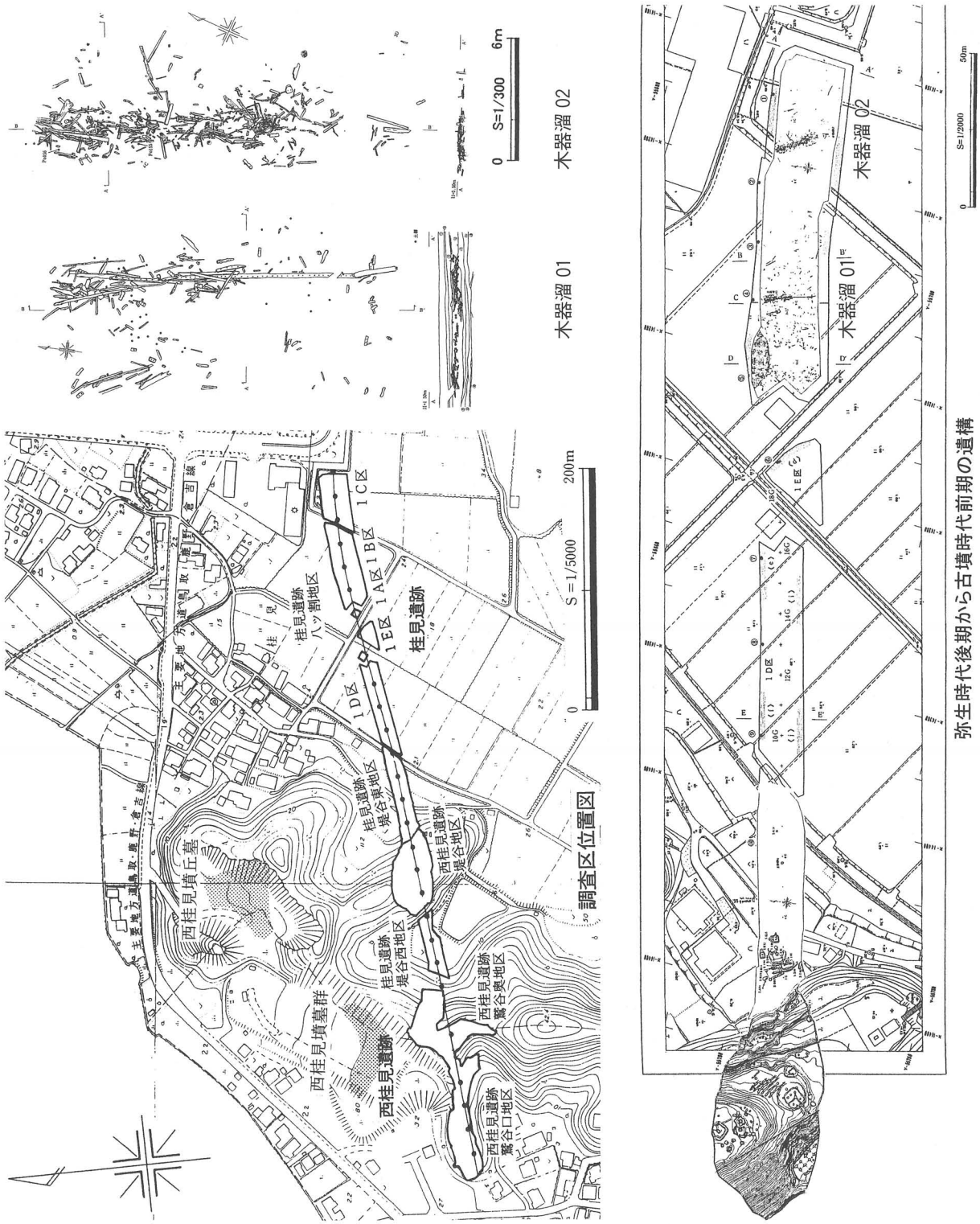
近年山陰地方では鳥取県西部の弥生時代後期を中心に集落の研究が盛んで、居住域や墓域、祭祀跡など集落全体の様子がわかる遺跡をモデルとし、各遺跡で検出された遺構が集落全体の中で

(8)　園山　薫氏の御教示による。



第13図　五反配遺跡出土木製品と類似する木製品　Ｓ＝１／６

どのように位置づけられるか検討され始めている。島根県で生産域（水田）や祭祀を含めた全体像を窺うことのできる集落遺跡の調査例が無いため、今回は鳥取県鳥取市桂見の遺跡群を参考にした。ここでは湖山池に面した丘陵の南側で居住域が検出され、北側には首長墓である西桂見墳丘墓をはじめ多数の墳墓が築かれている。この集落で五反配遺跡が参考にできるのは、多数の木製品が出土した桂見遺跡八ッ割地区で、弥生時代中期の自然河道が埋まった後に形成された木器



第14図　鳥取市桂見の集落遺跡

溜01・02である。それぞれ弥生時代後期、古墳時代前期の遺構とされ、付近で水田耕作が行われた可能性が高いと見られている。弥生時代中期に流れていた河道が埋まった後の遺構であるなど共通する部分があり、同様の遺構である可能性が考えられる。この遺構から西側の丘陵裾に位置する居住域までは約220mで、五反配遺跡の木組み遺構から北側の丘陵部までの距離もほぼ同程度である。このことから、五反配遺跡の水田を耕作していた集落の住人は、同時期の遺物が出土している遺跡北側の丘陵上に居住していたと考えて大過ないと言えよう。さらに、遺跡南東の砂丘に立地する原山遺跡（文献５）では、弥生時代後期の貼石墓と考えられる遺構も確認されている。原山遺跡が同じ集落の墓域にあたり、ここまで集落の範囲が広がる可能性が考えられる。また、祭祀関係では桂見の弥生集落から南西約1.2kmの高住の谷では銅鐸が１個出土している。五反配遺跡北側でも真名井遺跡で銅戈と勾玉が出土し、出雲大社境内遺跡で古墳時代前期の祭祀跡が確認されている。これまで弥生時代中期の遺物の出土量が少なくこの時期の集落の存在は不明だったが、今回の調査で水田耕作に関わったと考えられる弥生時代中期中葉から後期前葉の河道が確認されたことから、付近にこの時期の居住域が存在すると推測される。このほか、木組みや畦畔を構成する部材は、遺跡周辺の居住域で使用されていた可能性が高い。今後居住域が確認された場合、建物の構造や使用された雑具を考える重要な手がかりになると考えられる。

以上、五反配遺跡の発掘調査は、出雲平野部の弥生時代から古墳時代の集落象を、居住域・墳墓群・生産域・祭祀の面からより具体的に復元する資料を提供したと言える。

参考文献

1　島根県教育委員会　『嘉久志遺跡・飯田Ｃ遺跡・古八幡付近遺跡』　1997
2　島根県教育委員会　『姫原西遺跡』　1999
3　島根県教育委員会　『三田谷Ｉ遺跡vol.３』　2000
4　大社町教育委員会　『修理免本郷遺跡』　1992
5　大社町　『大社町史　史料編』　2003
6　出雲市教育委員会　『海上遺跡』　2002
7　鹿島町教育委員会　『下谷遺跡・稗田遺跡』　1994
8　(財)鳥取県教育文化財団　『桂見遺跡－八つ割地区・堤谷東地区・堤谷西地区－』　1996
9　(財)鳥取県教育文化財団　『青谷上寺地遺跡３』　2001
10　(財)鳥取県教育文化財団　『青谷上寺地遺跡４』　2002
11　兵庫県教育委員会　『五反田遺跡』　2002
12　兵庫県教育委員会　『入佐川遺跡』　2002
13　(財)京都府埋蔵文化財調査センター　『古殿遺跡』　1988
14　奈良国立文化財研究所　「木器集成図録　近畿原始編」『奈良国立文化財研究所史料』第36冊　1993
15　滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会　『森浜遺跡発掘調査報告書』　1978
16　守山市教育委員会　『下長遺跡発掘調査報告書　Ⅷ』　2001
17　安土城考古博物館　『弥生の祈り人～よみがえる農耕祭祀～』　1994
18　三重県埋蔵文化財センター　『六大Ａ遺跡発掘調査報告（木製品編）』　2000
19　(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　『瀬名遺跡Ｉ（遺構編Ｉ）』　1992
20　山陰考古学研究集会　『山陰の集落遺跡　第31回山陰考古学研究集会資料』　2003
21　内田律雄　「川を上る和爾」『古代近畿と物流の考古学』　2003　石野博信編　学生社
22　木の文化研究会　『第１回木の文化研究会資料』　2003

第４表　土器観察表(1)

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法（cm） 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	21	40	縄文土器	深鉢	BS区	13	(22.6)		(15.8)		内：ケズリ 外：ケズリ	径1㎜の砂粒多量	内：暗灰黄色（2.5Y5/2） 外：暗灰黄色（2.5Y5/2）	晩期？
2	21	40	縄文土器	深鉢	10T	5				口縁部に刻目の無い突帯を貼り付ける	内：ケズリ後ナデ 外：ナデ	径1㎜前後の砂粒多量	内：灰黄色（2.5Y6/2） 外：灰黄色（2.5Y6/2）	晩期突帯文期
3	21	40	縄文土器	深鉢	DS区 南側溝	5					内・外：ナデ・二枚貝による条痕	径1～1.5㎜の砂粒多量	内：灰オリーブ色（5Y5/2） 外：灰オリーブ色（5Y5/2）	
4	21	40	縄文土器	深鉢	CN区	7					内：ナデ 外：ケズリ後ナデ	径1～2㎜の砂粒多量	内：灰黄色（2.5YR6/2） 外：灰黄色（2.5YR6/2）	
5	21	40	縄文土器	深鉢	CN区	7					内：ナデ 外：ケズリ後ナデ	径1～2㎜の砂粒多量	内：にぶい黄色（2.5Y6/4） 外：にぶい黄色（2.5Y6/4）	
6	21	40	縄文土器	深鉢	DS区	7					内：ケズリ後ナデ 外：ナデ	径1㎜前後の砂粒多量	内：灰黄褐色（10YR5/2） 外：黒色（7.5Y2/1）	
7	21	40	縄文土器	浅鉢	河道	9					内：ナデ・ミガキ 外：ミガキケズリ後ナデ	径1㎜の砂粒多量	内：灰黄色（2.5Y5/1） 外：黒色（2.5Y2/1）	晩期突帯文期
8	21	40	縄文土器	浅鉢	溝						内：ミガキ 外：ミガキ	径1㎜の砂粒多量	内：灰オリーブ色（5Y4/2） 外：暗灰黄色（2.5Y5/2）	晩期突帯文期
9	21	40	縄文土器	浅鉢	河道	9		(7.6)			内：ナデ 外：不定方向のケズリ後ミガキ	径0.5㎜の砂粒少量	内：黒色（10YR2/1） 外：黒色（10YR2/1）	
13	22	40	弥生土器	壷	河道	床面				頸部に段	内：ナデ 外：タテハケメ後ミガキ	径1～2㎜の砂粒多量	内：暗灰黄色（2.5Y5/2） 外：灰黄色（2.5Y6/2）	Ⅰ様式
14	22	40	弥生土器	甕	河道	9	(15.5)			ヘラ描沈線1条	内：ヨコナデ・ナデ 外：ヨコナデ・タテハケ	径2～3㎜の砂粒少量	内：黄灰色（2.5Y4/1） 外：黒色（2.5Y2/1）	Ⅰ－2様式
15	22	40	弥生土器	甕	河道	7・9	(20.3)			口縁下端にキザミ。ヘラ描沈線を1条廻らせる	内：ヨコナデ・タテハケメの後ナデ 外：ヨコナデ・タテハケメ	径1～1.5㎜の砂粒少量	内：黒褐色（2.5Y3/1） 外：黒色（N1.5/）	Ⅰ－2様式
16	22	40	弥生土器	甕	溝	11				口縁部に三角形の刺突文	内：ヨコ方向のヘラミガキ 外：ユビオサエ・タテハケメ	径0.5～1㎜の砂粒少量	内：黒褐色（2.5Y3/1） 外：黒色（2.5Y2/1）	Ⅱ様式
17	22	40	弥生土器	甕	溝					胴部に段	内：タテハケ 外：ヨコナデ・タテハケ	径2～3㎜の砂粒多量	内：黄灰色（2.5Y4/1） 外：暗黄灰色（2.5Y5/2）	Ⅰ様式
18	22	40	弥生土器	壺	AS・BS・A区溝	5		9.9			内：不明 外：不明	径2～5㎜の砂粒多量	内：にぶい黄橙色（10YR6/3） 外：にぶい黄橙色（10YR6/3）	Ⅰ様式
19	22	40	弥生土器	甕	溝	9		(8.6)			内：タテハケメ後ナデ 外：タテハケメ・ナデ	径1～2㎜の砂粒多量	内：黄灰色（2.5Y4/1） 外：にぶい黄橙色（10YR6/3）	Ⅰ様式
20	22	40	弥生土器	甕	河道	9					内：不明 外：タテハケメ	径2～5㎜の砂粒少量	内：黒色（N1.5/） 外：黄灰色（2.5Y4/1）	Ⅰ様式
21	22	40	弥生土器	壷	10T	5	(29.9)			口縁部は大きく開き、端部は肥厚し下垂する。	全面ナデ	微砂粒多い、白色粒子	にぶい黄色（2.5Y6/3）	Ⅳ－1様式
22	22	41	弥生土器	壺	DN区、河道	5・7・9				頸部と肩部の境に2条以上の波状文を施す。	内：ヘラ　ミガキ、ナデ、ヨコ　ハケメ 外：ヘラ　ミガキ	径3㎜以下の砂粒多量	内：にぶい黄橙色（10YR6/3） 外：暗灰黄色（2.5Y5/2）	Ⅳ様式 胴部下半内面はタテ方向のヘラケズリ
23	22	40	弥生土器	壺	DS区 溝	床				5条の凹線文、刺突文、有軸羽状文	内：タテハケメ・ユビオサエ後ヨコナデ 外：タテハケメ	径0.5㎜の砂粒少量	内：黒褐色（10YR3/1） 外：にぶい黄橙色（2.5Y6/3）	Ⅳ様式
24	22	41	弥生土器	壷	DN区	5	(18.2)	6.1		頸部にキザミを施した突帯。胴部最大径部分に刺突文を2条施す。	内：タテハケメ・ナデ・ヘラケズリ 外：ハケメ後ナデ・ヘラミガキ	径1～1.5㎜の砂粒多量	内：にぶい黄色（2.5Y6/3） 外：にぶい黄色（2.5Y6/3）	Ⅳ－1様式
25	22	41	弥生土器	壷	BN、溝	8・9・11	16.4	6.6	32	口縁端部は肥厚し面を持つ。胴部は丸く張り、刺突文を廻らせる。	内：ヨコナデ・タテハケメ・ヨコハケメ・ヘラミガキ 外：ヨコナデ・タテハケメ・ヘラミガキ	径1㎜の砂粒多量	内：黄灰色（2.5Y5/1） 外：浅黄色（2.5Y7/3）～黄灰色（2.5Y4/1）	Ⅲ－2様式
26	22	42	弥生土器	甕	河道	9	(19.2)			口縁部は外側へほぼ水平に拡張する	内：ヘラケズリ後ナデ外：タテハケ	径0.5㎜の砂粒多量	内：黒褐色（10YR3/1） 外：黒色（5Y2/1）	Ⅱ様式
27	22	42	弥生土器	甕	河道	9	(18.3)				内：ヨコナデ・タテハケメ 外：ヨコナデ・タテハケ後ナデ	径0..5㎜以下の砂粒と2.5㎜以下の石英を含む	内：褐黄灰色（10YR5/2） 外：黒色（2.5Y2/1）	Ⅲ－1様式 内面コゲ付土器と同一個体か
28	22	42	弥生土器	甕	CN区BN区	5・7	(19.8)			口縁端部を上方につまんでアクセントをつける。	内：ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ 外：タテハケ後ヨコハケ・ヨコナデ	径1㎜の砂粒多量	内：暗灰黄色（2.5Y5/2） 外：黒色（2.5Y2/1）	Ⅲ－2様式
29	23	42	弥生土器	甕	河道	9	19.0			口縁端部を僅かに上下に拡張する。口縁端部に刺突文を廻らせる。	内：ヨコナデ・ハケメ外：ヨコナデ・タテハケメ	径0.5㎜以下の砂粒少量、金雲母少量	内：褐灰色（10YR5/1） 外：黒色（2.5Y2/1）	Ⅲ－2様式
30	23	42	弥生土器	甕	10T	5	19.8			口縁部擬凹線	内：ヨコナデ・タテハケメ 外：ヨコナデ・タテハケメ	微砂粒多い、白色粒子・石英		Ⅳ－1様式
31	23	42	弥生土器	甕	DS区	床	(18.2)				内：ヨコナデ・ヨコハケメ 外：ヨコナデ・タテハケメ	径1㎜前後の砂粒多量	内：褐灰色（10YR4/1） 外：黒色（7.5Y2/1）	Ⅳ－2様式
32	23	42	弥生土器	甕	CS区	5	(15.9)			口縁端部を上下に拡張し、3条の凹線文を廻らせる。	内：ヨコナデ・タテハケメ・ヨコハケメ 外：ヨコナデ・タテハケメ	径0.5㎜の砂粒多量	内：灰黄色（2.5Y6/2） 外：黒色（2.5Y2/1）	Ⅳ－2様式
33	23	42	弥生土器	甕	溝	11	(21.4)			口縁端部を上方に拡張し、2条の凹線文を廻らせる。	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	径0.5㎜の砂粒少量	内：黒色（2.5Y2/1） 外：黒色（2.5Y2/1）	Ⅳ－2様式
34	23	42	弥生土器	壺	BN区	7		6.2			内：ナデ 外：ユビオサエ・ヨコナデ	径1～1.5㎜の砂粒多量	内：灰黄褐色（10YR4/2） 外：灰黄色（2.5Y6/2）	Ⅲ様式？ 内面が黒ずんでいる。
35	23	42	弥生土器	甕	河道	9		4.4			内：ユビオサエ・ナデ 外：ミガキ・ナデ	径1㎜以下の砂粒多量	内：黒褐色（2.5Y3/1） 外：黄灰色（2.5Y5/1）	中期
36	23	43	弥生土器	壷	AS区	9	26.0	(8.5)	45.5	口縁に3条の凹線を廻らせる。頸部に、ハケ調整に使用した工具による刺突文を廻らせる。	内：ヨコハケ・ヘラケズリ 外：タテハケ・ヨコハケ	径1～1.5㎜の砂粒多量	内：黄褐色（2.5Y5/3）～黒色（2.5Y2/1） 外：黄褐色（2.5Y5/3）	Ⅴ－1様式

第５表　土器観察表(2)

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法（cm） 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
37	23	43	弥生土器	壺	溝	11	24.8			口縁端部に2条の凹線文。肩部に沈線と刺突文。	内：ヨコハケ後ヨコナデ・ヘラケズリ 外：ヨコ及びタテ方向のハケメ後ヨコナデ	径0.5～1mmの砂粒多量	内：鈍い黄橙色（10YR6/3） 外：鈍い黄橙色（10YR6/3）	Ｖ－1様式
38	23	42	弥生土器	甕	河道	9	(14.0)			口縁部に3条の凹線を廻らせる	内：ヘラケズリ・ヨコナデ 外：タテハケ・ヨコナデ	径1mmの砂粒多量	内：黄灰色（2.5Y4/1）外：黒色（10YR2/1）	Ｖ－1様式
39	23	42	弥生土器	甕	DN区	5	21.4				内：ヨコナデ・ヘラケズリ 外：ヨコナデ・タテハケ	径1mmの砂粒多量	内：暗灰黄色（2.5Y5/2）外：黒色（2.5Y2/1）	Ｖ－1様式
40	23	42	弥生土器	不明	DN区	4				胴部に刺突文を施す。	内：ヘラケズリ 外：ナデ	径1mm以下の砂粒を含む	内：鈍い黄橙色（10YR6/3） 外：黒色（7.5Y2/1）	Ⅳ様式？ ススが厚く付着
41	23	42	弥生土器	小型の壺又は鉢	BS区	4				胴部に波状文と沈線を施す。	内：ヘラケズリ 外：ヨコハケメ	径2.5mm以下の砂粒を含む。	内：暗灰黄色（2.5Y4/2）外：黒色（7.5Y2/1）	Ｖ様式？ ススが厚く付着
42	24	44	弥生土器	甕	5T	黒褐色粘質土	15.0			口縁端部は先細りし、稜は下方に突出する。片部に刺突文を廻らせる。	内：ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリ外：ヨコナデ・タテハケ・ヨコハケメ	微砂粒多い、石英・雲母	淡黄色（2.5Y8/3）	草田5期
43	24	44	弥生土器	甕	BS区	5	(12.1)			口縁部は外反し、端部は丸い	内：ヨコナデ、ナデ外：ヨコナデ	径0.5mmの砂粒多量	内：鈍い黄褐色（10YR5/3） 外：黒色（10YR2/1）	草田5期
44	24	44	弥生土器	甕	CS区	7	(16.9)			口縁端部は丸く、稜は貼り付けによる	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	径0.5mmの砂粒少量	内：灰黄褐色（10YR6/2） 外：灰黄褐色（10YR6/2）～黒色（10YR6/2）	草田5期
45	24	44	土師器	甕	T3北板列		16.5			片部に平行線文を施す	内：ヨコナデ・ヘラケズリ 外：ヨコナデ・タテハケ・ヨコハケメ	微砂粒多い、石英・雲母	鈍い黄色（2.5Y6/3）	草田6期
46	24	44	土師器	甕	DS区	7	(15.8)			口縁端部は外方に肥厚し面を持つ	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	径0.5mmの砂粒多量	内：灰黄色（2.5Y6/2） 外：灰黄色（2.5Y6/2）～黒色（2.5Y2/1）	草田6期
47	24	44	土師器	甕	DS区	7	(16.8)			口縁端部は外方に肥厚し面を持つ	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	径1mmの砂粒多量	内：灰黄色（2.5Y6/2） 外：黄灰色（2.5Y5/1）	草田6期
48	24	44	土師器	甕	DS区	4	(17.1)			口縁端部は外方に肥厚し、稜は貼り付けによる	内：ヨコナデ、ケズリ 外：ヨコナデ	径0.5mmの砂粒多量	内：灰黄色（2.5Y6/2） 外：灰黄色（2.5Y6/2）～黒色（2.5Y2/1）	草田6期
49	24	44	土師器	甕	CS区	4	(16.5)			口縁端部は外側に肥厚し面を持つ	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	径0.5mmの砂粒多量	内：灰黄色（2.5Y6/2） 外：灰黄色（2.5Y6/2）	草田6期
50	24	44	土師器	甕	AN区、溝	1・9	(14.9)			口縁端部は面を持ち、内外に肥厚する	内：ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ 外：ヨコナデ、ハケメ	径0.5mmの砂粒少量	内：灰黄褐色（10YR5/2）外：黒色（10Y2/1）	草田6期
51	24	44	土師器	甕	DS区	7	(15.6)			口縁端部に面を持つ、稜は下方に突出する	内：ヨコナデ、ヘラケズリ 外：ヨコナデ、タテハケメ、ヨコハケメ	径0.5mmの砂粒多量	内：鈍い黄橙色（10YR7/3）～褐灰色（10YR4/1） 外：黒色（2.5Y2/1）	草田6期
52	24	44	土師器	甕	DS区	4	(14.6)			口縁端部に面をもつ。	内：ヨコナデ、ケズリ 外：ヨコナデ	径0.5mm以下の砂粒多量	内：灰黄色（2.5Y6/2） 外：灰黄色（2.5Y6/2）	草田7期
53	24	43	土師器	甕	BN区、CN区	3・4・7	(16.4)			口縁端部は内側に拡張し、面を持つ。肩部に1条の波状文を施す。	内：ヨコナデ、ヘラケズリ 外：ヨコナデ、タテハケメ、ヨコハケメ	径0.5mmの砂粒多量	内：灰黄色（2.5Y6/2） 外：灰黄色（2.5Y6/2）	小谷3式
54	24	44	土師器	甕	DS区	7	(14.0)			口縁端部は外片に肥厚し、面を持つ。稜の上に沈線が廻る	内：ヨコナデ、ヘラケズリ、ミガキ 外：ヨコナデ、タテハケメ、ヨコハケメ	径1～2mmの砂粒少量	内：浅黄色（2.5Y7/3） 外：浅黄色（2.5Y7/3）～黒色（5Y2/1）	小谷3式
55	24	44	土師器	甕	BN区	7	(14.7)			口縁端部は外側に肥厚し面を持つ	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	径0.5mmの砂粒少量	内：灰黄色（2.5Y7/2） 外：灰黄色（2.5Y7/2）	小谷3式
56	24	43	土師器	甕	DS区、CS区	4、5、7	(15.6)			口縁端部は肥厚し、面を持つ。肩部に刺突文を施す。	内：ヨコナデ、ヘラケズリ 外：タテハケメ、ヨコハケメ、ヨコナデ	径0.5mmの砂粒少量	内：灰黄色（2.5Y6/2） 外：黒色（2.5Y2/1）	小谷3式
57	24	44	土師器	甕	CN区	7	(16.0)			口縁端部は外側に肥厚し面を持つ	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	径0.5mmの砂粒多量	内：鈍い黄橙色（10YR5/3）） 外：鈍い黄橙色（10YR5/3））	小谷3式
58	24	44	土師器	甕	BN区	4・5	(15.5)			口縁端部に面を持ち稜は緩い。肩部に緩くカーブするヘラ描沈線	内：ヨコナデ、ヘラケズリ 外：ヨコナデ、ヨコハケメ	径1mmの砂粒多量	内：暗灰黄色（2.5Y5/2） 外：黒褐色（2.5Y3/1）	小谷3式？
59	24	44	土師器	甕	CN区	7	(13.1)			口縁端部に面を持つ	内：ヨコナデ、ケズリ外：ヨコナデ	径1mmの砂粒多量	内：灰黄色（2.5Y6/2） 外：灰黄色（2.5Y6/2）～黒色（2.5Y2/1）	小谷4式
60	24	44	土師器	甕	CS区	4	(13.6)			口縁端部に面を持ち、稜は貼り付けによる	内：ヨコナデ、ヘラケズリ ユビオサエ 外：ヨコナデ、タテハケメ	径1mmの砂粒多量	内：鈍い黄橙色（10YR7/3）） 外：鈍い黄橙色（10YR7/3））	小谷4式
61	24	44	土師器	甕	ES区	4	(18.1)			口縁部の稜は緩く、端部は丸い	内：ヨコナデ、ナデ外：ヨコナデ	径0.5mmの砂粒多量	内：暗灰黄色（2.5Y5/2） 外：黒色（2.5Y2/1）	小谷3式以降
62	24	44	土師器	甕か鉢	3T北					口縁部の稜は水平に突出する	内：ヨコナデ、ヘラケズリ 外：ヨコナデ	径0.5mmの砂粒少量	内：灰黄色（2.5Y6/2） 外：鈍い黄（2.5Y6/3）	草田6～7期
63	24	44	土師器	甕	BN区、CN区	4・7				肩部に刺突文を廻らせる	内：ヨコナデ、ヨコハケメ、ナデ、ヘラケズリ 外：ヨコナデ、ヨコハケメ	径2.5mm以下の砂粒・石英を含む	内：暗灰黄色（2.5Y5/2）外：鈍い黄橙色（10YR6/3）～黒色（2.5Y2/1）	草田6～7期
64	24	43	土師器	壺	CN区、BN区、河道	3、4・7	(17.2)			口縁端部は内外に肥厚し上面がくぼむ	内：ヨコナデ後ヘラケズリ 外：ヨコナデ後ヨコハケメ	径1mmの砂粒少量	内：灰黄褐色（10YR5/2）外：暗灰黄色（2.5Y5/2）	大東式
65	24	44	土師器	甕	CS区	5・7	(12.9)			口縁は緩く屈曲し、端部に面を持つ	内：ヨコナデ、ヘラケズリ 外：ヨコナデ、タテハケメ	径0.5mmの砂粒多量	内：灰黄色（2.5Y6/2） 外：灰黄色（2.5Y6/2）	大東式
66	24	44	土師器	甕	CN区	4・7	(15.1)			口縁端部は面を持ち、内側に突出する	内：ヨコナデ、ヨコハケメ、ヘラケズリ、ナデ 外：ヨコナデ、タテハケメ、ナデ	径1mm以下の白色砂粒を含む	内：灰黄褐色（10YR5/2）外：灰黄褐色（10YR5/2）	大東式
67	24	44	土師器	甕	CS区	4	(12.7)			口縁端部内面が浅くくぼむ。	内：ヨコナデ 外：ヨコナテ	径0.5mmの砂粒少量	内：灰黄色（2.5Y6/2） 外：灰黄色（2.5Y6/2）	大東式
68	25	44	土師器	甕	AN区	7	(16.5)			口縁部は内湾し端部に平坦な面を持つ	内：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ 外：ヨコナデ、タテハケメ	径2.5mm以下の砂粒を含む	内：暗褐色（10YR3/3） 外：黒色（N1.5/）	

第６表　土器観察表(3)

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法（cm） 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
69	25	44	土師器	甕	CN区	5	(15.8)			口縁端部に面を持つ	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ヨコハケメ	径0.5㎜の砂粒多量	内：鈍い黄褐色（10YR5/3） 外：黒色（10YR2/1）	胴部は接合しない。
70	25	44	土師器	甕	AS区	4	(12.5)			口縁端部は僅かに内側に屈曲する	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ヨコハケメ	径1㎜の砂粒少量	内：褐灰色（10YR5/1） 外：黒褐色（10YR3/1）	
71	25	44	土師器	甕			(15.8)			口縁部は内側に肥厚し面を持つ	内：ヨコハケメ 外：ヨコナデ	径0.5㎜の砂粒多量	暗灰黄色（2.5Y5/2）	
72	25	44	土師器	甕	BN区	4	(12.8)			口縁部は僅かに内湾し端部は丸い	内：ヨコナデ、ヘラケズリ 外：ヨコナデ	径0.5㎜の砂粒少量	内：灰黄褐色（10YR4/2） 外：黒色（10YR2/1）	
73	25	45	土師器	壺	CS区	3・4・7	(15.6)			口縁部は緩く外反する	内：ヨコナデ、ヘラケズリ 外：ヨコナデ、タテハケメ	径1～2㎜の砂粒多量	内：鈍い黄橙色（10YR6/3） 外：鈍い黄橙色（10YR6/3）～黒色（5Y2/1）	胴部は接合しない。
74	25	45	土師器	壺	AN区、BN区	4・7	(8.6)			口縁部は直線的に開く	内：ヨコナデ、粗いナデ 外：ヨコナデ、ヨコハケメ	径0.5㎜以下の砂粒多量	内：褐灰色（10YR6/1） 外：黄灰色（2.5Y4/1）	
75	25	45	土師器	壺	C区	3	(10)			口縁部は直線的に開く	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	径0.6㎜以下の砂粒少量	鈍い黄橙色（10YR6/3）	
76	25	45	土師器	壺か	AN区	5				丸底	内：ヘラケズリ後ナデ 外：不明	径1㎜の砂粒多量	内：黄褐色（2.5Y5/3） 外：鈍い黄褐色（10YR5/3）	
77	25	45	土師器	甕か	CS区	4				器壁が薄く平坦	内：ヘラケズリ、ユビオサエ 外：ヨコハケメ	径0.5㎜の砂粒少量	内：灰黄色（2.5Y6/2） 外：暗灰黄色（2.5Y4/2）～黒色(2.5Y2/1)	
78	25	45	土師器	高坏	AN区、BN区、BS区	5・9・11	(25)				内：ヘラミガキ、ナデ 外：ヘラミガキ、ナデ	径1㎜の砂粒多量	鈍い黄橙色（10YR6/3）	草田5～6期
79	25	45	土師器	高坏		4	(19.4)			口縁部は緩く外反し、端部に1条の沈線が廻る	内：ヘラミガキ、ナデ 外：ヘラミガキ、ナデ、タテハケメ	径0.5㎜の砂粒少量 黒雲母多量	灰黄色（2.5Y7/2）	草田7期
80	25	46	土師器	高坏	BN区	4・5	(19.7)			口縁部は緩く外反する	内：ヘラミガキ、ナデ 外：ヘラミガキ、ナデ	径0.5㎜の砂粒少量	鈍い黄褐色（10YR5/4）	草田7期 内面が黒く変色し、炭化物が付着している。蓋に使用した可能性がある。
81	25	45	土師器	高坏	DS区	4・6	(17.9)			口縁部は緩く外反する	内：ヨコハケメ後ヘラミガキ 外：ヨコナデ後放射状のハケメ	径1㎜の砂粒多量	内：暗灰黄色（2.5Y5/2） 外：黄灰色（2.5Y4/1）	草田7期以降
82	25	43	土師器	低脚坏	BN区、CN区	7、8、9	14.4	9.0	8.0	坏部は丸く内弯し、脚部は「ハ」の字に開く。外面は強いミガキの為凹凸が目立つ。	内：ヘラ　ミガキ 外：ヘラ　ミガキ、ヘラケズリ	径1㎜の砂粒少量 金雲母微量	内：暗灰黄色（2.5Y5/2） 外：暗灰黄色（2.5Y5/2）	草田6～7期 蓋として使用されている。
83	25	46	土師器	低脚坏	DS区	4	18.2				内：不明 外：不明	径1～1.5㎜の砂粒多量	内：黄灰色（2.5Y6/1） 外：黄灰色（2.5Y6/1）	草田5～7期 全体的に大きくゆがむ。
84	25	45	土師器	低脚坏	DS区	4	(13.9)			口縁端部内面に浅い沈線が廻る。	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	径0.5㎜の砂粒多量	鈍い黄橙色（10YR7/3）	
85	25	45	土師器	椀	DS区	4	(12.7)			口縁端部は丸く、体部は内弯する。	内：ミガキ 外：ナデ	径1㎜の砂粒多量	内：灰黄色（2.5Y7/2） 外：鈍い赤褐色（5YR4/3）	内外面に赤彩
86	25	45	土師器	椀	DN区	5				体部は緩く内弯する。	内：ミガキ 外：ナデ	径0.5㎜以下の砂粒少量	内：鈍い赤褐色（5YR4/3） 外：黄褐色（2.5Y5/3）	内外面とも赤彩あり。
87	25	46	須恵器	杯蓋	DS区	3・4	10.0			天井部と体部の境に溝がある	内：回転ナデ・ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り後ナデ	径2.5㎜以下の砂粒を含む	内：灰白色（NY7/） 外：灰白色（NY7/）	出雲6期平行
88	25	46	須恵器	杯蓋	BS区	4・5	(12.9)		3.5		内：回転ナデ・ナデ 外：回転ナデ・回転ヘラケズリ	径3㎜以下の砂粒を含む	内：灰白色（10Y7/1） 外：オリーブ灰色（2.5GY6/1）	出雲5期
89	25	46	須恵器	杯身	BS区	5	10.7		4.4		内：回転ナデ・ナデ 外：回転ナデ・回転ヘラケズリ・ヘラ切り後ナデ	径2㎜以下の砂粒、黒色粒子を多く含む	内：灰色（N6/） 外：灰色（N5/）	出雲5期
90	25	46	須恵器	杯身	BS区	5					内：回転ナデ・ナデ 外：回転ナデ゛	径1㎜以下の砂粒をやや多く含む	内：灰色（10Y6/1） 外：灰色（10Y6/1）	8世紀？
91	25	46	須恵器	杯身	AN・AS	3・4	11.9	8.8			内：回転ナデ・ナデ 外：回転ナデ゛・回転糸切り・ナデ	径3㎜以下の砂粒を含む	内：灰色（N6/） 外：灰色（N6/） 口縁部：オリーブ灰色（2.5GY5/1）	9世紀
92	25	46	須恵器	皿	DS区	4	13.3	10.9	2.1		内：回転ナデ・回転ナデ゛後ナデ 外：回転ナデ゛回転糸切り・ナデ	径0.5㎜以下の砂粒を僅かに含む。黒色の粒子を多く含む。	内：暗灰黄色（2.5Y4/21） 外：灰色（7.5Y7/1） 口縁部：灰色(7.5Y5/1)	8世紀後 半灯明皿の可能性がある。
93	25	47	須恵器	壺	A区	3・4					内：同心円文オサエ 外：平行タタキ・カキメ	径2㎜以下の砂粒を含む	内：赤灰色（5R6/1） 外：灰色（N5/）	
94	25	47	須恵器	甕	DN区	4					内：同心円文オサエ 外：平行タタキ	径1㎜以下の砂粒を含む	内：灰白色（2.5Y7/1） 外：灰色（10Y5/1）	
95	25	47	須恵器	甕	A区	3					内：同心円文オサエ 外：平行タタキ	径0.5㎜以下の砂粒を含む	内：灰白色（10Y7/1） 外：灰色（10Y5/1）	
96	25	47	須恵器	甕	A区	3・4					内：同心円文オサエ 外：平行タタキ	径1㎜以下の砂粒、黒色の粒子を含む	内：灰白色（N7/） 外：灰色（N6/）	
97	25	47	須恵器	甕	AN区 BN区	3・4					内：同心円文オサエ 外：平行タタキ	径1㎜以下の砂粒を含む	内：灰色（N5/） 外：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）	
98	26	47	須恵器	甕	AN区	4					内：同心円文オサエ 外：平行タタキ	径0.2㎜以下の砂粒を含む	内：灰色（N6/） 外：灰色（N6/）	
99	26	47	須恵器	甕	BN区	4					内：同心円文オサエ 外：平行タタキ	径1㎜以下の砂粒を含む	内：暗灰色（N3/） 外：灰色（N5/）	
100	26	47	須恵器	甕	BN区 CS区 CN区	3・4					内：同心円文オサエ 外：平行タタキ	径1㎜以下の砂粒、黒色の粒子を含む	内：灰白色（N7/） 外：灰色（N5/）	
101	26	47	土師器	皿	CS区	4		(9.0)			内：回転ナデ、ヘラ切り 外：回転ナデ	径0.5㎜以下の砂粒多量	内：鈍い黄橙色（10YR7/2） 外：褐灰色（10YR6/1）	9世紀後半

第７表　土器観察表(4)

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
102	26	47	土師器	杯	A区	4		(6.4)			内：回転ナデ、回転糸切り 外：回転ナデ	径1.5㎜以下の砂粒含む	にぶい黄橙色（10YR6/3）	
103	26	47	土師器	杯				(14.5)			内：回転ナデ 外：回転ナデ	径0.5㎜以下の砂粒含む	灰黄褐色（10YR6/2）	12世紀
104	26	47	土師器	高台付杯							内：回転ナデ、回転糸切り 外：回転ナデ	径0.5㎜の砂粒少量	内：黒色（N1.5/） 外：暗灰黄色（2.5Y4/2）	12世紀 内面に炭化物が付着する
105	26	47	土師器	高台付杯	DN区	3		5.7 （高台を除く）			内：回転ナデ 外：回転ナデ	径0.5㎜の砂粒多量	灰黄色（2.5YR6/2）	12世紀
106	26	47	土師器	杯	A区	3		5.7			内：回転ナデ、回転糸切り 外：回転ナデ	径0.5㎜の砂粒多量	灰黄色（2.5YR7/2）	12世紀
107	26	47	土師器	杯	BN区	4		(5.4)			内：回転ナデ 外：回転ナデ	径0.5㎜以下の砂粒含む	内：黒褐色（2.5Y3/1） 外：灰白色（2.5Y7/1）	12世紀 内面に炭化物が付着する
108	26	47	土師器	皿	AS区	3		5.5			内：回転ナデ、回転糸切り 外：回転ナデ	径0.5㎜の砂粒少量	鈍い黄橙色（10YR7/4）	12世紀
109	26	47	土師器	杯	BN区	4		6.1			内：回転ナデ 外：回転ナデ	径0.5㎜の砂粒少量	灰黄色（2.5YR6/2）	12世紀
110	26	47	土師器	杯	11T	3	(13.4)	(5.4)	4.5		内：ヨコナデ 外：ヨコナデ 底：回転糸切り	径0.5㎜の砂粒少量	鈍い黄橙色（10YR6/4）	12世紀 内外に炭化物が付着する
111	26	47	土師器	皿	11T	3		(6.0)			内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	径0.5㎜の砂粒多量	灰黄色（2.5Y6/2）	
112	26	47	土師器	杯	11T	4		(6.4)			内：ヨコナデ 外：ヨコナデ 底：回転糸切り	径0.5㎜の砂粒多量	灰黄色（2.5Y6/2）	
113	26	48	土師器	杯	BS区	4	(11.5)	(5.5)	3.65		内：回転ナデ 外：回転ナデ	径0.5㎜以下の砂粒多量	灰黄褐色（10YR5/2）	12世紀
114	26	48	土師器	杯	AN区 条里遺構	4		(5.4)			内：回転ナデ、回転糸切り 外：回転ナデ	径0.5㎜以下の砂粒含む	灰黄褐色（10YR6/2）	
115	26	48	土師器	杯	条里遺構	3		(5.1)			内：回転ナデ、 静止糸切り 外：回転ナデ	径0.5㎜以下の砂粒含む	灰黄色（2.5Y6/2）	
116	26	48	土師器	皿	AS区	3		3.2			内：回転ナデ、回転糸切り 外：回転ナデ	径0.5㎜以下の砂粒含む	鈍い黄橙色（10YR7/3）	
117	26	48	土師器	皿	AN区 条里遺構	3		3.6			内：回転ナデ、回転糸切り 外：回転ナデ	径0.5㎜以下の白色粒多量	灰黄色（2.5Y6/2）	
118	26	48	土師器	皿		4		3.5			内：回転ナデ 外：回転ナデ	径0.5㎜以下の砂粒少量	灰黄色（2.5YR6/2）	
119	26	48	土師器	皿	A区 杭列北			3.6			内：回転ナデ、回転糸切り 外：回転ナデ	径1.0㎜以下の砂粒含む	鈍い黄橙色（10YR7/2）	
120	26	48	須恵器	壺	AN区	3･4･5					内：回転ナデ、ユビオサエ 外：回転ナデ、格子目タタキ	径1㎜以下の砂粒を含む	内：灰白色（5Y7/1） 外：灰色（5Y6/1）	
121	26	48	青磁	碗	C区	3						密	灰オリーブ（7.5Y4/2）	龍泉窯系青磁碗（Ⅱ類）

第８表　石器観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 長さ	幅	厚さ	重さ	形態・文様の特徴	色調	備考
10	21	48	石器	打製石斧	DS区	7	8.1	7.9	1.6			灰オリーブ色（7.5Y6/2）	打製石斧の基部。両端のみ加工。自然面を残す。
11	21	48	石器	打製石斧	BS区	5	5.7	8.2	1.2			灰オリーブ色（7.5Y6/2）	上下を欠損。109と同じ石材と思われる。
125	26	48	石器	砥石		5	9.8	8.3	3.7		角は丸くなっている。	オリーブ灰色（2.5GY5/1）	
126	26	48	石器	砥石	BS区		9.75	3.7	3.3			灰白色（10YR8/2）	ほぼ全面を使用している。
127	26	48	石器	砥石	AN区	3	5.9	4.0	1.2			浅黄色（2.5Y7/3）	6面とも使用
450		48	石器	砥石	CS区	5						灰白色（10ＹＲ8/2）	

第９表　鉄器観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 長さ	幅	厚さ	形態・文様の特徴	色調	備考
123	26	48	鉄製品	鑿または船釘	CS区	3	19.6	3.1	1.2	頭部近くは幅が広くなる		頭部が敲打によりつぶれている。

第10表　木製品観察表(1)

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	品目	出土地点	層位	寸法(cm) 長	幅	厚	高	樹種	保存処理	備　考
12	21	51	用途不明品		BN区	13	86.1	9.5	1.5		スギ	○	両端とくびれ部が炭化している
122	26	51	容器	椀	BS区	3	3.0	4.1	0.45			○	内面には赤、外面には黒い漆が塗られる
124	26	51	建築部材	杭	AN区 地割遺構	4b	38.5	9.8	7.6				片方の端を削って尖らせる。反対側は炭化している。
128	27	51	工具	掛矢	C区溝	7	55.3	16.5	9.4		二葉マツ	○	握り部分は、鉛筆を削るように細くしてある。使用痕あり。
129	27	51	工具	掛矢	D区溝	床面	67.7	12.5	9.0		ケヤキ	○	身と握りの境が明確にくびれる。使用痕あり。
130	27	51	工具	掛矢	C区河道	7	43.5	15.3	10.5		アカガシ亜属	○	身と握りの境が明確にくびれる。使用により潰れている。
131	27	51	農具	直柄手鍬	A区溝	11	20.5	7.2	1.3				鍬先のみ
132	27	51	農具	曲柄又鍬	A区河道	7	30.0	11.5	1.5		アカガシ亜属	○	笠部を持つ。刃部は二又で扁平
133	28	51	農具	曲柄又鍬	C区溝	7	76.7	18.5	1.6		アカガシ亜属	○	笠部を持つ。刃部は三又で扁平
134	28	51	農具	曲柄又鍬	A区溝	11	70.5	9.8	2.1		アカガシ亜属	○	笠部を持つ。刃部は三又で棒状
135	28		農具	柄	D区河道	7	36.2	2.2	2.2				面取りが施されており、断面は円形。端部は丸みを帯びる。
136	28	52	農具	組合せ平鋤	C区河道	9	20.7	15.7	2.0		アカガシ亜属	○	樋と柄穴を持つ
137	29	52	農具	一木平鋤	A区河道	8	99.8	10.6	2.0		アカガシ亜属	○	肩部は発達せず、柄の先端はT字に作り出す。
138	29	52	農具	一木平鋤	C区河道	9	85.4	12.0	3.0		モチノキ属	○	身は長く、肩からほぼ直線的で刃部に至る
139	29	52	農具	一木平鋤	A区溝	7	18	7.1	1.2		アカガシ亜属	○	肩部から直線的に刃部に至る
140	30	53	農具	田下駄	A区河道	9	38.0	26.0	2.0		スギ	○	4孔式。孔は不整形で大きい。
141	30	53	農具	田下駄	BS区	4	38.5	26.8	1.4		スギ	○	4孔式。孔は方形。角を丸く削る
142	30	53	農具	田下駄	B区河道	9	17.5	38.9	2.4				4孔式。孔は方形。
143	30	53	農具	田下駄	D区河道	7	35.5	33.5	1.8		スギ	○	4孔式。孔は方形。角を丸く削る
144	31	53	農具	田下駄		7	40.8	9.1	2.0		スギ	○	孔は長方形。角を丸く削る
145	31	53	農具	田下駄	C区河道	7	34.8	7.2	2.1				側面に丁寧な加工が施されている。角を取っている。
146	31	53	農具	田下駄	C区河道	7	41.0	20.8	2.4		スギ	○	長方形。側面にV字の切込みを4か所入れる。
147	31	53	農具	田下駄	AN区	5	35.5	12.5	2.0		スギ	○	八角形で三孔式。前後にも孔を持つ。
148	31	53	農具	田下駄	AN区	5	38.5	12.0	1.5		ヒノキ	○	八角形で三孔式。前後に計4か所孔を持つ。
149	31	53	農具	田下駄			39.5	12.0	2.0		スギ	○	三孔式。前後にも孔を持つ
150	32	54	農具	田下駄	E区	4	32.3	10.3	1.5		スギ	○	4孔式
151	32	54	農具	田下駄	D区溝	7	42.0	10.0	2.0				三孔式。細長い
152	32	54	農具	田下駄	DS区	4	39.0	10.5	2.0		スギ	○	三孔式。細長い
153	32	54	農具	田下駄枠	CS区	4	31.2	1.5	1.0		スギ	○	先端など3ヶ所にくびれがある
154	32	54	農具	高足田下駄	BS区	4	23.5	12.3	2.6		スギ	○	台形状で長辺端部に突起がある
155	32	54	農具	穂摘具	A区河道	7	10.5	5.7	1.0		ケンポナシ	○	孔が2か所ある。刃部は鋸歯状
156	32	54	農具	鎌柄		4	25.5	3.0	3.7		ツバキ	○	先端は短く屈曲する。
157	32	54	農具	編台目盛板			45.0	2.1	1.1				切込みが3ヶ所ある。
158	32	54	紡織具	紡錘	D区溝	床面	径10.0		1.0		スギ	○	中央に円形の孔を開ける
159	33	55	運搬具	天秤棒			82.5	3.5	3.5		ヒノキ	○	完形。両端に抉り。
160	33	55	運搬具	緊縛具	C区溝	9	17.6	2.1	1.1		スギ	○	断面は半円形。くびれがある
161	33	55	運搬具	緊縛具	C区河道	9	24.5	2.5	1.8		スギ	○	断面は半円形。くびれがある
162	33	55	運搬具	田舟	D区河道	7	33.2	32.8	6.2				先端に方形の孔がある
163	33	55	漁撈具	櫂	E区	4	55.0	12.0	2.0		スギ	○	片面が炭化する。
164	33	55	漁撈具	櫂	D区河道	7	50.0	13.0	2.0		スギ	○	長方形の孔がある。建築部材を転用したものか。
165	34	55	漁撈具	櫂	A区河道	7	124.5	12.5	1.8		スギ	○	刃部を薄く削る。柄の先端はT字に作り出す。
166	34	56	武器	盾	C区河道	7	113	33	1.5			○	上下に多数の小孔があり、一部綴紐が残る。やや大きい円形の孔4か所と割り付けの線刻がある。
167	34	55	武器	盾	3T北河道								7小片に破損する。一部片面に赤彩が残る。径1～2mmの小孔あり。
168	35	56	食事具	杓子	A区溝	11	18.2	9.2		9.7	タブノキ?	○	内面に黒色物が塗布される
169	35	56	食事具	杓子	A区溝	11	12.3	10.7		4.5	イヌガヤ	○	表面の加工が粗い。未製品か
170	35	56	容器	椀	C区河道	7	口径（24.0）		0.5	3.7	ヤマグワ	○	黒色物を塗布した痕跡がある

第11表　木製品観察表(2)

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	品目	出土地点	層位	寸法(cm) 長	幅	厚	高	樹種	保存処理	備考
171	35	56	容器	圏脚盤	C区河道	9	底径 20.0		1.3	5	ヤマグワ	○	底部は高台上に削り出す。
172	35	56	容器		A区溝	11	脚部径 (22.7)		2.0	4.7	サクラ属	○	脚端部が短く屈曲する。外面赤彩
173	35	56	容器	蓋			7.2	5.6	1.2				表面に楔形の窪みが4か所有り、側面から径1㎜の孔を2つずつ開ける。裏面には三角形の線刻あり
174	35	57	容器	蓋	C区河道	7	25.7	13.3		7	スギ	○	口縁端部に2か所突起があり、円形の孔が開けられる。
175	36	57	容器	槽	C区木組み	7	26.0	8.5	1.0	6.7	スギ	○	側面の角が丸く加工される
176	36	57	容器	槽	B区河道	8	30.0	20.0		8.5	スギ	○	側面の角が丸く加工されてる
177	36	57	容器	槽	BN区	5	38.7	4.4	1.8	8.9	スギ	○	平面は長方形
178	36	57	容器	盤	B区河道	8	27.1	5.8		3.8			底部の器壁が薄い。やや小型。
179	36	57	容器	盤	B区河道	7	13.7		1.1	3.2	スギ	○	内面が黒く変色する。底部に円形の脚の痕跡がある。
180	36	57	容器	盤	A区河道	7	47.0	5.0	3.0		サクラ属	○	平面は楕円形。口縁部は段状に屈曲する。
181	37	58	容器	槽	C区河道	7	54.5	10.0	1.2		スギ	○	側面の角が丸く加工される。補修孔がある
182	37	58	容器	槽	3T北木組み		76.0	23.2	2.3	9.3	スギ	○	大型品
183	37	59	容器	刳物桶		7		15.4	3.5	29.8	スギ	○	
184	37	58	容器	刳物桶	B区河道			11.5	2.8	24.5	スギ	○	内面に黒色物が塗布される。底部に方形の孔がある。
185	37	59	容器	刳物桶	D区河道	7		5.3	0.8	19.0	スギ	○	両面に黒色物が塗布される。
186	38	59	容器	刳物桶	A区河道	7		12.0	3.5	40.0	スギ	○	柄が一部残存する。
187	38	59	容器	刳物桶	BS区	4		24.0	4.3	26.0	スギ	○	内面に黒色物が塗布される。底部に木釘が残存する。
188	38	59	容器	刳物桶	BS区	3		18.0	2.4	32.0	スギ	○	内面に黒色物が塗布される。底部に木釘の痕跡有り。
189	38	59	容器	刳物桶底板		8	23.0	13.3	1.3		スギ	○	楕円形
190	38	60	容器	底板	CN区	4	22.0	10.3	1.0		スギ	○	端部に木釘が残存する
191	38	60	容器	底板	BS区	5	45.5	20.0	1.5		スギ	○	楕円形
192	39	60	雑具	腰掛	CN区	4	25.9	8.5	3.2	6.5			方形の孔に木質が残存する。
193	39	60	雑具	腰掛	BN区	8	22.5	9.0	2.0	12.8	スギ	○	座板上面に金属器使用痕多数あり
194	39	60	雑具	腰掛	D区河道	7	38.5	13.5	2.0	12.5	スギ	○	座板はやや反っている
195	40	61	雑具	腰掛	C区河道	7	63.0	14.0	1.7	8.9	スギ	○	脚の高さは低い
196	40	61	雑具	腰掛	A区溝	11	44.0	17.0	2.6		スギ	○	側面に抉りがある
197	40	61	雑具	腰掛	D区木組み	7	51.2	13.4	1.6				側面に抉りがある
198	41	61	雑具	腰掛	B区河道	7	67.5	19.5	3.0		スギ	○	座板上面の窪みが残存する
199	41	61	雑具	腰掛	C区河道	9	45.5	19.5	2.5		スギ	○	緩く反っている
200	41	61	雑具	腰掛	A区溝	7	34.3	16.4	2.3		スギ	○	ほぼ完形。側面に抉りを入れる
201	42	61	雑具	腰掛	C区河道	7	58.1	22.2	2.0		スギ	○	側面の四隅が丸く加工される
202	42	61	雑具	腰掛	A区木組み	4	59.2	20.0	2.5		スギ？	○	側面の四隅が丸く加工される
203	42	62	雑具	箱（刳物）	B区河道	8	37.0	9.0	1.8	5.7	スギ	○	側面は短辺が一段低く加工される。
204	42	62	雑具	箱	D区河道	9	23.5	10.9	0.9		ヒノキ	○	側面の3か所に木釘残存する
205	42	62	雑具	箱	A区河道		17.8	6.7	0.9		スギ	○	側面に木釘と孔が残存する
206	42	62	雑具	箱	CN区	4	21.5	8.0	1.5		スギ	○	端部に方形の孔を開ける
207	43	63	雑具	箱	C区河道	9	31.0	14.7	2.4		スギ	○	不整形な孔を2か所開ける。側面に抉りがある。小孔有り
208	43	63	雑具	箱	B区河道		32.0	9.9	1.5		スギ	○	不整形な孔を2か所開ける。小孔が14有り一部木釘が残存する
209	43	63	雑具	箱	B区河道	8	32.0	14.0	1.7		スギ	○	不整形な孔を2か所開ける。小孔が10有り一部木釘が残存する
210	43	63	雑具	箱	A区溝	7	33.5	12.2	1.8				方形と円形の孔が2つずつある
211	43	63	雑具	箱	D区河道	9	30.0	10.2	1.7		スギ	○	両端に楔状の木を差し込み木釘で固定する。円形の孔と貫通しない窪みがある。
212	43	63	雑具	箱	D区河道	7	29.2	4.7	2.0		スギ	○	211と似た加工が有る。同一固体か
213	43	63	雑具	箱	A区河道	9	20.7	11.6	2.2		スギ	○	端部に溝が彫られ、側面がホゾ状に作り出される
214	43	63	雑具	箱	A区河道	9	20.6	7.8	2.0		スギ	○	端部に溝が彫られ、側面がホゾ状に作り出される
215	44	64	雑具部材	栓	C区溝	11	18.2	上径6.3	下径3.6		スギ	○	釘頭部は丸く加工される
216	44	64	雑具部材	栓	D区河道	7	24.6	上径8.0	下径4.2		スギ	○	釘頭部は平坦。表面が炭化している。
217	44	64	雑具部材	琴上板？	B区河道	8	45.7	15.6	1.4				片面は粗く削った後、再度逆方向へ丁寧に削る。逆の面は多数の小孔が有る。琴の上板の可能性あり。

第12表　木製品観察表(3)

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	品目	出土地点	層位	寸法(cm) 長	幅	厚	高	樹種	保存処理	備考
218	44	64	雑具部材		B区河道	8	83	13.0	1.8			○	粗い加工で2か所孔を開ける
219	44	64	雑具部材		CN区	4	60.9	18.6	1.3				方形の孔を2か所、円形と方形の小孔を5か所開ける。
220	44	64	雑具部材		C区河道	7	48.2	15.2	1.3				小孔を5ヶ所開ける。
221	44	64	雑具部材		D区木組み	4	48.0	9.9	1.6				6ヶ所に孔を開ける。端部は丁寧な加工で斜めにカーブをつける。
222	44	65	雑具部材		A区河道	7	32.1	6.0	1.2				両端が薄く加工される
223	44	65	雑具部材		B区河道	8	32.2	8.3	2.0				端部を斜めに加工する。
224	45	65	雑具部材		A区河道	8	34.7	6.9	1.3				片側をL字に作り出す。方形の孔または抉りあり。
225	45	65	雑具部材		BS区	5	40.2	7.5	1.6				片側面をL字に切欠く。片方の先端が炭化している。
226	45	65	雑具部材		B区河道		45.3	6.8	1.6				途中で板の幅が狭くなる。
227	45	65	雑具部材			5	39.4	8.4	2.0				片側面に大小の抉りを入れる。
228	45	65	雑具部材		D区木組み	7	44.1	7.4	1.4				長方形の孔を2か所、小孔を2か所開ける。他の板があたっていた痕跡がある。
229	45	65	雑具部材				31.1	13.9	1.3				長方形の孔が2か所ある。
230	45	65	雑具部材				63.7	13.8	2.1				片側をL字に切欠き、長方形の孔を2か所開ける。
231	45	65	雑具部材		CN区	7	52.1	12.6	1.8				楕円形の孔を2か所開ける
232	45	65	雑具部材			7	62.7	10.6	2.1				方形の孔を1か所開ける。. 片側の先端が炭化している。
233	45	65	雑具部材				38.2	22.4	2.9				板の端部に長方形の孔を開け、両側面に抉りを入れる。
234	46	66	雑具部材				95	5.0	1			○	円形の小孔を10か所開ける。孔に木質が残存する。
235	46	66	雑具部材		3T北木組み		15.8	7.0	1.4				円形の小孔2か所あり。
236	46	66	雑具部材		C区河道	7	140.5	6.5	1.4				片側寄りに円形の孔を4か所開ける。
237	46	66	雑具部材		CN区	4	63.1	6.9	1.1				3か所に孔を有る。木目に沿って割った後、片方の先端を斜め切断し杭に転用。
238	46	66	雑具部材		B区河道	9	49.0	9.2	1.3				円形の孔を6か所開ける。
239	46	66	雑具部材				65.3	6.5	1.5				円形の孔が4か所、小さい窪みが4か所ある。
240	46	66	雑具部材		B区河道	8	53	8.0	2			○	小孔を9か所開ける。板の幅が狭くなる
241	46	66	雑具部材			8	23.7	2.2	1.2				379～385と一括で出土
242	46	66	雑具部材		BS区		14.2	3.6	1.1				方形の穴1ヶ所、両面及び側面に径1～3mmの小穴がある。
243	46	66	雑具部材				29.9	4.4	1.4				片方の側面をL字に切欠く。長方形の孔を2か所開ける
244	46	66	雑具部材		E区木組み	4	59	6	3.2			○	方形の切欠きが1か所、斜めに貫通する方形の孔が2か所ある。
245	47	67	雑具部材		B区河道	8	48.1	2.4	2.3				両端に抉りがある。245～252・256は一括で出土。
246	47	67	雑具部材		B区河道	8	46.8	2.7	1.4				両端に抉りがある。
247	47	67	雑具部材		B区河道	8	47.7	2.7	1.8				両端に抉りがある。
248	47	67	雑具部材		B区河道	8	47.0	3.1	2.1				両端に抉りがある。
249	47	67	雑具部材		B区河道	8	42.1	7.1	3.4				下端を尖らせる。上端は枝を利用し、クランクを作る。
250	47	67	雑具部材		B区河道	8	24.6	11.9	3.6				下端を尖らせる。上端は枝を利用し、クランクを作る。
251	47	67	雑具部材		B区河道	8	72.9	2.8	1.6				他の材が当たった痕跡がある。先端は削って細くする。
252	47	67	雑具部材		B区河道	8	71.8	3.2	1.4				他の材が当たった痕跡がある。先端は削って細くする。
253	47	67	雑具部材		B区河道	7	43.8	3.8	2.3				両端に抉りがある。
254	47	67	雑具部材		A区河道	7	52.7	3.1	2.5				両端に抉りがある。
255	47	67	雑具部材				75.5	7.4	7.0		ヒノキ？	○	断面三角形に加工される。両側はやや細く断面は円形
256	47	67	雑具部材			8	105.6	2.9	2.4				245～252セットになると考えられる
257	47	67	雑具部材		A区溝	9	95.6	3.5	2.7				全体に面取りされ、端部は丸い。
258	48	68	雑具部材		A区河道	7	66.6	6.6	4.7				端部にくびれをつくり、裏面に抉りを入れる。丁寧な加工で角が面取りされる。
259	48	68	雑具部材		D区河道	7	30.3	5.1	4.0				端部にくびれをつくり、裏面に抉りを入れる。丁寧な加工で角が面取りされる。
260	48	68	雑具部材			7	54.2	4.5	3.9		ヒノキ	○	両端にくびれがある。先端は斜めに加工される

第13表　木製品観察表(4)

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	品目	出土地点	層位	寸法(cm) 長	幅	厚	高	樹種	保存処理	備考
261	48	68	雑具部材		C区河道	7	54.1	4.8	4.5		ヒノキ	○	先端にホゾを作り出す。ホゾには楔が残存し、他の材と組合わせた痕跡が残る
262	48	68	雑具部材		D区木組み	－	77.5	3.0	2.7		スギ	○	先端にホゾを作り出す
263	48	68	雑具部材				79.3	3.3	3.8		スギ	○	先端を丸く加工し、切込みを入れる。
264	49	68	建築部材	梯子	D区溝	7	141	17.6	3.4	9.6		○	一木梯子
265	49	69	建築部材	梯子	CN区	7	105.2	17.8	4.0	8.4		○	一木梯子。下端に抉りがある
266	50	69	建築部材	梯子			91.7	19.5	4.2	9.7		○	一木梯子。下端に抉りがある
267	50	69	建築部材	梯子	C区河道	7	34.4	16.6	9.3				杭に転用されている
268	50	69	建築部材	梯子	A区溝	9	40.2	10.4	7.6				足掛けが一部残存する。薄い
269	50	69	建築部材		D区溝	床面	94.6	14.0	2.4				長方形の孔が3か所あり、1か所は斜めに貫通する。端部に抉りあり。
270	50	69	建築部材		C区河道	7	87.2	23.1	2.5				側面は斜めに加工される。雑な孔が2か所開けられる。
271	51	69	建築部材		D区木組み	7	105.8	13.2	2.1				長方形の孔が2か所以上開けられる。片側を斜めに切断している。
272	51	69	建築部材		C区河道	7	124	14.4	4			○	長方形の孔が4か所有る。片方の側面が斜めに加工される。
273	51	70	建築部材		BS区	7	211.5	21.0	1.8			○	端部や側面に斜めに切断される。
274	51	70	建築部材		CN区	4	218.6	19.0	1.6				長方形の孔が7ヶ所以上有る。端部は丸く加工し先端が突出する
275	51	70	建築部材			4	12.1	39.9	2.4				端部は丁寧に丸く加工され、角がとれて丸くなっている。
276	52	70	建築部材		C区河道	7	114.0	19.7	1.7				方形や楕円形の孔が多数開けられる。
277	52	70	建築部材		CN区	4	120.9	19.1	2.5				複雑な形に加工され、孔が多数ある。
278	52	70	建築部材		C区木組み	4	177.4	18.0	2.0	5.4		○	円形の突起を2か所作り出す。
279	53	71	建築部材		C区河道	7	107.7	16.6	2.0				円形4、方形5の孔がある。孔に木質が残る。
280	53	70	建築部材			7	98.0	23.0	2.6			○	長方形の孔を2か所、小孔を14ヶ所開ける。割り付けの線刻3本あり。
281	53	71	建築部材		B区河道	8	96.8	17.4	1.7				小孔3つが集まる。片方の端部を薄くする。
282	53	71	建築部材			8	100.1	18.9	2.0				長方形の孔を1ヶ所、小孔を5か所開ける。両端が薄くなる。
283	53	71	建築部材		B区河道	8	84.8	14.8	2.7				片方の側面に寄せて長方形の孔2か所開ける。
284	54	71	建築部材		C区河道	7	117.1	25.1	2.8				片方の側面に寄せて方形の孔を4か所開ける。
285	54	71	建築部材		C区河道	8	109.5	16.0	1.5			○	方形の孔を2か所開け、端部には2個一対の孔と小孔10を開ける。割付の線刻あり。
286	54	71	建築部材		BN区	4	97.0	18.0	2.0				片方の側面の中央に抉りを入れる。2個一対の孔あり。
287	54	71	建築部材		A区木組み	－	93.9	13.5	2.1				方形の孔2と割り付けの線刻あり。矢板に転用
288	54	72	建築部材		D区木組み	7	74.5	16.4	1.7				方形の孔を3か所開ける。
289	55	71	建築部材		C区河道	7	140.2	8.8	1.7				方形の孔を2か所開ける。孔の横が一段低い。
290	55	72	建築部材		A区溝、C区河道	7・11	123.6	13.6	2.4			○	横が一段低くなる長方形の孔2か所とその他の孔がある。
291	55	72	建築部材		C区河道	7	101.9	7.3	2.7				等間隔に方形の穴3か所開ける。杭に転用
292	55	72	建築部材		C区河道	7	94.5	6.5	1.8				先端に突起作り出す。長方形の孔が有り周囲が一段低くなる。
293	55	72	建築部材		A区北側畦畔	－	55.5	9.9	3.2				厚みのある角材。側面に丁寧な加工による抉りを入れる。大小の孔を2か所あり。
294	56	72	建築部材		C区河道	7	74.7	9.5	2.3				長方形の孔を4か所開ける。矢板に転用。
295	56	72	建築部材		B区河道	8	63.7	12.4	1.8				方形の孔あり。
296	56	72	建築部材		C区畦畔	－	84.6	10.4	3.0			○	等間隔に方形の孔を3か所開ける。小孔3、側面に抉りあり。
297	56	72	建築部材		A区溝	11	78.9	8.6	2.7				縦に割って幅を細くしてある。長方形の孔が2か所ある。
298	56	73	建築部材		B区畦畔	－	62.0	19.7	4.2				板の中央に大型の孔がある。矢板に転用。

第14表　木製品観察表(5)

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	品目	出土地点	層位	寸法(cm) 長	幅	厚	高	樹種	保存処理	備　考
299	56	73	建築部材		C区河道	7	138.9	25.2	2.6				大型の孔と方形の小孔2か所有り。矢板に転用
300	57	73	建築部材		D区河道	9	47.2	22.8	48.0				大型の方形の孔がある。
301	57	73	建築部材		B区河道	8	90.6	24.1					矢板に転用。先端の加工は断面が菱形になる。
302	57	73	建築部材		C区河道	7	108.1	49.0	4.0				矢板に転用。
303	58	73	建築部材		B区河道	8	95.9	2.8	3.0				片側がL字に切断される。矢板に転用。
304	58	73	建築部材				81.6	9.6	2.5				端部を斜めに切断し矢板に転用。
305	58	73	建築部材		B区河道	7	123.5	13.3	2.7				先端を丁寧に加工し矢板に転用。
306	58	73	建築部材		C区河道	7	140.1	37.8	3.3				上部がへこみが有る。掛矢で打った痕跡か。
307	59	74	建築部材		B区河道	8	164.5	17.5	1.6				両端にL字に切り欠く。
308	59	74	建築部材		B区河道	8	200.6	20.2	2.8				片側を木目に沿って割り、先端を斜めに切断し矢板に転用。
309	59	74	建築部材		C区河道	7	207.1	9.7	2.7				4か所に長方形の孔。杭に転用。掛矢で打った痕跡あり。
310	59	74	建築部材		D区河道	7	216.5	17.9	1.7				端部に2個一対の孔あり。
311	59	74	建築部材		C区河道	7	252.9	18.2	2.9				端部の側面をL字に切り欠く。
312	60	74	建築部材		C区河道	7	64.5	16.1	6.9				厚手で、端部近くに溝・方形のくぼみ・小孔がある。
313	60	74	建築部材				69.9	8.4	5.6				木目に沿って割り杭に転用。312に類似する
314	60	74	建築部材		C区河道	7	50.4	12.2	6.2				端部は厚く削り残す。
315	61	75	建築部材		D区河道	7	94.8	11.3	3.5				端部側面に切り込みを入れる。
316	61	75	建築部材		C区木組み	7	110.8	8.6	10.0			○	両端に丸い材を受ける部分を作り出す。受け部は炭化する
317	61	75	建築部材		B区河道	8	125.0	13.0	9.0			○	弓なりに反る。両側面に対照的に溝が彫られる
318	61	75	建築部材		B区河道	8	77.4	7.6	5.0			○	角材。方形の孔にホゾが残存する。先端が炭化している。
319	62	75	建築部材		C区畦畔	−	139.5	11.8	5.5				断面台形状に削り出す。長方形の孔2ヶ所と先端に切り欠きあり。
320	62	76	建築部材		C区河道	8	57.5	7.1	3.9				縦に割って杭に転用。断面は台形状と考えられる。長方形の切り欠きがある。319に類似する。
321	62	76	建築部材	梁又は床梁	AS区	4	247.0	9.6	9.0			○	断面台形状に加工する。両端に切り欠きがある。
322	62	76	建築部材	柱	B区河道	8	198.1	8.8	6.5				先端を削って杭に転用。反対もやや細くする加工する。
323	63	76	建築部材		A区河道	7	99.2	15.0	6.6			○	先端を凸状に作り出す。反対側に方形の孔か切り欠きあり。
324	63	76	建築部材	床材	A区木組み	−	87.0	13.0	5.0			○	断面は半円形。柱を受ける部分に2段の刳り込みあり。端部は弧状に加工される。
325	63	76	建築部材	床材	A区木組み	−	82.4	11.0	5.4				断面は三角形。柱を受ける部分に2段の刳り込みあり。
326	63	76	建築部材		D区木組み	−	82.0	9.0	7.5			○	他の材を受ける抉りがある。受け部は炭化している。
327	64	77	建築部材		C区河道	9	141.0	7	8			○	枝を利用しL字の材に加工している。くびれが3か所有り、先端は細く削る。
328	64	77	建築部材		C区河道	7	96.0	8.6	6.0			○	先端を凸状に作り出す。抉りが有る。縦に割って杭に転用。
329	64	77	建築部材		C区河道	7	130.8	9.7	7.0				他の材を受ける抉りあり。先端を削る。
330	65	77	建築部材		C区河道	7	115.3	6.2	4.4				断面は四角形。片方の先端をL字に切り欠く。
331	65	77	建築部材		B区河道	8	114.2	5.8	3.5				断面は四角形。片方の先端をL字に切り欠く。斜めに貫通する孔にホゾが残る。
332	65	78	建築部材		D区畦畔	7	102.2	5.2	4.6				端部をL字に切り欠き、一方の先端をV字に尖らせる。断面は六角形。
333	65	77	建築部材		D区畦畔	5	99.6	5.4	3.9				端部をL字に切り欠き、一方の先端をV字に尖らせる。
334	65	78	建築部材		B区河道	8	40.9	4.5	2.9				端部をL字に切り欠き、先端をV字に尖らせる。木目に沿って割り杭に転用。
335	66	77	建築部材		C区畦畔	K	112.3	4.4	3.7				端部に抉りが有る。

第15表　木製品観察表(6)

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	品目	出土地点	層位	寸法(cm) 長	幅	厚	高	樹種	保存処理	備　　考
336	66	78	建築部材		BS区	5	61	6.0	2.8				端部がくびれる。全体に加工が粗い。
337	66	78	建築部材		C区河道	7	96.5	6.6	2.9				端部がくびれる。全体に加工が粗い。
338	66	77	建築部材		D区木組み	－	101.4	4.5	4.5				片方の端部に抉りを入れる。
339	66	78	建築部材		D区畦畔	7	176.4	5.2	4.1				端部に抉り2か所あり。
340	66	78	建築部材	垂木	D区木組み	7	165.0	7.0	3.5			○	片方の端部に抉りを入れる。
341	67	78	建築部材	垂木	BS区	6上面	176.4	7.0	6.0			○	369ほかと組んだ状態で出土。両端に切り欠きあり。
342	67	78	建築部材		C区河道	7	120.0	4.1	3.1				先端を削り細くする。
343	67	78	建築部材			4	139.4	4.7	2.7				端部にくびれが有る。
344	67	79	建築部材		B区河道	9	79.3	4.7	2.7				木目に沿って割り、杭に転用。
345	67	79	建築部材	杭	A区木組み	－	49.6	5.6	3.5				上下ともV字に切断。長い材を転用したと考えられる。
346	67	79	建築部材		D区畦畔	7	134.2	3.5	1.3				畦畔構築材。薄手で土圧により蛇行する。
347	68	79	建築部材		D区畦畔	7	152.0	2.8	2.6				畦畔構築材。薄手で土圧により蛇行する。
348	68	79	建築部材		D区畦畔	7	156.3	3.8	2.3				畦畔構築材。薄手で土圧により蛇行する。
349	68	79	建築部材	柱	A区木組み	－	64.2	8.8	8.0				杭に転用。
350	68	79	建築部材	柱（多角形）	A区河道	7	49.3	9.4	7.7				側面を丁寧に加工。
351	68	79	建築部材	柱	D区河道	9	44.1	13.3	11.8				先端を斜めに加工し、杭に転用
352	68	79	建築部材	柱	A区河道	7	51.8	11.9	7.3				縦に割った後先端を尖らせ杭に転用。
353	68	79	建築部材	柱	D区木組み	－	80.1	12.0	7.5				353と同じ材を割って杭に転用。長方形のくぼみ2か所あり
354	68	79	建築部材	柱	D区木組み	－	92.6	10.4	6.1				354と接合する。
355	69	79	建築部材	柱	B区河道	8	92.9	12.7	10.8				先端を削ってやや細くする。
356	69	79	建築部材	柱	A区木組み	－	90.6	15.6	15.1				先端を削って杭に転用。
357	69	80	建築部材	杭	C区河道	9	41.5	6.1	4.0				先端をL字に切り欠く。
358	69	80	建築部材	杭（丸）	C区河道		35.5	3.8	3.5				表面に樹種が残る。
359	69	80	建築部材	杭（Y字）	A区河道	8	53.2	14.2	6.7				枝を利用しY字に加工する。
360	69	80	建築部材	杭	D区溝	床面	41.2	6.3	6.0				先端は稜が取れ丸くなる
361	69	80	建築部材	杭	A区木組み	7	114.2	5.5	5.1				両端を尖らせる。
362	69	80	建築部材	杭（断面丸）	C区河道	7	114.2	4.4	4.9				先端を粗く尖らせる。
363	69	80	建築部材	杭	D区溝	床面	201	8.9	9.2				先端のみ加工（先端のみ掲載）
364	70	80	建築部材	杭（丸）			159.5	6.2	5.9				片方は斜めに加工し、反対はV字に切断する。
365	70	80	建築部材	杭？	D区河道	9	162.1	4.9	5.5				先端に加工あり。杭としての加工か伐採の痕跡か不明。
366	70	80	建築部材	杭（丸）	B区河道	8	155.2	6.2	7.3				先端を斜めに加工する。
367	70	80	建築部材	杭（丸）		9	154.4	8.1	6.9				片方は斜めに加工し、反対はV字に切断する。
368	70	80	建築部材	杭（丸）	D区溝	7	219.1	5.9	5.9				両側に加工。一方は伐採の痕跡の可能性あり。
369	70	80	建築部材	杭（丸）	BS区	6上面	207.8	5.9	4.9				341ほかと組んだ状態で出土
370	71	81・82	用途不明品		C区河道	7	19.0	15.5	1.5		スギ	○	370～376は組合わせた状態で出土。側盤や木釘を固定する木釘や孔が残存する。
371	71	81・82	用途不明品		C区河道	7	13.0	5.5	1.7		スギ	○	側盤。木釘や孔が残存する。
372	71	81・82	用途不明品		C区河道	7	20.5	14.8	1.1		スギ	○	多数の木釘や孔がある。
373	71	81・82	用途不明品		C区河道	7	13.0	3.8	1.3		スギ	○	側盤。木釘や孔が残存する。
374	71	81・82	用途不明品		C区河道	7	7.0	2.2	1.3		スギ	○	側盤。木釘や孔が残存する。
375	71	81・82	用途不明品		C区河道	7	5.4	1.8	0.8		シイ属	○	楔。方形の孔がある
376	71	81・82	用途不明品		C区河道	7	6.0	1.8	0.5		シイ属	○	楔。方形の孔がある
377	71	82	用途不明品		C区河道	7	23.5	1.8	1.2		スギ	○	370～376と同地点で出土
378	71	82・88	用途不明品		BS区	5	21.3	3.1	1.5		カヤ	○	外面に鋸歯状文帯を刻み赤彩する。円形の孔あり。短甲か。
379	71	83	用途不明品		B区河道	8	37.8	1.3	1.3				379～385はまとまって出土。丁寧な加工で先端を細く加工する。
380	71	83	用途不明品		B区河道	8	35.7	1.3	1.3				丁寧な加工で先端を細く加工する
381	71	83	用途不明品		B区河道	8	33.2	1.4	1.4				丁寧な加工で先端を細く加工する
382	71	83	用途不明品		B区河道	8	41.9	1.3	1.3				丁寧な加工で先端を細く加工する
383	71	83	用途不明品		B区河道	8？	40.5	1.2	1.2				丁寧な加工で先端を細く加工する
384	71	83	用途不明品		B区河道	8	21.4	1.2	1.2				丁寧な加工で先端を細く加工する
385	71	83	用途不明品		B区河道	8	19.1	1.3	1.2				丁寧な加工で先端を細く加工する

第16表　木製品観察表(7)

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	品目	出土地点	層位	寸法(cm) 長	幅	厚	高	樹種	保存処理	備　考
386	71	83	用途不明品				24.6	1.7	1.4				先端を削り尖らせる。
387	71	82	用途不明品		A区河道	7	23.2	11.8	1.3				片側が炭化する。
388	71	83	用途不明品		A区溝	9	22.2	8.7	1.8				丁寧に面取りした円形の孔が1か所有る。
389	72	83	用途不明品		D区河道	7	18.5	24.5	1.7		スギ	○	六角形で方形の小孔を6か所開ける。
390	72	83	用途不明品		A区河道	8	18.4	24.2	1.6				八角形の板に方形4か所、不整形か所の小孔を開ける。不整形の穴には木質が残る。
391	72	83	用途不明品		AS区	4	39.6	17.0	1.0		スギ	○	隅を丸く加工している。中央に対になる半月状の孔を開け、周囲に細長い孔を4か所開ける。
392	72	83	用途不明品		CN区	4	39.8	7.4	1.8				両側面に2ヶ所ずつ抉りを入れ、短辺は斜めに切断される。
393	72	84	用途不明品		BS区	5	24.0	9.0	2.1		スギ	○	表面に凹凸が目立つ。短辺は丁寧な加工で丸く加工される。
394	72	84	用途不明品		D区河道	7	9.5	12.7	1.6				欠損部に孔の痕跡が2か所ある。側面は丸くなる。
395	72	83	用途不明品			4	17.2	3.4	1.0		ヒノキ？	○	等間隔に方形の孔が4か所開けられる。
396	72	83	その他	もえさし		7	20.7	3.7	2.6				短く切断した後使用されている
397	72	84	その他	もえさし	SD02	9	29.9	2.0	0.9				先端が炭化している。
398	72	84	用途不明品		AN区	7	50.9	2.7	1.6				木目に沿って割られる。先端に当初の加工が、側面に円形の孔がある。
399	72		用途不明品				32.1	4.5	3.5				木目に沿って割られる。使用によるものか、両端の角が取れて丸くなっている。
400	73	84	用途不明品		C区河道	9	89.3	16.0	2.8		シイ属？	○	「身」は平面水滴状で、外縁が薄くなり線刻がある。
401	73	84	用途不明品		D区溝	床面	84.5	20.5	2.3		ヒノキ	○	長辺は丁寧に曲線が作れられ、短辺は雑に切断される。方形の小孔が2か所あり、中央には金属器の傷が多数ある。
402	74	84	用途不明品		BS区		36.2	6.6	1.2				しゃもじ形で、中央に長方形の孔1か所あり。
403	74	85	用途不明品		B区河道	8	55.5	24.3	2.7				片方の先端に抉りを入れる。全体に粗い加工。
404	74	84	用途不明品		C区河道	7	31.8	10.6	3.2				板の端部から中心まで方形の抉りがある。
405	74	85	用途不明品		B区河道	8	66.8	13.1	1.8				端部を斜めに切断し、「柄」を作り出す。
406	74	84	用途不明品			7	20.5	5.3	1.0		スギ	○	片方の側面を丸く加工する。
407	74	84	用途不明品		A区河道	9	32.2	6.5	1.1		スギ	○	片方の側面を丸く加工する。
408	74	85	用途不明品		C区河道	7	94.3	21.3	3.3				表面に炭化した部分がある。断面は湾曲する。
409	75	85	用途不明品	鞘状木製品	C区河道	7	103.4	23	5.6			○	鞘状の形態。鞘口部分の切断が雑で方形の孔がある。未製品か。
410	75	86	用途不明品		D区木組み	7	94.7	21.5	2.9		スギ	○	「身」は厚さが均一で反っている。「柄」は角柱状で切断が雑。
411	76	86	用途不明品	抉り入り板材	CN区	4	33.1	8.4	1.2				片方の側面中央を弧状に抉り、両端を斜めに切断する。
412	76	86	用途不明品	抉り入り板材	B区河道	7	45.0	9.5	1.0				片方の側面中央を浅く抉り、両端を斜めに切断する。
413	76	86	用途不明品	抉り入り板材	C区河道	7	50.0	9.0	1.0				片方の側面中央を浅く抉り、両端を斜めに切断する。
414	76	86	用途不明品	抉り入り板材			66.7	12.2	1.2				片方の側面中央を弧状に抉り、両端を斜めに切断する。
415	76	86	用途不明品	抉り入り板材	C区木組み	7	69.8	13.4	1.7				片方の側面中央を浅く抉り、両端を斜めに切断する。
416	76	86	用途不明品	抉り入り板材	B区河道	8	52.3	17.6	10.0				片方の側面中央を粗く抉り、反対側は隅を斜めに切断する。
417	76	86	用途不明品	抉り入り板材	B区河道		43.6	15.2	2.3				416と似た形状。中央で切断されている。
418	76	87	用途不明品	抉り入り板材	CN区	4	98.5	12.0	1.9				片方の側面中央を浅く抉り、両端は斜めに切断する。
419	76	87	用途不明品	抉り入り板材	D区木組み	4	58.5	7.7	1.3				片方の側面中央を弧状に抉る。を欠損している。
420	76	87	用途不明品	抉り入り板材	A区河道	7	56.1	9.7	0.6				片方の側面中央を浅く抉る。

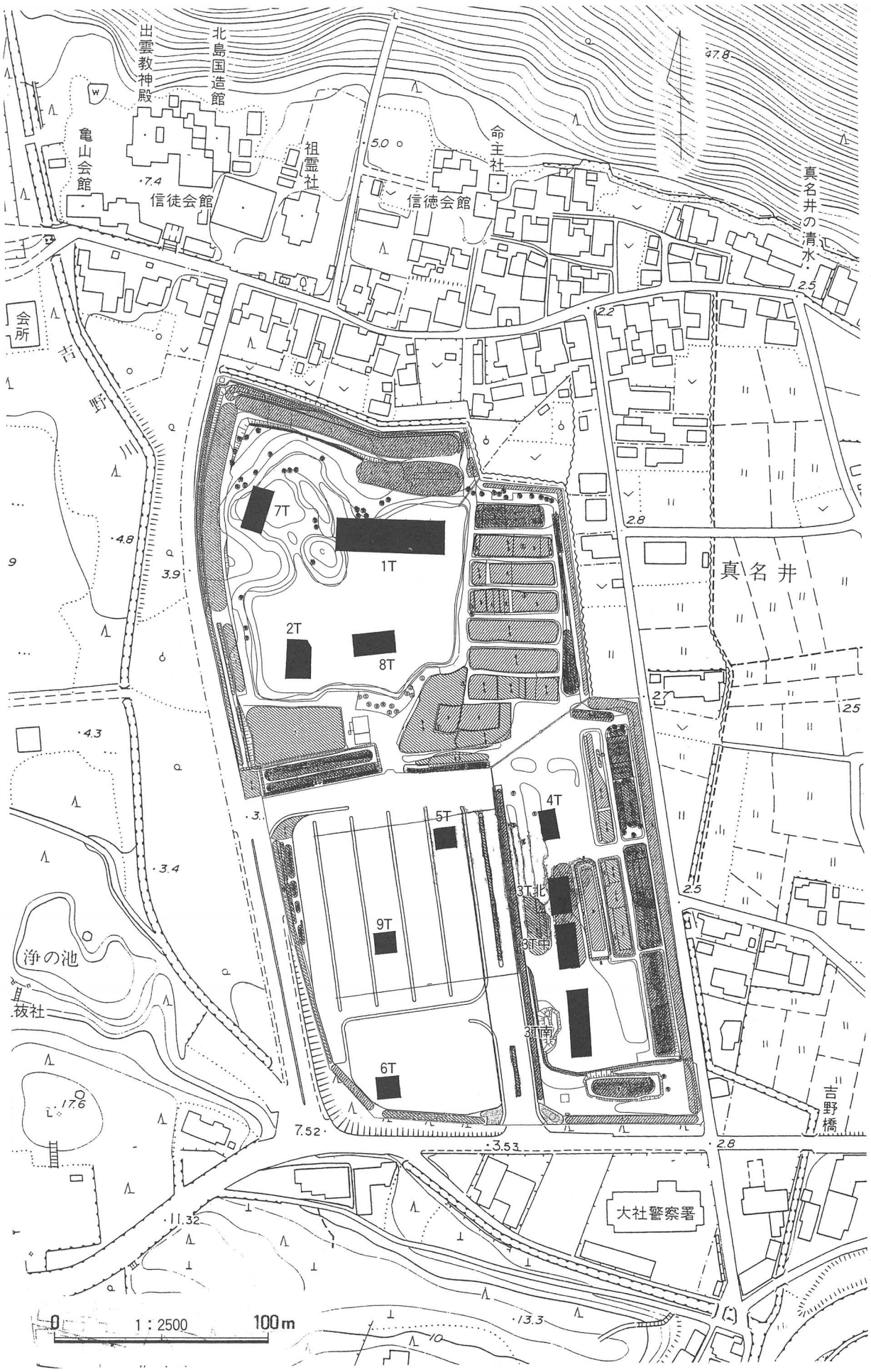
第17表　木製品観察表(8)

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	品目	出土地点	層位	寸法(cm)				樹種	保存処理	備　　考
							長	幅	厚	高			
421	76	87	用途不明品	抉り入り板材	D区河道	7	58.9	17.5	2.1				片方の側面中央を弧状に抉る。表面に金属器の傷がある。
422	77	87	用途不明品	抉り入り板材	B区畦畔	—	71.8	22.9	2.3				片方の側面中央を浅く抉る。
423	77	87	用途不明品	抉り入り板材	B区河道	8	69.8	26.7	5.0				片方の側面を、大きく弧状に抉る。
424	77	87	用途不明品	抉り入り板材	D区河道	7	80.2	19.4	1.5				片方の側面中央を弧状に抉る。小孔がある。
425	77	87	用途不明品	抉り入り板材	D区木組み	7	80.4	16.2	3.1				片方の側面を大きく弧状に抉る。
426	77	87	用途不明品	抉り入り板材	B区河道	8	76.9	15.2	21.0				片方の側面中央を抉る。方形の孔が２か所ある。
427	77	87	用途不明品	抉り入り板材	C区木組み	7	74.2	11.3	2.5				片方の側面に弧状の抉りと小さな台形状の抉りがある。
428	78	87	用途不明品	抉り入り板材		9	83.6	16.1	2.8				片方の側面中央を浅く抉る。
429	78	87	用途不明品	抉り入り板材	D区木組み	7	86.4	12.5	2.1				片方の側面を弧状に抉る。
430	78	87	用途不明品	抉り入り板材	C区河道	9	100.3	13.0	1.6				片方の側面を弧状に抉る。
431	78	87	用途不明品	抉り入り板材	C区河道	9	111.6	13.8	1.7				片方の側面中央を弧状に抉る。端部をほぞ状に作り出す。

第18表　木製品観察表(9)

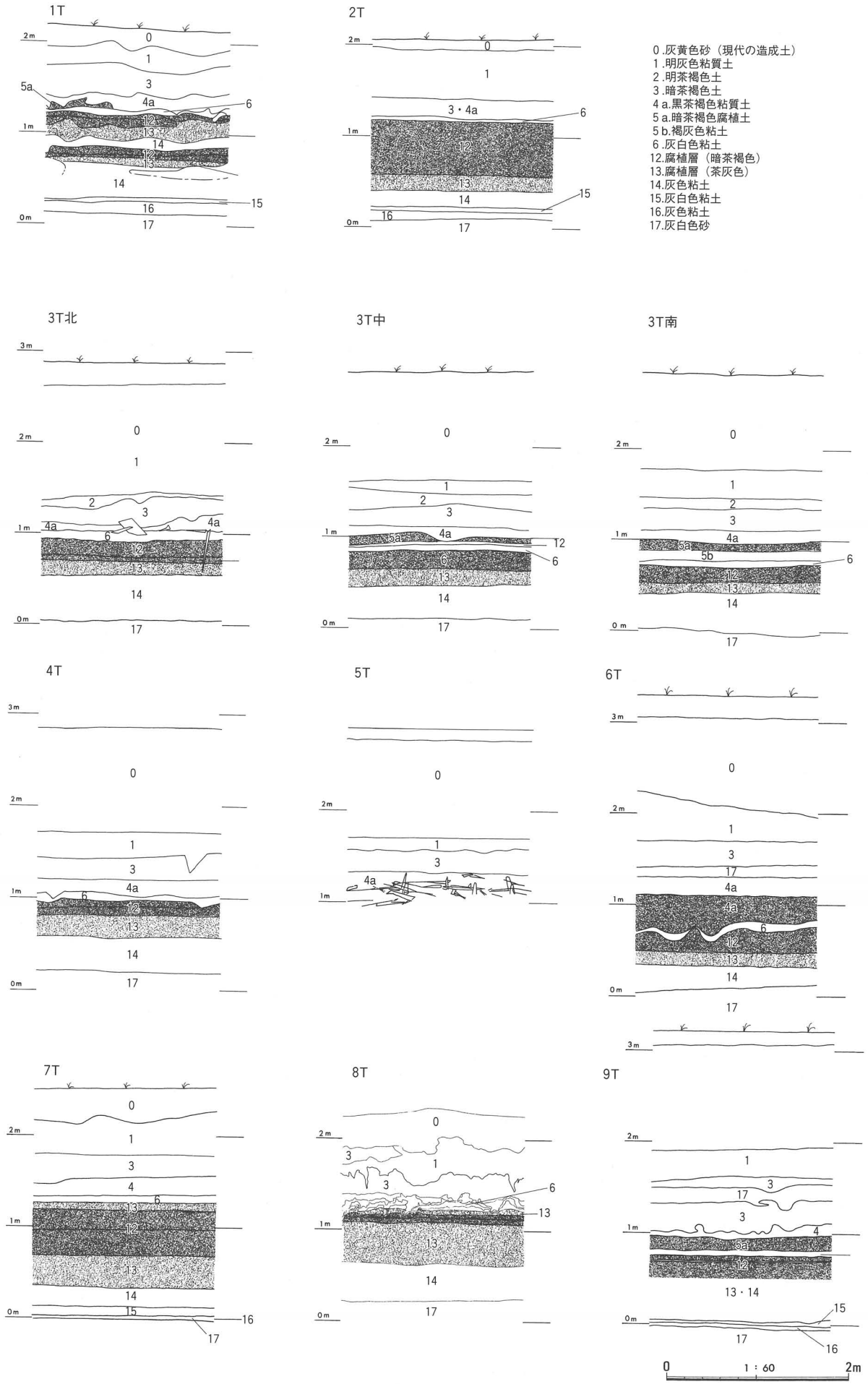
遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	品目	出土地点	層位	寸法(cm)				樹種	保存処理	備　　考
							長	幅	厚	高			
432		52	農具	曲柄平鍬		5	37.6	9.5	1.5		カバノキ属	○	
433		52	農具	曲柄又鍬	A区溝	9	52.8	3.9	1.1		アカガシ亜属	○	笠部を持つ。刃部は扁平
434		52	農具	一木平鋤	B区河道	8	26.5	14.5	0.6		アカガシ亜属	○	身は直線的に刃部に至る
435		58	容器	盤	A区河道	7	42.0	8.0	2.0		スギ	○	器高が低い。
436		58	容器	槽	C区河道	9	39.0	6.3	1.1	6	スギ	○	大型品か
437		58	容器	盤	B区河道	8	39.5	4.5	1.8	4	アカガシ亜属	○	平面は長方形で器高が低い。
438		58	容器	盤	A区溝	9	42.1	7.0	1.5		スギ	○	側面の角が丸く加工される。
439		58	容器	盤	B区河道		57.5	13.5		5	スギ	○	隅を丸く加工する。端部に溝が彫られる。孔が3か所ある。
440		58	容器	盤	CS	4	46.5	9.0	2.0	5	ヒノキ	○	底部より側面の器壁が厚い。
441		58	容器	盤		7	20.5	8.6	2.9		スギ	○	底部より側面の器壁が厚い。
442		60	容器	刳物桶	B区河道	8	19.5	11.5	3		スギ	○	内面に黒色物が塗布される。
443		59	容器	刳物桶	CN区	4	30.0	19.5	2.7		スギ	○	上下を欠損する。
444		64	雑具部材	栓	D区河道	7	15.5	4	3.5		クリ	○	頭部を欠損する。
445		68	雑具部材		BS区	4	44.0	4.5	4.0		スギ	○	棒状。抉りがある。
446		72	建築部材	A区河道	A区木組み	11	94.5	22	1			○	方形と2個一組の孔がある。
447		73	建築部材	矢板	C区河道	7	140.0	36.5	2.5			○	306と同地点で出土。
448			建築部材		D区木組み	7	260	22	2			○	片方の側面のほぼ中央に抉りがある。
449		87	その他	綴紐	A区溝	11	2.0					○	

図　　版

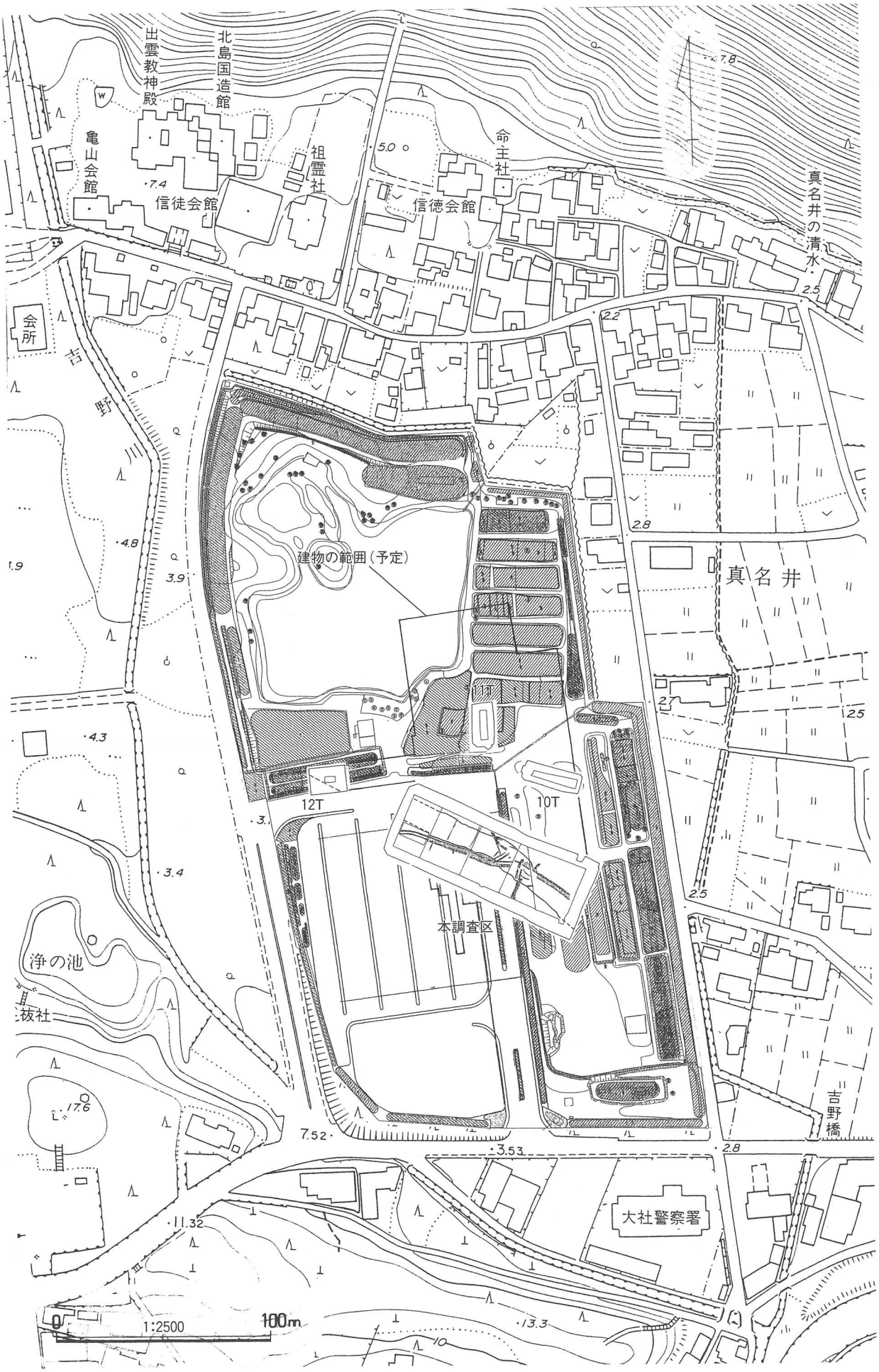


平成13年度確認調査トレンチ配置図　S＝1／2500

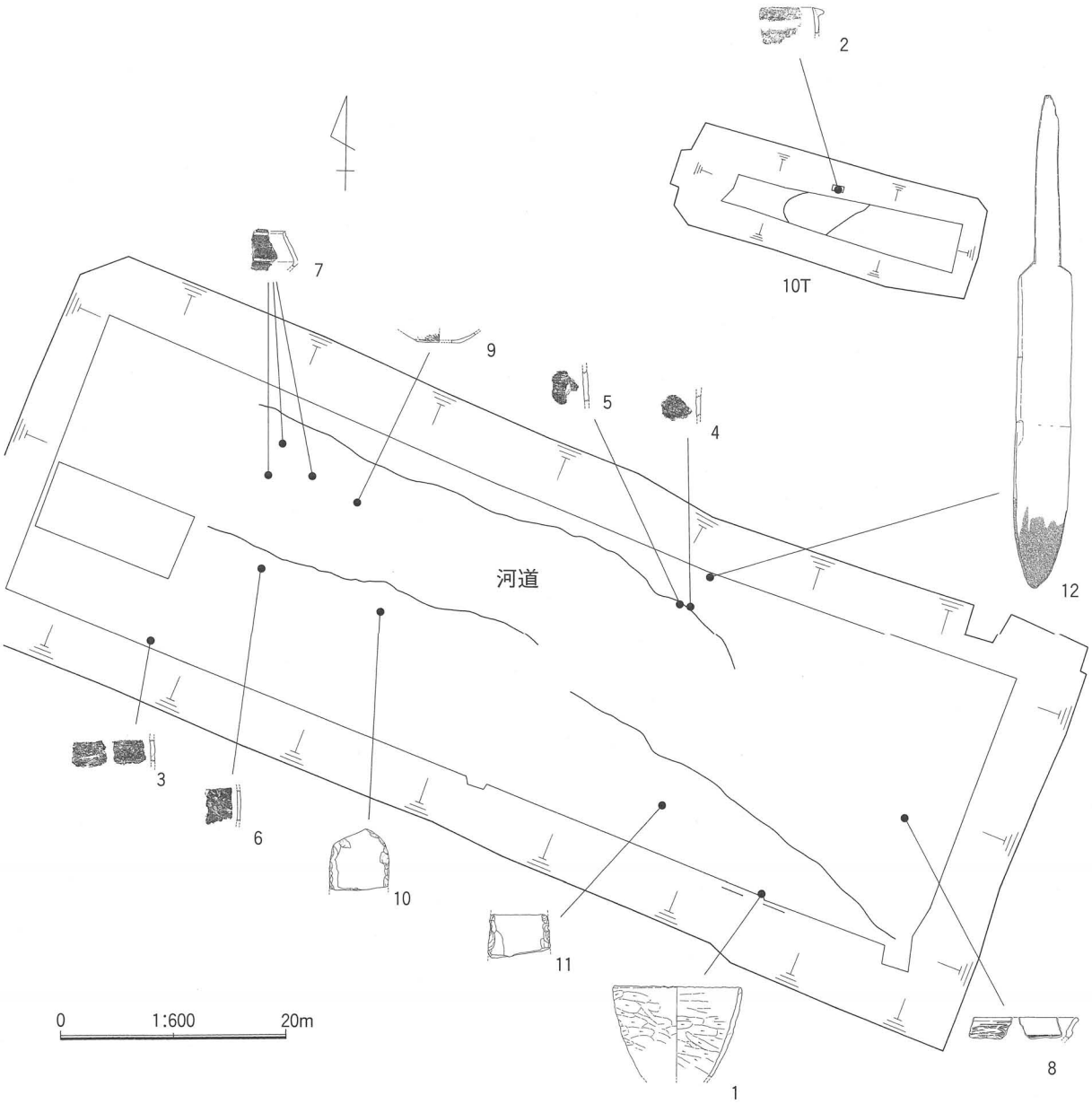
図版 2



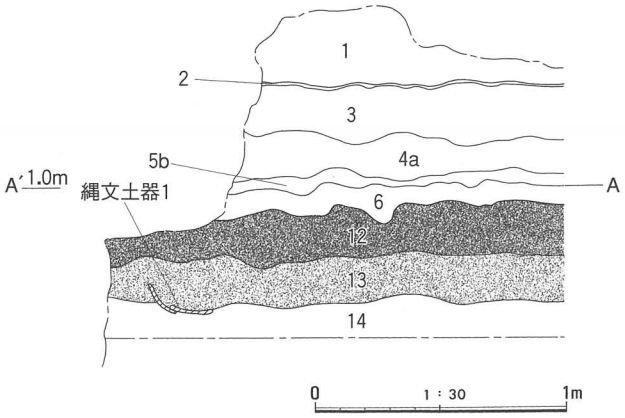
トレンチ土層断面図　S＝1／60



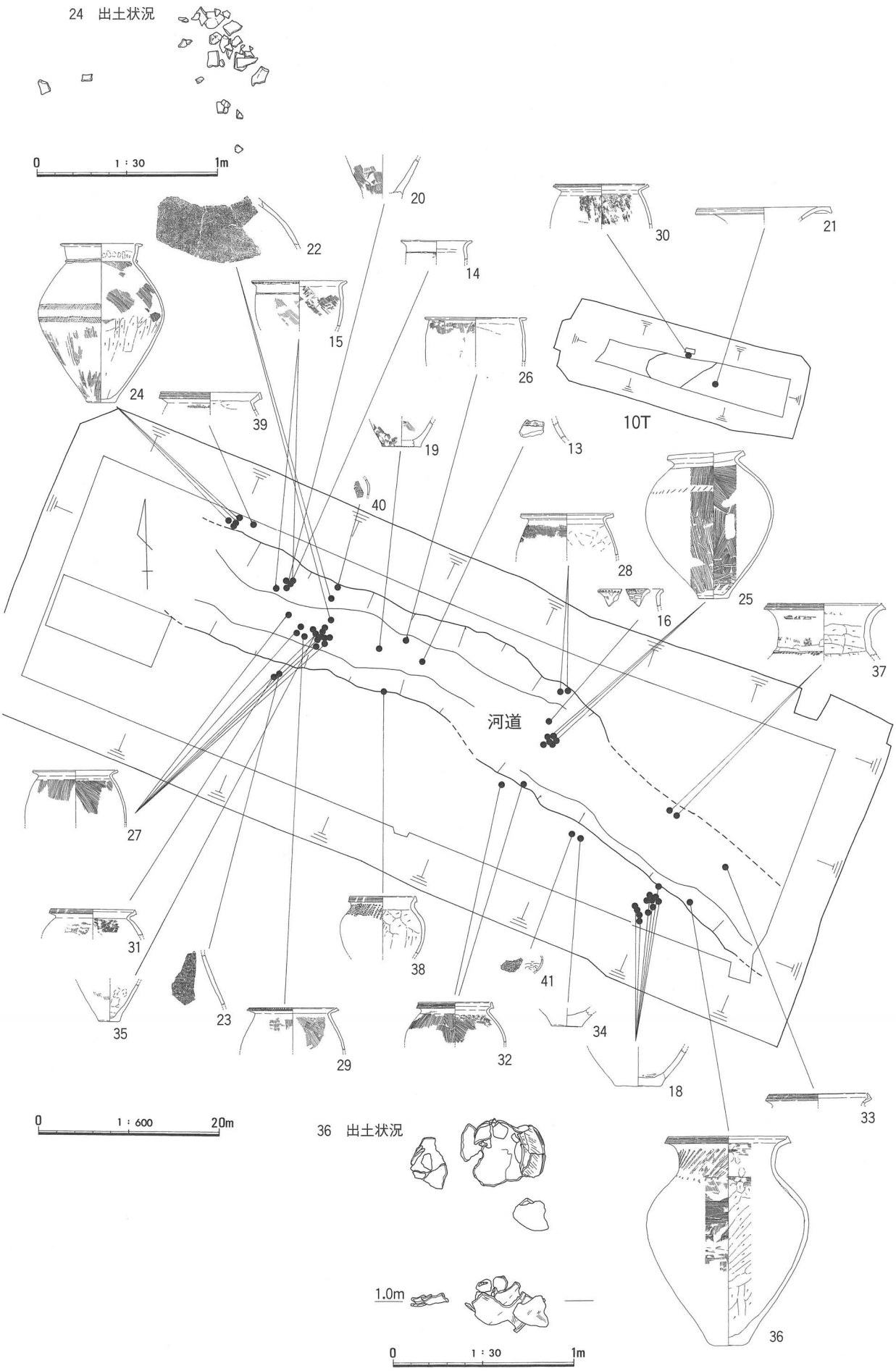
平成14年度調査区配置図　S＝1／2500



1.明灰色粘質土
2.明茶褐色土
3.暗茶褐色土
4a.黒茶褐色粘質土
5b.褐灰色粘土
6.灰白色粘土
12.腐植層（暗茶褐色）
13.腐植層（茶灰色）
14.灰色粘土

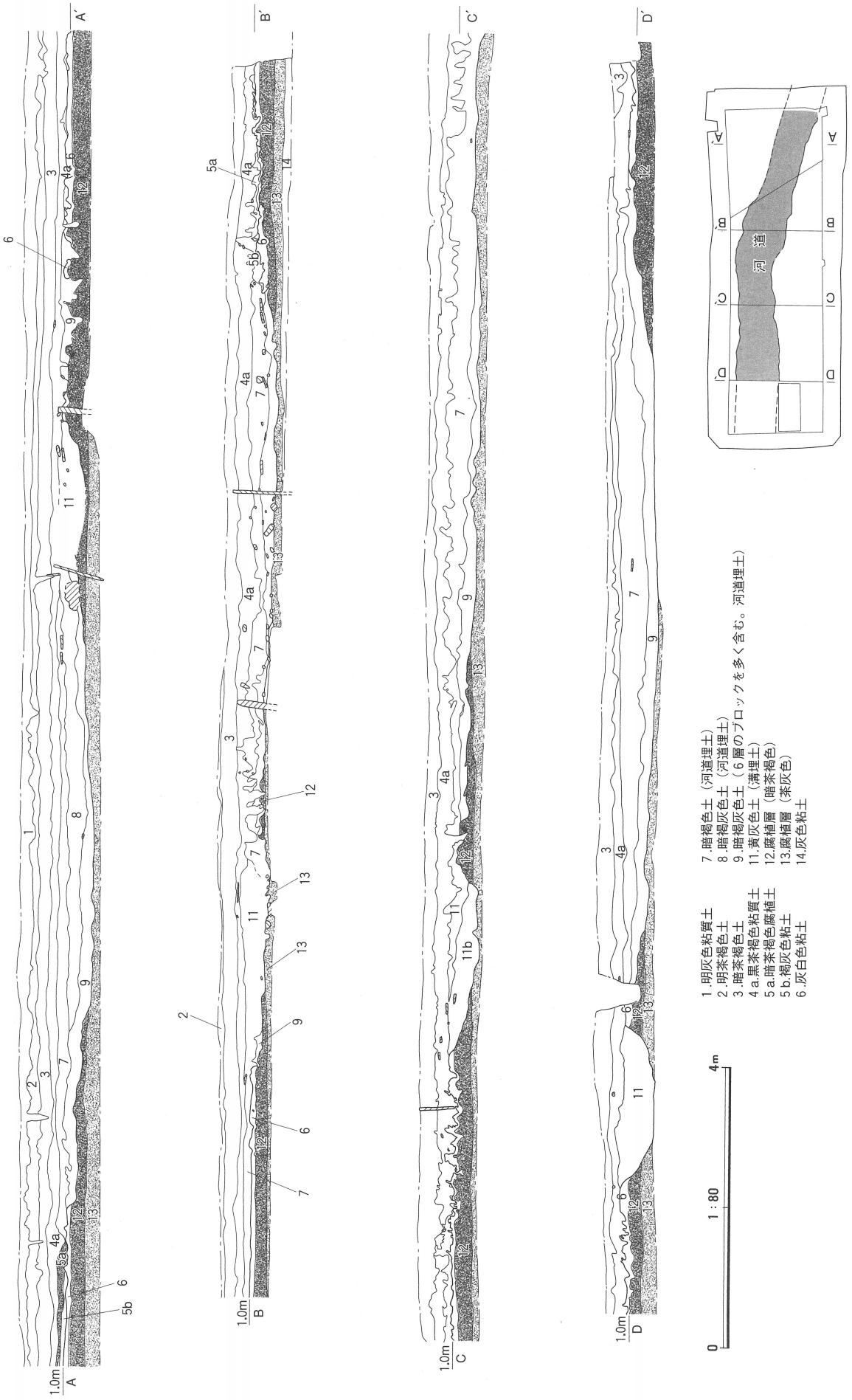


縄文時代の遺物出土状況　S＝1／600、土層断面はS＝1／30

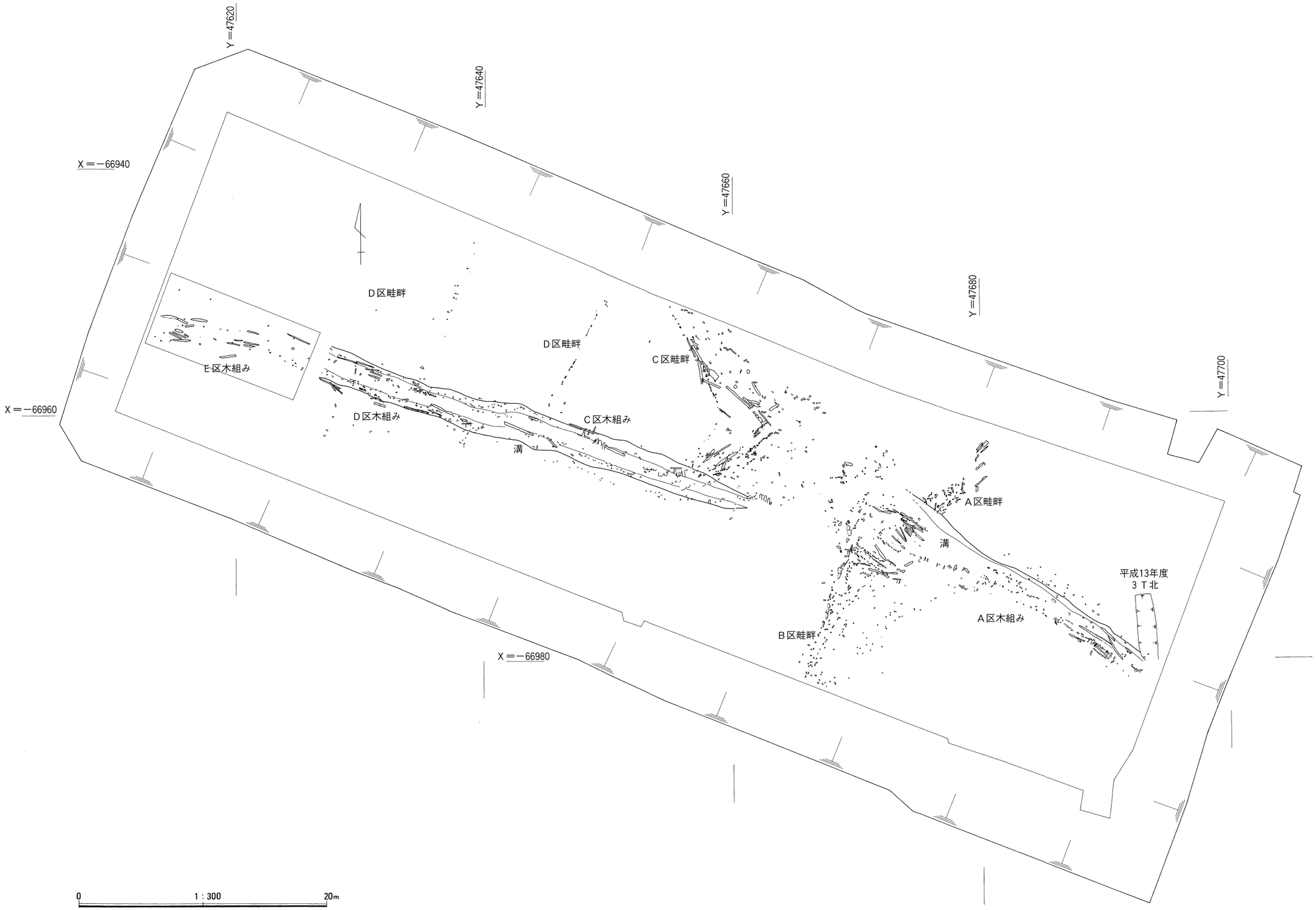


弥生土器出土状況　S＝1／600

図版 6



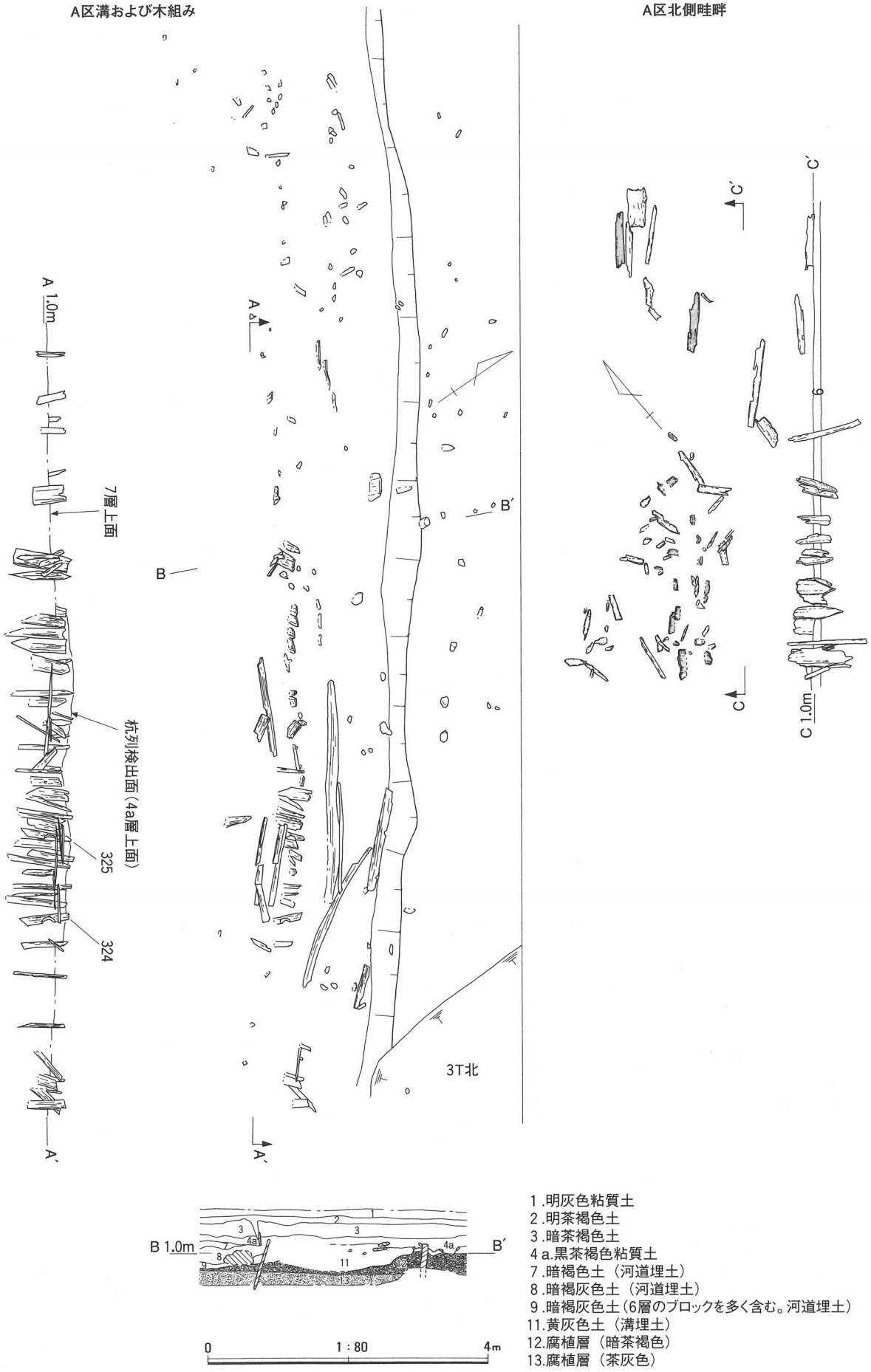
河道土層断面　S＝1／80



古墳時代の遺構　Ｓ＝１／300

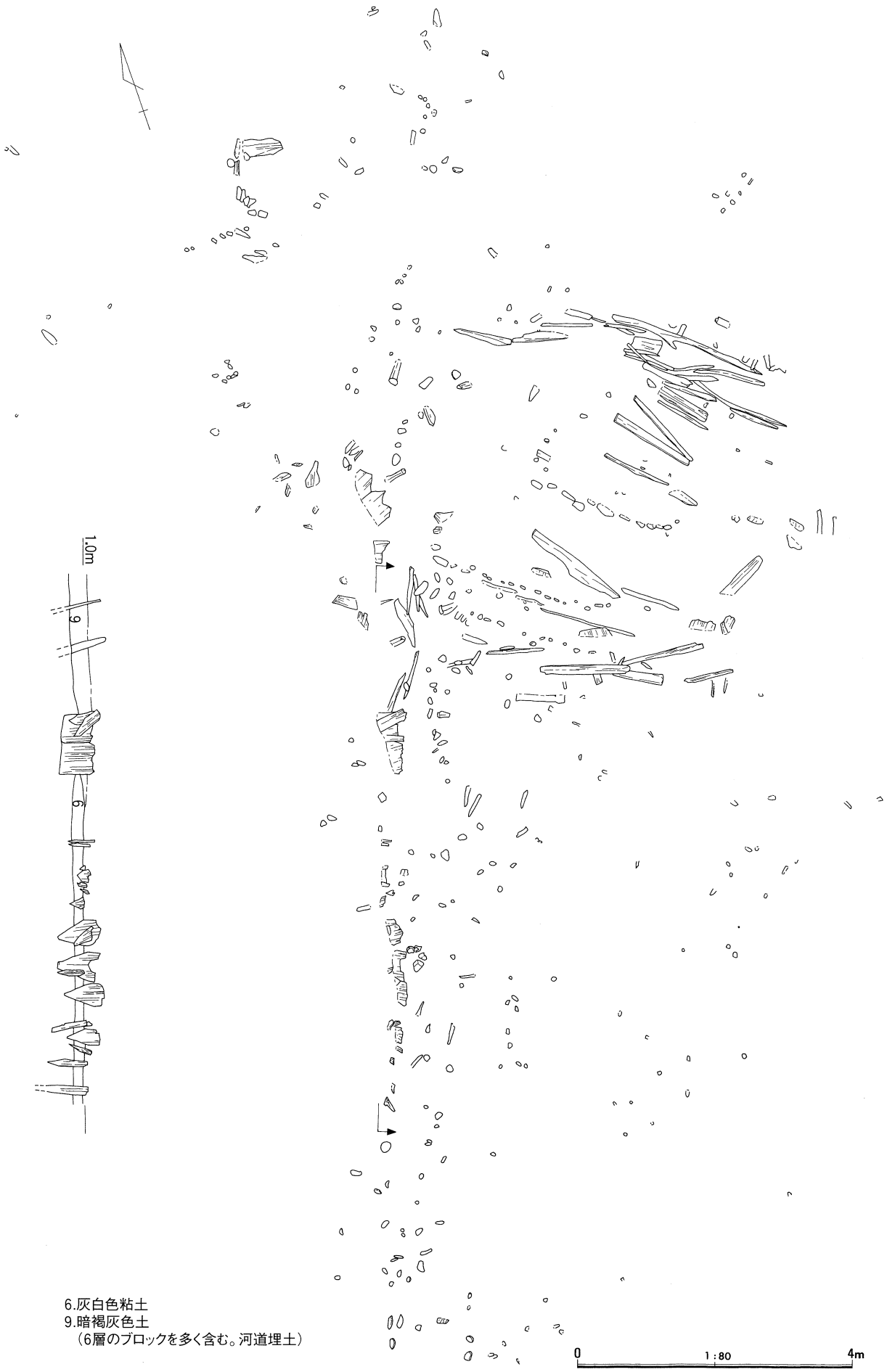
A区溝および木組み

A区北側畦畔

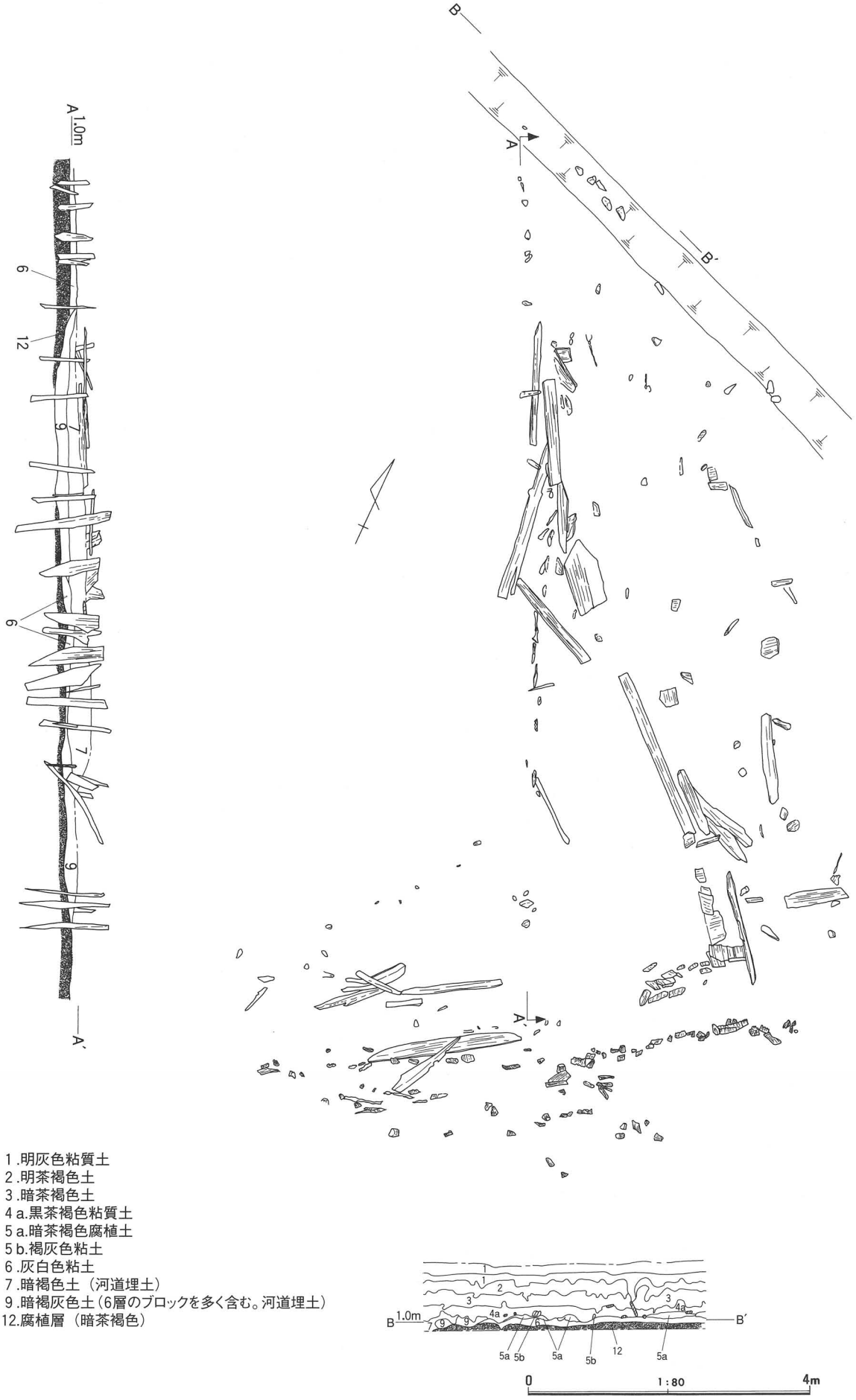


1.明灰色粘質土
2.明茶褐色土
3.暗茶褐色土
4a.黒茶褐色粘質土
7.暗褐色土（河道埋土）
8.暗褐灰色土（河道埋土）
9.暗褐灰色土（6層のブロックを多く含む。河道埋土）
11.黄灰色土（溝埋土）
12.腐植層（暗茶褐色）
13.腐植層（茶灰色）

A区溝および木組み・畦畔　S＝1／80



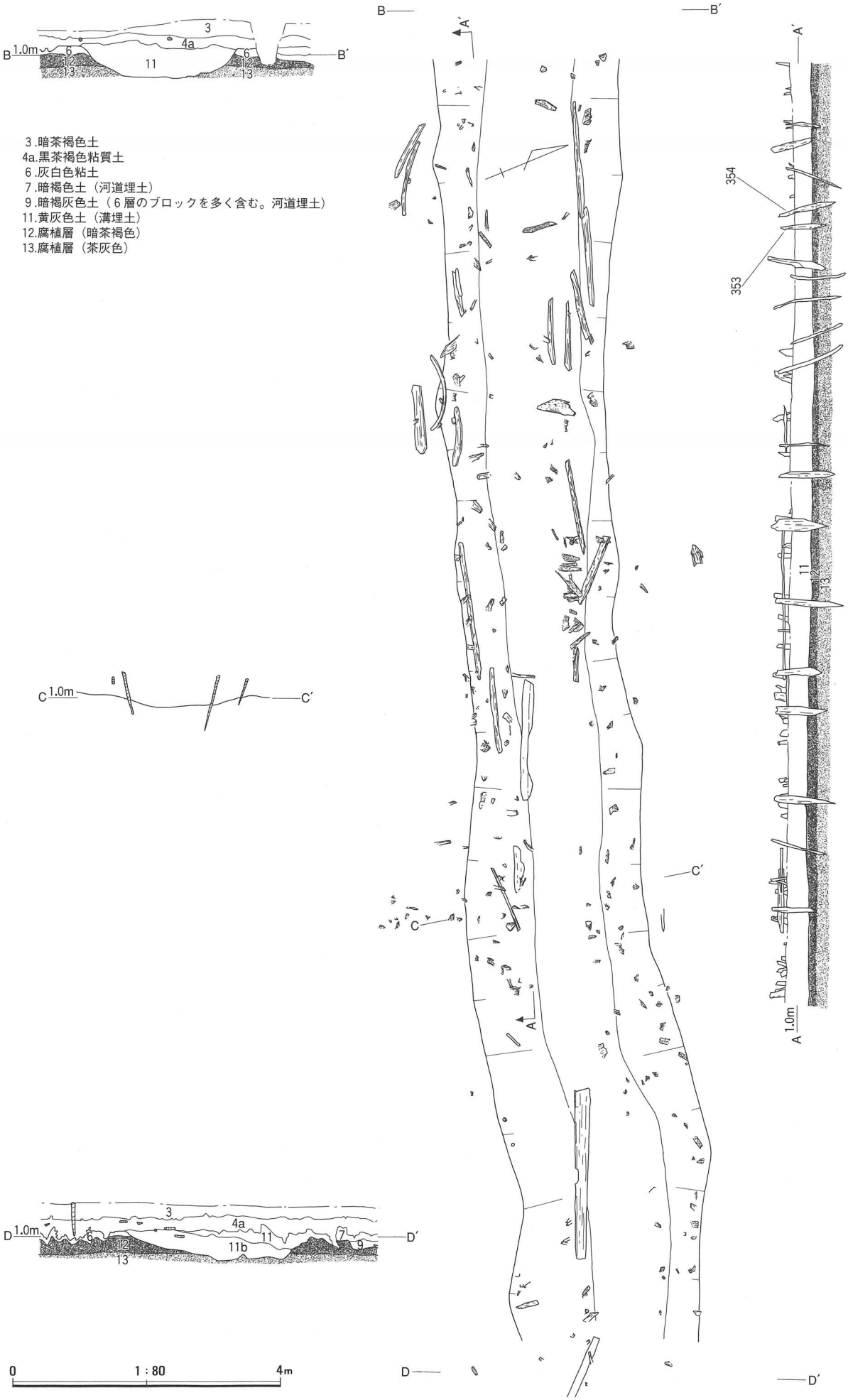
B区畦畔　S＝1／80



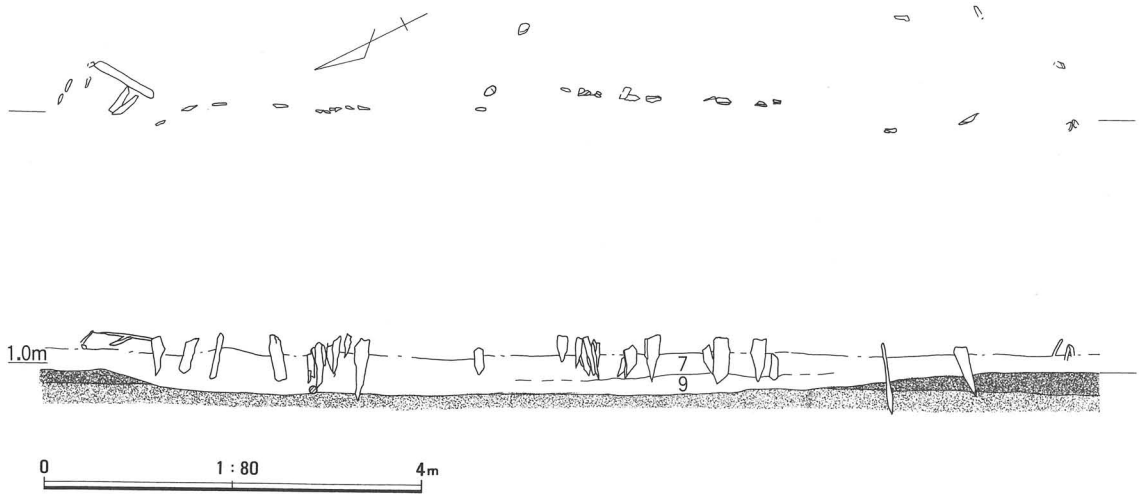
1.明灰色粘質土
2.明茶褐色土
3.暗茶褐色土
4a.黒茶褐色粘質土
5a.暗茶褐色腐植土
5b.褐灰色粘土
6.灰白色粘土
7.暗褐色土（河道埋土）
9.暗褐灰色土（6層のブロックを多く含む。河道埋土）
12.腐植層（暗茶褐色）

C区北側畦畔　S＝1／80

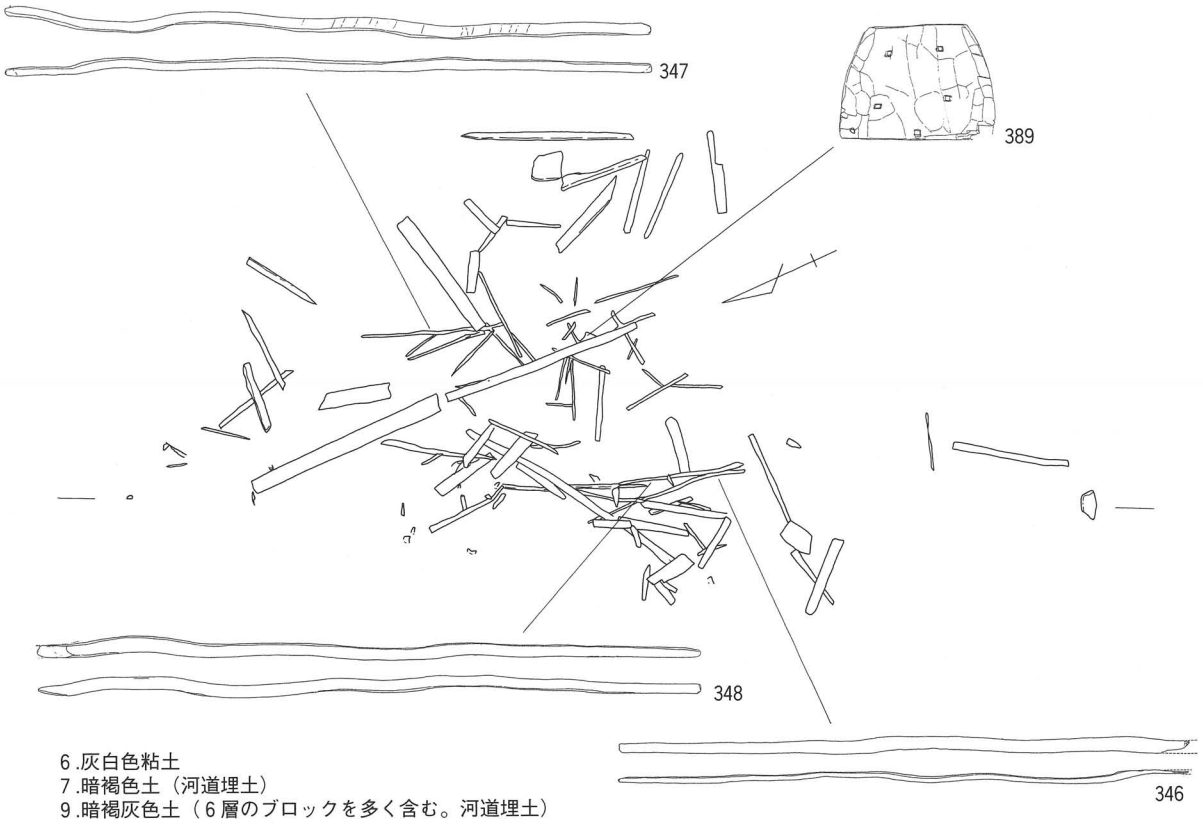
図版11



D区溝および木組み　S＝1／80

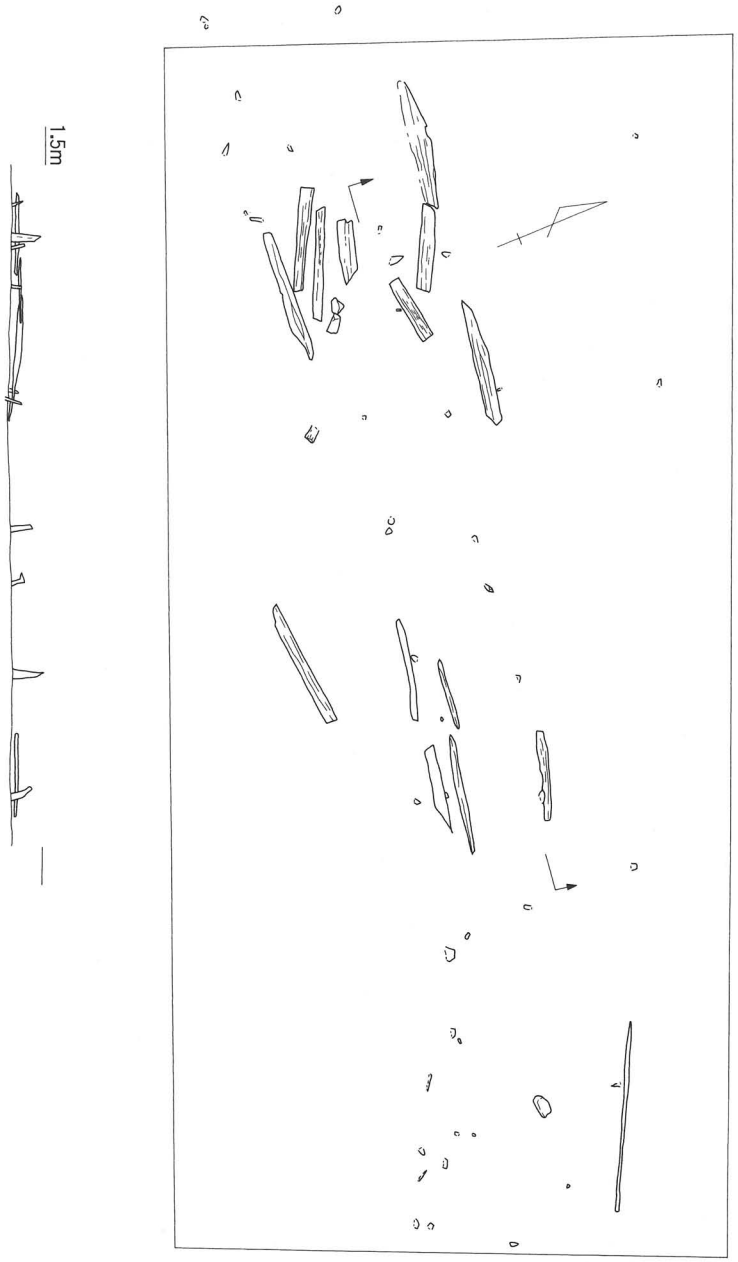


D区北側矢坂列　S＝1／80

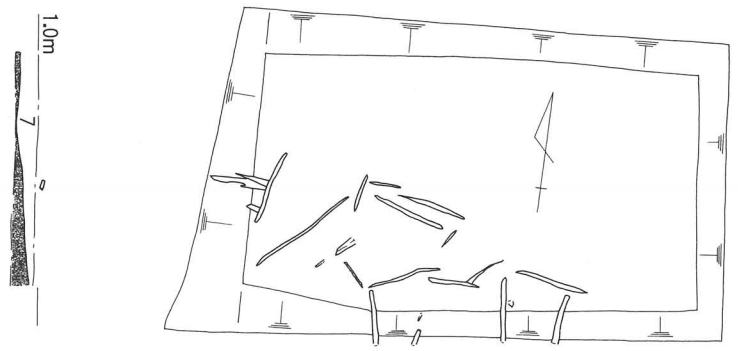


D区北側杭列　S＝1／80

E区木組み



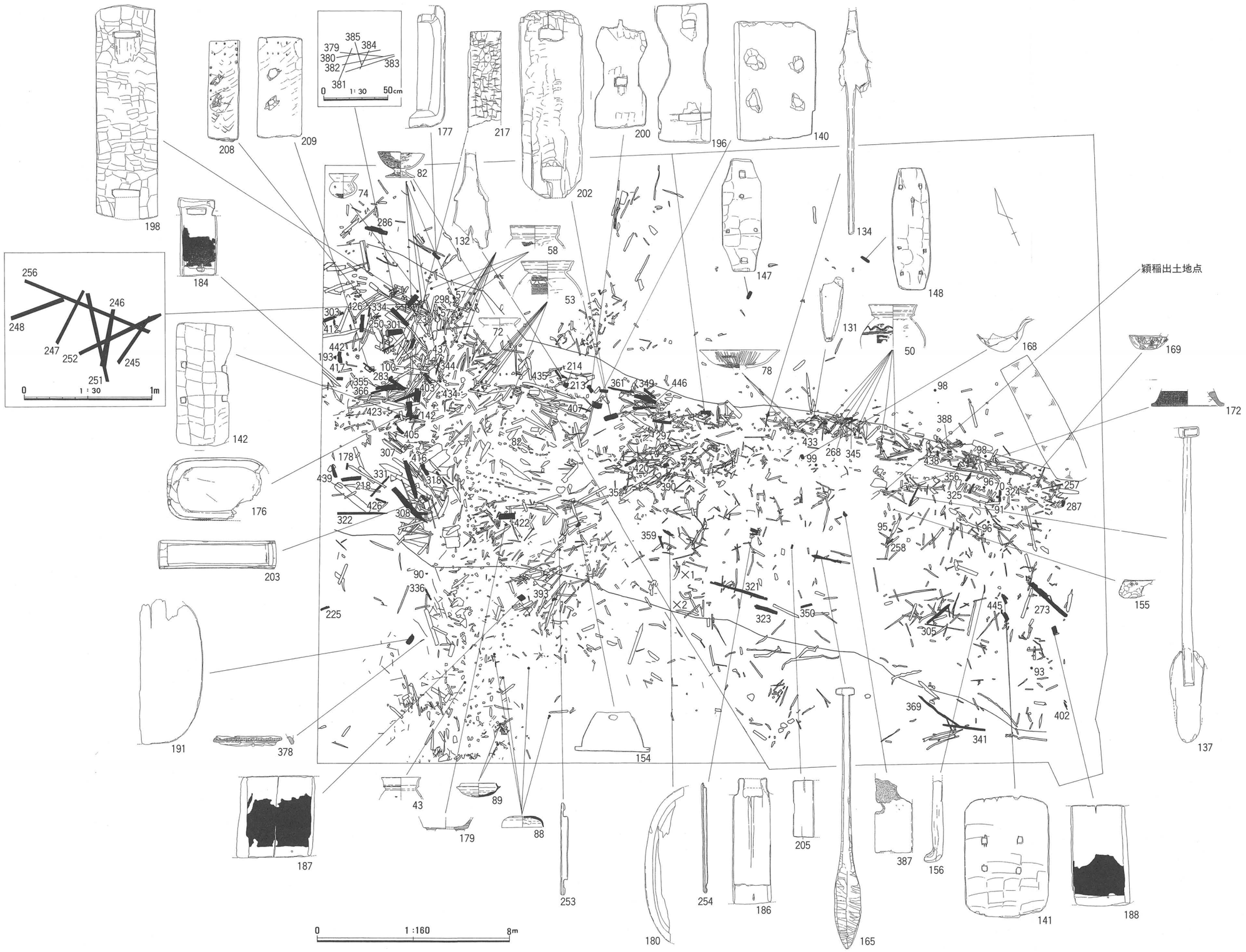
12T



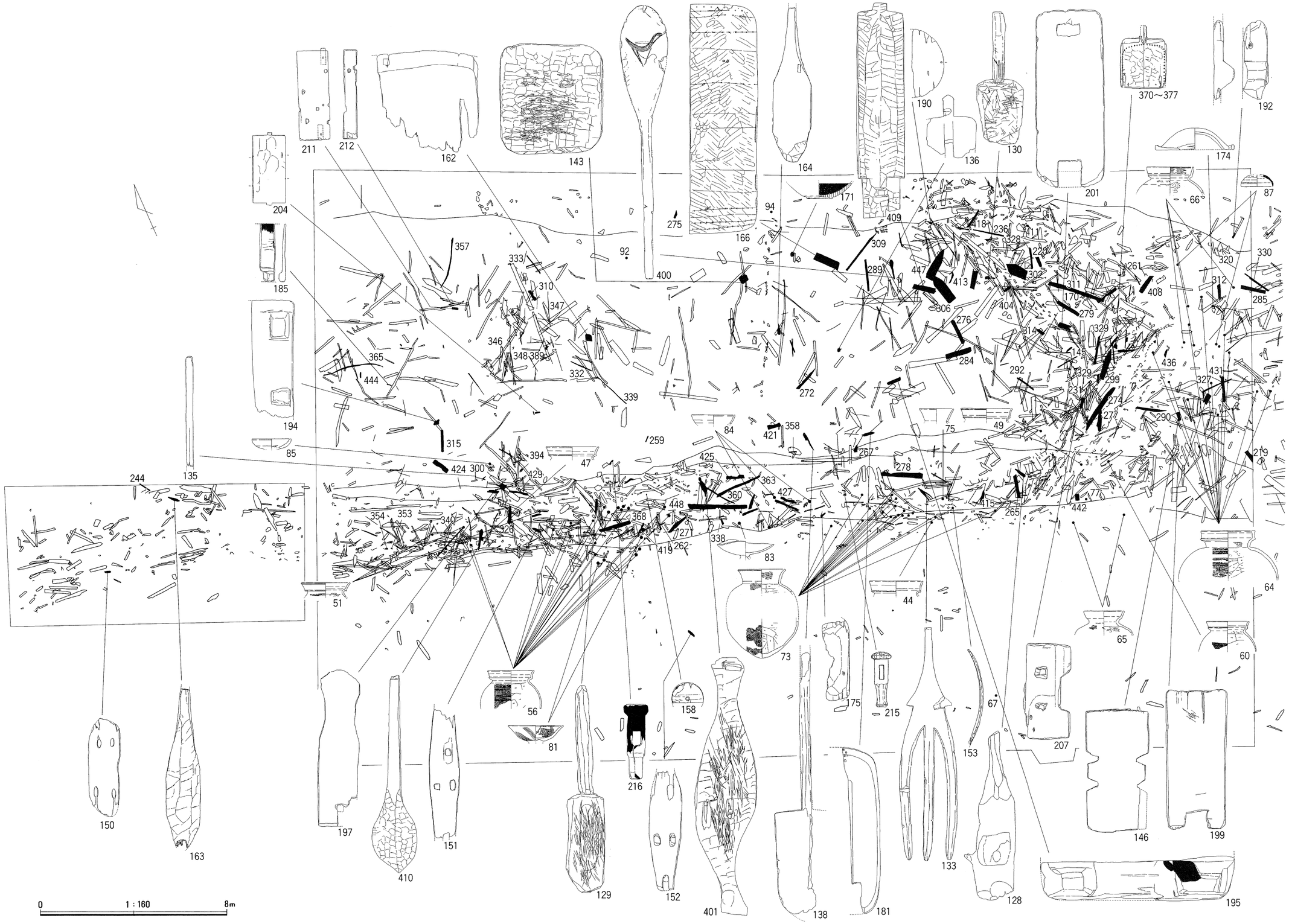
7.暗褐色土（河道埋土）

0　1：80　4m

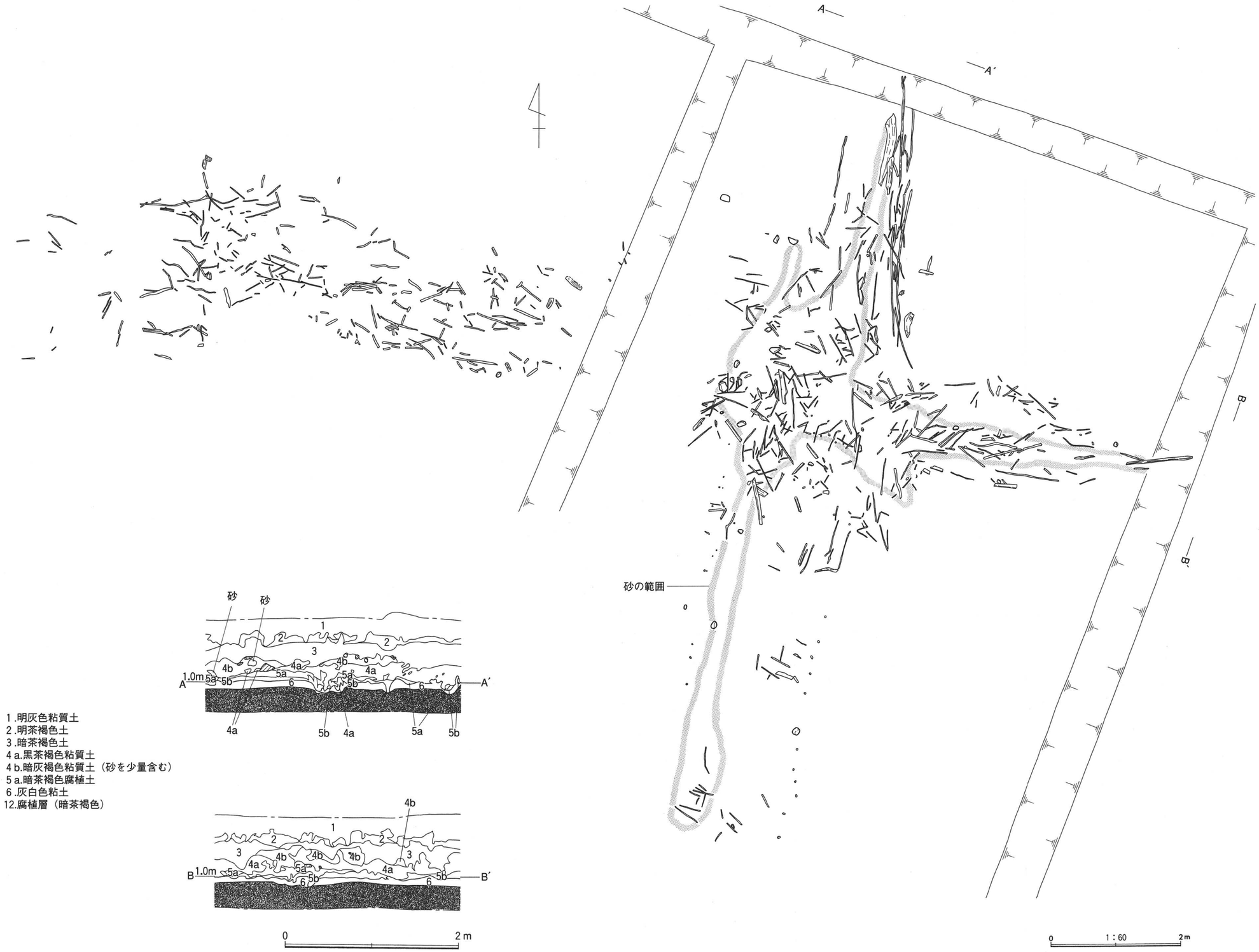
E区木組み・12T　S＝1／80



A・B区土師器・須恵器出土状況　S＝1／160、遺物は1／12（165は1／18、×は不明遺物）

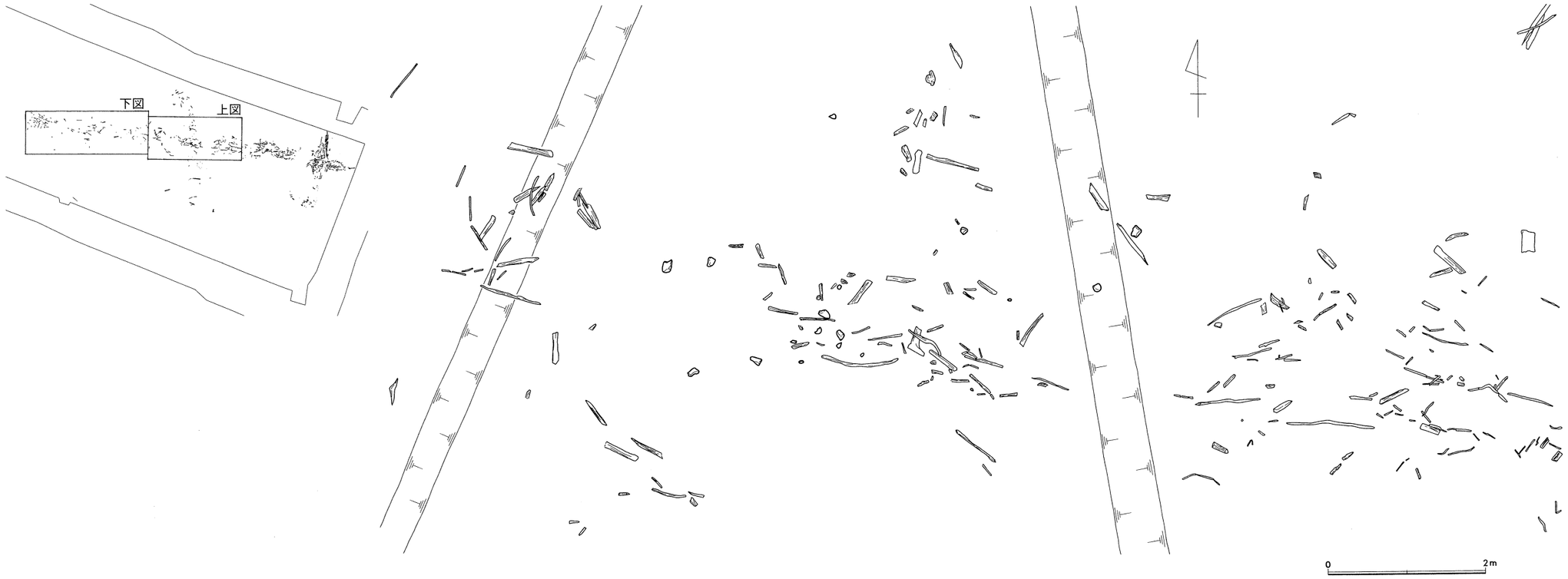


C～E区土師器・須恵器・木製品出土状況　S＝1／160　遺物は1／12（166・409・410はS＝1／18）

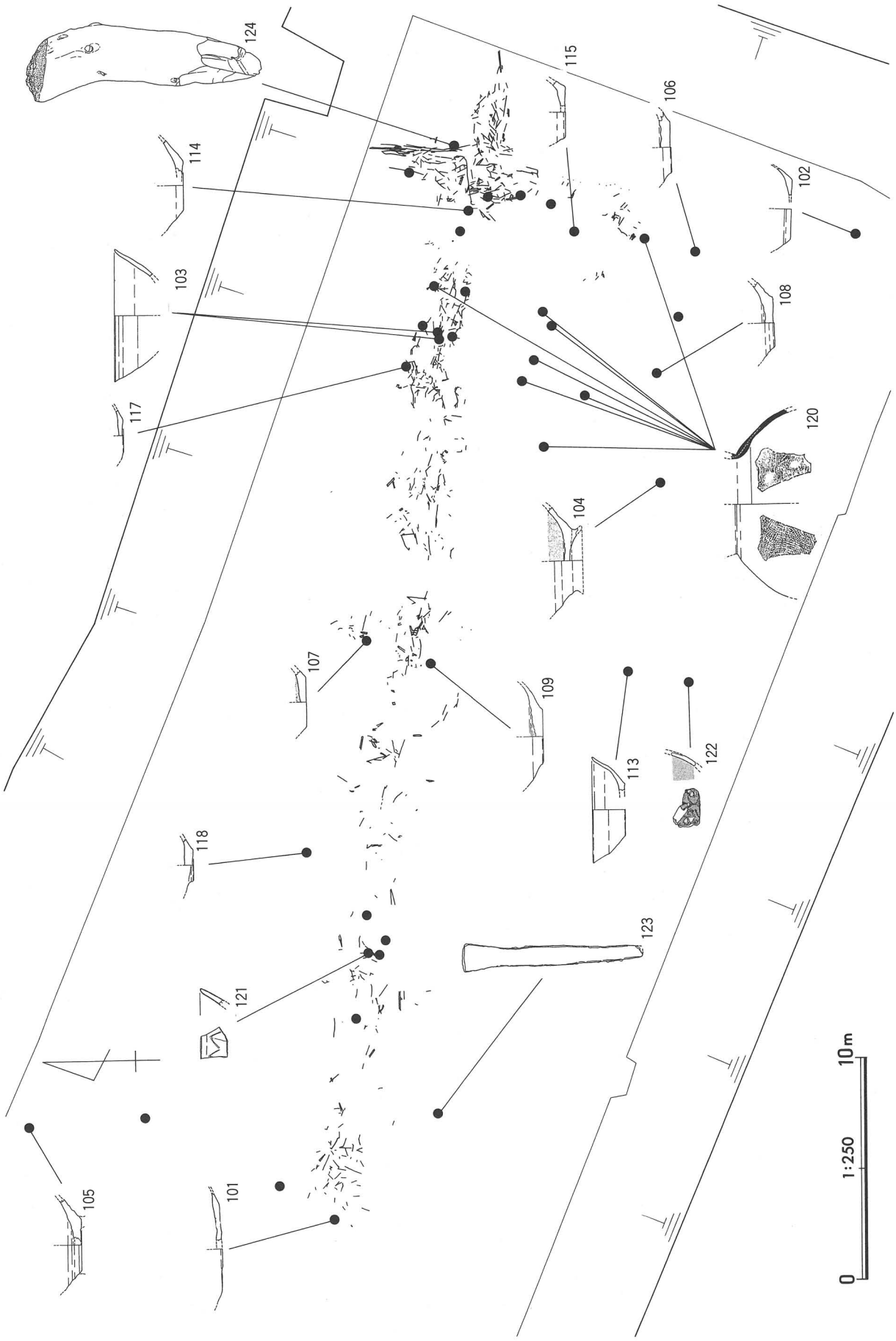


1.明灰色粘質土
2.明茶褐色土
3.暗茶褐色土
4a.黒茶褐色粘質土
4b.暗灰褐色粘質土（砂を少量含む）
5a.暗茶褐色腐植土
6.灰白色粘土
12.腐植層（暗茶褐色）

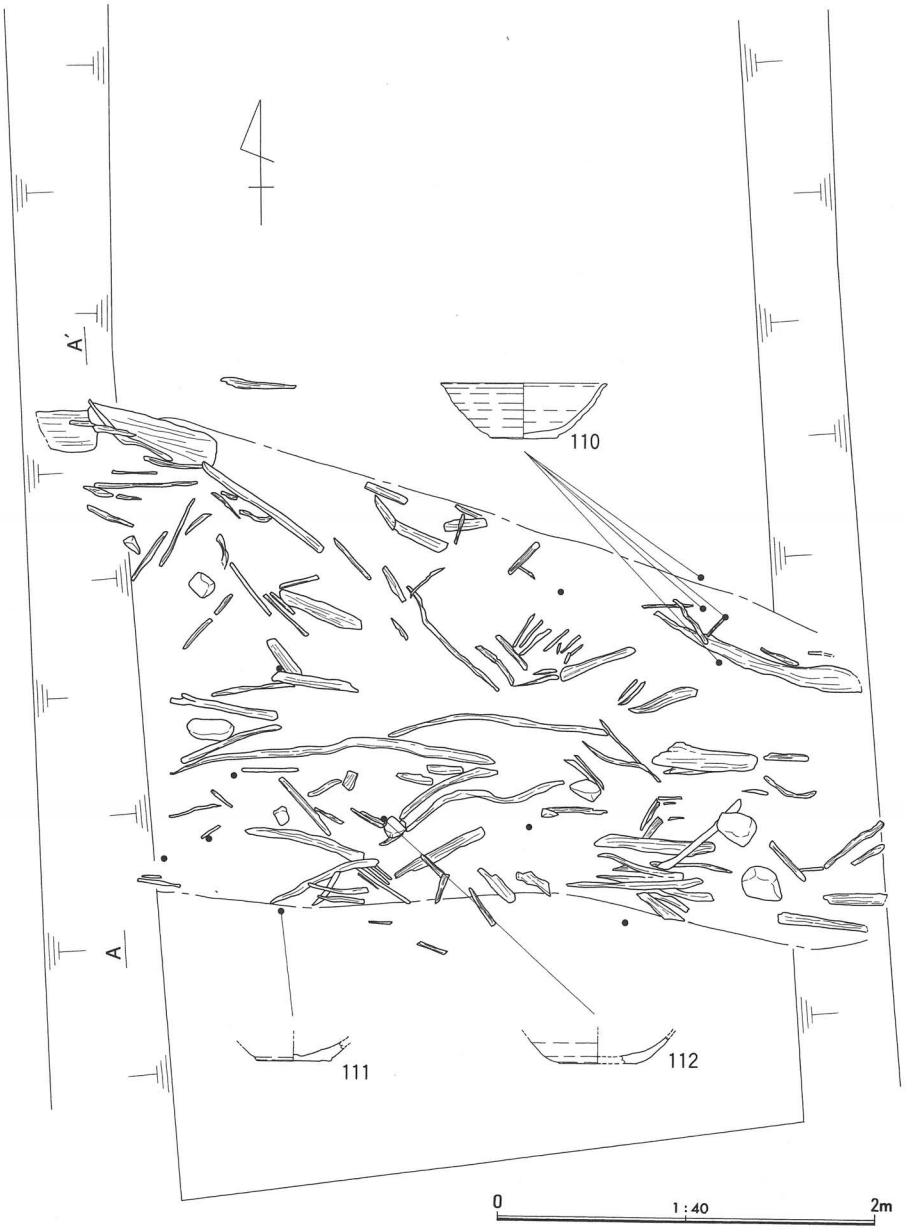
A区地割遺構　平面図S＝1／60、土層断面はS＝1／40



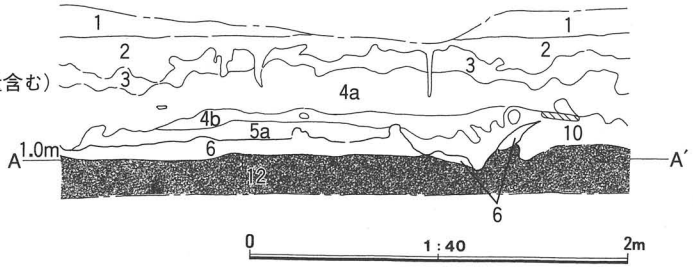
B・C区地割遺構　S＝1／60



地割遺構遺物出土状況　S＝1／250、遺物はS＝1／6

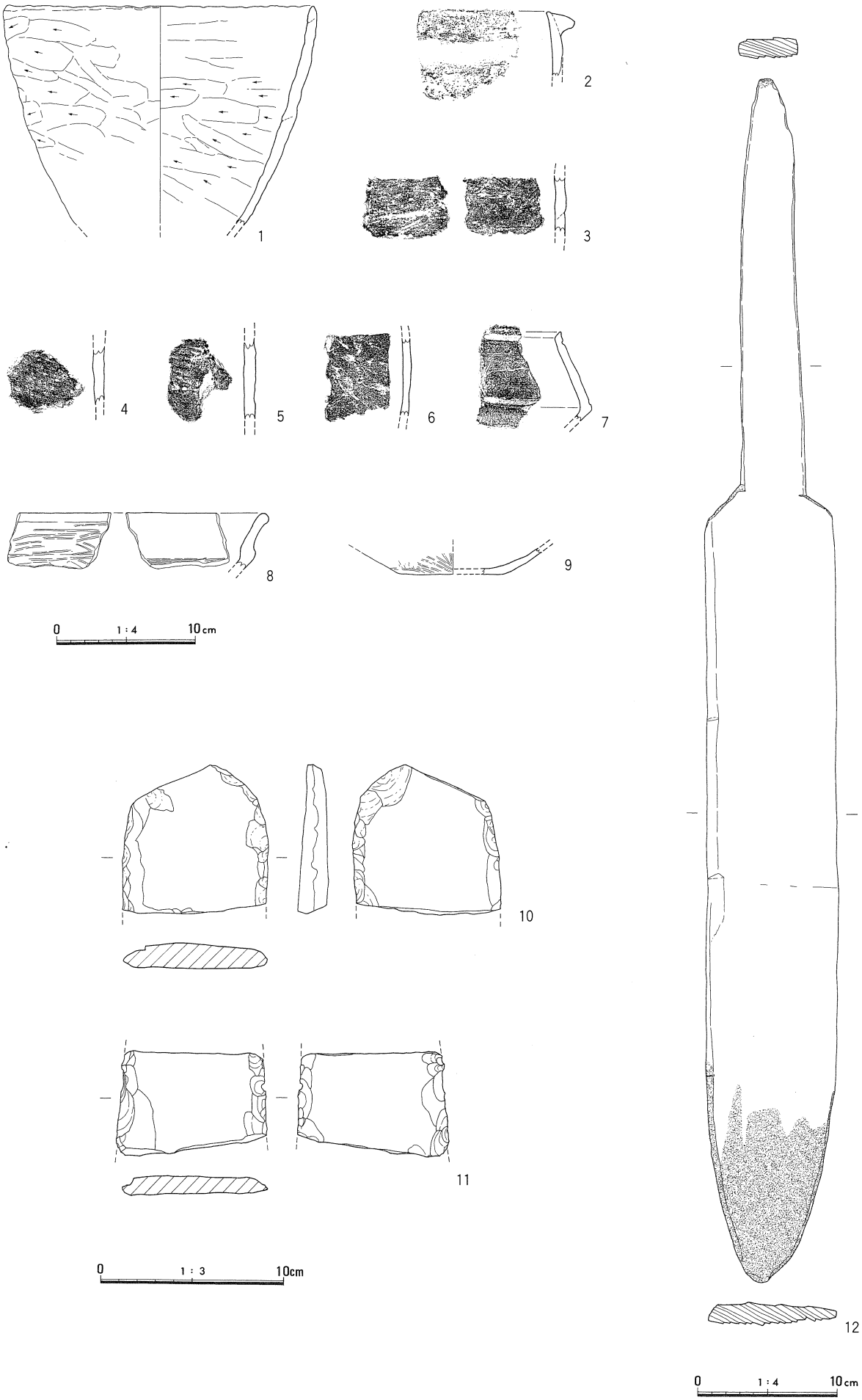


1.明灰色粘質土
2.明茶褐色土
3.暗茶褐色土
4a.黒茶褐色粘質土
4b.暗灰褐色粘質土（砂を少量含む）
5a.暗茶褐色腐植土
6.灰白色粘土
10.暗灰色粘質土
12.腐植層（暗茶褐色）

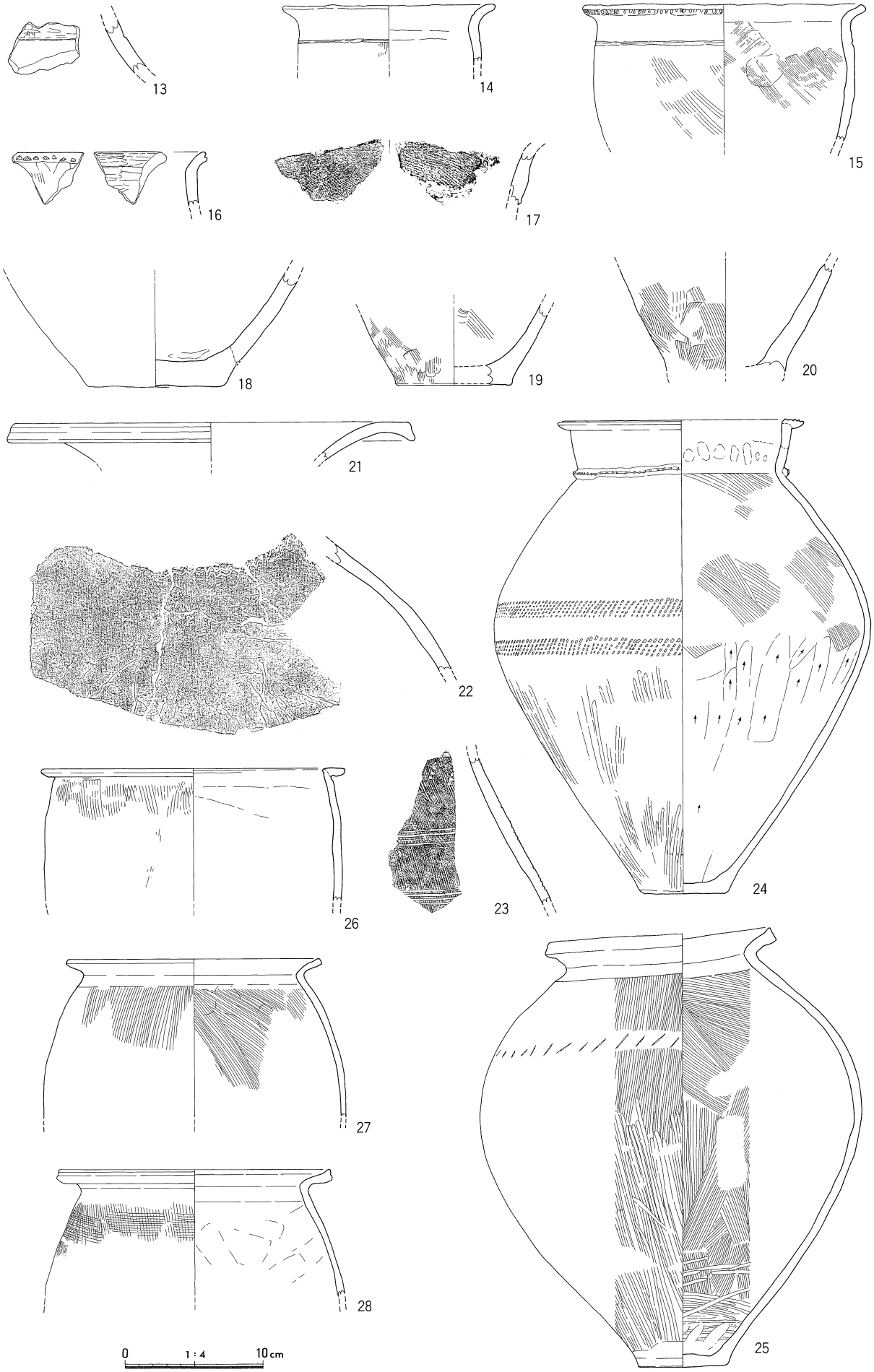


11T地割遺構　S＝1／40、遺物はS＝1／6

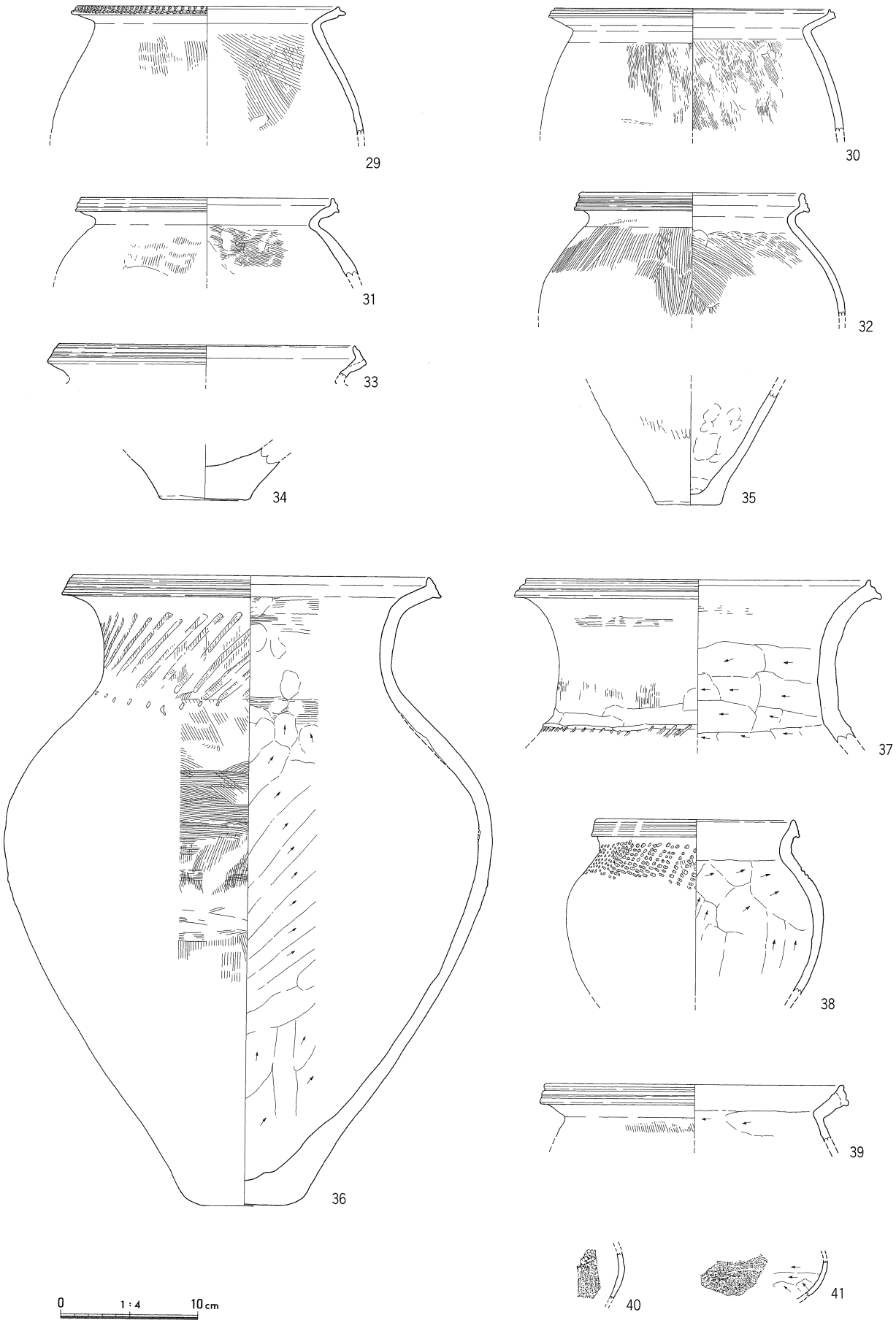
地割遺構と周辺の地形　S＝1／5000



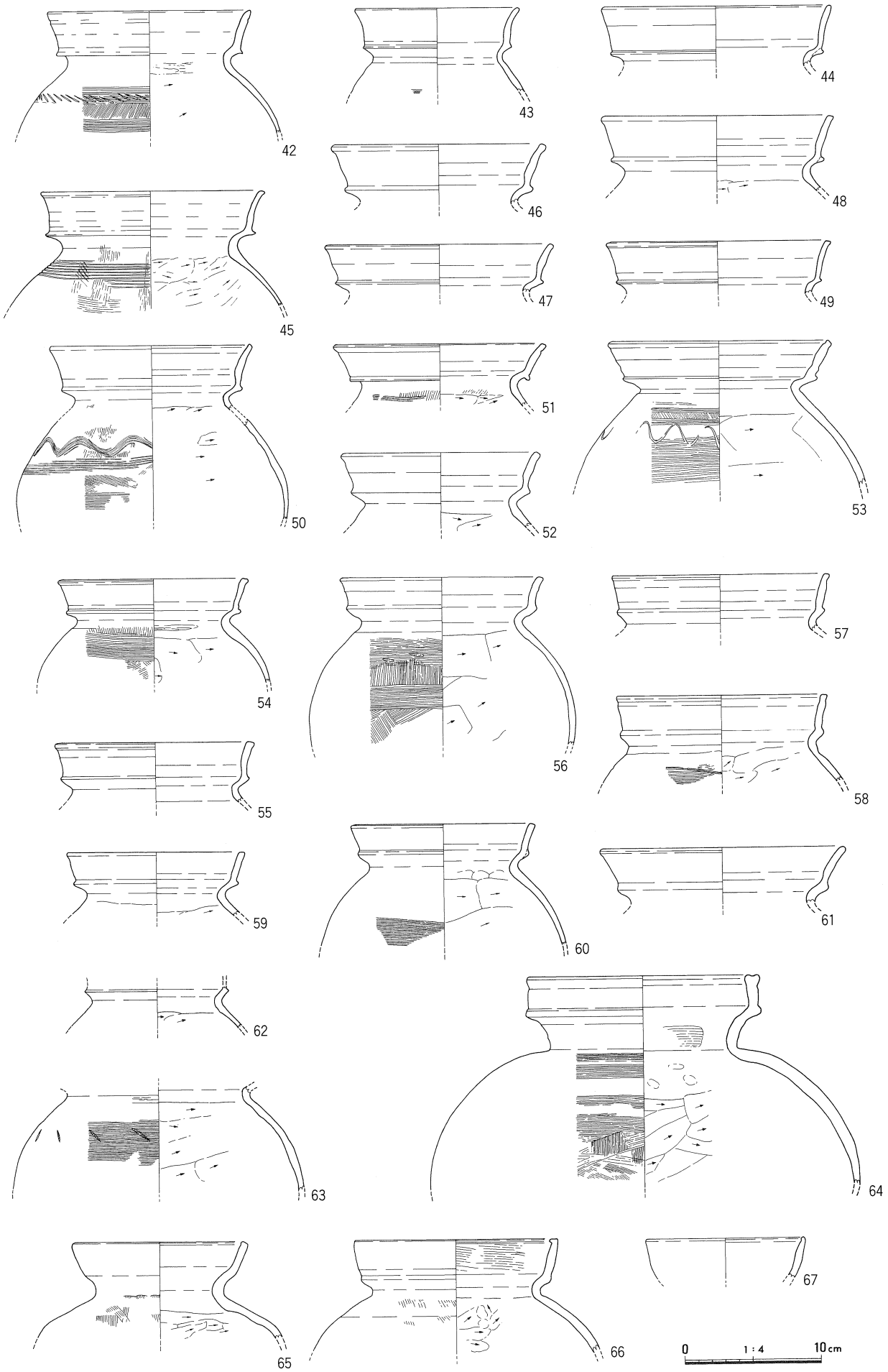
縄文時代の遺物　S＝1／4、10・11はS＝1／3



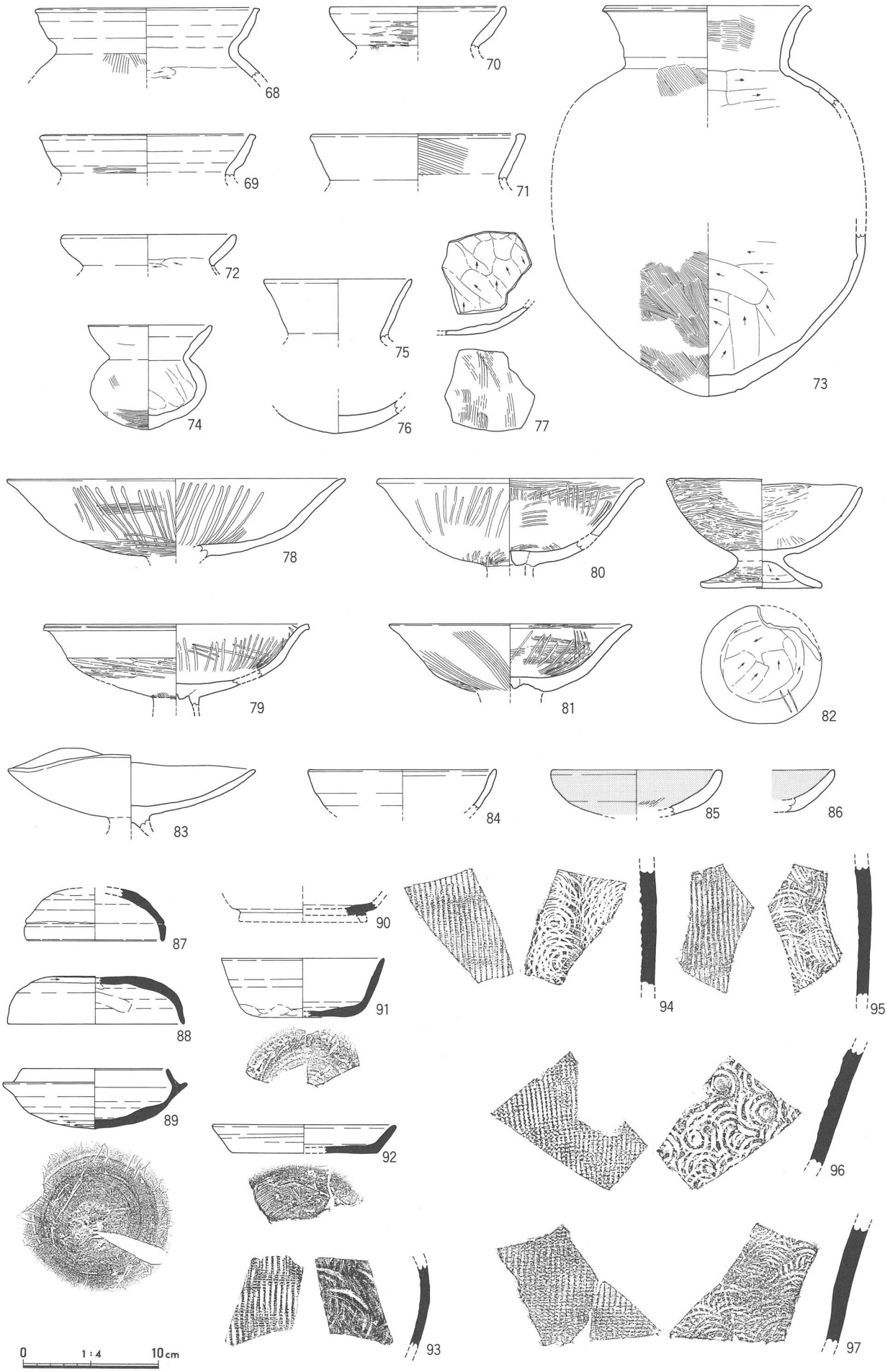
弥生土器(1)　S＝1／4



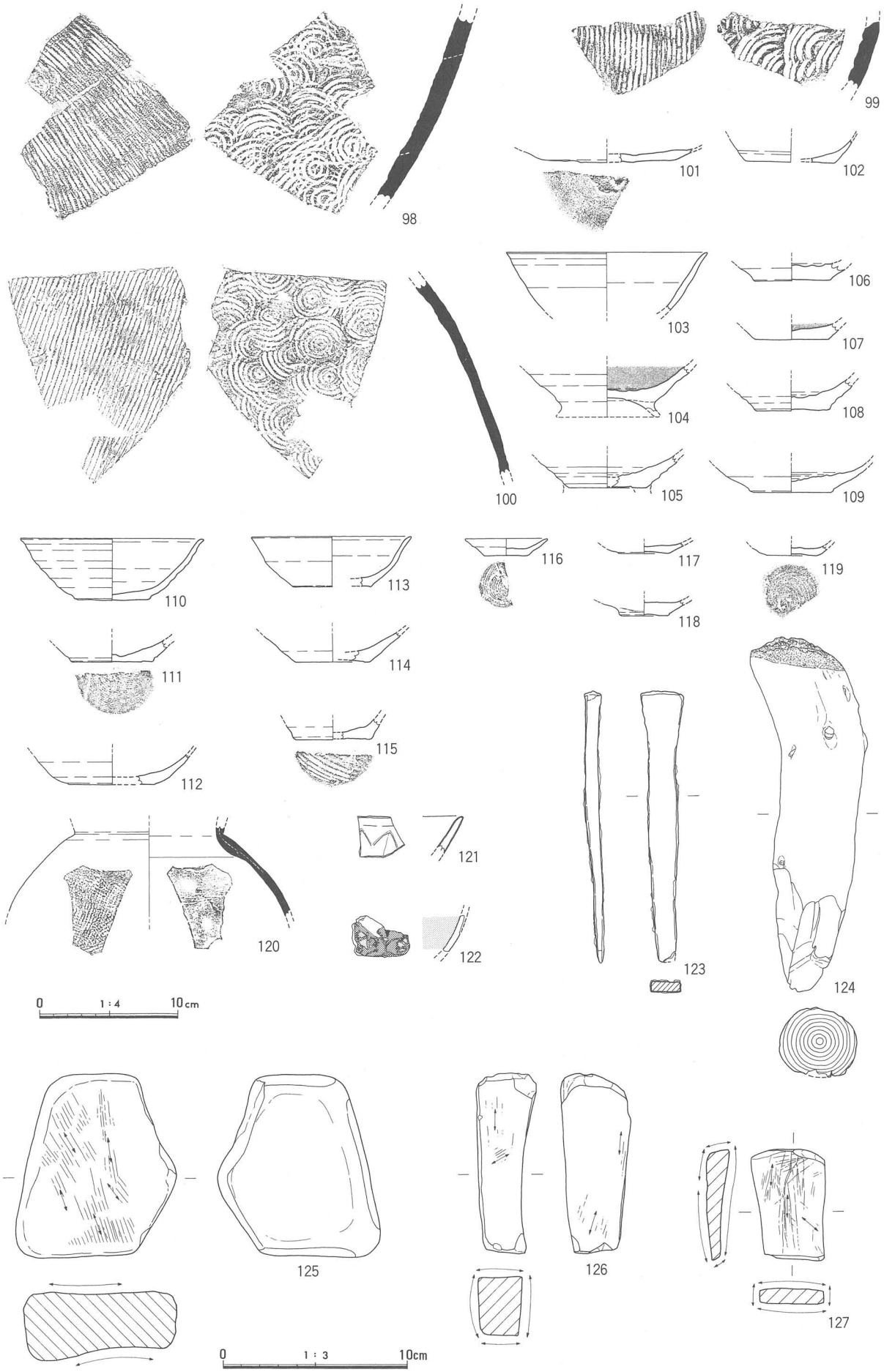
弥生土器(2)　S＝1／4


42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
0
1:4
10cm

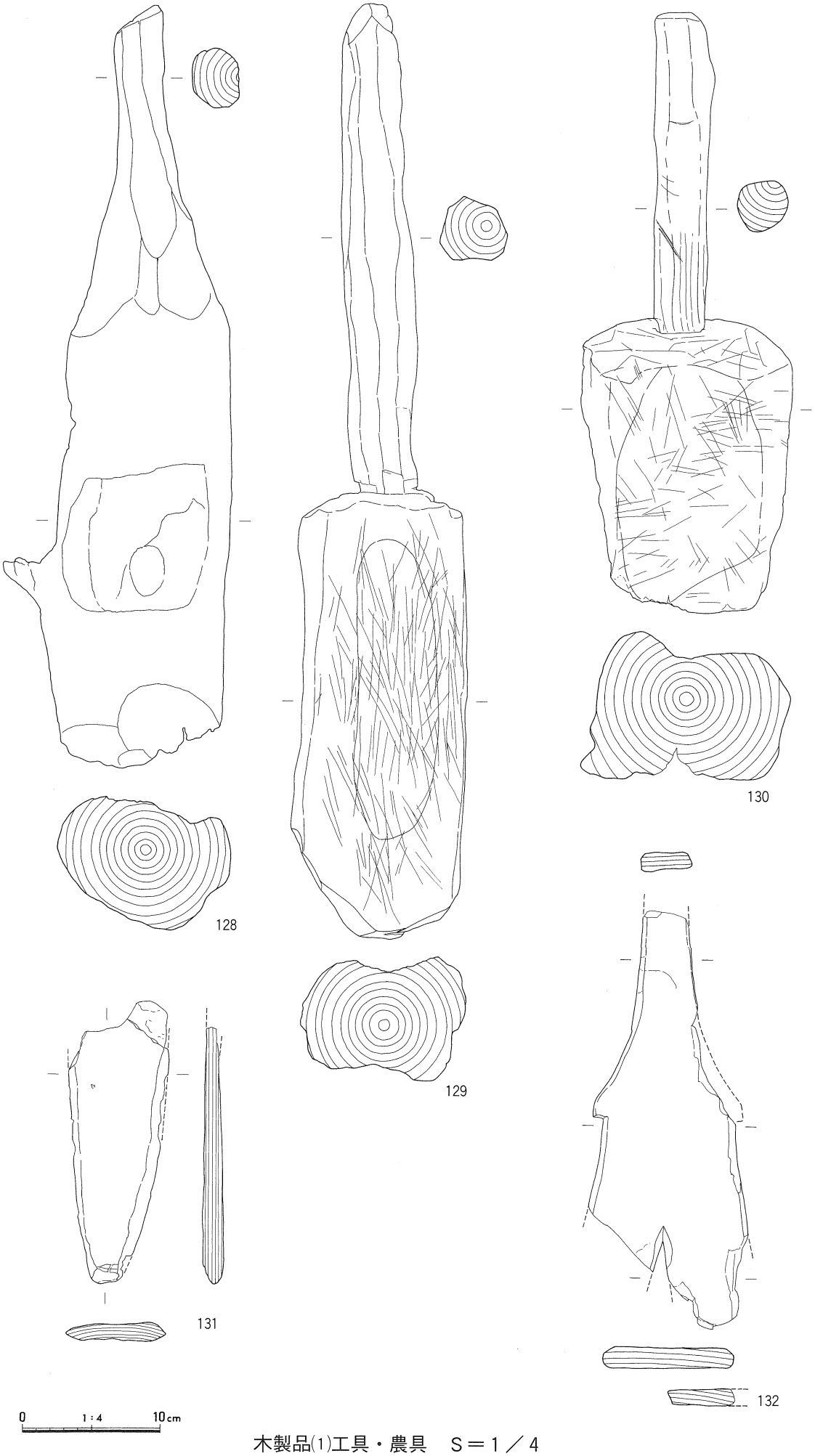
土師器(1)　S＝1／4



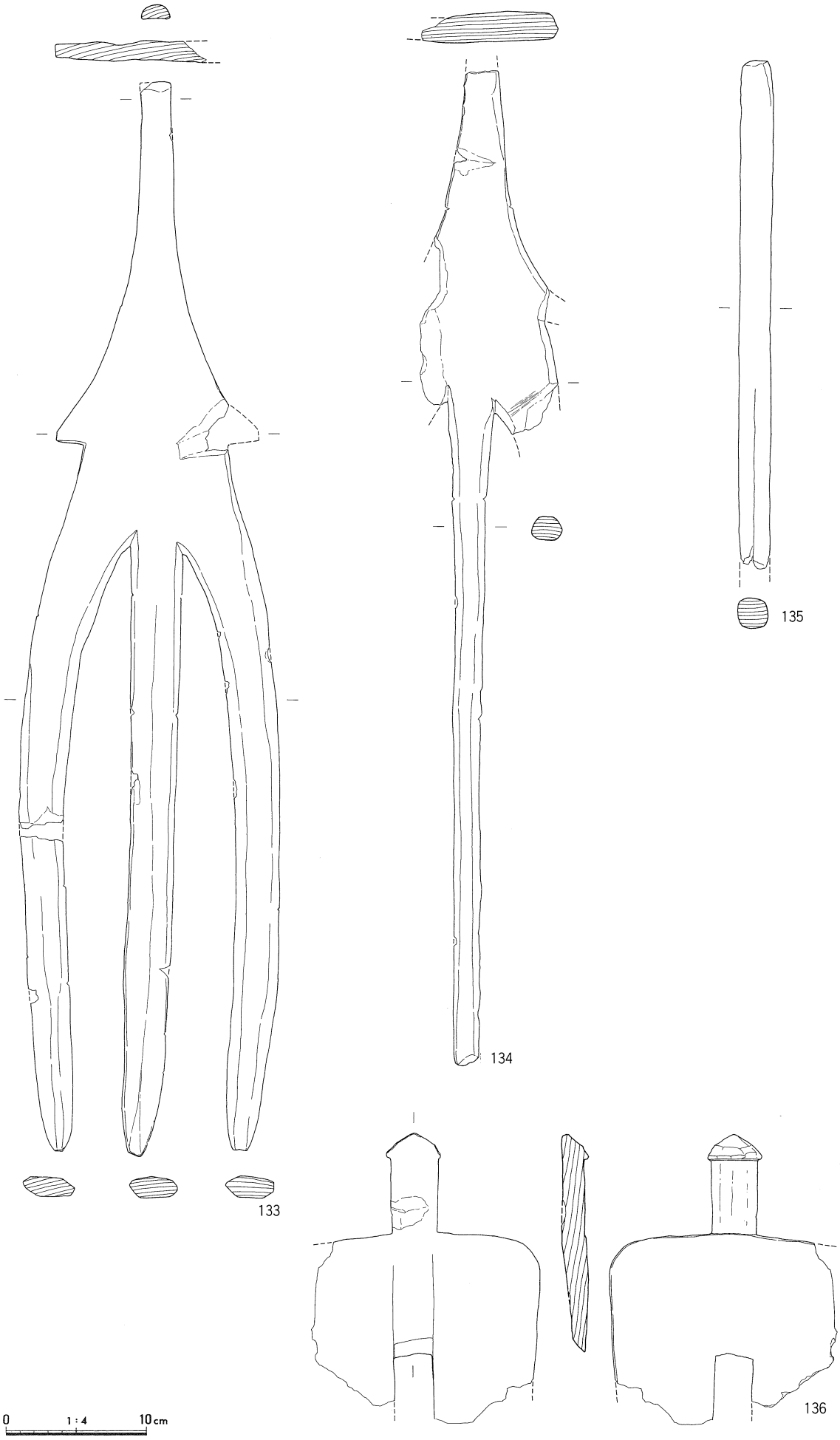
土師器(2)・須恵器(1)　S＝1／4



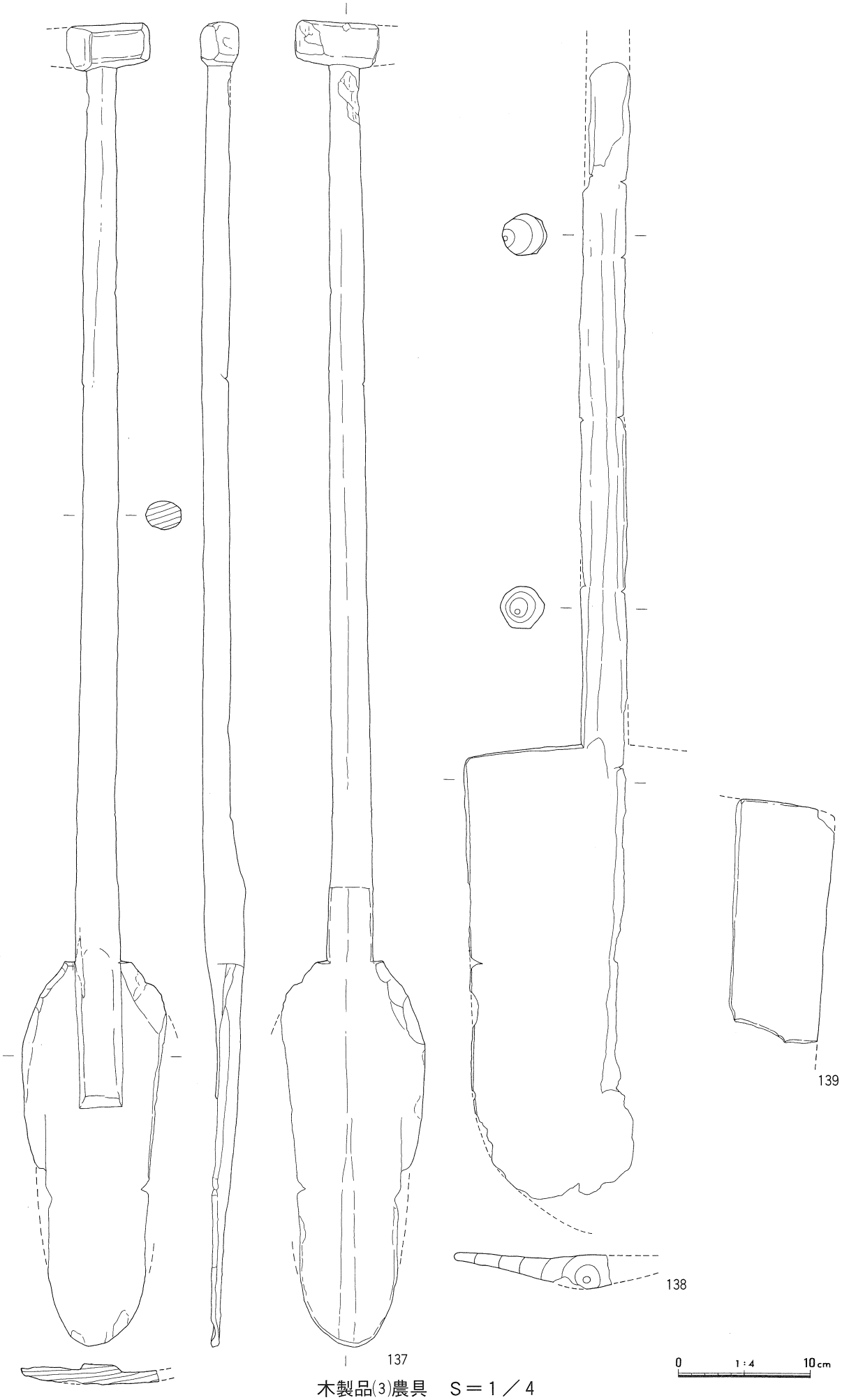
須恵器(2)・平安時代以降の遺物・石器　S＝1／4、125～127はS＝1／3



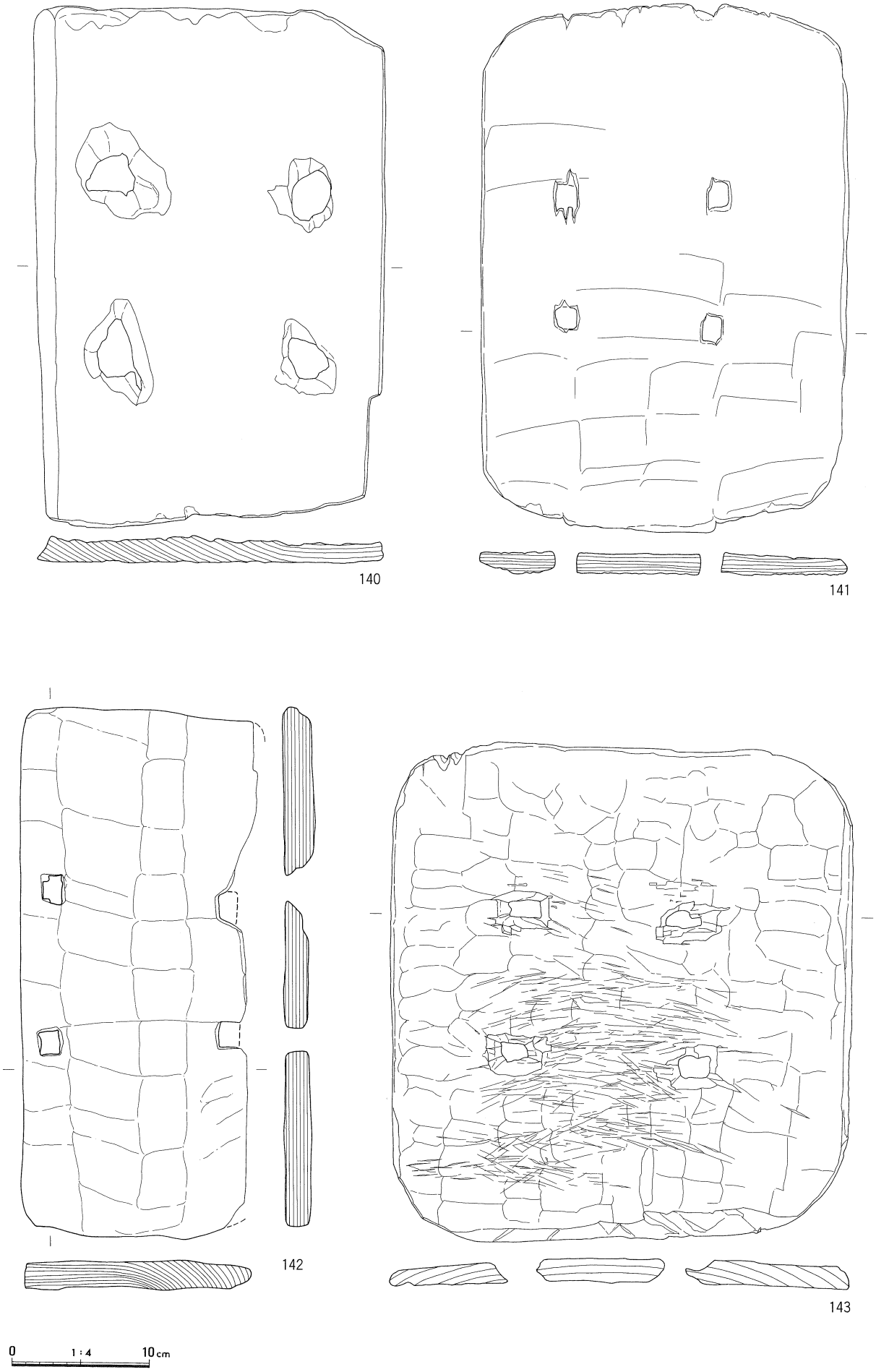
木製品(1)工具・農具　S＝1／4



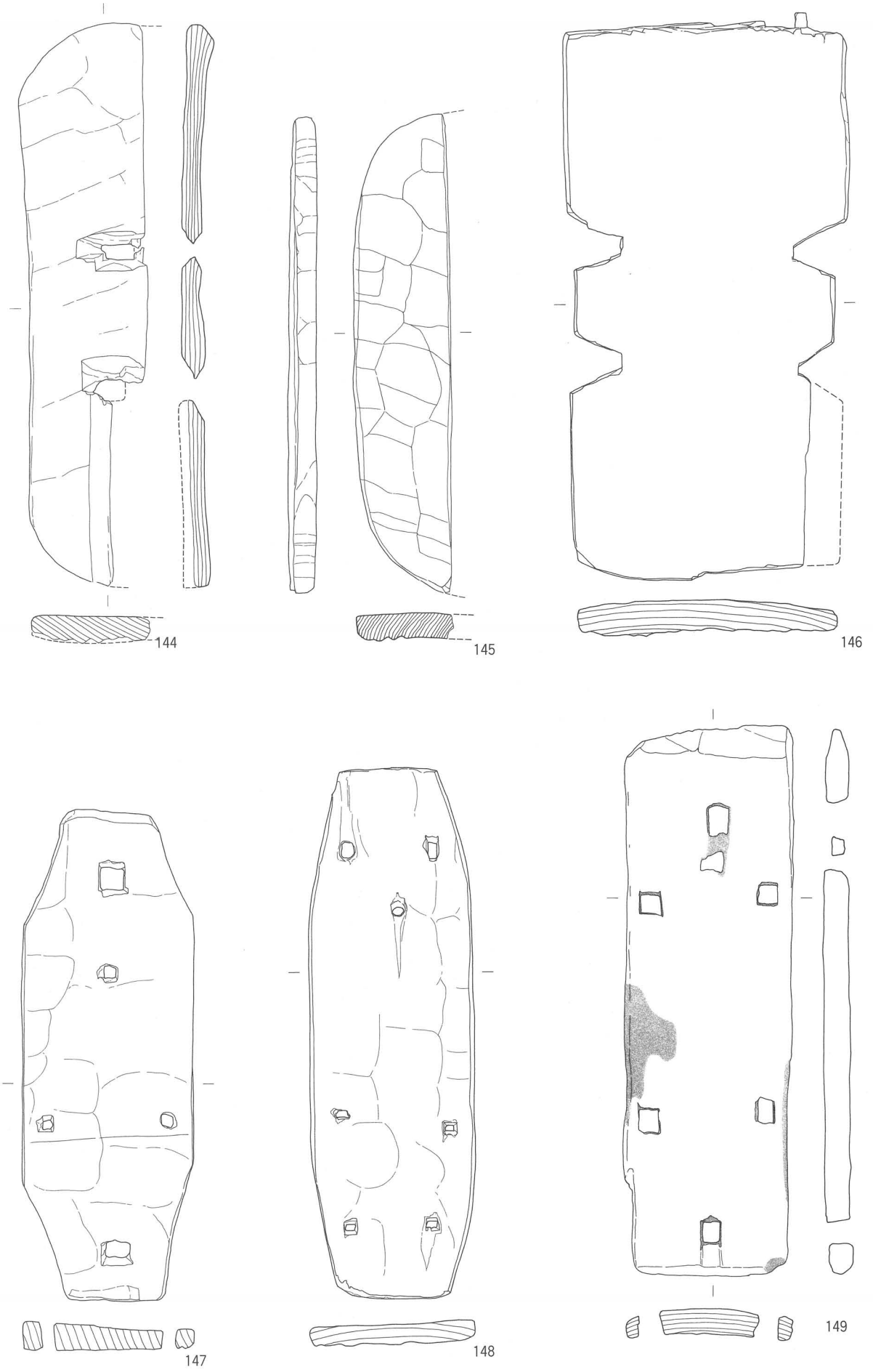
木製品(2)農具　S＝1／4



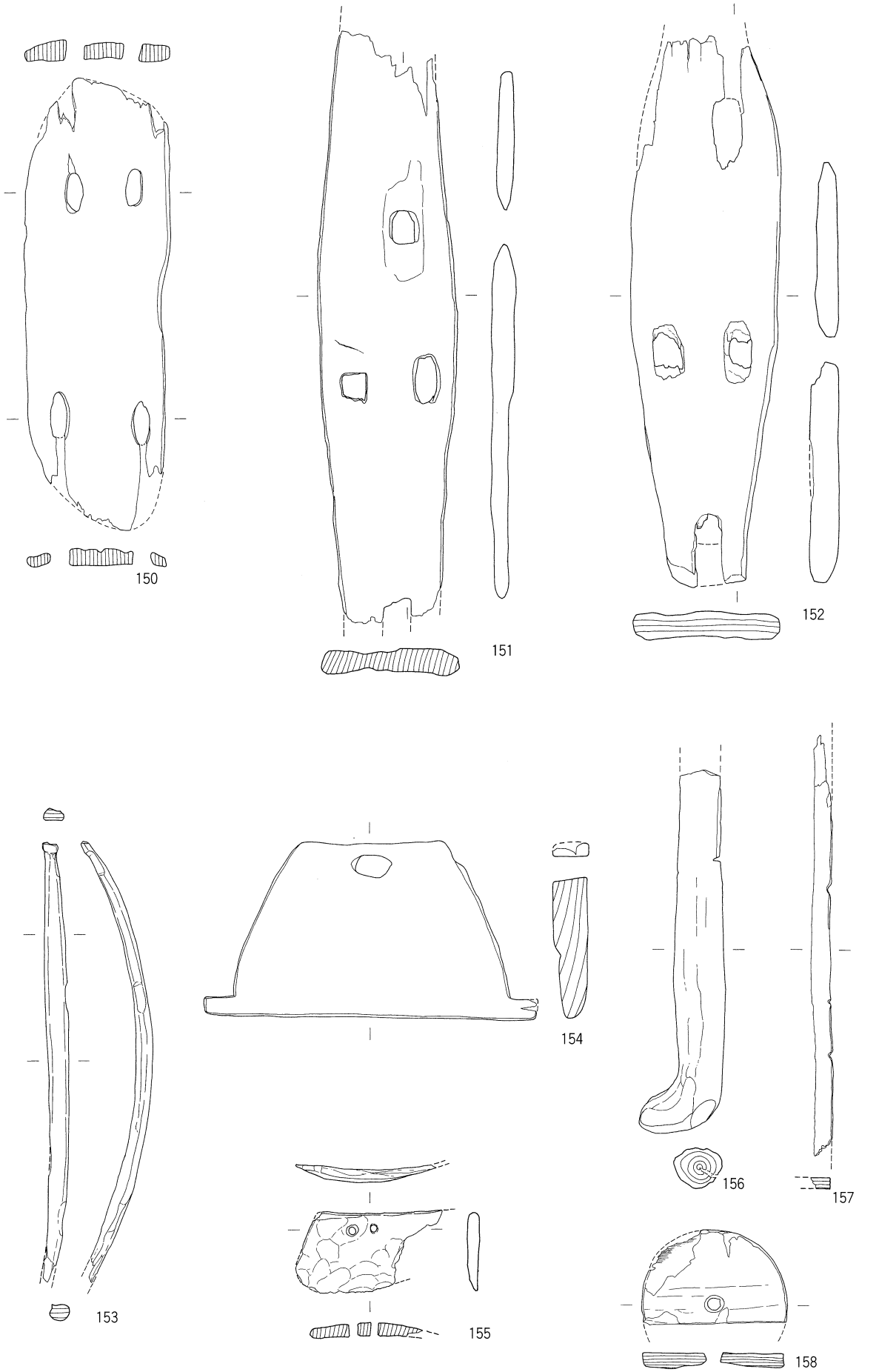
木製品(3)農具　S＝1／4



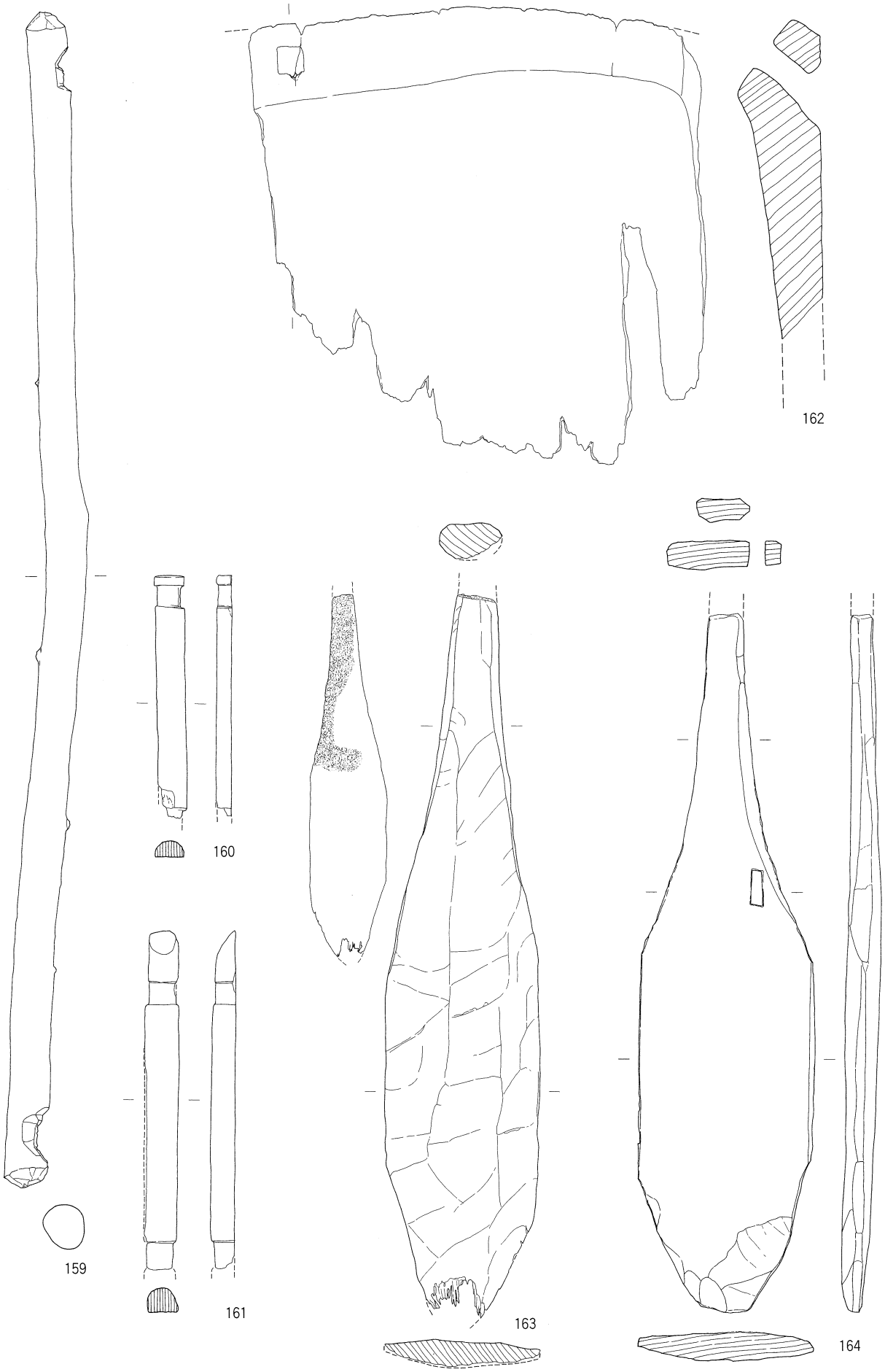
木製品(4)農具　S＝1／4



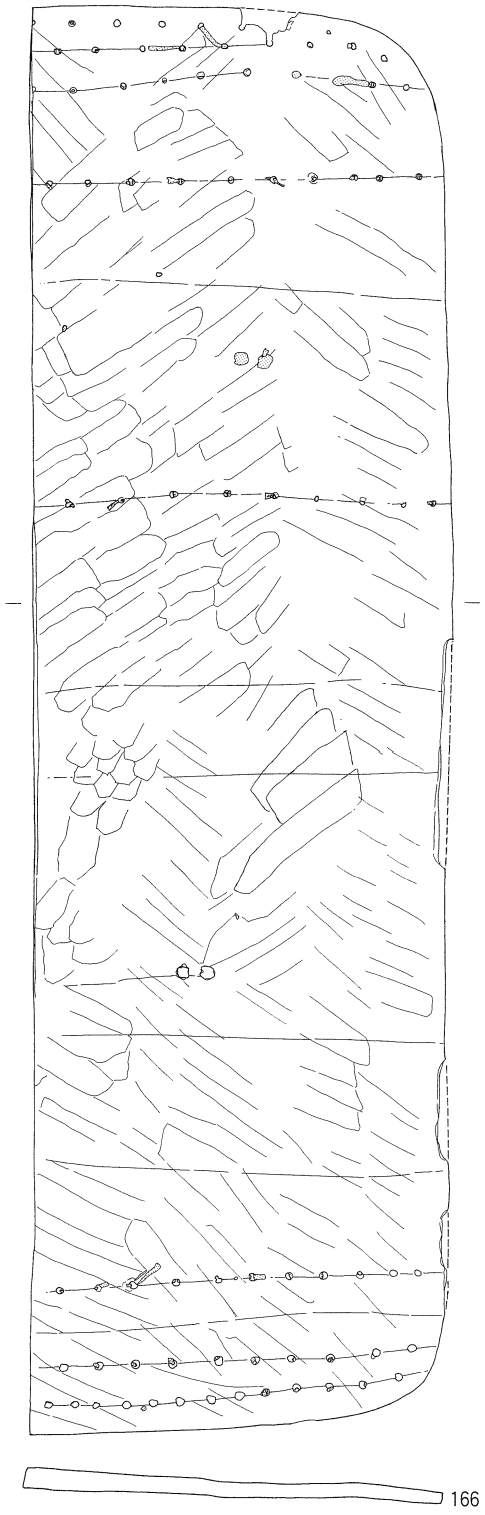
木製品(5)農具　S＝1／4

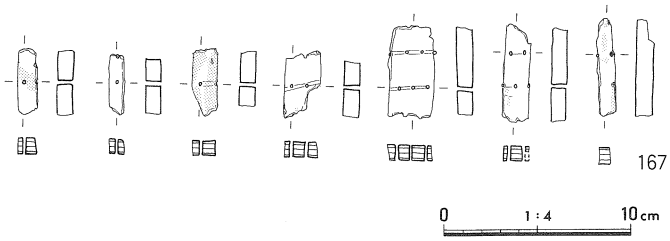


木製品(6)農具・紡織具　S＝1／4

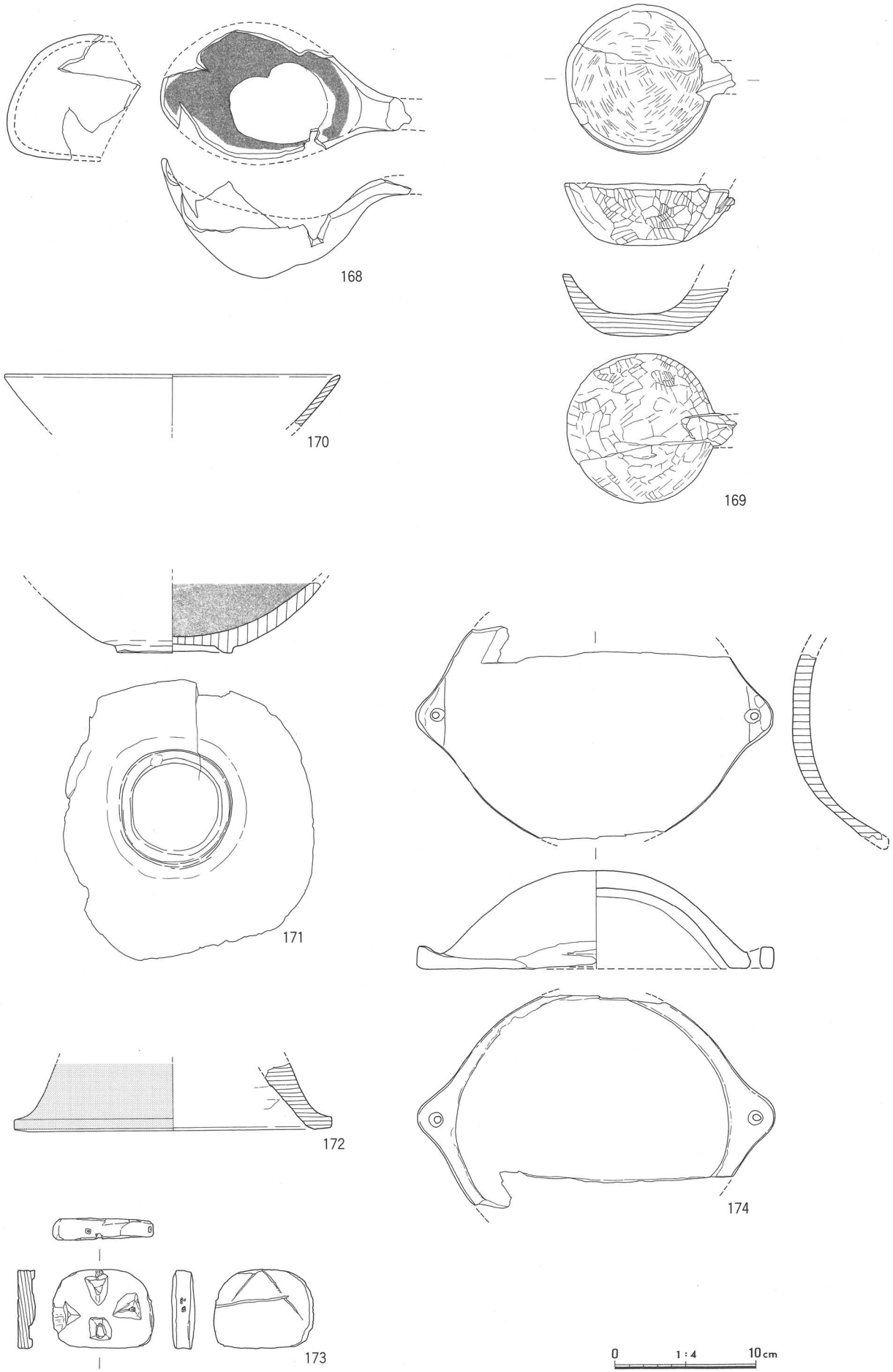


木製品(7)運搬具・漁撈具　S＝1／4

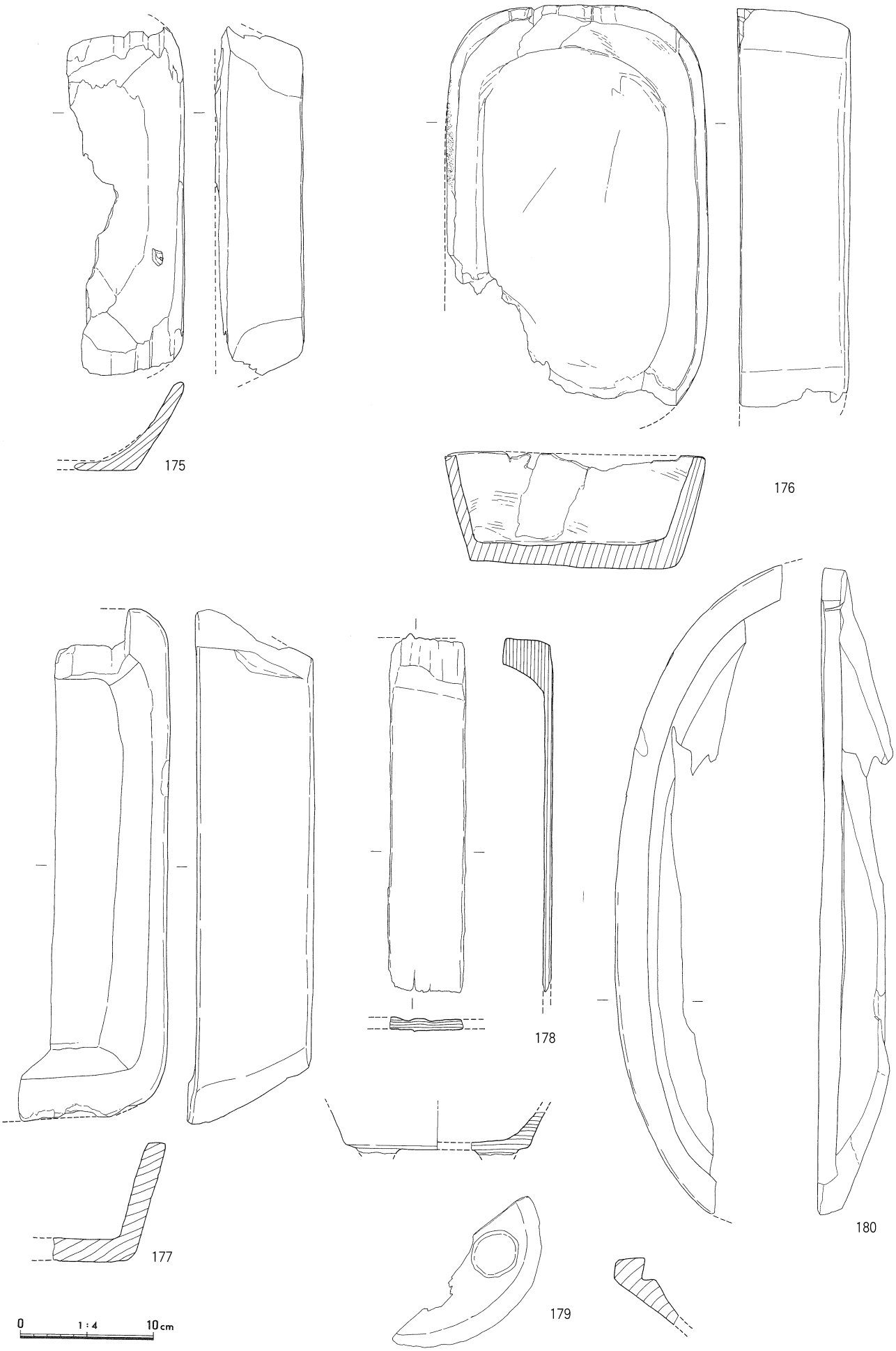




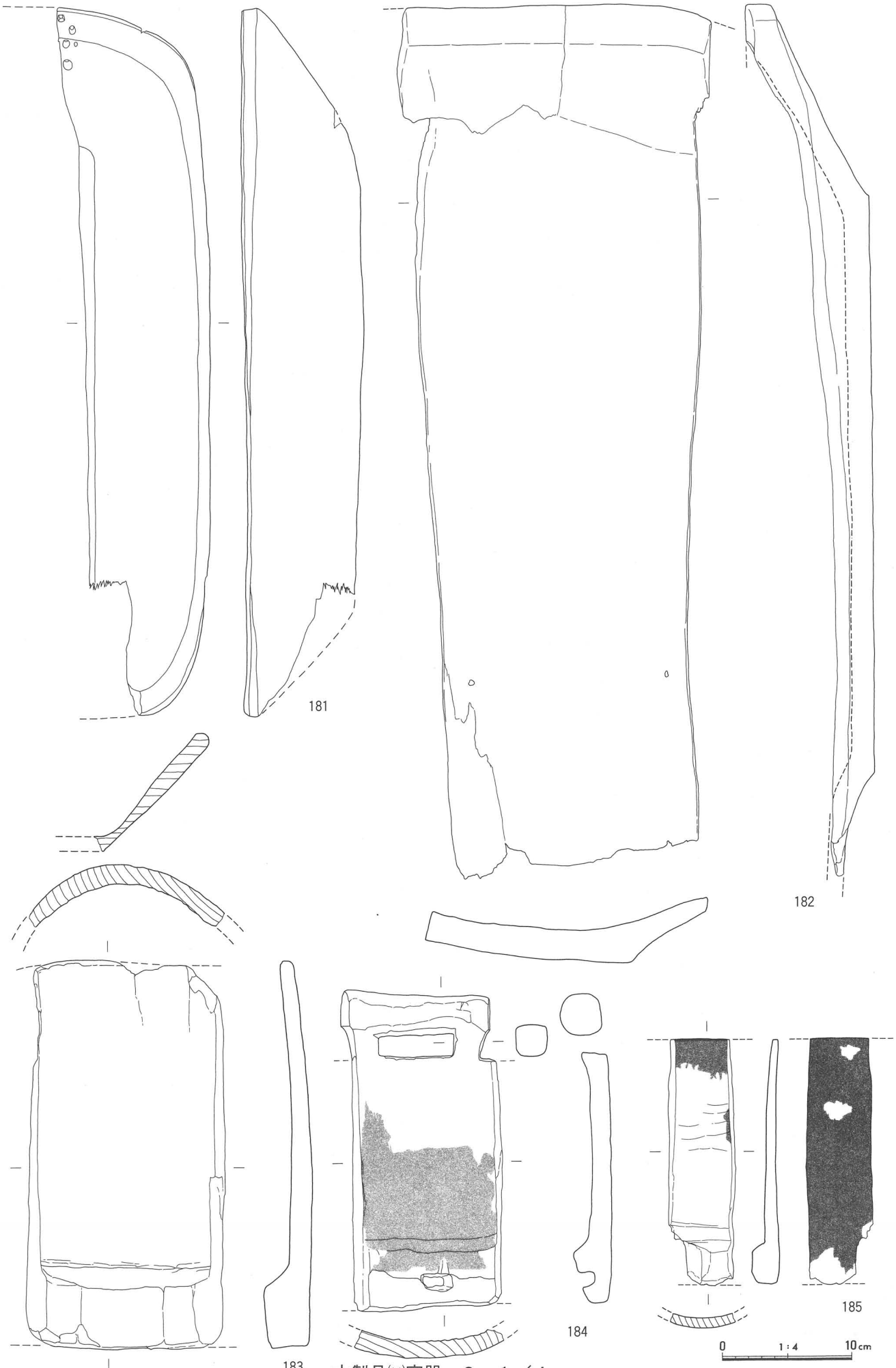
木製品(8)漁撈具・武器　S＝1／6、167はS＝1／4



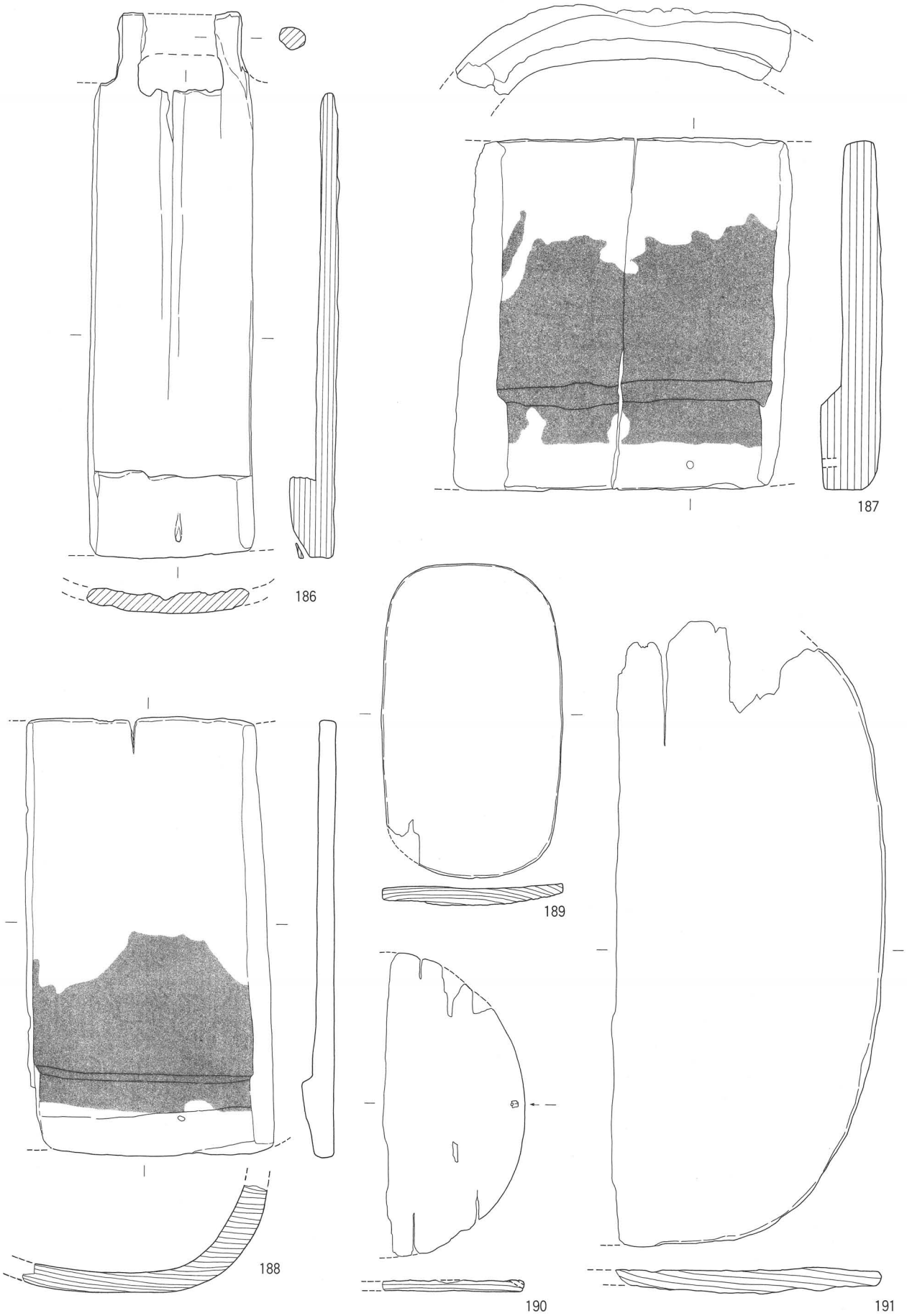
木製品(9)食事具・容器　S＝1／4



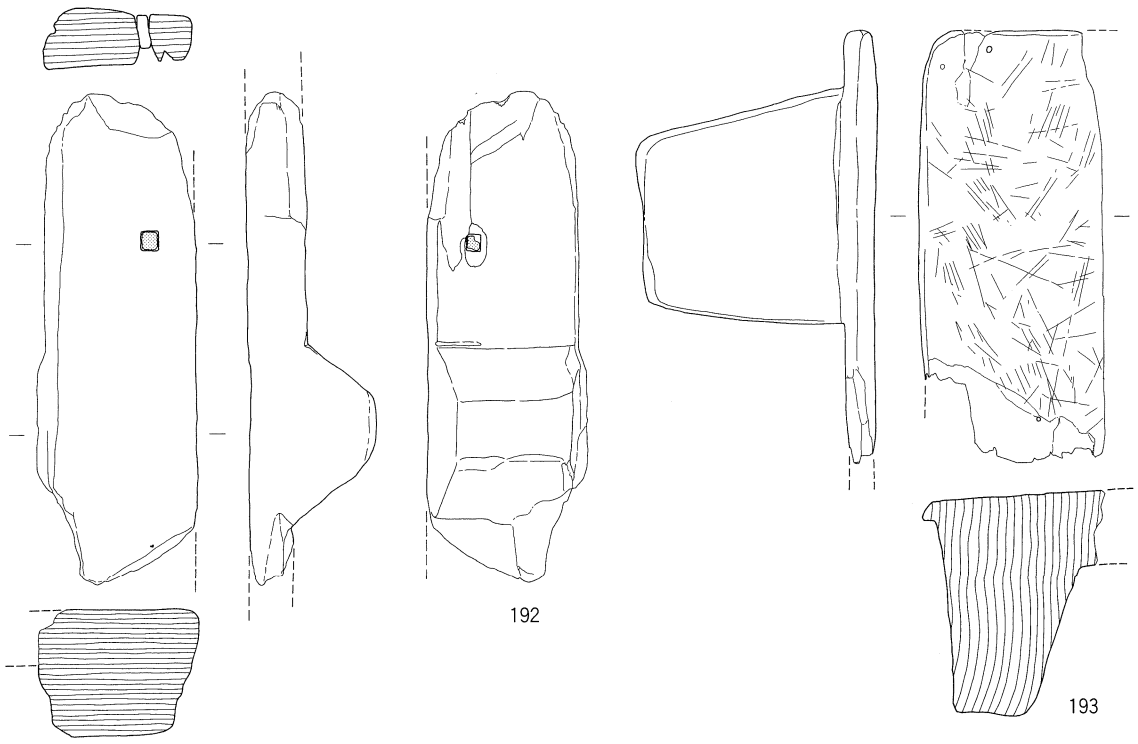
木製品(10)容器　S＝1／4

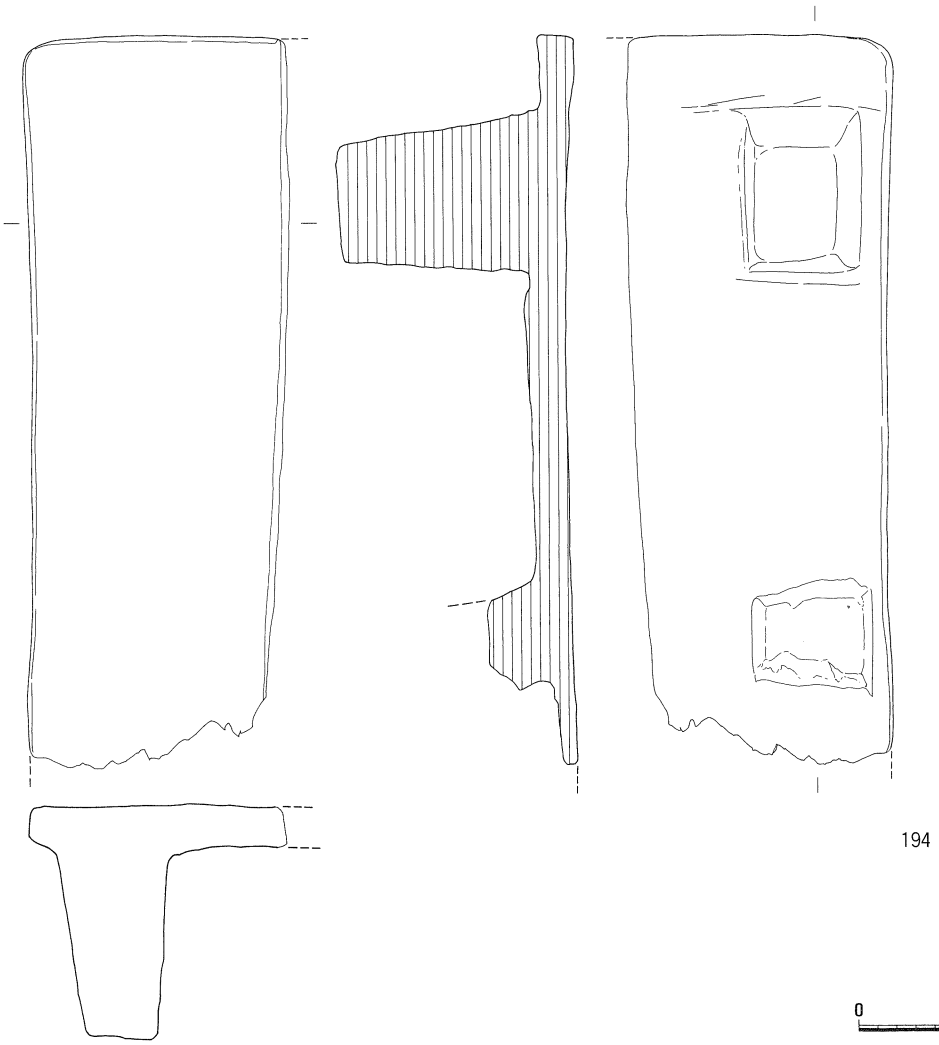


木製品(11)容器　S＝1／4

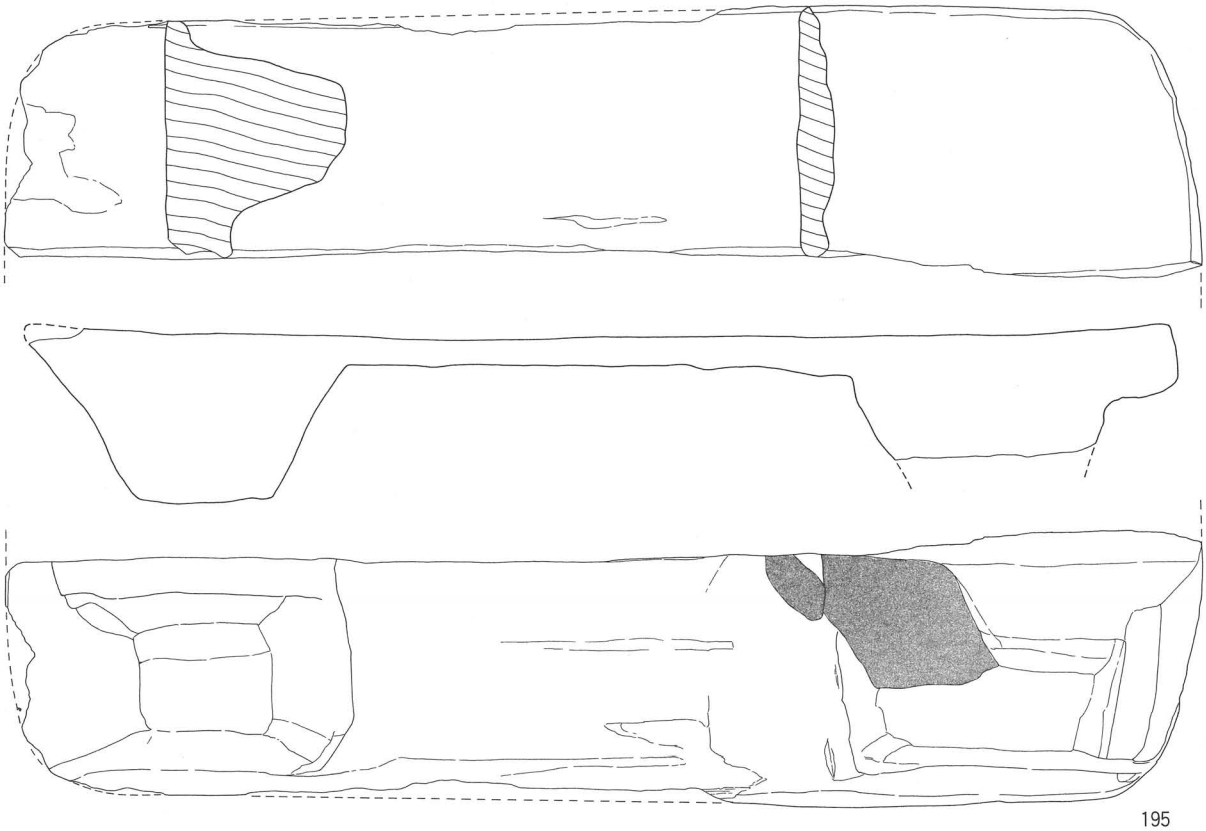


木製品⑫容器　S＝1／4

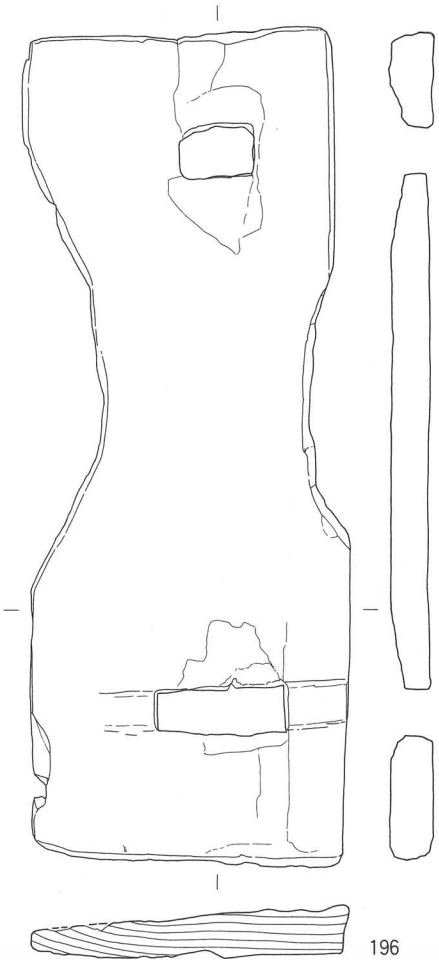




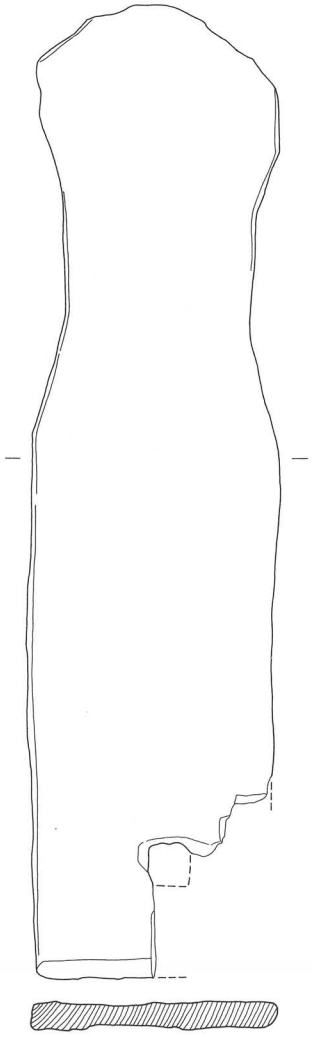
木製品(13)雑具　S＝1／4



195



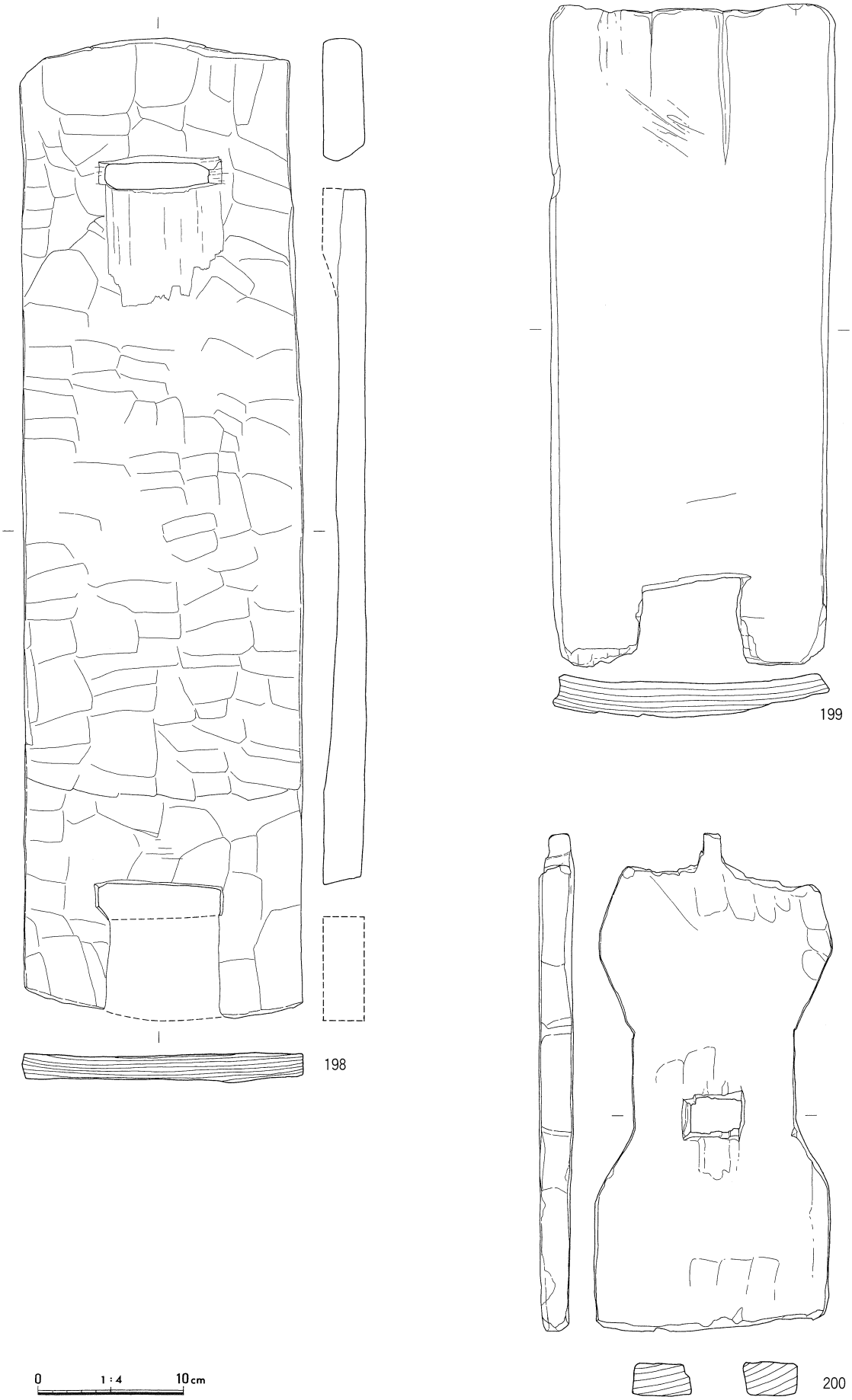
196



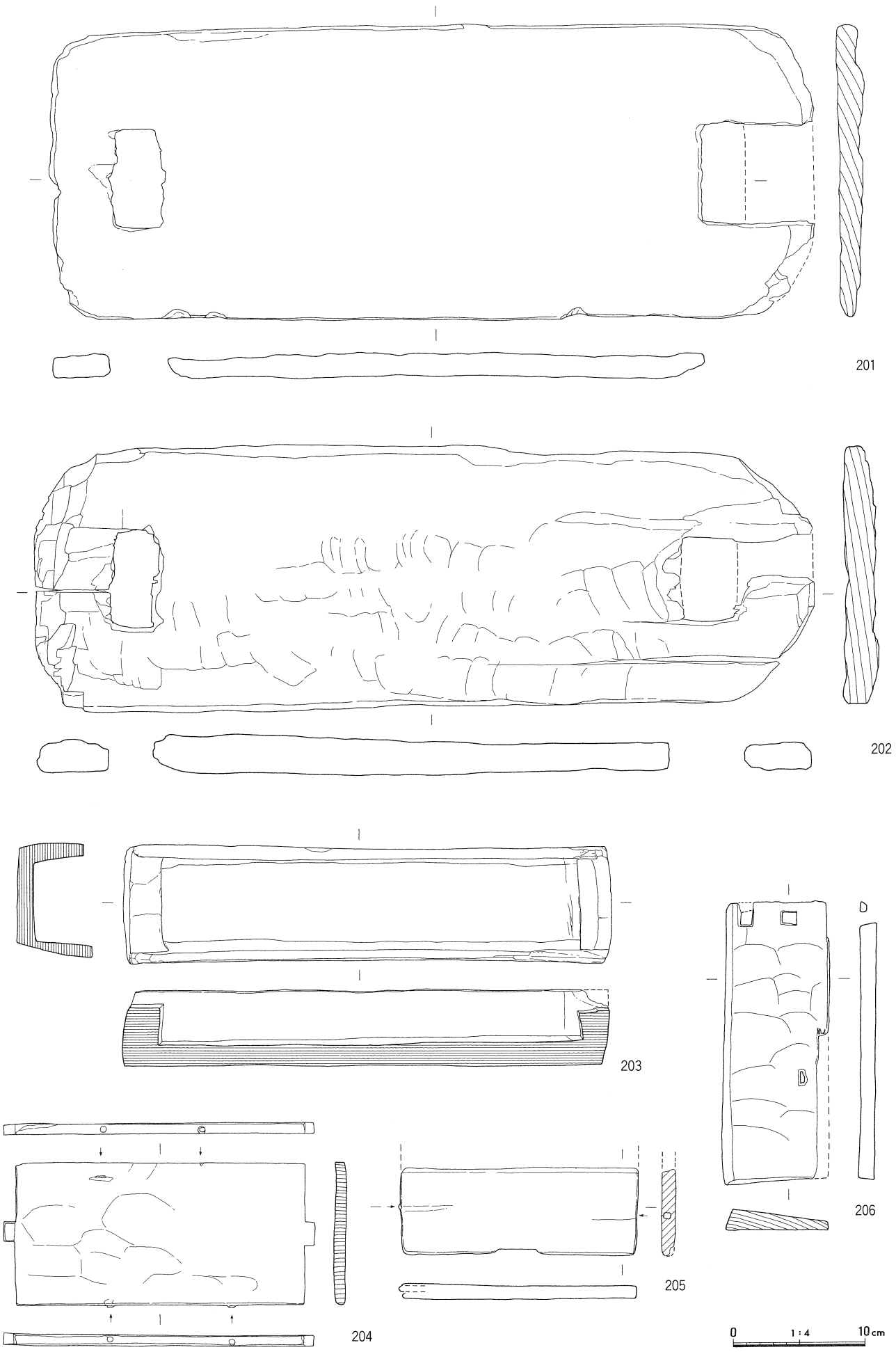
197

0　1：4　10cm

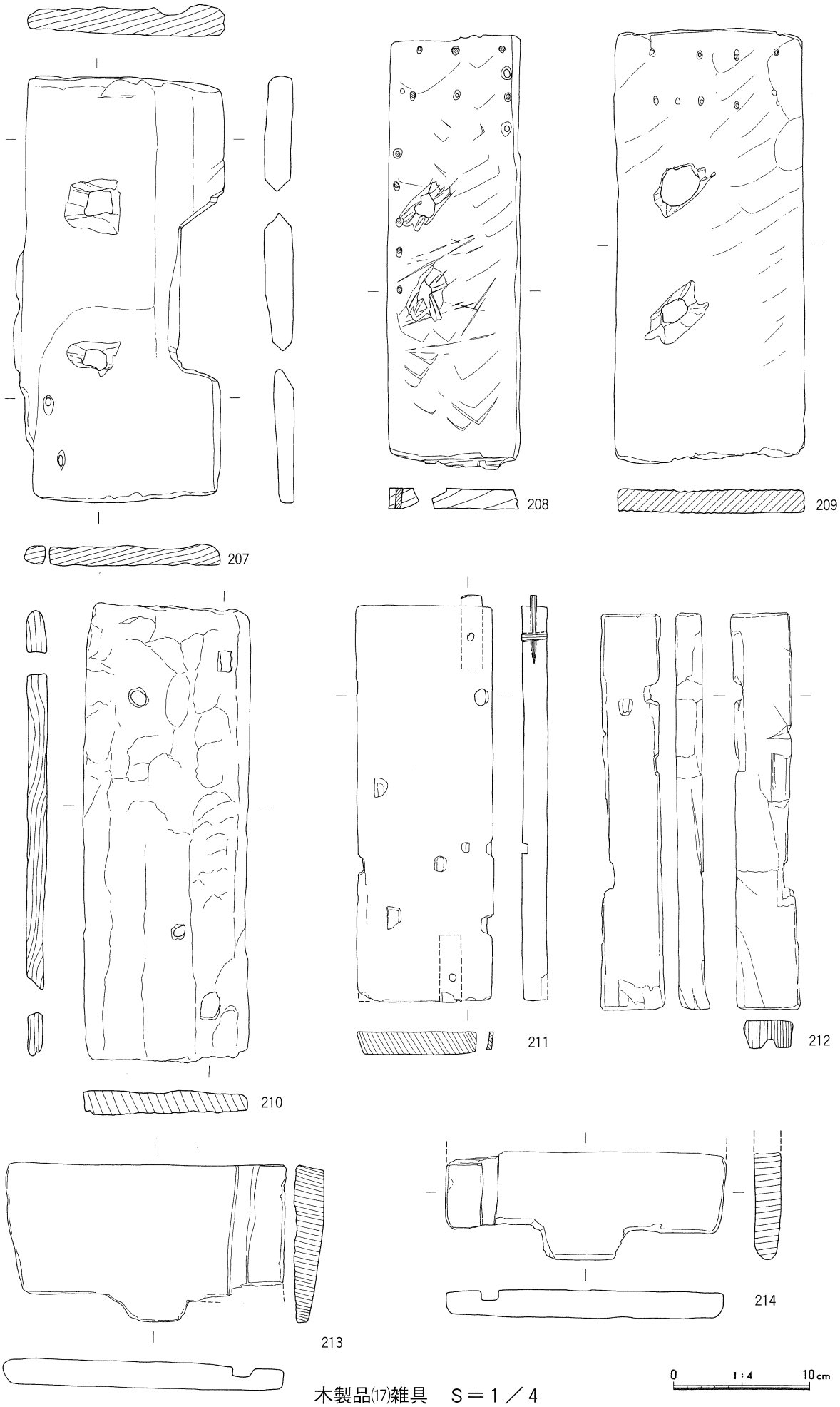
木製品⑭雑具　S＝1／4



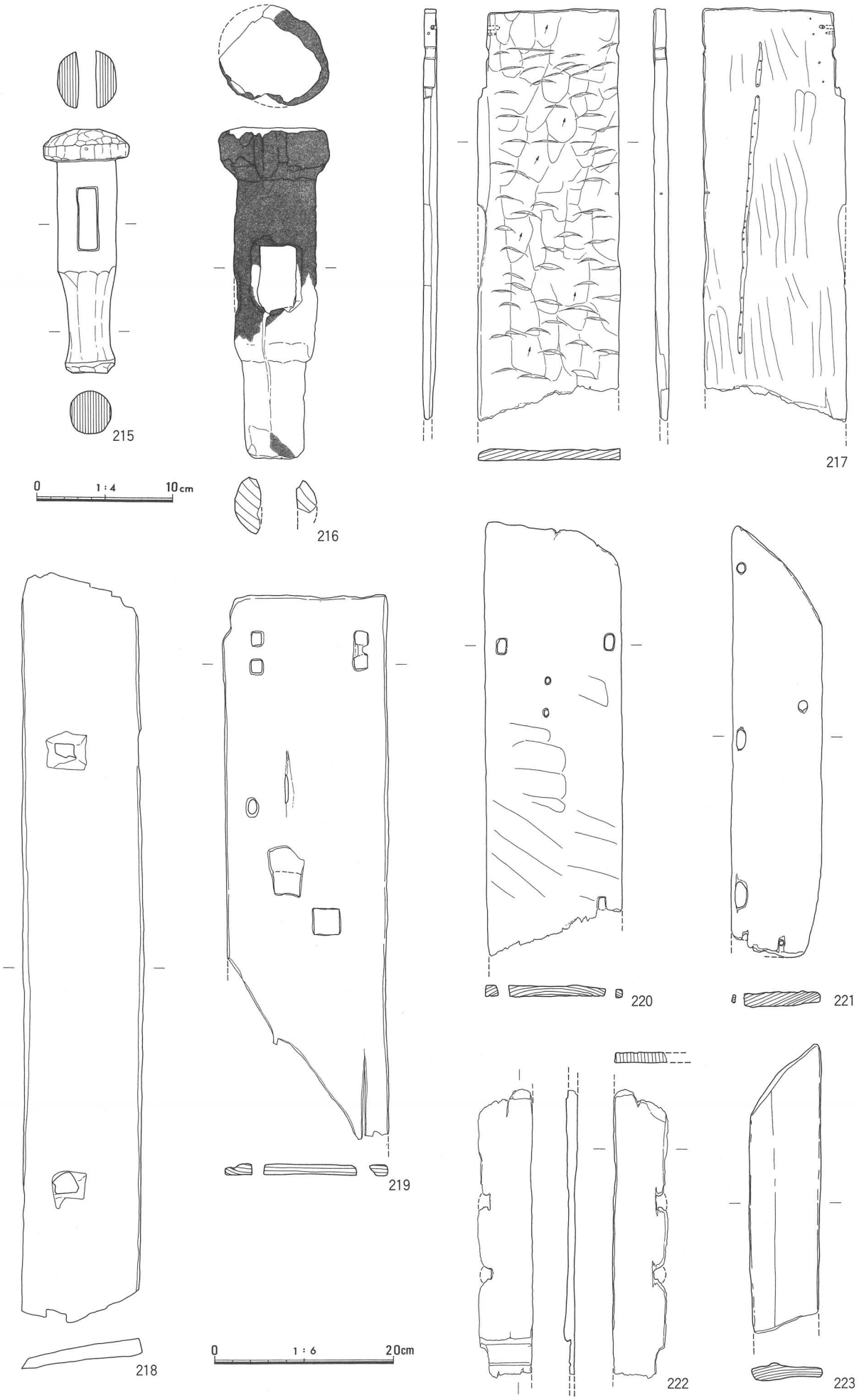
木製品(15)雑具　S＝1／4



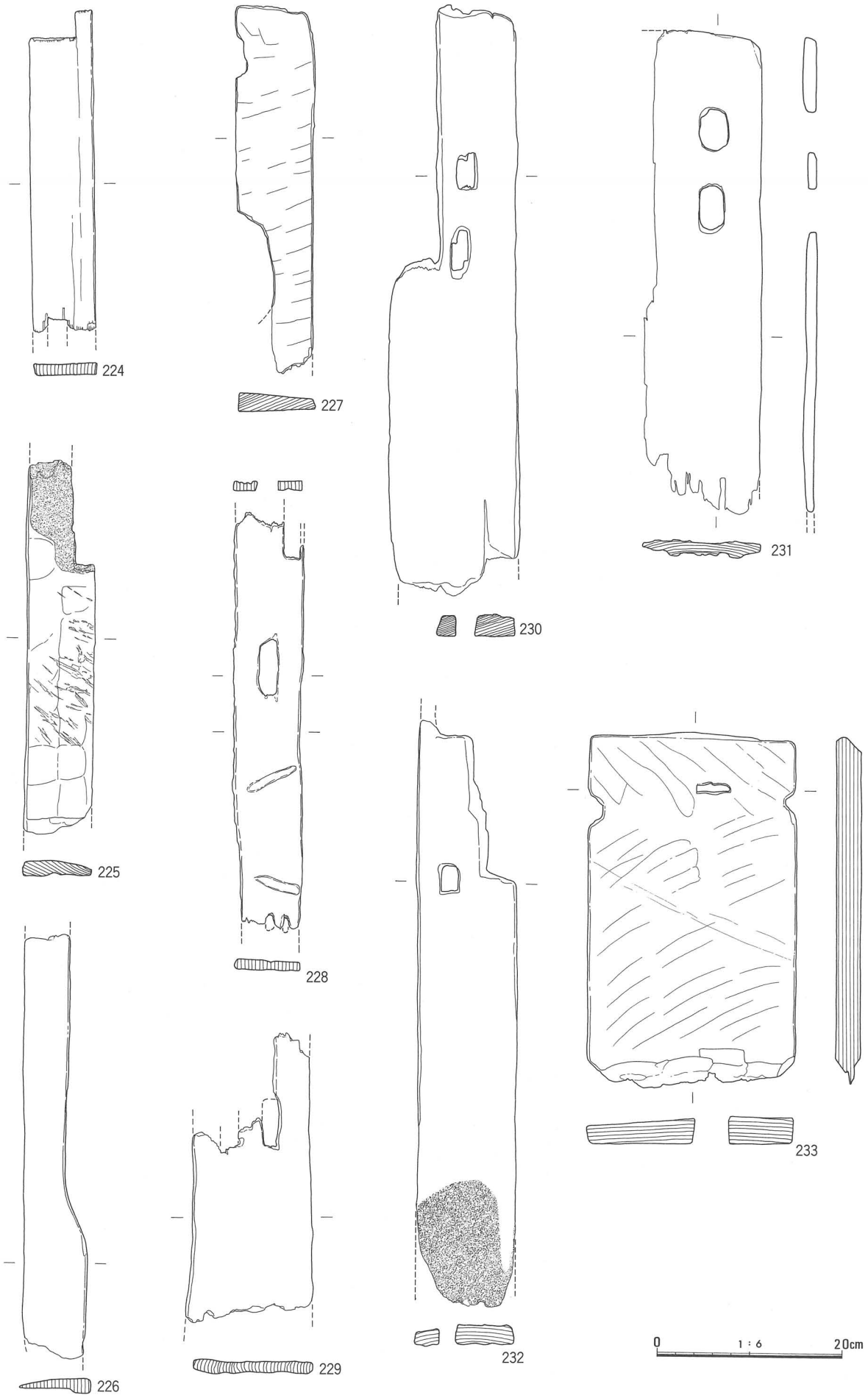
木製品⑯雑具　S＝1／4



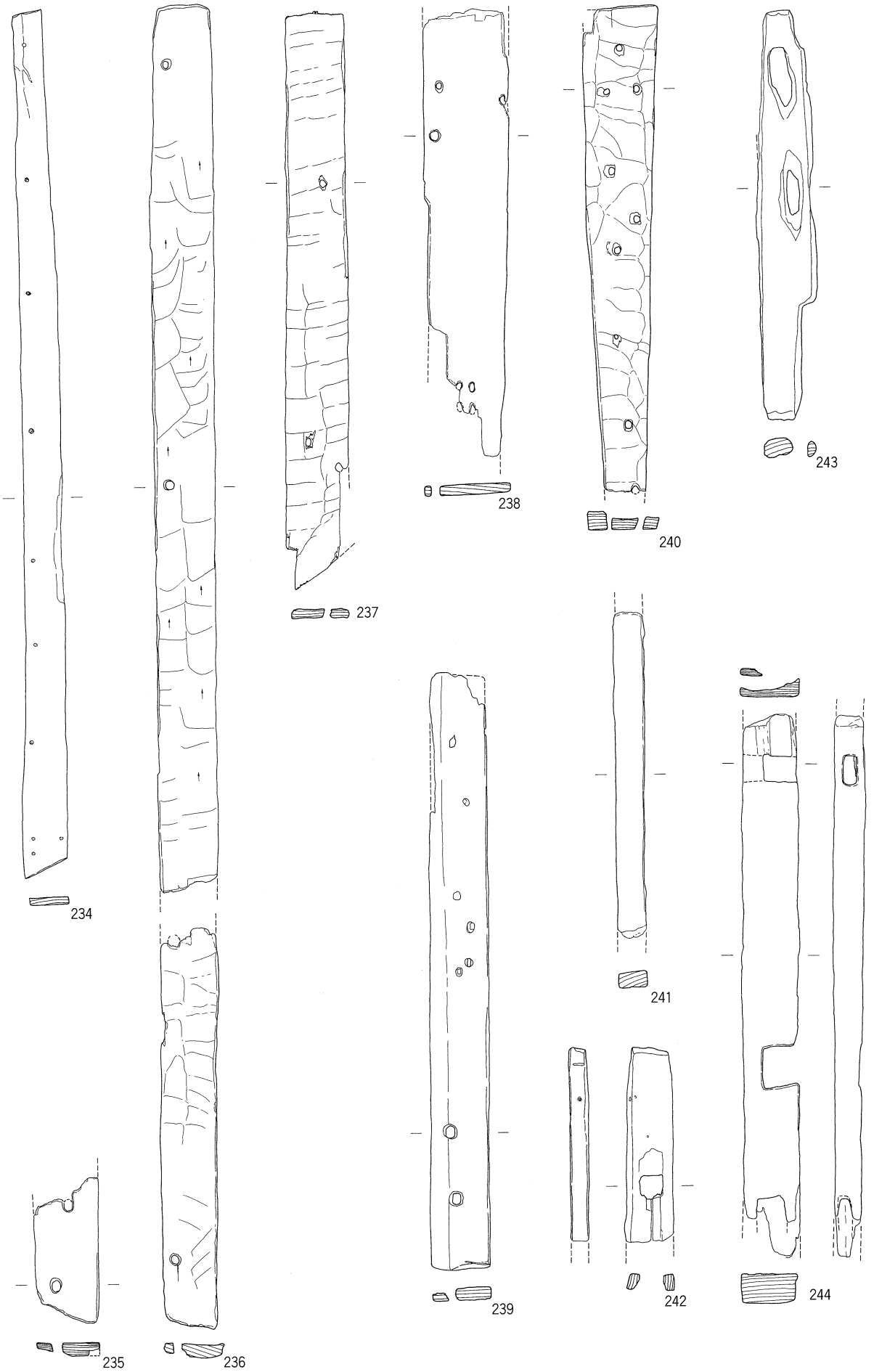
木製品(17)雑具　S＝1／4



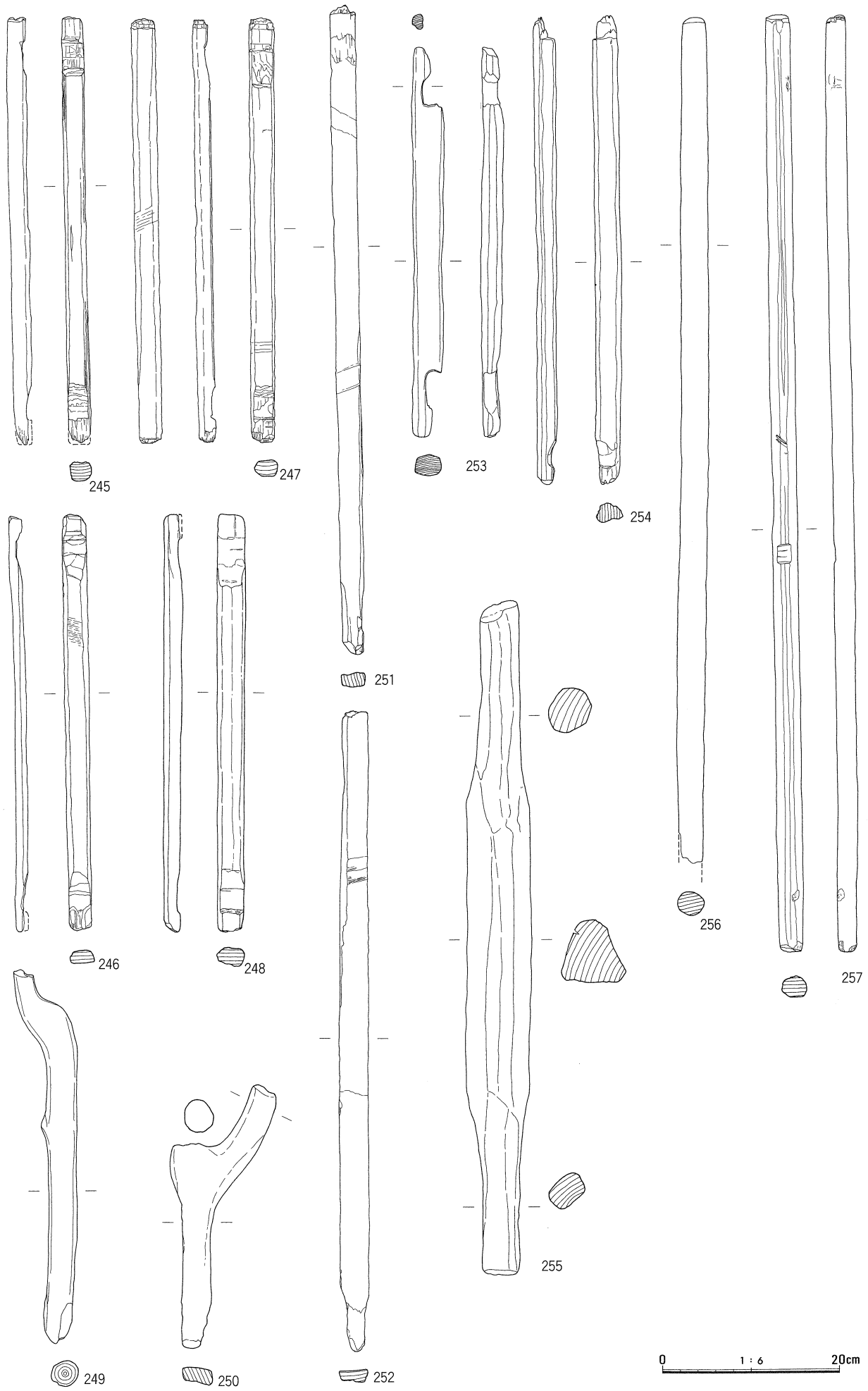
木製品(18)雑具部材　S＝1／6、215・216はS＝1／4



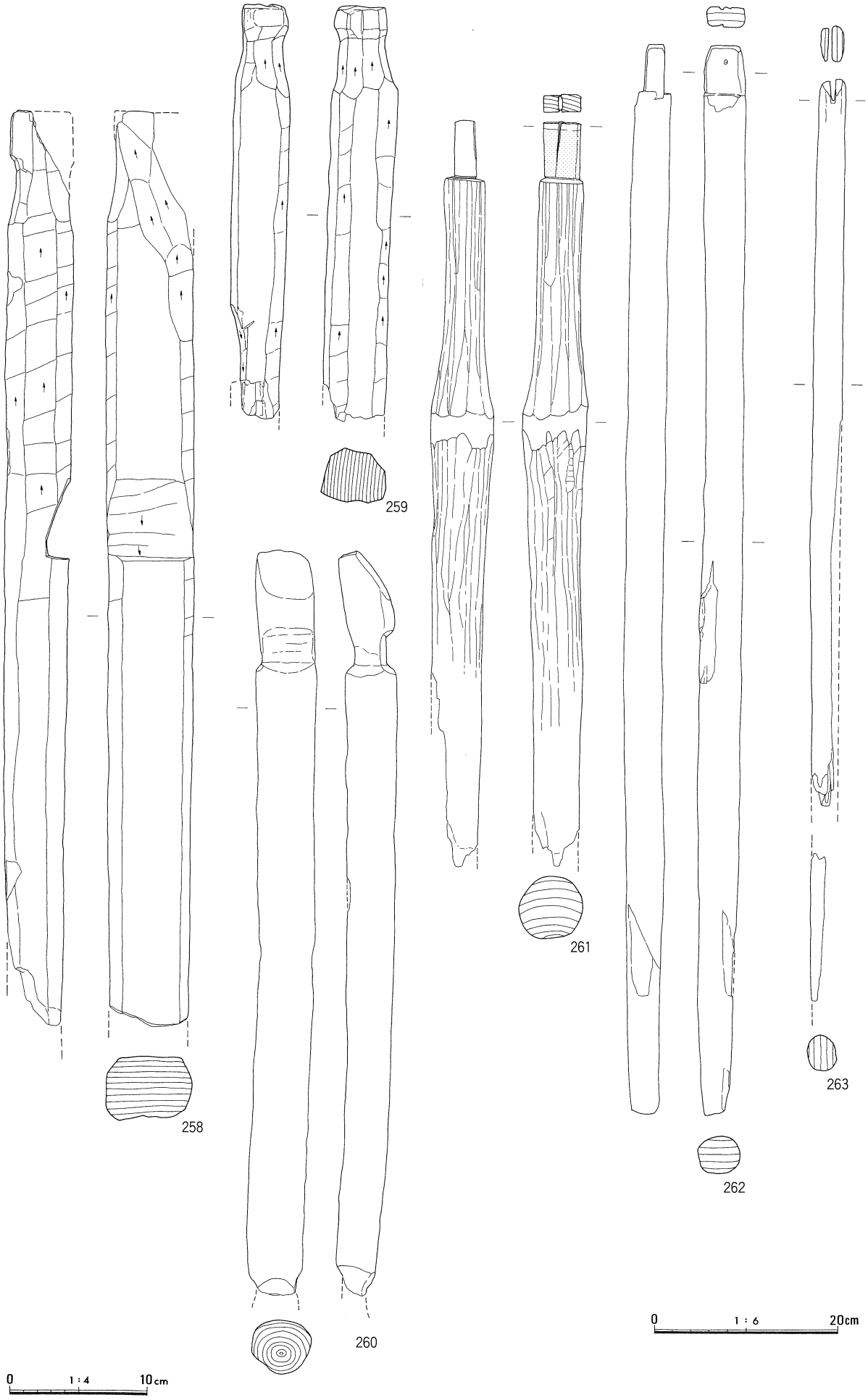
木製品⑲雑具部材　S＝1／6



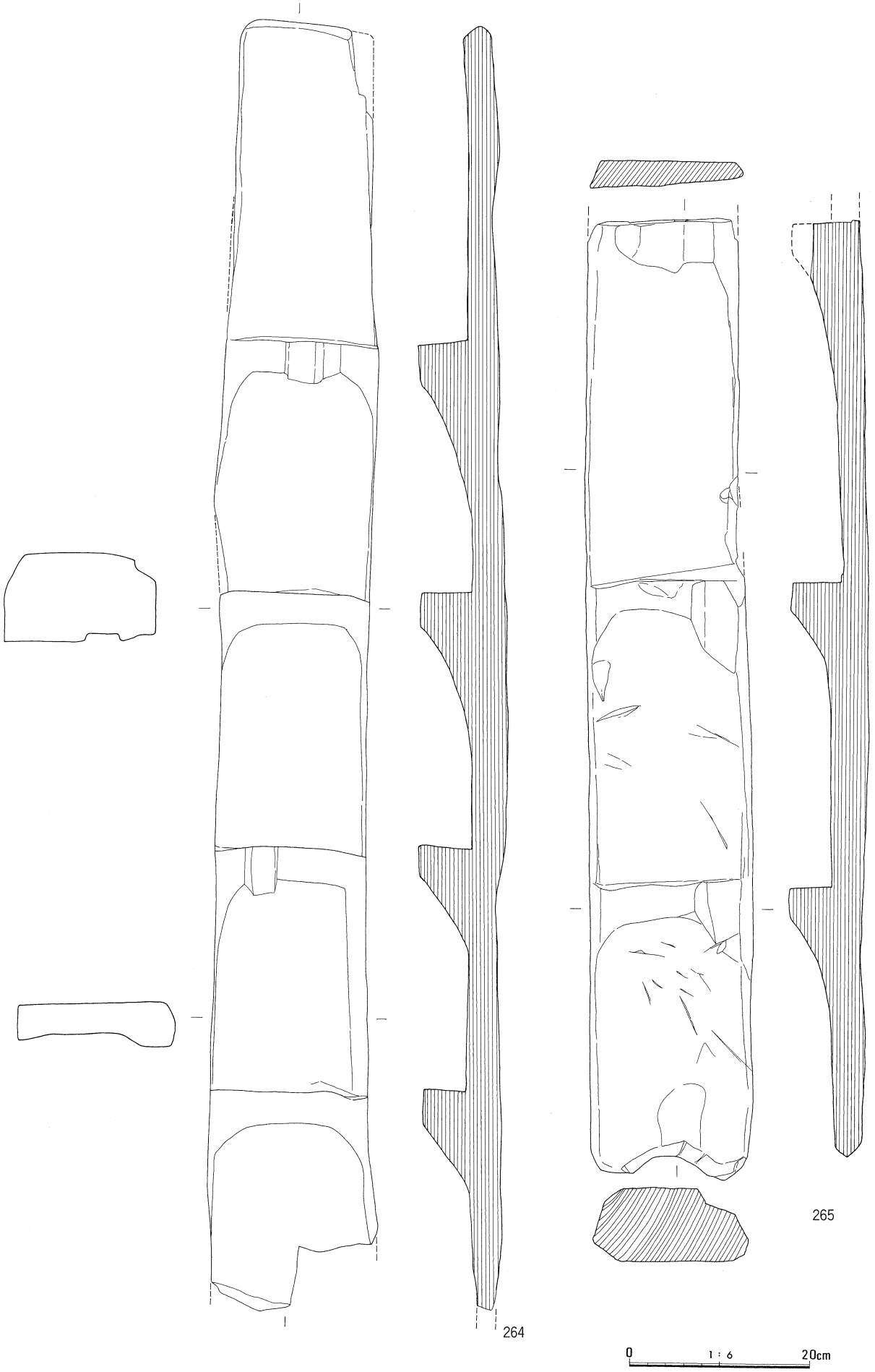
木製品⑳雑具部材　S＝1／6



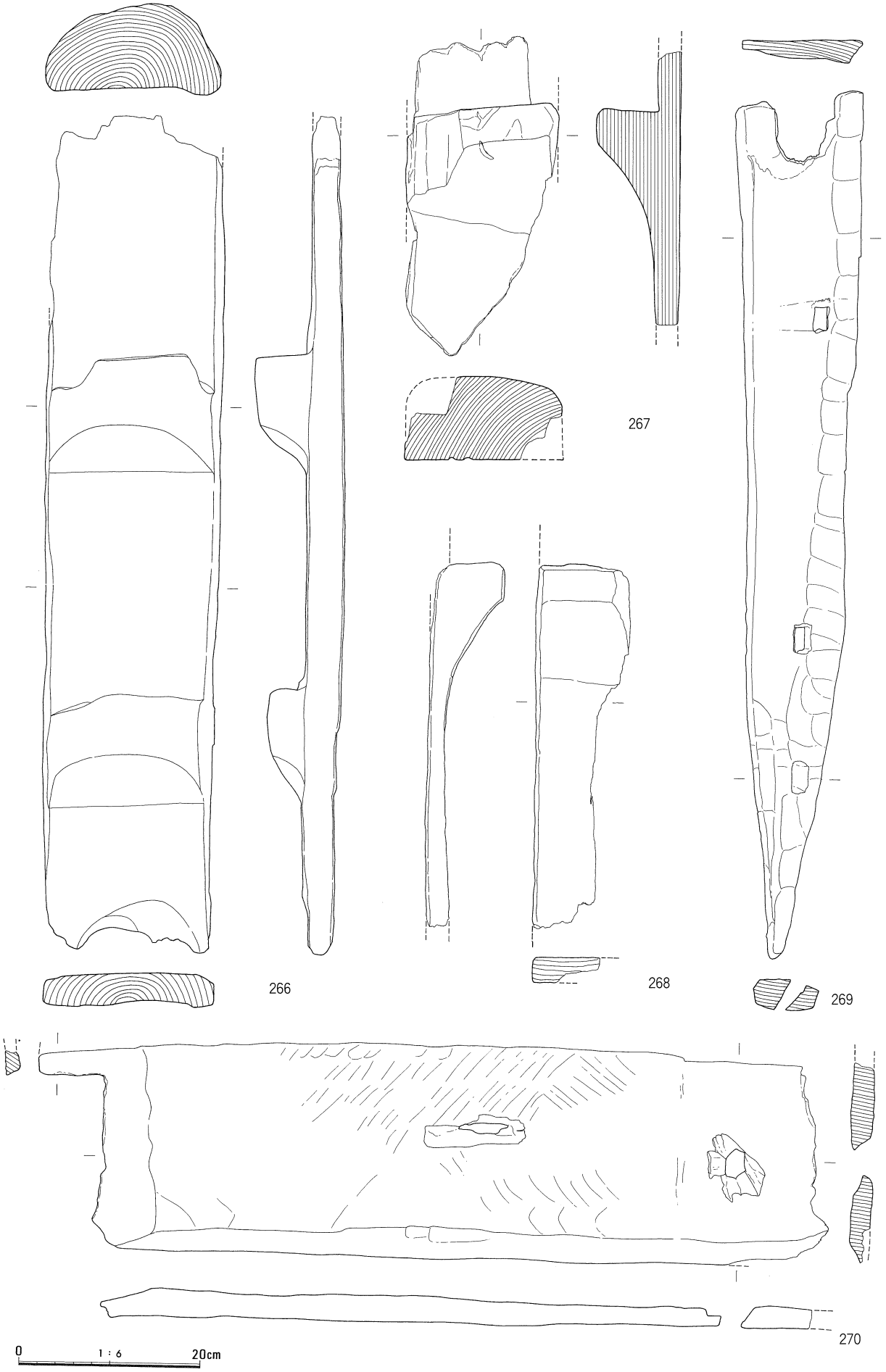
木製品(21)雑具部材　S＝1／6



木製品㉒雑具部材　S＝1／4、263はS＝1／6

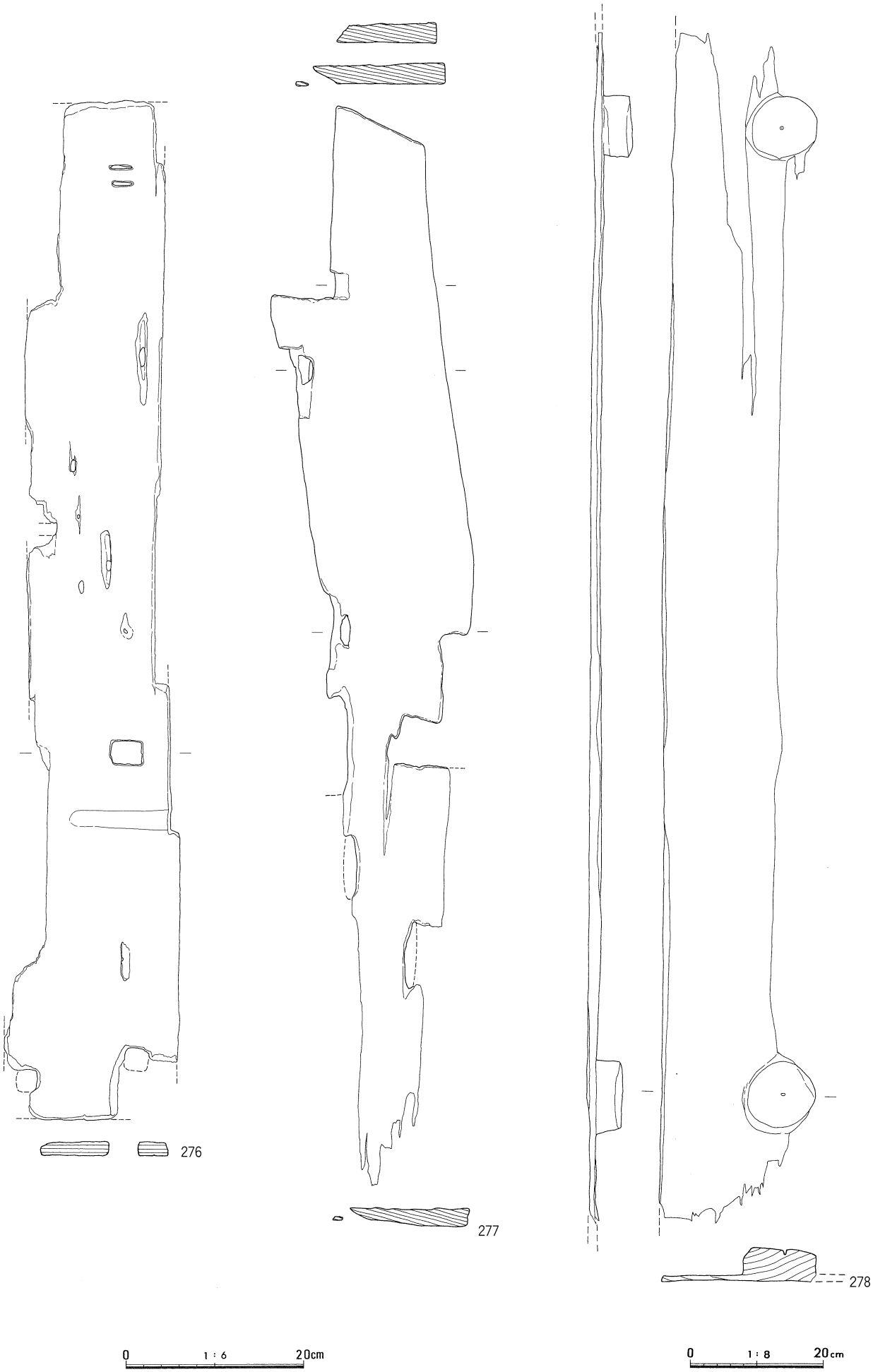


木製品(23)建築部材　S＝1／6

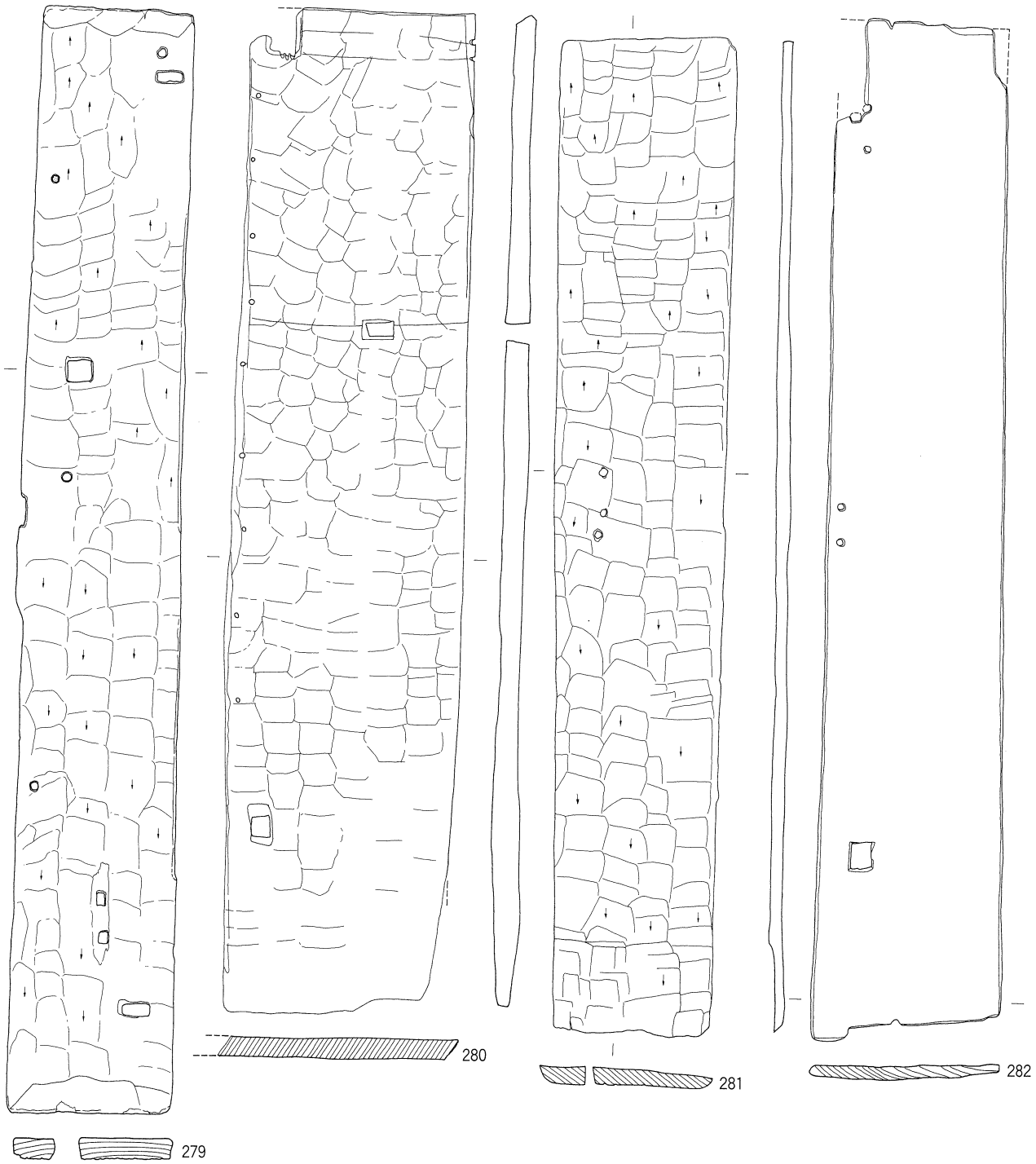


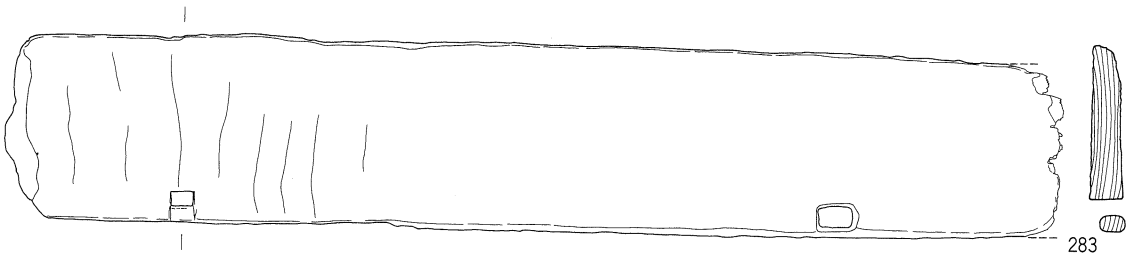
木製品(24)建築部材　S＝1／6

木製品㉕建築部材　S＝1／6、273・274はS＝1／10



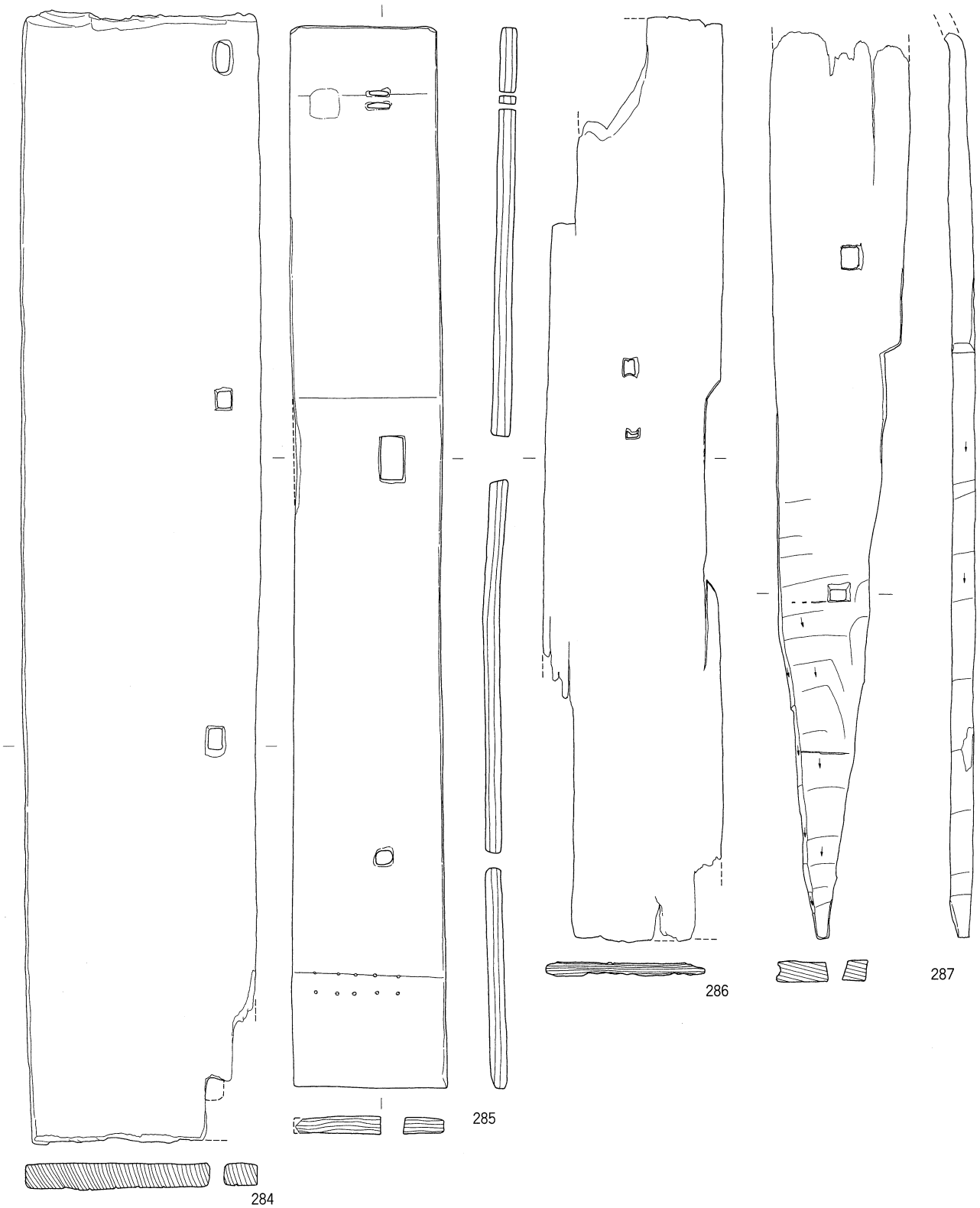
木製品㉖建築部材　S＝1／6、278はS＝1／8

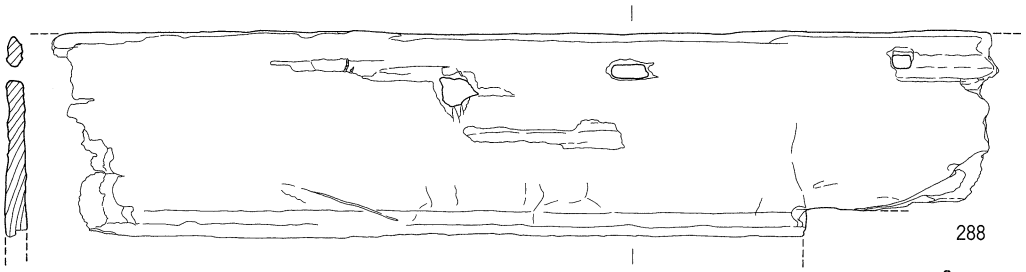




木製品(27)建築部材　S＝1／6

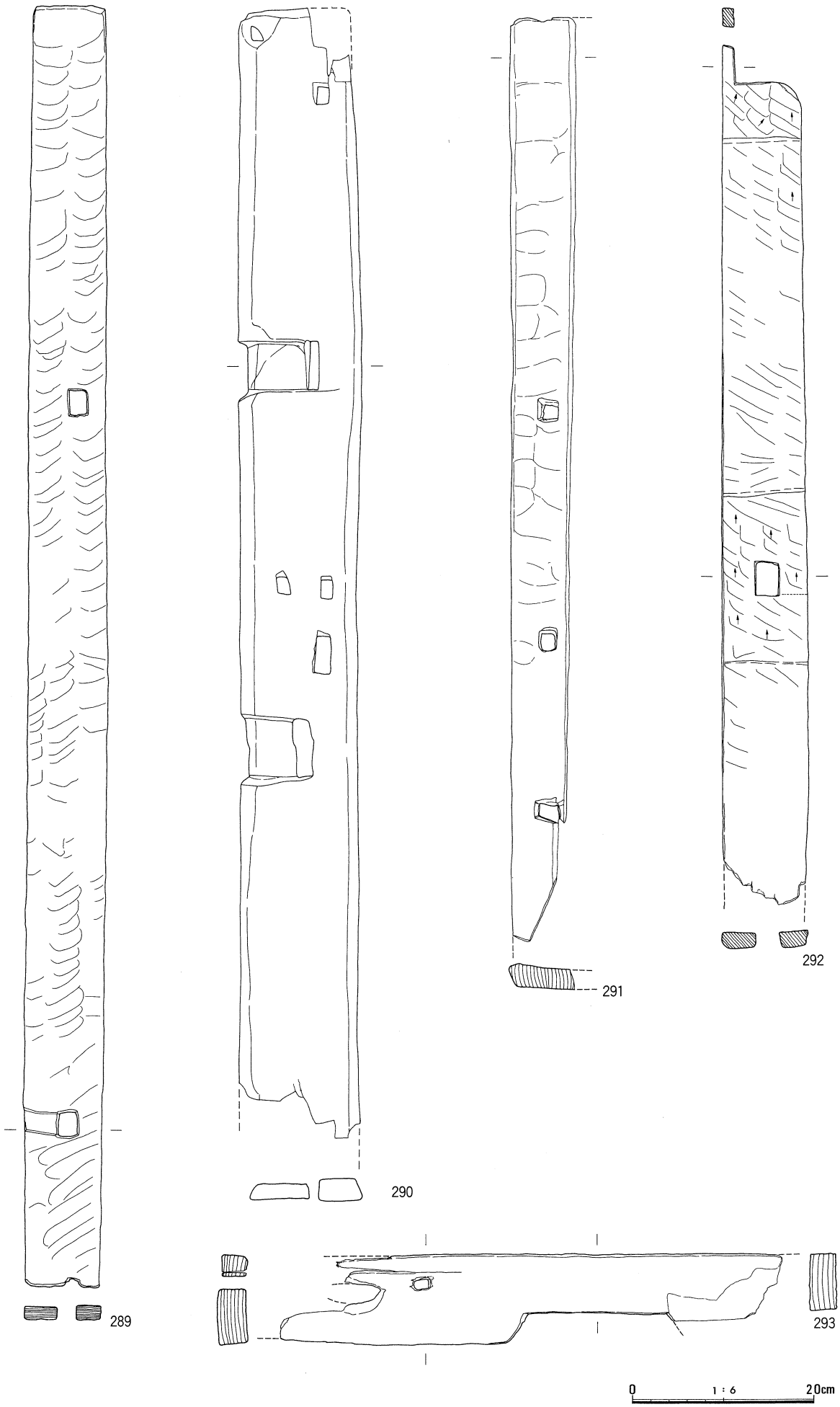
0　1：6　20cm



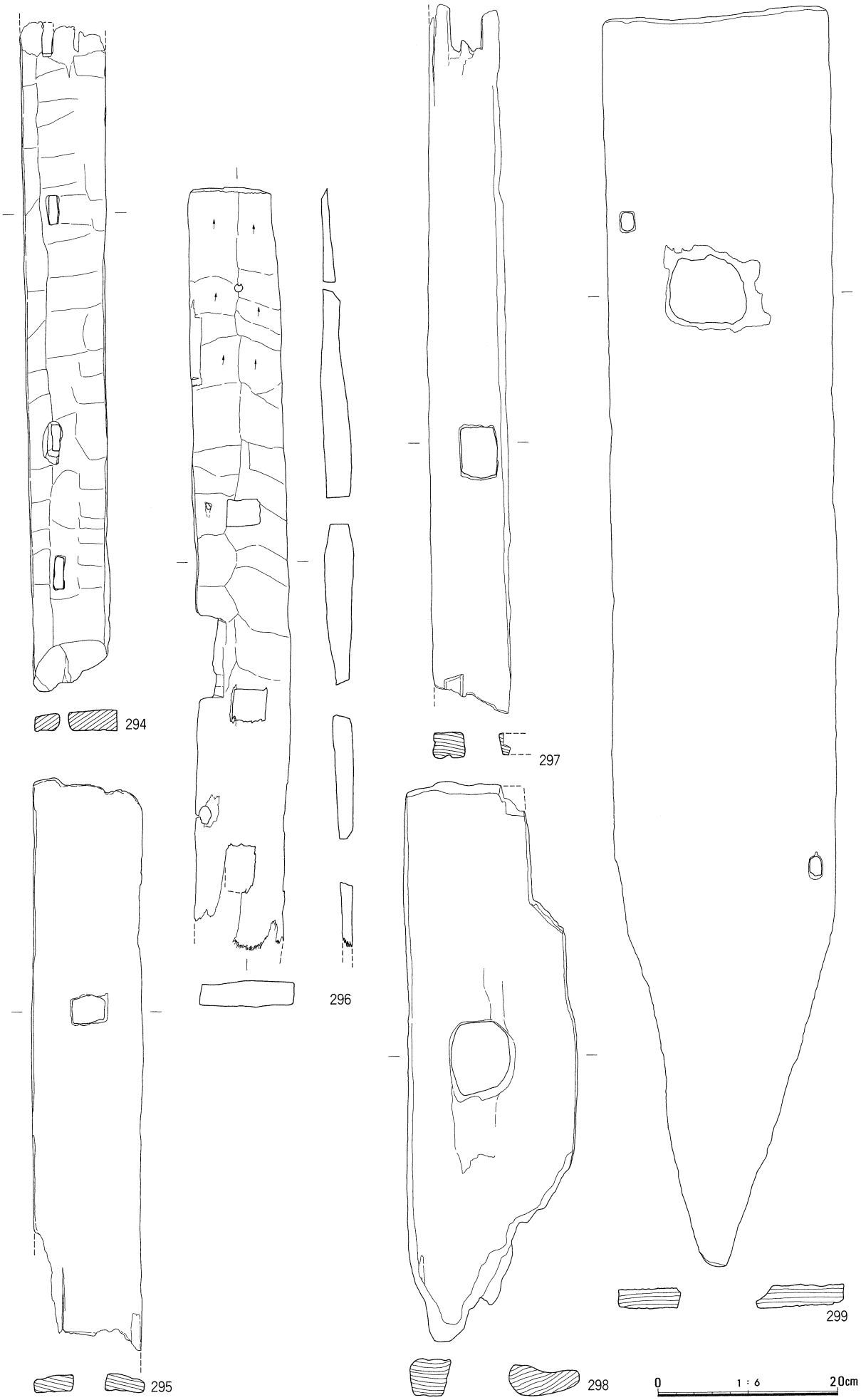


0　1：6　20cm

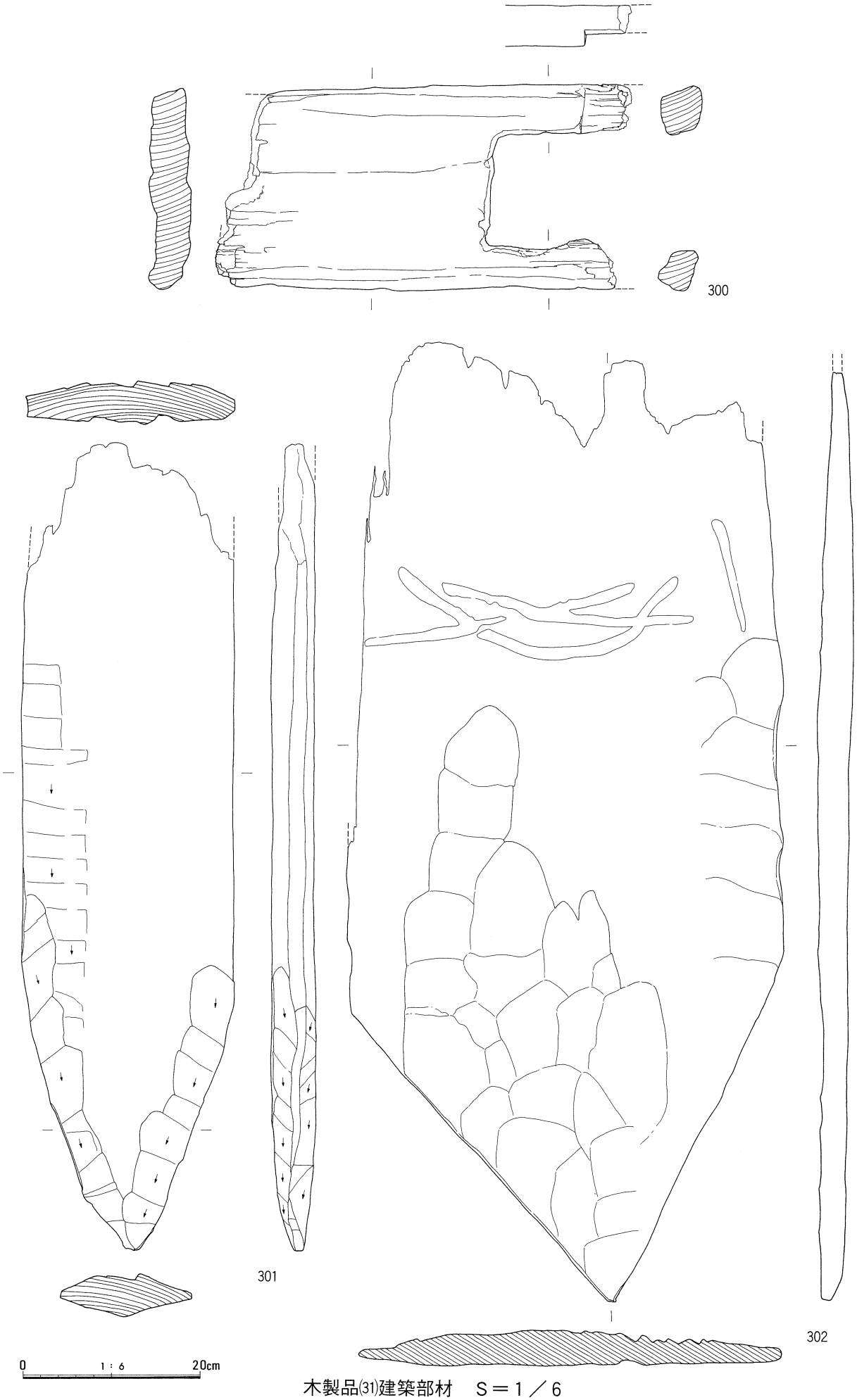
木製品(28)建築部材　S＝1／6



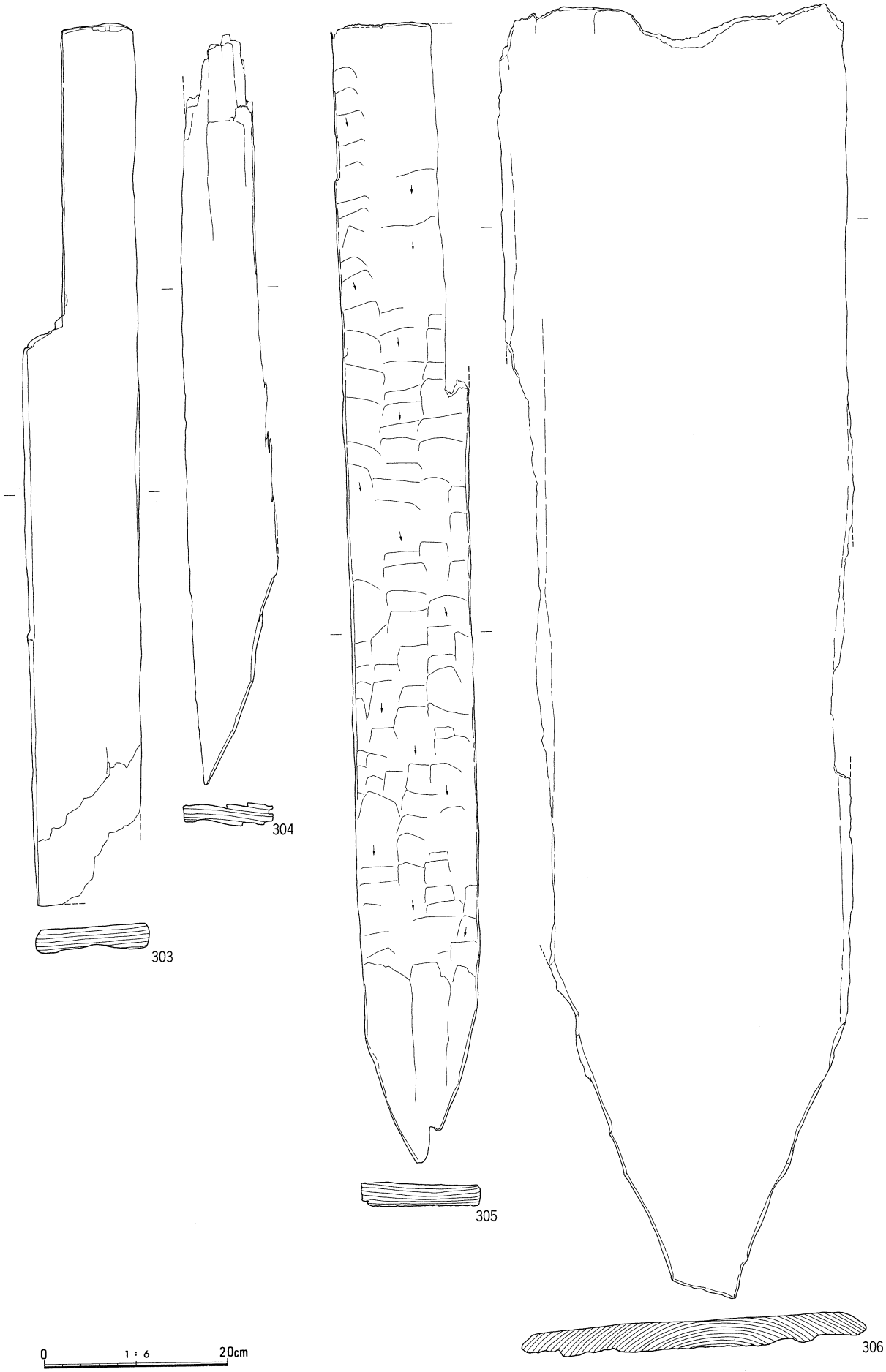
木製品(29)建築部材　S＝1／6



木製品(30)建築部材　S＝1／6

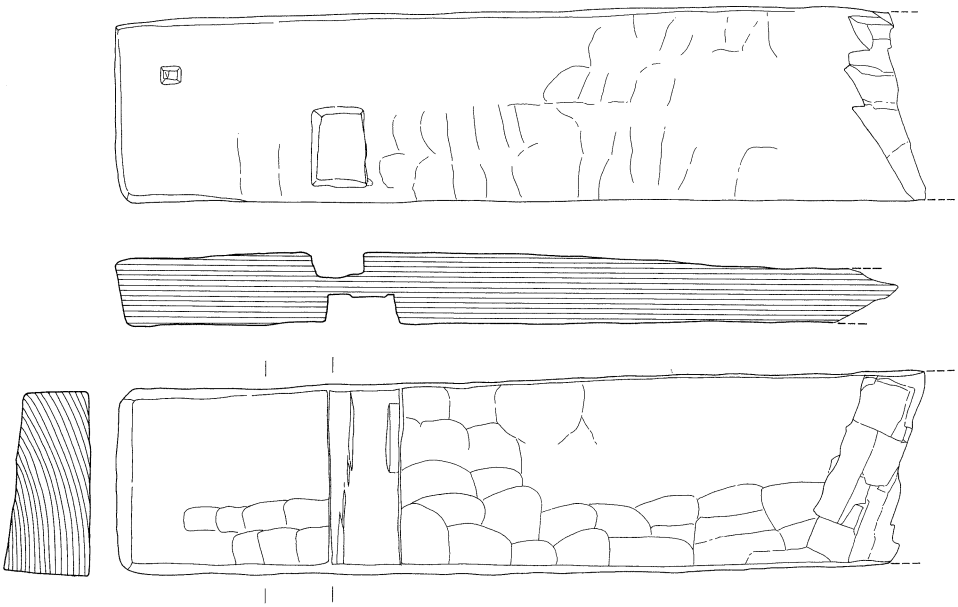


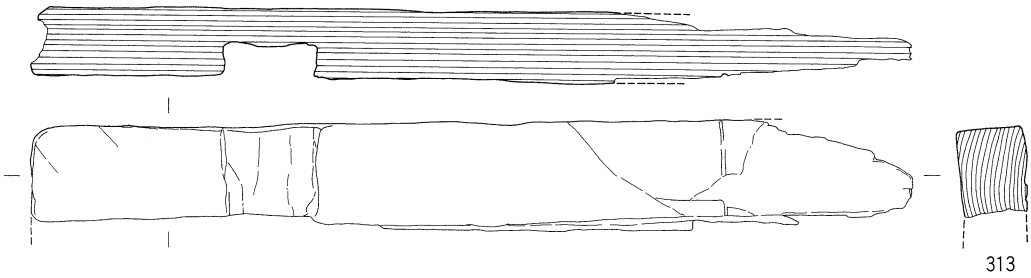
木製品(31)建築部材　S＝1／6

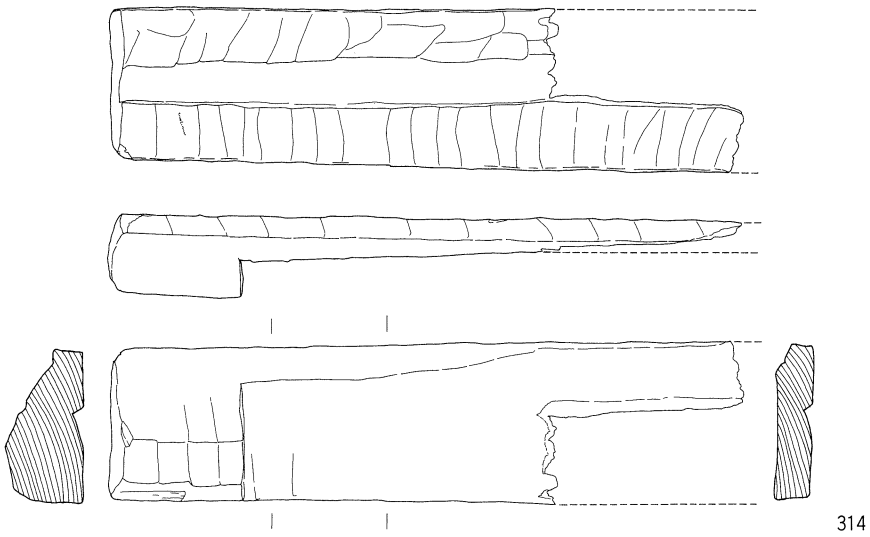


木製品(32)建築部材　S＝1／6

木製品(33)建築部材　307・308はS＝1／8、309～311はS＝1／10

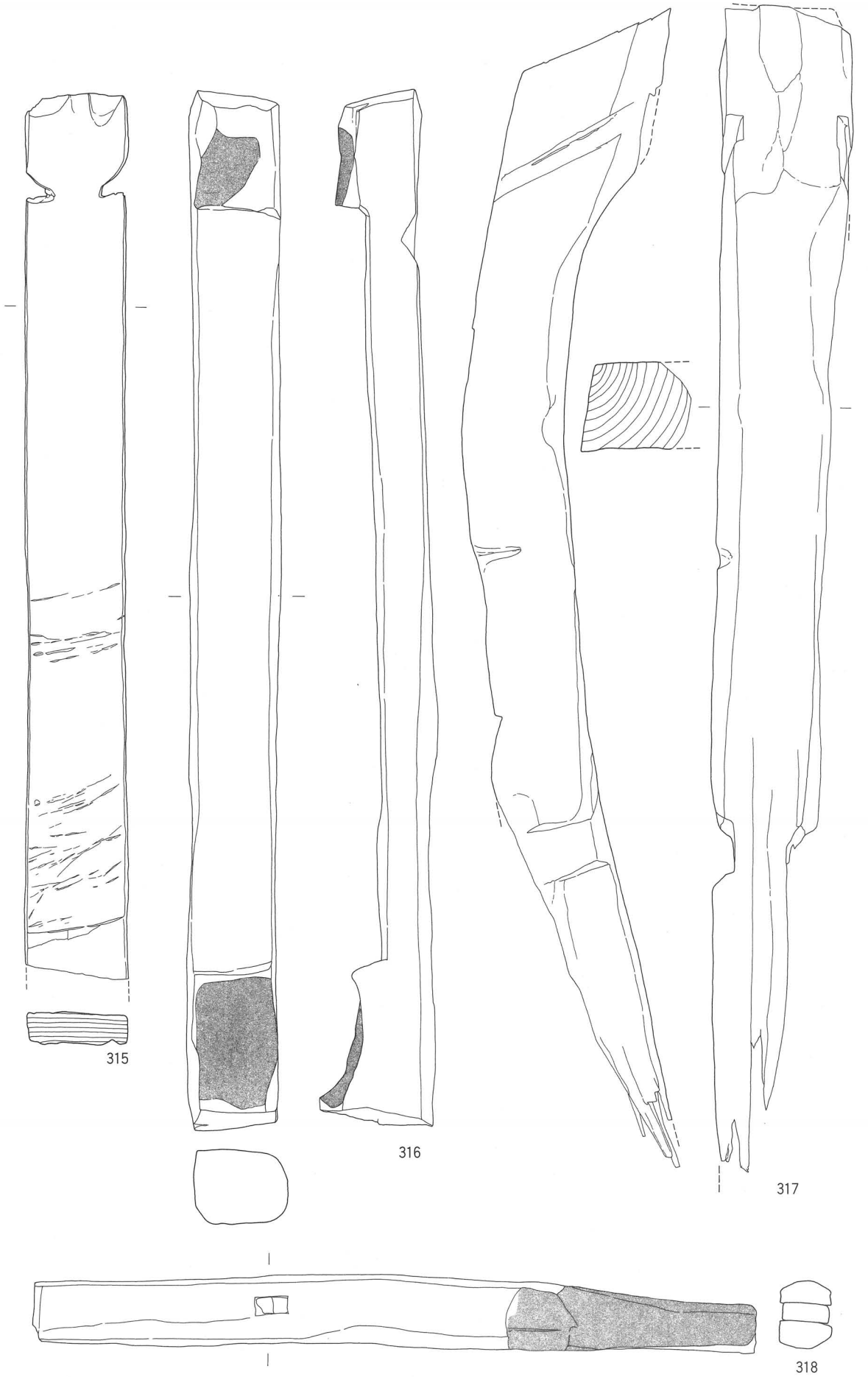






0　1：6　20cm

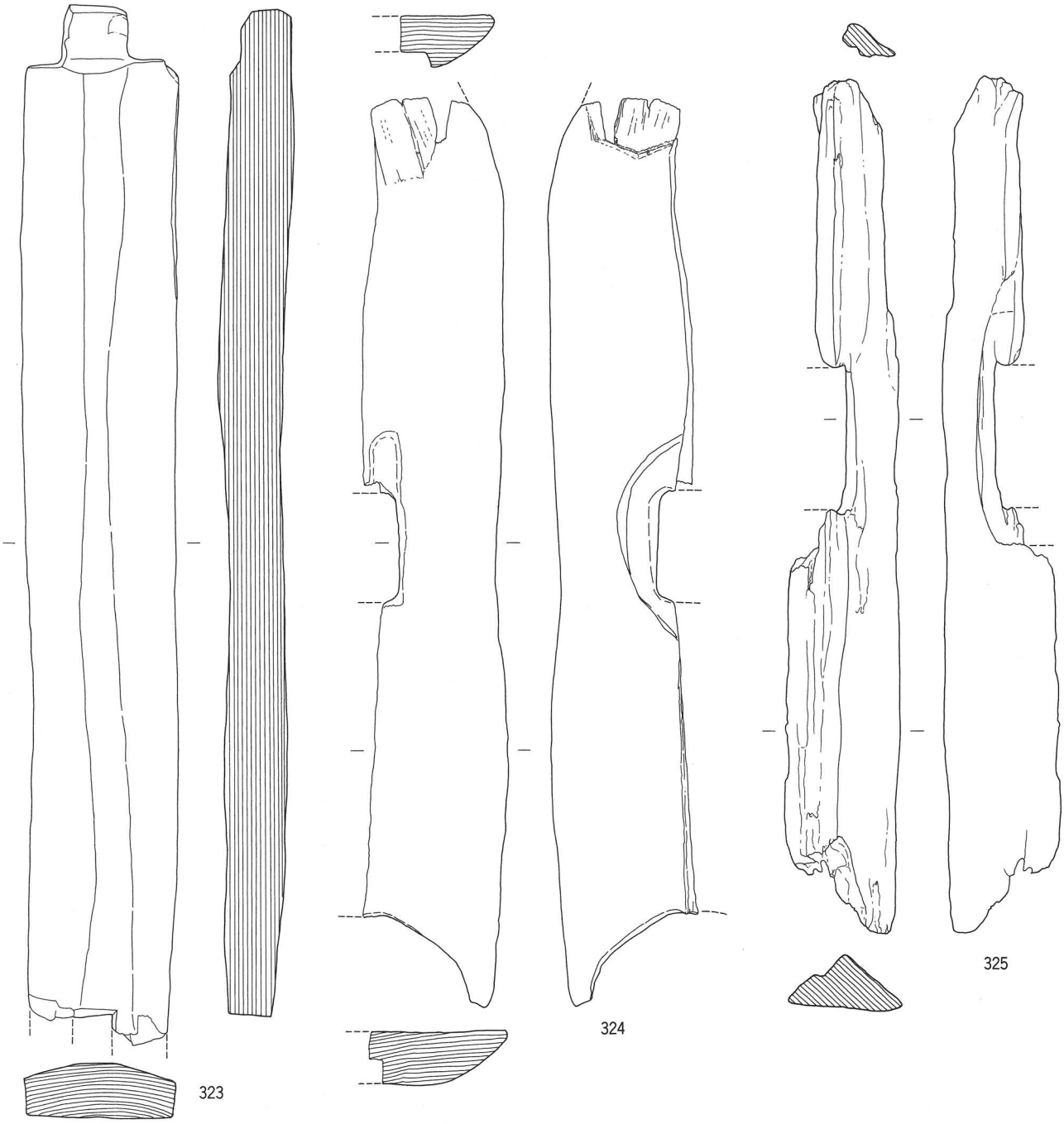
木製品(34)建築部材　S＝1／6

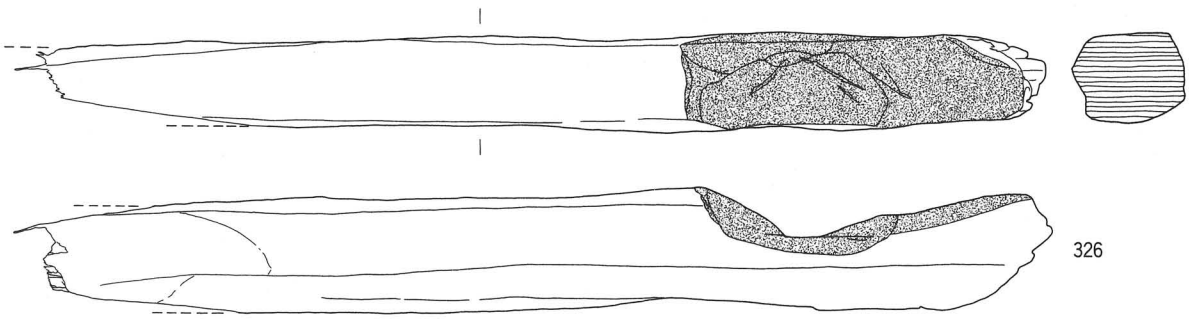


木製品(35)建築部材　S＝1／6

0　1：6　20cm

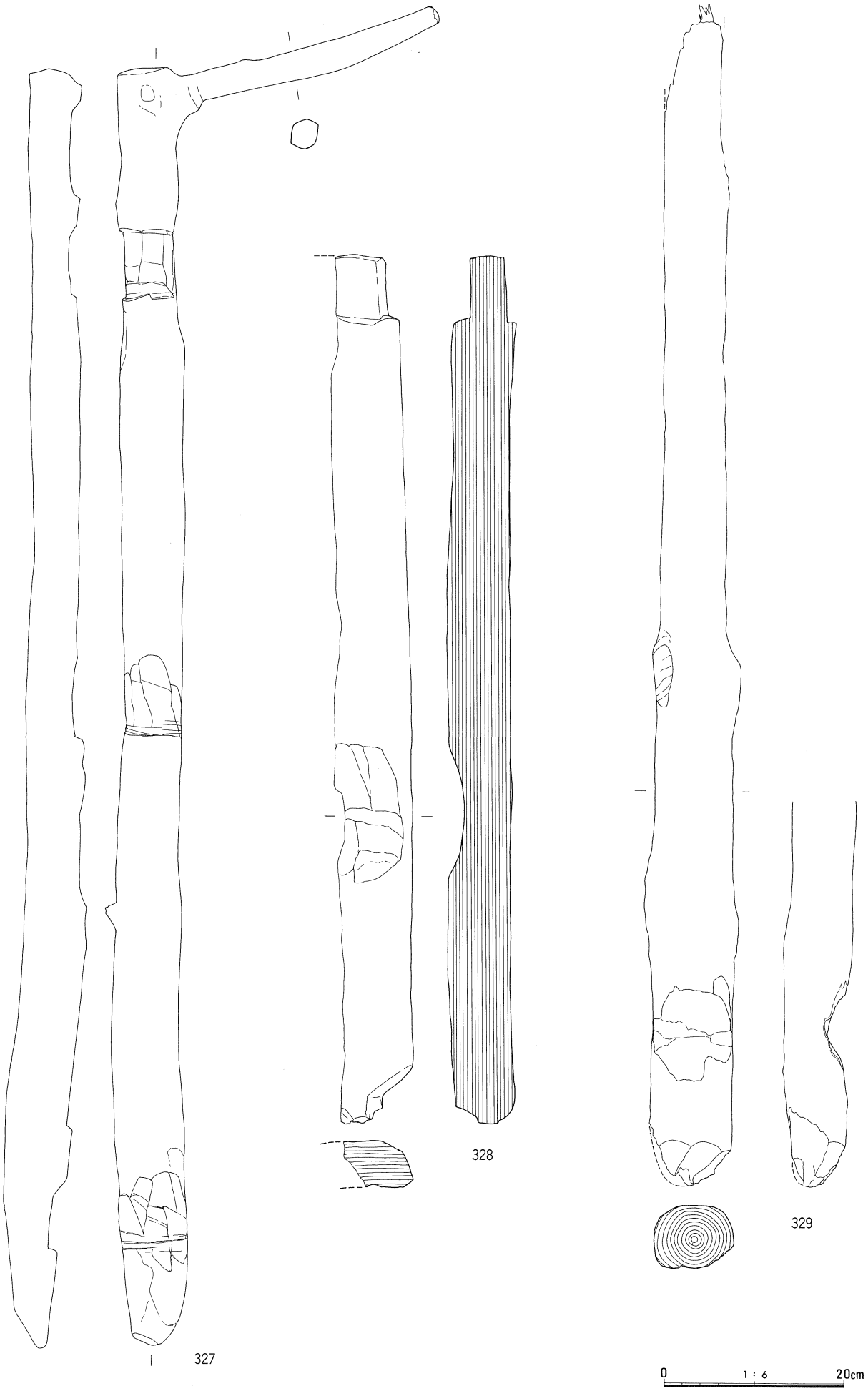
木製品㊱建築部材　S＝1／6、321・322はS＝1／10



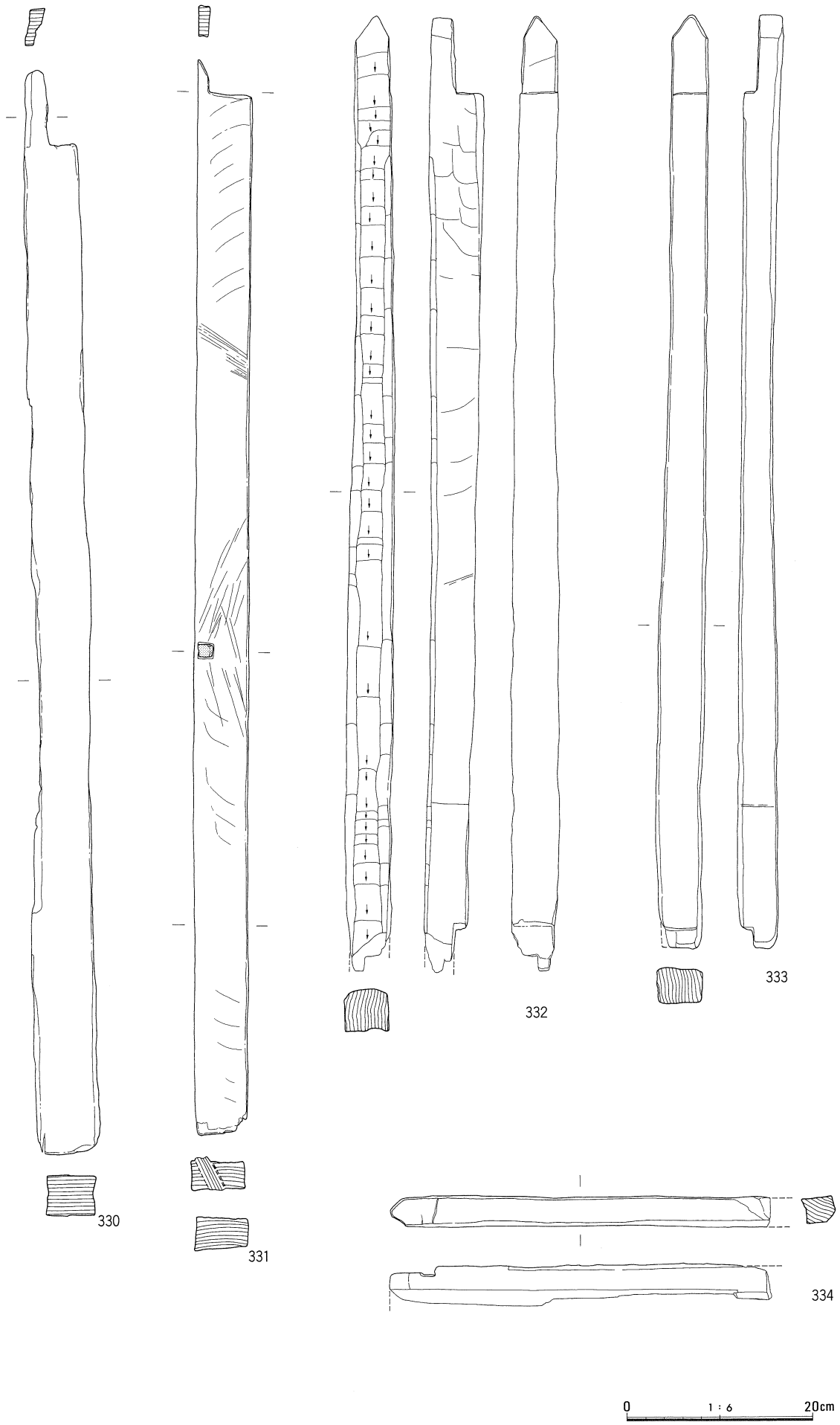


0　1：6　20cm

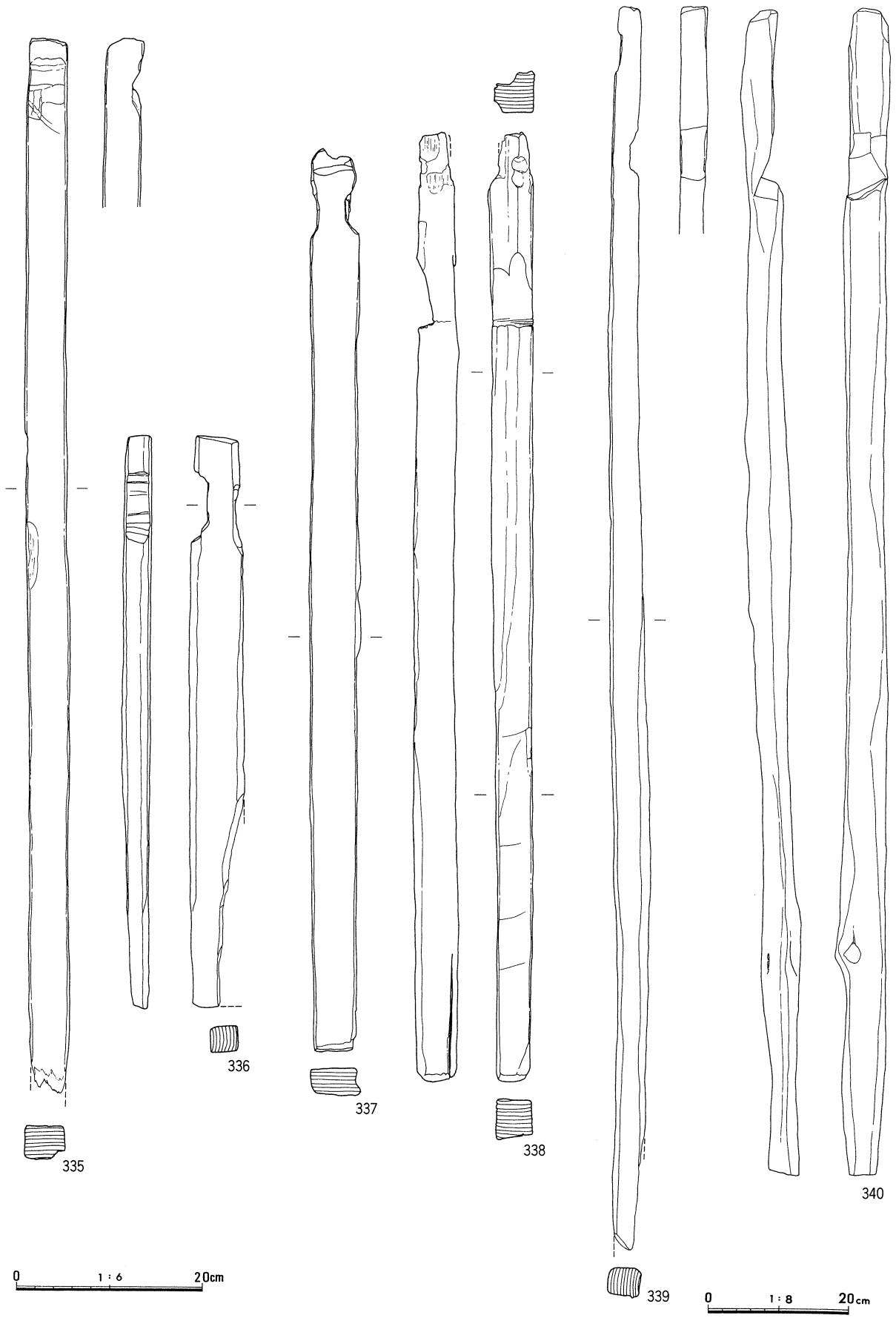
木製品(37)建築部材　S＝1／6



木製品㊳建築部材　S＝1／6



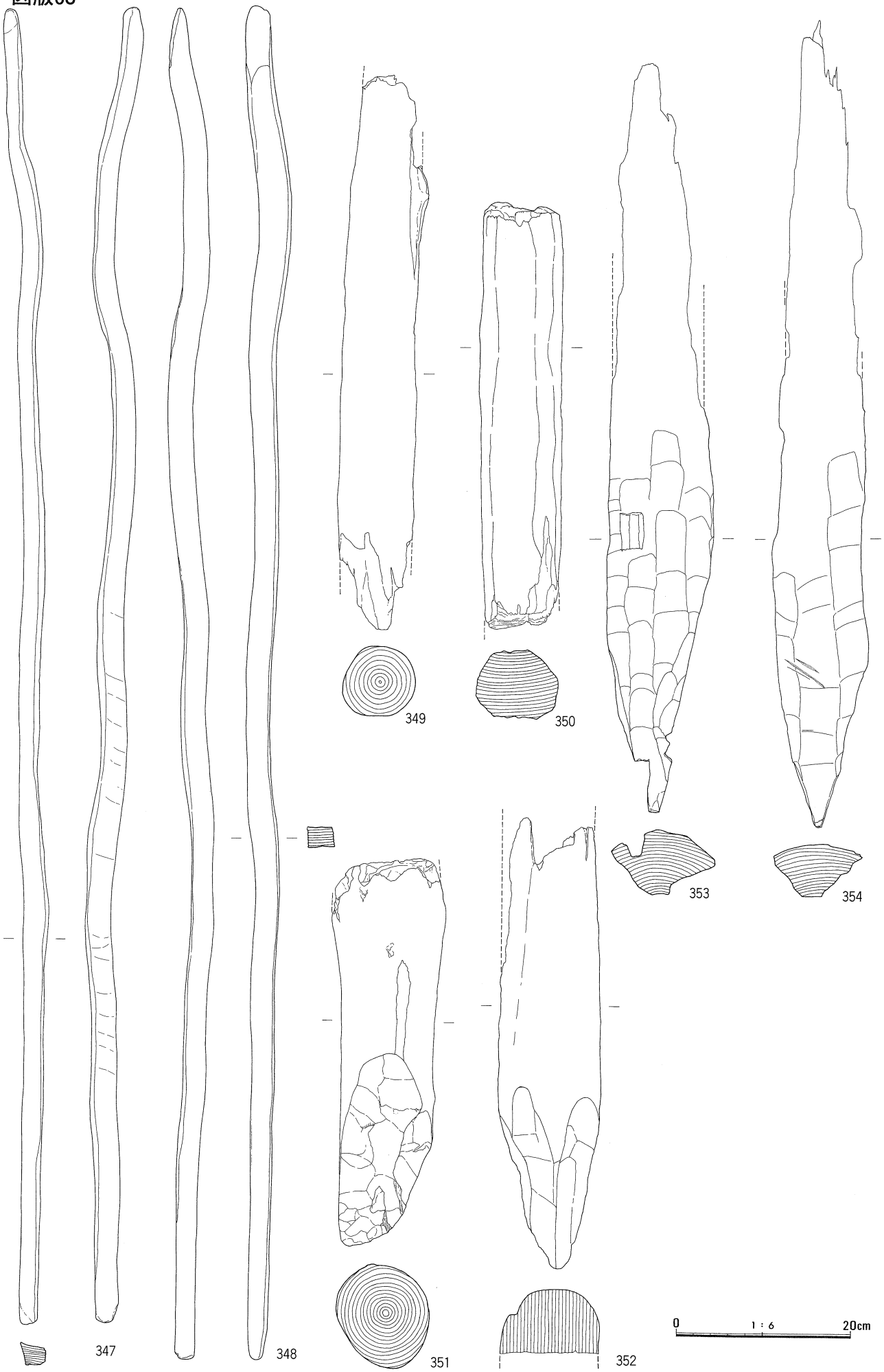
木製品(39)建築部材　S＝1／6



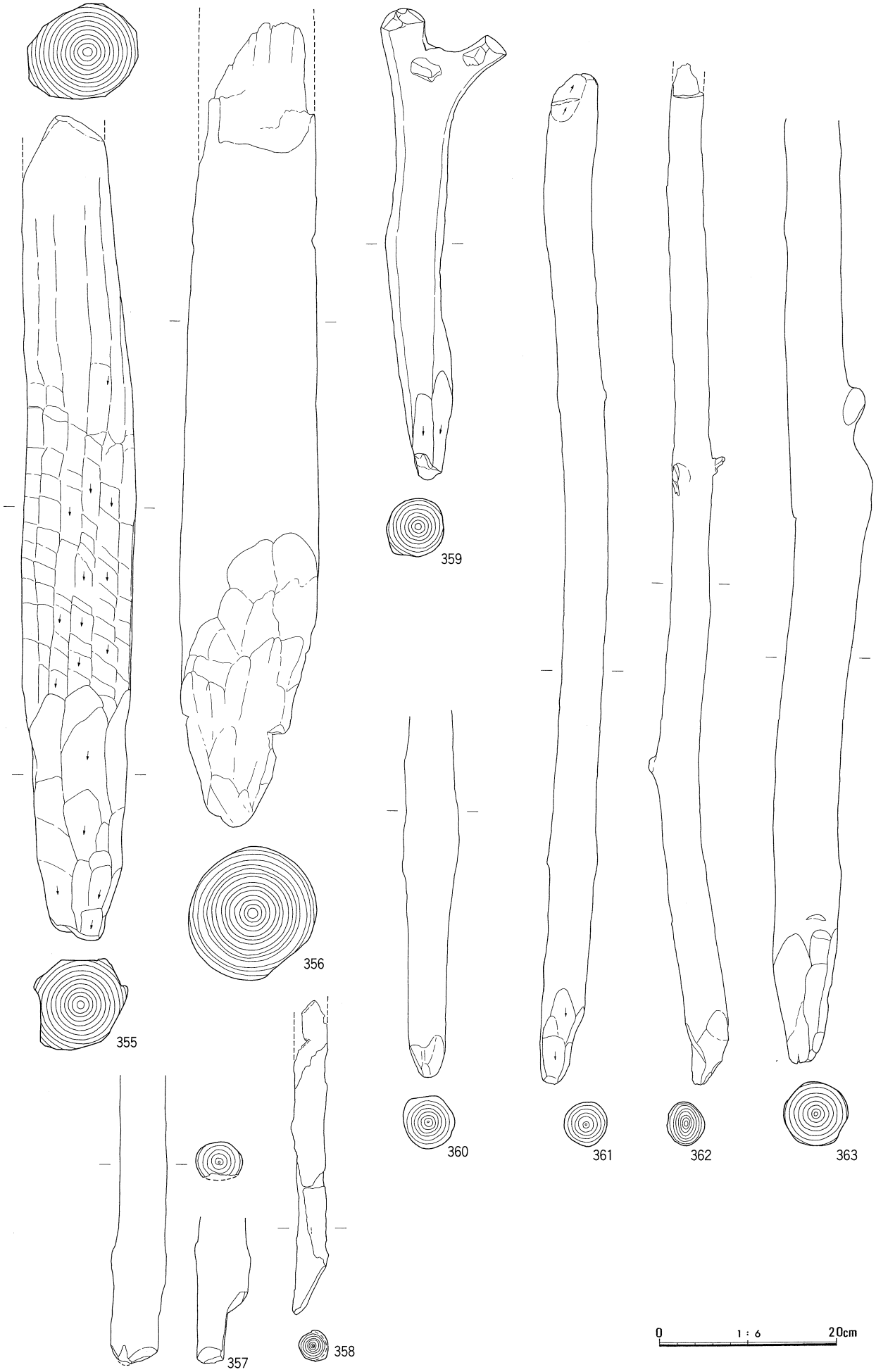
木製品(40)建築部材　S＝1／6、339・340はS＝1／8

木製品(41)建築部材　S＝1／6、341はS＝1／8

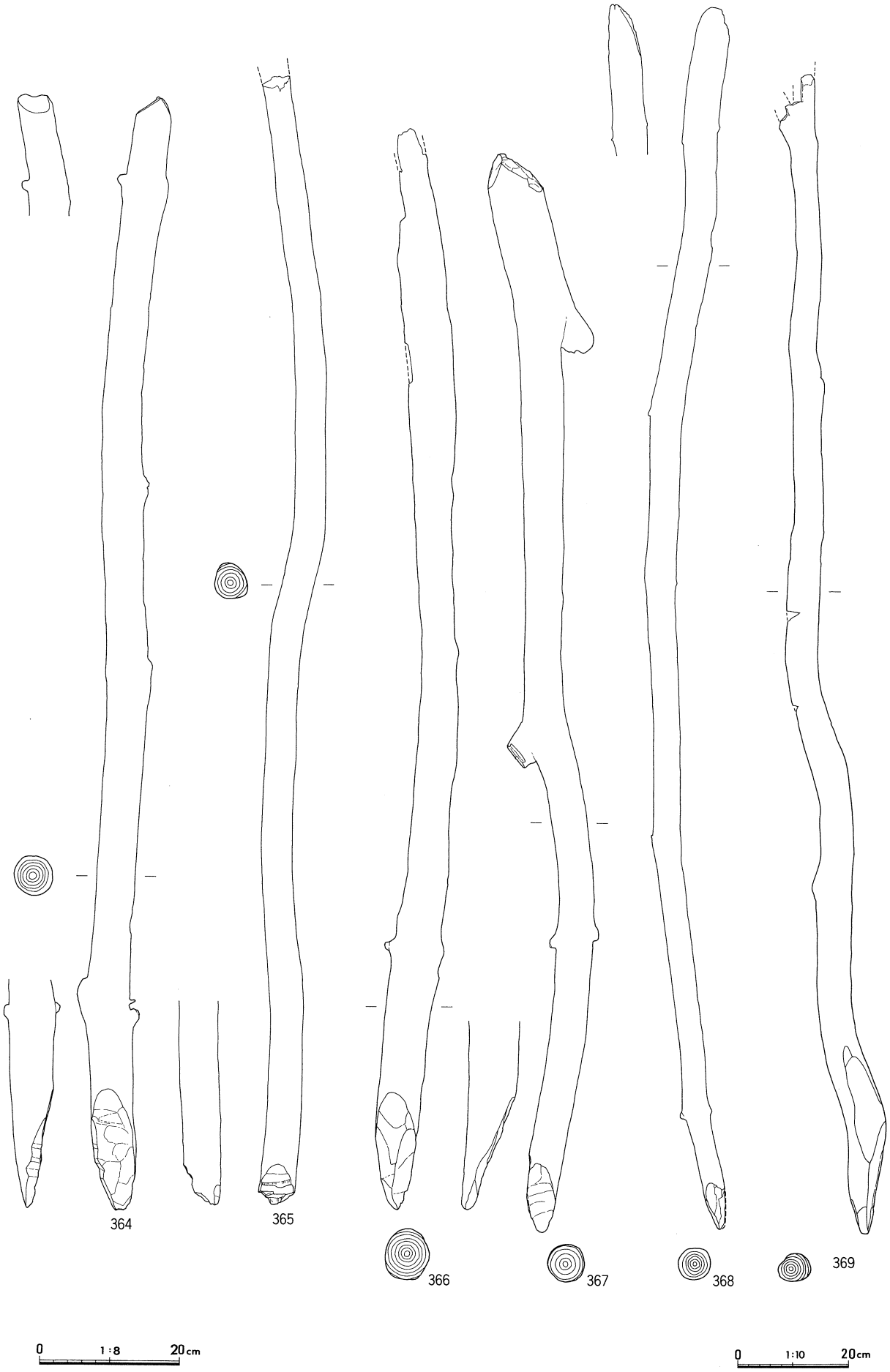
図版68



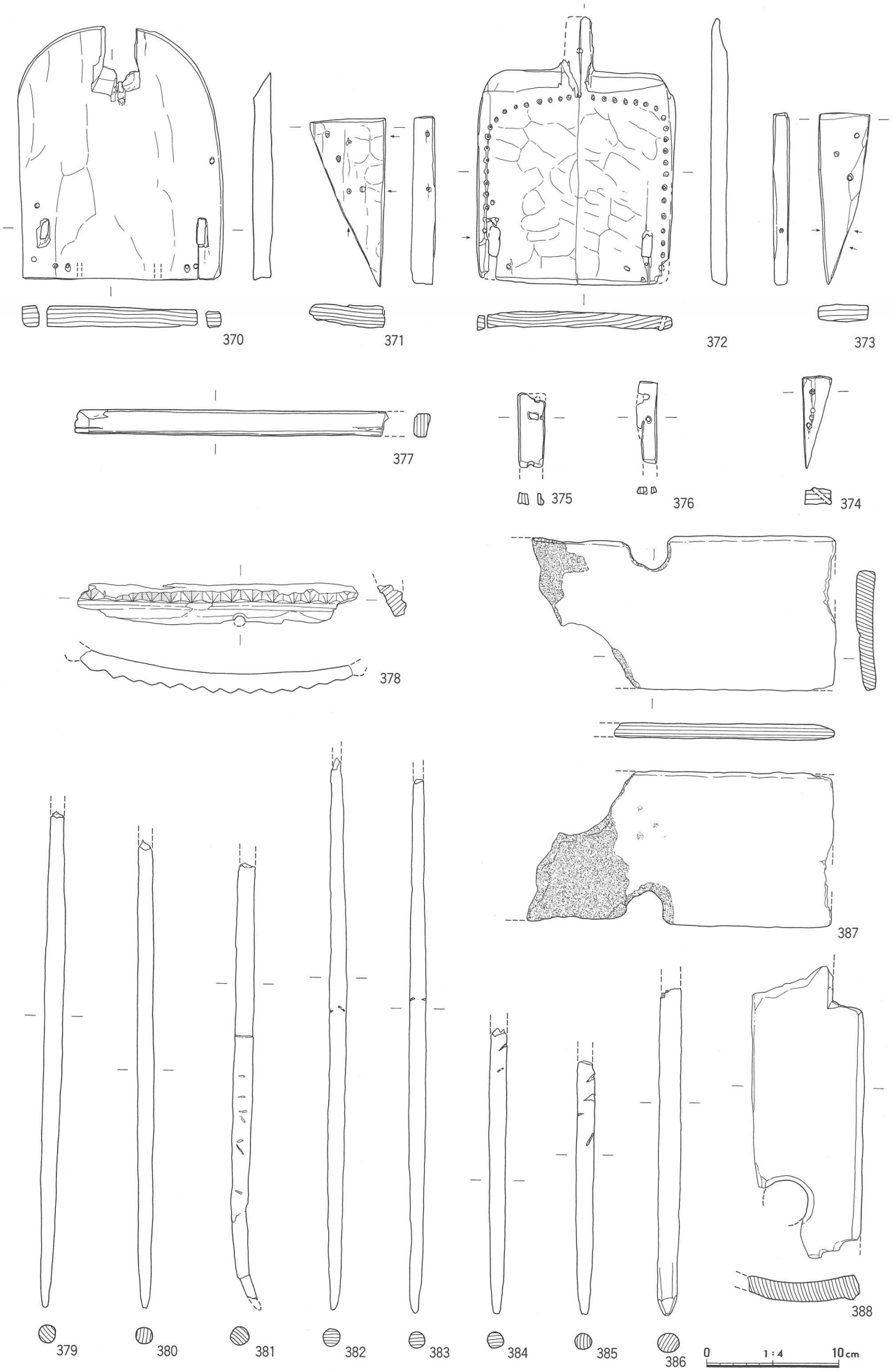
木製品(42)建築部材　S＝1／6



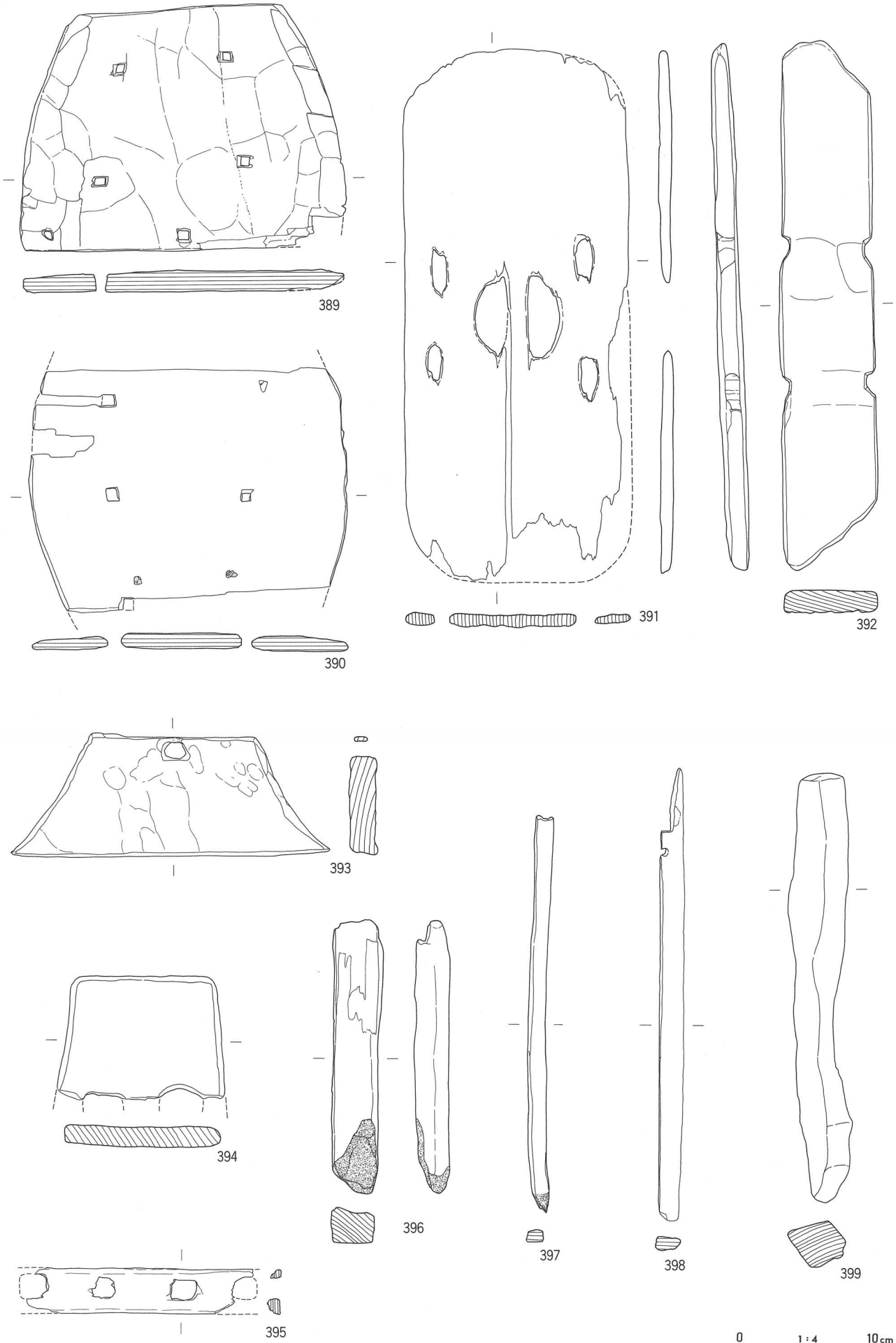
木製品(43)建築部材　S＝1／6



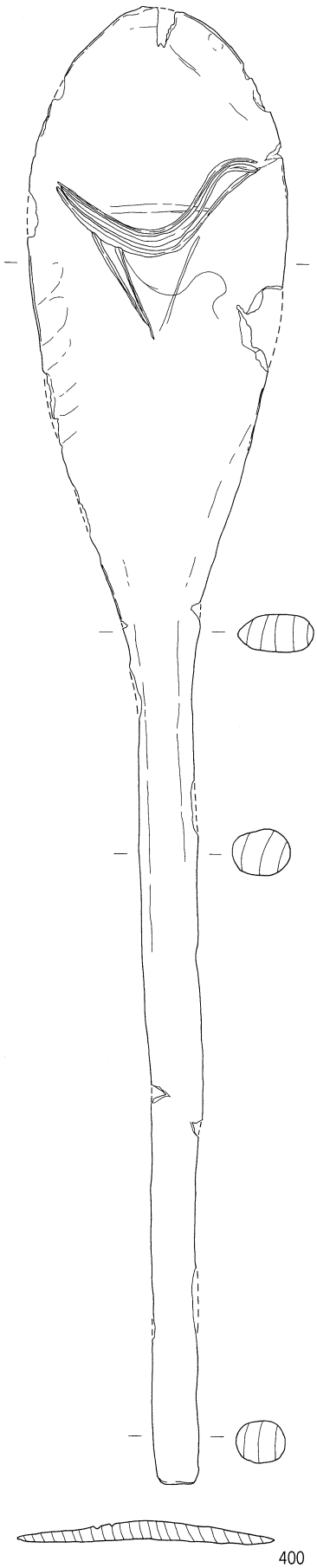
木製品(44)建築部材　S＝1／8、368・369はS＝1／10



木製品(45)その他・用途不明品　S＝1／4

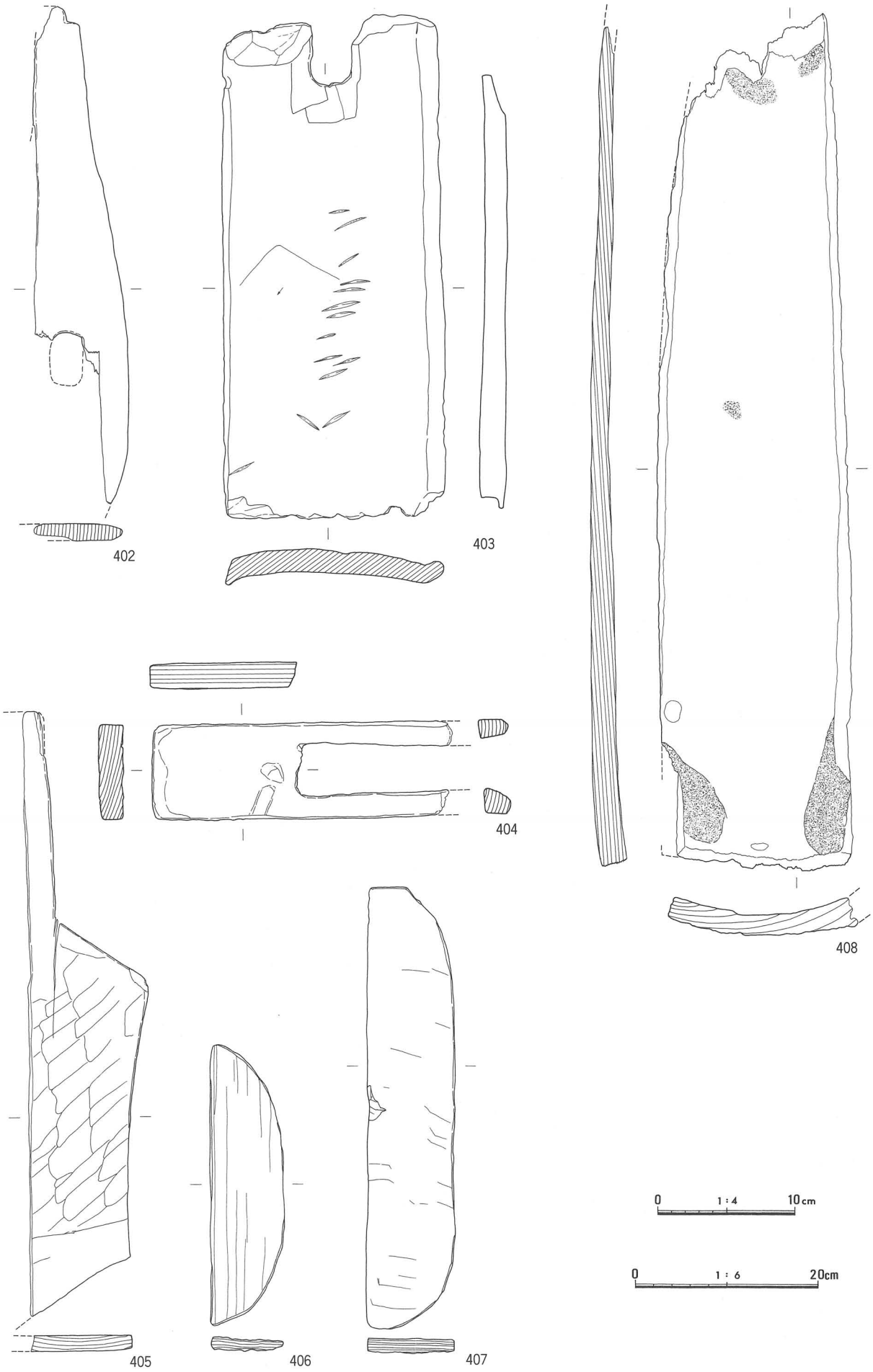


木製品(46)その他・用途不明品　S＝1／4

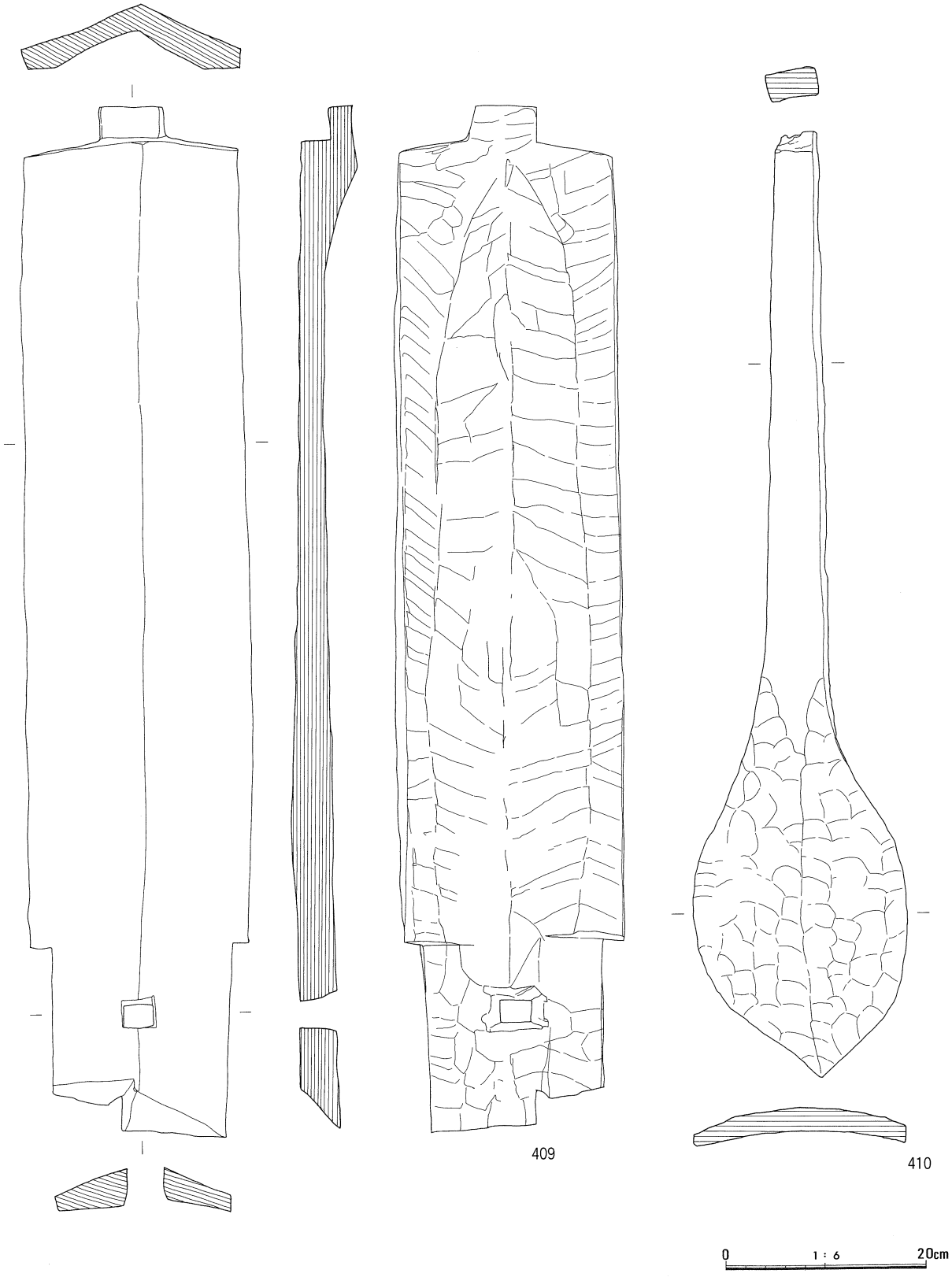


0 1:4 10cm

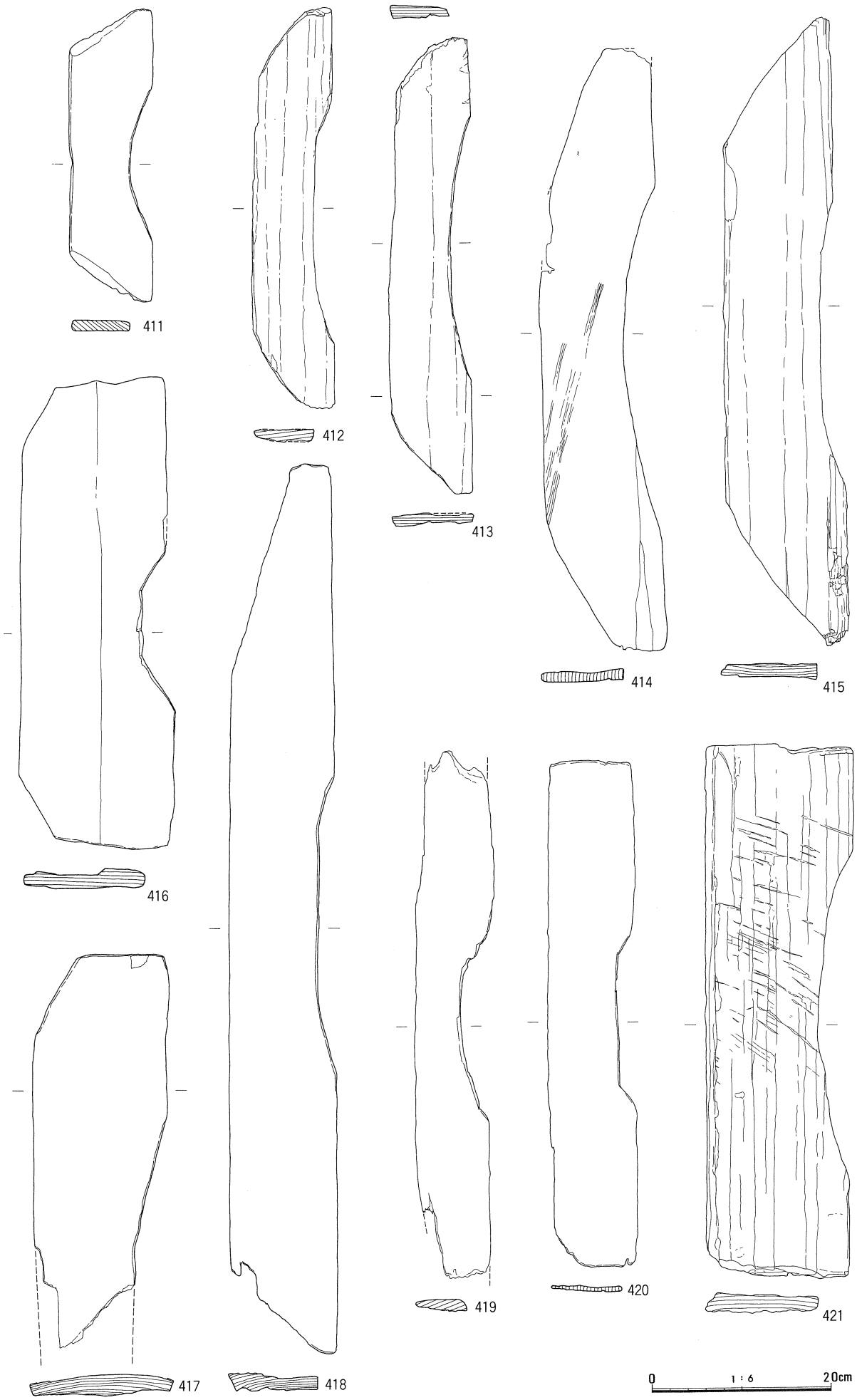
木製品(47)その他・用途不明品　S＝1／4



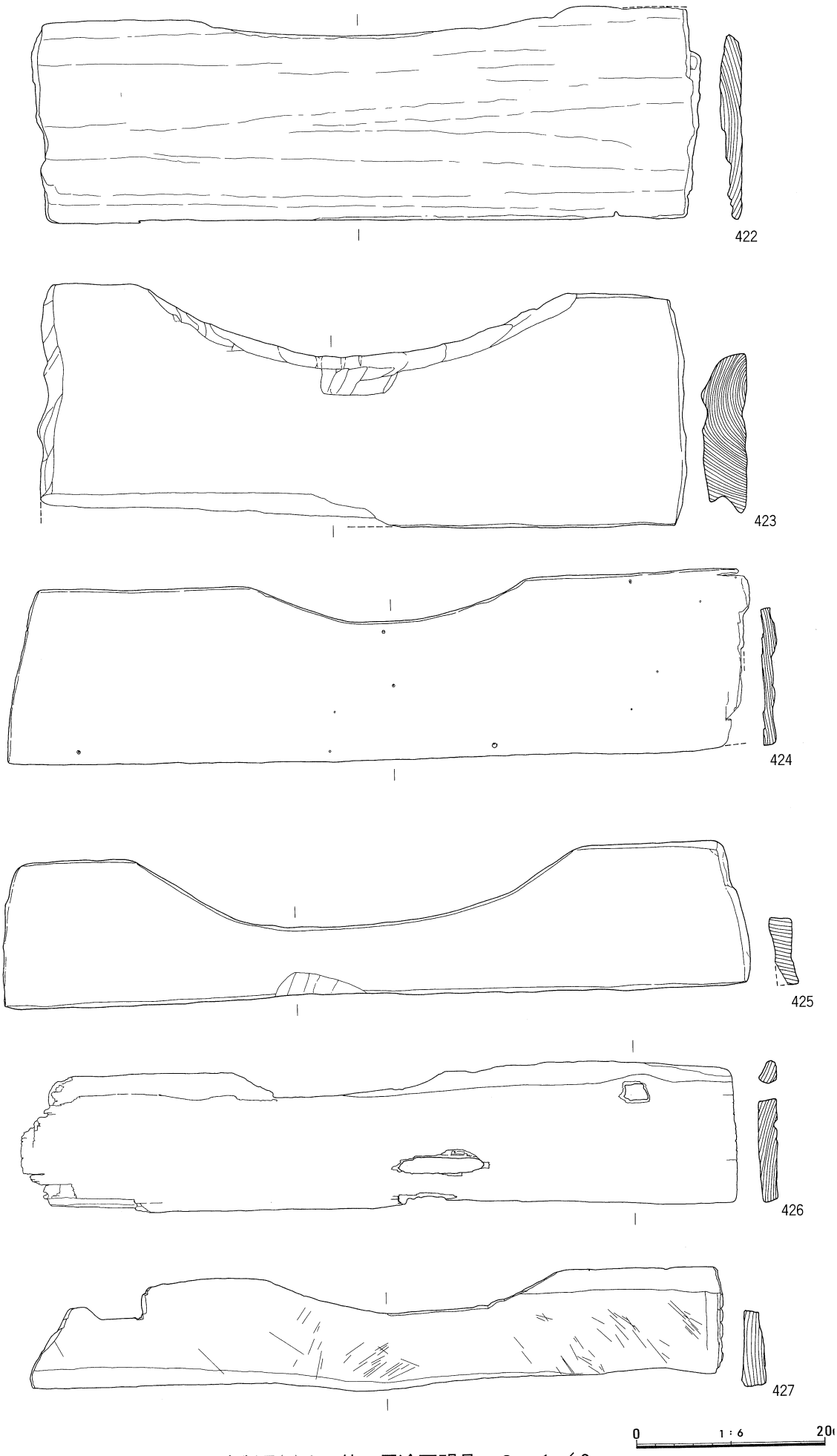
木製品(48)その他・用途不明品　S＝1／4、404・405・408はS＝1／6



木製品(49)その他・用途不明品　S＝1／6



木製品(50)その他・用途不明品　S＝1／6



木製品(51)その他・用途不明品　S＝1／6

木製品(52)その他・用途不明品　S＝1／6

写　真　図　版

遺跡遠景（南東から）

同上（北西から）

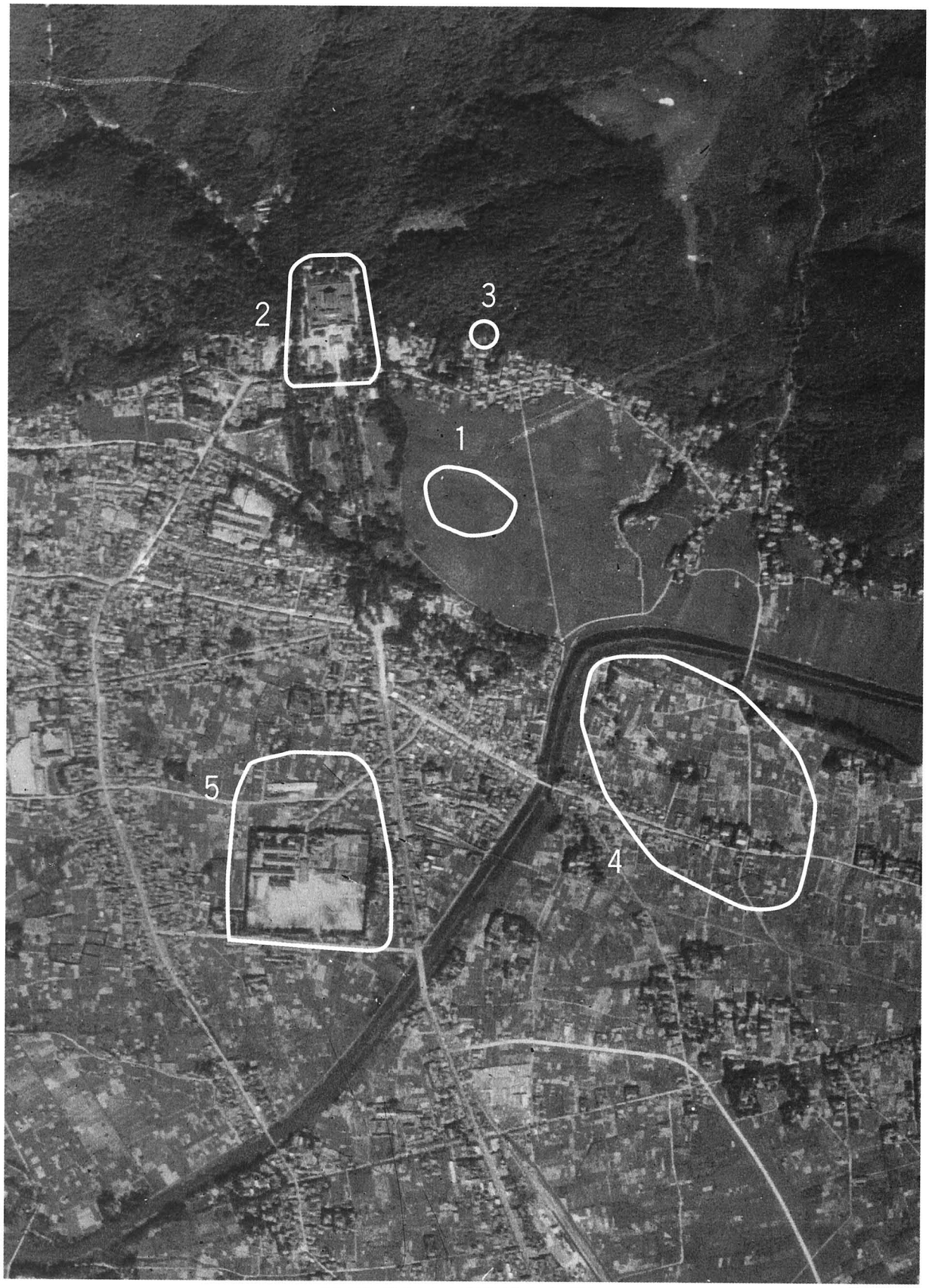
調査区全景（南東から）

C区畦畔（北西から）

D区河道、溝（西から）

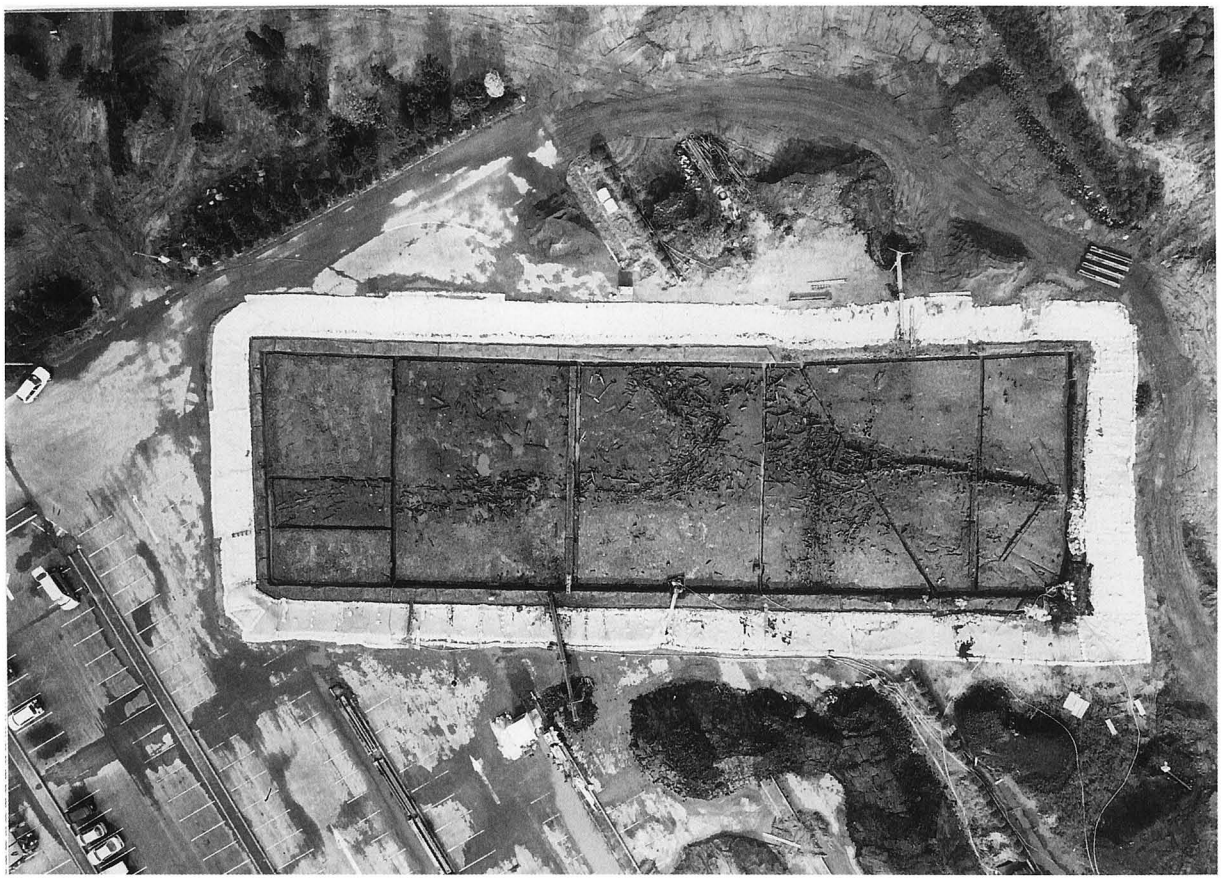
D区 6 層上面
弥生土器（24）
出土状況

B区14層上面
縄文土器（1）
出土状況

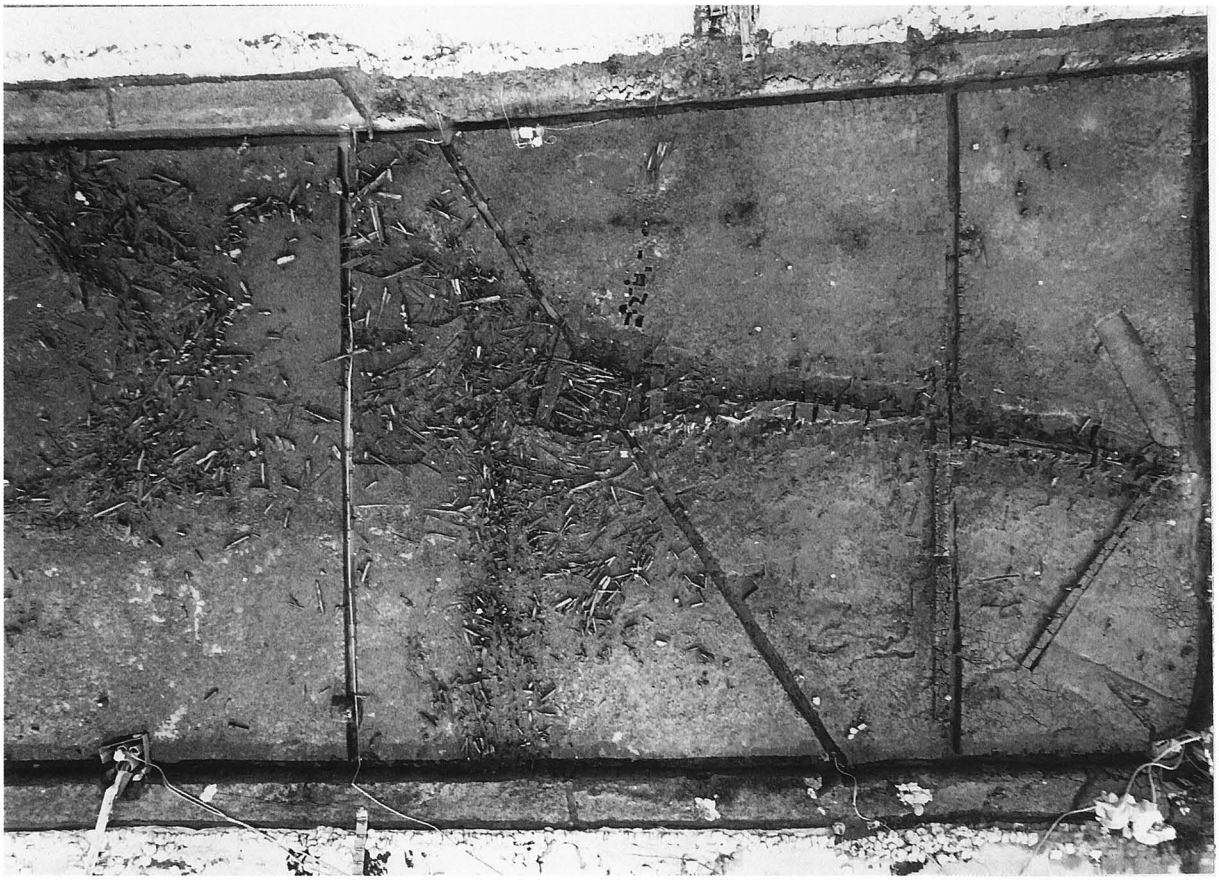


1947年米極東空軍撮影空中写真

1　五反田遺跡　　2　出雲大社境内遺跡　　3　真名井（命主社境内）遺跡
4　原山遺跡　　5　鹿蔵山遺跡



調査区全景（真上から）



A・B区（真上から）

B区北側（真上から）

B区南側（真上から）

C区（真上から）

D区（真上から）

Ａ区地割遺構
（北から）

同上
（西から）